成田市関戸関ノ台遺跡

― 一般国道464号北千葉道路事業埋蔵文化財発掘調査報告書3 ―

令和3年1月

千葉県教育委員会

成田市関戸関ノ台遺跡

なりたしせきどせきのだいいせき

— 一般国道464号北千葉道路事業埋蔵文化財発掘調査報告書3 —

序　文

いにしえより温暖な気候に恵まれた千葉県には、先人たちの生活の痕跡が埋蔵文化財包蔵地（遺跡）として数多く残されています。これらの埋蔵文化財は県民共有の財産として、地域の歴史や文化の解明に欠かすことのできない貴重なものです。

千葉県教育委員会では、埋蔵文化財の保護と各種開発事業との調整、埋蔵文化財の調査研究・文化財保護思想の普及などを目的とした諸活動に加え、千葉県が行う開発事業に係る埋蔵文化財の記録保存のための発掘調査や調査成果の整理、報告書の刊行について実施しております。

本書は、千葉県教育委員会埋蔵文化財調査報告第35集として、一般国道464号北千葉道路事業に伴って実施した成田市関戸関ノ台遺跡の発掘調査報告書です。今回の調査では、旧石器時代の石器製作跡をはじめ、縄文時代の狩猟用の陥穴、弥生時代から平安時代までの竪穴住居跡、中・近世の地下式の倉庫跡など、長期間にわたる人々の多様な営みの跡が検出されました。既に調査報告第31集として報告した隣接する成田市関戸谷津之台遺跡などの調査成果と相まって、当地域の歴史を知る上での貴重な資料を得ることができました。

刊行に当たり、本書が学術資料としてだけでなく、郷土の歴史に対する理解を深めるための資料として多くの方々に広く活用されることを期待しております。

最後に、発掘調査から整理作業を通じ、地元の方々をはじめとする関係者の皆様や関係諸機関には多大な御協力をいただきました。心から感謝申し上げます。

令和３年１月

千葉県教育庁教育振興部
文化財課長　田中　文昭

凡　例

1　本書は、千葉県県土整備部北千葉道路建設事務所による一般国道464号北千葉道路事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書である。

2　本書は、下記の遺跡を収録したものである。

関戸関ノ台遺跡　成田市関戸字関ノ臺245ほか　（遺跡コード211-097）

3　千葉県県土整備部の依頼を受け、千葉県教育庁教育振興部文化財課が平成27・28年度に発掘調査を実施し、令和元・2年度に整理作業を実施した。なお、整理作業については、公益財団法人千葉県教育振興財団に支援業務委託して実施した。

4　調査組織及び発掘調査と整理作業の期間・担当者等は、第1章第1節に記載したとおりである。

5　本書の執筆は、第2章第2節・第7節及び第3章の一部を文化財主事渡邊玲、第2章第3節・第4節及び第3章の一部を文化財主事鈴木彩奈、第2章第5節・第6節及び第3章の一部を文化財主事横田真名望、第1章及び第2章第1節を主任上席文化財主事金丸誠が担当し、編集及び加筆・訂正は、各担当者と協同し金丸が行った。

6　SI-020出土の完形品の土鈴2点については、内部構造を明らかにするために、千葉県産業支援技術研究所細谷昌裕主席研究員にX線CT試験を依頼した。その結果については、第3章まとめにその概要を記載するとともに画像データの一部を図版40に掲載した。

7　発掘調査から報告書の刊行に至るまで、千葉県県土整備部道路整備課、同北千葉道路建設事務所、成田市教育委員会、公益財団法人千葉市教育振興財団小林嵩氏ほか多くの方々から御指導、御協力を得た。

8　本書で使用した地図の座標値は、世界測地系に基づく平面直角座標で、図面の方位は全て座標北である。

9　土器観察表及び本文中に記載した色調は、農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版標準土色帖2007年版』に基づいている。

10　本書で使用した地形図は下記のとおりである。

第1図　成田市発行　1/2,500　成田市都市計画図を編集

第4図　参謀本部陸軍測量局作成　1/25,000　迅速測図「成田」を編集

第5図　国土地理院発行　1/25,000　地形図「成田」を編集

11　図版1の航空写真は、京葉測量株式会社による昭和45年撮影のものを使用した。

12　各表中の（　）は推定数値、＜　＞は現存数値を表わす。

13　遺構や遺物の図面に使用したスクリーントーンの用例は次のとおりである。挿図中の「K」は撹乱の略である。

山　砂　　焼　土　　黒色処理

本文目次

第１章　はじめに…… 1
　第１節　調査の概要…… 1
　　1　調査に至る経緯と経過…… 1
　　2　調査の方法と概要…… 3
　第２節　遺跡の位置と環境…… 3
　　1　遺跡の位置と地形…… 3
　　2　周辺の遺跡…… 5
第２章　調査の成果……15
　第１節　遺跡の概要……15
　第２節　旧石器時代の遺構と遺物……18
　　1　第１ブロック……18
　　2　単独出土……20
　第３節　縄文時代の遺構と遺物……23
　　1　陥穴……23
　　2　遺構外出土の遺物……25
　第４節　弥生時代の遺構と遺物……28
　　1　竪穴住居跡……28
　　2　遺構外出土の遺物……34
　第５節　古墳時代の遺構と遺物……44
　　1　竪穴住居跡……44
　　2　土坑……62
　　3　溝……63
　　4　遺構外出土の遺物……64
　第６節　奈良・平安時代の遺構と遺物……70
　　1　竪穴住居跡……70
　　2　土坑……72
　　3　遺構外出土の遺物……78
　第７節　中・近世の遺構と遺物……81
　　1　北側台地整形区画……81
　　2　南側台地整形区画……97
　　3　土坑墓…… 100
　　4　土坑…… 101
　　5　土坑群（ピット群）…… 104
　　6　溝…… 105

第３章　まとめ……106
報告書抄録……巻末

挿図目次

第１図　周辺地形と調査区 …… 2
第２図　上層トレンチ配置及び表土除去範囲 … 4
第３図　下層確認グリッド配置 …… 4
第４図　遺跡の位置（迅速測図） …… 6
第５図　周辺の遺跡 …… 8
第６図　調査区内上層遺構分布 ……16
第７図　第１ブロック器種別・母岩別分布図 …19
第８図　第１ブロック出土石器 ……21
第９図　単独出土石器 ……22
第10図　SK-010・011・020・024・030・042・043 ……24
第11図　SK-046・050・058 ……26
第12図　SK-052 ……27
第13図　遺構外出土の遺物 ……28
第14図　SI-002 ……29
第15図　SI-007 ……31
第16図　SI-009 ……33
第17図　遺構外出土の遺物（１） ……35
第18図　遺構外出土の遺物（２） ……36
第19図　遺構外出土の遺物（３） ……37
第20図　SI-001・004 ……45
第21図　SI-003a･b（１）・SK-044 ……48
第22図　SI-003a･b（２） ……49
第23図　SI-005 ……50
第24図　SI-006 ……51
第25図　SI-012～015（１） ……53
第26図　SI-012～015（２） ……54
第27図　SI-017 ……56
第28図　SI-018・019（１） ……58
第29図　SI-018・019（２） ……59
第30図　SI-020（１） ……61
第31図　SI-020（２） ……62
第32図　SI-021・SK-021 ……63
第33図　SD-006 ……64
第34図　遺構外出土の遺物 ……65
第35図　SB-001 ……71
第36図　SB-002 ……71
第37図　SK-004 ……72
第38図　SK-005 ……73
第39図　SK-007a･b……74
第40図　SK-008・009……75
第41図　SK-012 ……76
第42図　SK-026 ……77
第43図　SK-057 ……77
第44図　SK-070 ……78
第45図　SK-085 ……79
第46図　遺構外出土の遺物 ……79
第47図　北側台地整形区画 ……82
第48図　第Ⅰ地区SX-001・008・SK-014・025 a～c（１） ……84
第49図　第Ⅰ地区SX-001・008・SK-014・025 a～c（２） ……85
第50図　第Ⅰ地区SK-028・029・031・034・SX-007 ……87
第51図　第Ⅰ地区SK-001～003・032・033……88
第52図　第Ⅱ地区SB-003・SX-009 ……90
第53図　第Ⅱ地区SK-016・018・019 ……91
第54図　第Ⅱ地区SK-015 ……92
第55図　第Ⅱ地区SK-022・023……93
第56図　第Ⅱ地区SK-035a･b・SX-010 ……94
第57図　第Ⅲ地区SX-003 ……96
第58図　南側台地整形区画SX-004・005・

SK-071～079（1）……98
第59図　南側台地整形区画 SK-004・005・
SK-071～079（2）……99
第60図　SK-027 …… 101
第61図　SK-017a～d・SK-002 …… 102
第62図　SK-051・053～056 …… 103
第63図　SK-080～084・SD-003 …… 103
第64図　SX-006 …… 104
第65図　関戸関ノ台遺跡・関戸砦跡遺構配置… 110

表目次

第１表　周辺の遺跡概要一覧表……12
第２表　竪穴住居跡等一覧表……15
第３表　竪穴状遺構・土坑等一覧表……17
第４表　溝一覧表……18
第５表　旧石器時代石器属性表……19
第６表　縄文土器観察表……27
第７表　縄文時代石器属性表……27
第８表　弥生土器観察表……38
第９表　古墳時代土器観察表……66
第10表　古墳時代土製品観察表……69
第11表　古墳時代石製品観察表……70
第12表　奈良・平安時代土器観察表……79
第13表　SX-007ピット計測表 ……89
第14表　SX-008ピット計測表 ……89
第15表　SB-003柱穴計測表 ……90
第16表　SX-009ピット計測表 ……95
第17表　SX-010ピット計測表 ……95
第18表　SX-003ピット計測表 ……96
第19表　SX-004ピット計測表 …… 100
第20表　SX-002ピット計測表 …… 104
第21表　SX-006ピット計測表 …… 105
第22表　中・近世土器観察表…… 105
第23表　中・近世土製品観察表…… 105

図版目次

図版１　航空写真
図版２　調査前①　調査前②
図版３　調査前③　調査前④
図版４　調査前⑤　調査前⑥
図版５　Ｔ６遺構検出　Ｔ７遺構検出
T12遺構検出　第１ブロック
図版６　SK-009・010　SK-011　SK-020　SK-024
SK-030セクション　SK-030
SK-042・043　SK-058
図版７　SK-046セクション　SK-046
SK-050セクション　SK-050
SK-052セクション　SK-052
SI-002遺物
図版８　SI-002　SI-007
図版９　SI-009H27　SI-009H28・SK-051
図版10　SI-009炉　SI-001カマド　SI-001貯蔵穴
SI-001
図版11　SI-003a･b　SI-005
図版12　SI-006　SI-006カマド　SI-006貯蔵穴
SI-013カマド　SI-012・013
図版13　SI-012～015
図版14　SI-017・SK-070　SI-017貯蔵穴
SI-018・019セクション　SI-018・019遺物
SI-018貯蔵穴
図版15　SI-018・019・SK-085　SD-006・SK-057
図版16　SI-020貯蔵穴　SK-021　SK-004　SB-001
図版17　SK-005　SK-008・009遺物　SK-012
SK-026・北側台地整形区画

図版18　北側台地整形区画SX-001　北側台地整形区画第Ⅰ地区北側
図版19　SK-014　SK-025a～c・SX-008　SK-028・034　SK-029　SK-032　SK-033　SK-001～003　SK-031
図版20　第Ⅱ地区SB-003・SX-009・010　SK-018　SK-015　SK-016　SK-019　SK-022　SK-023
図版21　SK-035a･b　第Ⅲ地区SX-003　南側台地整形区画SX-004・005・SK-071～079　SX-005セクション　SX-004セクション
図版22　南側台地整形区画SX-004・005
図版23　南側台地整形区画SX-004・005　SK-027　SK-017a～d・SX-002　SK-053～056　SX-006
図版24　第１ブロック出土石器
図版25　単独出土石器
図版26　SK-050　遺構外出土の遺物　SI-002
図版27　SI-007　SI-009
図版28　遺構外出土の遺物（１）
図版29　遺構外出土の遺物（２）
図版30　遺構外出土の遺物（３）
図版31　SI-001　SI-003a･b　SI-004　SI-005
図版32　SI-006　SI-013　SI-014　SI-015　SI-017　SI-018
図版33　SI-018　SI-019
図版34　SI-020
図版35　SI-020　SI-021　SI-021　SD-006　遺構外出土の遺物
図版36　遺構外出土の遺物　SB-001　SK-004　SK-007a　SK-005　SK-012
図版37　SK-008　SK-009　SK-026　SK-057　SK-070
図版38　SK-085　遺構外出土の遺物　SX-001　SK-014　SK-018　SK-015　SK-023
図版39　SX-004　SK-078　SK-074　SK-027　SX-002　SK-008-1墨書土器（赤外線）　SK-070-1墨書土器（赤外線）
図版40　SI-020-16X線CT画像　SI-020-17Ｘ線CT画像

第１章　はじめに

第１節　調査の概要

１　調査に至る経緯と経過（第１図）

一般国道464号北千葉道路は、東京外かく環状道路から千葉ニュータウンを経て成田国際空港を結ぶ全長約43㎞の幹線道路で、このうち印西市から成田市までの区間（延長約13.5㎞）については、成田新高速鉄道の新線建設区間と並行しており、一体的に整備を進めていくことが計画された。本区間の整備により首都圏北部や県西地域と成田国際空港間のアクセスの強化が図れるとともに、沿線地域の活性化、物流の効率化、救急医療・防災機能の強化などが期待されている[註1]。

本区間の整備事業の実施に先立って、平成16年９月に事業地内の「埋蔵文化財の所在の有無及びその取扱いについて」の照会文書が千葉県県土整備部道路計画課長から千葉県教育委員会に提出された。千葉県教育委員会では現地踏査等の結果を踏まえ、平成16年11月に事業地内には埋蔵文化財の包蔵地６か所が所在する旨の回答を行った。この回答に基づき、埋蔵文化財の取扱いについて千葉県県土整備部、千葉県教育委員会、成田市教育委員会の関係諸機関による協議を行った結果、事業の性格上、やむを得ず記録保存の措置を講ずることとなった。このうち、千葉県が施工する国道408号（成田市押畑）から国道295号（成田市大山）までの区間に所在する関戸谷津之台遺跡・関戸関ノ台遺跡・久米砦遺跡の３遺跡については、千葉県教育委員会が発掘調査を実施することとなった。

今回報告する関戸関ノ台遺跡は平成27・28年度に発掘調査を実施し、令和元・２年度に整理作業を実施した。各年度の調査組織及び担当者・期間・内容は次のとおりである。

○平成27年度　関戸関ノ台遺跡（１）

千葉県教育庁教育振興部文化財課

文化財課長　永沼 律朗　　発掘調査班長　蜂屋 孝之

担当者　主任上席文化財主事　土屋 潤一郎

実施期間　平成27年８月10日～平成28年１月28日

内容　調査対象面積2,753㎡　確認調査 上層320㎡ 下層172㎡　本調査 上層2,753㎡ 下層0㎡

○平成28年度　関戸関ノ台遺跡（２）

千葉県教育庁教育振興部文化財課

文化財課長　永沼 律朗　　発掘調査班長　田井 知二

担当者　主任上席文化財主事　土屋 潤一郎

実施期間　平成28年７月１日～平成28年10月７日

内容　調査対象面積4,875㎡　確認調査 上層354㎡ 下層56㎡　本調査 上層4,875㎡ 下層0㎡

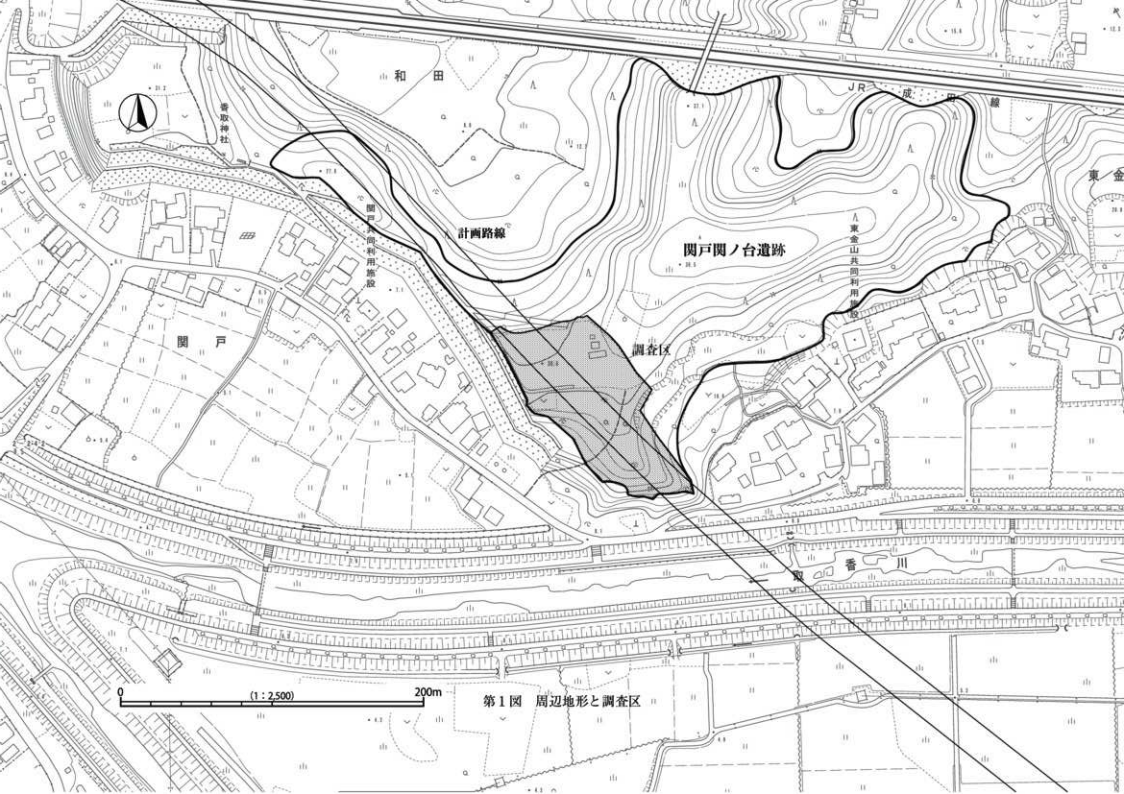
○令和元年度　関戸関ノ台遺跡（１）・（２）

千葉県教育庁教育振興部文化財課

文化財課長　大森 けい子　　発掘調査班長　大内 千年

担当者　主任上席文化財主事　金丸 誠、文化財主事　渡邊 玲・横田 真名望・鈴木 彩奈

内容　水洗注記～実測・トレースの一部



第１図　周辺地形と調査区

○令和２年度　関戸関ノ台遺跡（１）・（２）

千葉県教育庁教育振興部文化財課

文化財課長　田中 文昭　　発掘調査班長　大内 千年

担当者　主任上席文化財主事　金丸 誠、文化財主事　渡邊 玲・横田 真名望・鈴木 彩奈

内容　実測・トレースの一部～報告書刊行

2　調査の方法と概要（第２・３図、図版２～５）

発掘調査に当たっては、千葉県教育委員会が実施する３遺跡を網羅するように日本測地系（第Ⅸ座標系）の公共座標に基づくグリッド設定を行った。グリッドの基準は関戸谷津之台遺跡の位置するX=-22,540、Y=44,760を起点とし、40m×40mの方眼網を設定し、大グリッドとした。名称は北から南へ１・２、西から東へA・Bとした。大グリッドは更に４m×４mの小グリッドに100分割し、北西隅を00、南東隅を99とした。大グリッドと小グリッドを組み合わせて、1A-01や2B-00などと呼称した。今回報告する関戸関ノ台遺跡はX=-22,700、Y=45,000の5G大グリッド～8J大グリッドの範囲に所在する。

確認調査は基本的に地形に沿って２m幅のトレンチを設定して実施した（第２図）。ただし、（２）地点の三角形の地区は全面表土除去による確認調査を行い、南側及び東側の傾斜面部は安全上の観点からトレンチを設定しなかった。確認調査の結果、全てのトレンチで遺構が検出されたため全域を本調査範囲とし、遺構精査・記録作成・写真撮影・遺物取上げなどの作業を行った。しかし、（２）地点の西側傾斜面部は土砂崩落等の危険が予想されたため表土除去は実施しなかった。下層確認調査は、ローム層が存在している範囲に２m×２mのグリッドを設定して実施した（第３図）。6H-70と6H-92グリッドで石器が出土したことから、それぞれのグリッド周囲を拡張し、合計10点及び３点の石器が出土したが、それ以上石器の分布の広がりが認められず、記録作成などを行い、確認調査で終了した。記録作成のうち全体図と遺構平面図の実測図面は平板測量で行った。写真撮影はフィルムカメラ（120㎜モノクロ、35㎜カラーリバーサル）及びデジタルカメラ（RAW＋JPEGデータ）により実施した。上層調査に当たっては、遺構種類ごとに記号を付け竪穴住居跡はSI、掘立柱建物跡はSB、土坑はSK、古墳はSM、溝はSD、その他はSXとし、種類記号ごとに３桁の通し番号と合わせてSI-001のように遺構番号として表記した。遺物は遺構ごとに、旧石器時代の遺物や帰属遺構が不明確なものについては小グリッド単位で通し番号を付けて取り上げた。

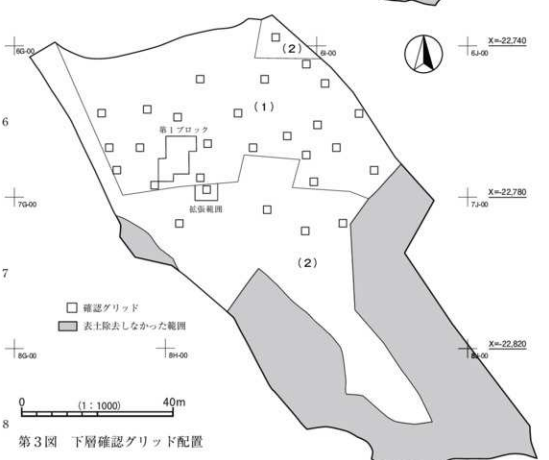
整理作業は出土遺物の水洗・注記作業を行った後、遺物の種別・器種分類を行ってから接合・復元作業を実施し、実測・拓本作業を行った。出土遺物の写真撮影はデジタルカメラで行った。発掘調査で作成した図面・写真などの記録整理を行った後、挿図・写真図版原図を作成し、それらをもとにデジタル編集によるトレースや写真補正などを行い、挿図・写真図版を作成した。その後、原稿執筆・編集・校正作業を経て、この度報告書刊行となった。また、報告書編集中に報告書に基づいた収納整理作業も併せて実施した。

第２節　遺跡の位置と環境

1　遺跡の位置と地形（第１・４図、図版１）

成田市は千葉県の北部中央に位置し、北は利根川を挟んで茨城県、東は香取市、南東は芝山町、南は富里市、南西は酒々井町、西は印旛沼を挟んで印西市、北西は栄町に接する面積約214㎢、人口約13万人の中核市である。周辺の地形は下総台地と沖積地からなり、台地は根木名川や大須賀川、印旛沼から延びる樹枝

第２図　上層トレンチ配置及び表土除去範囲



第３図　下層確認グリッド配置

状の小支谷により複雑に開析されている。本遺跡は根木名川とその支流である取香川の合流地点の北側で、樹枝状に延びる痩せ尾根付け根部分の台地上にある。この痩せ尾根先端部には関戸谷津之台遺跡がある。本遺跡の標高は28m～30mで、台地下の水田面との標高差は21m前後である。

2　周辺の遺跡（第５図）

本遺跡＜１＞の周辺では、成田ニュータウン造成事業をはじめとして、東関東自動車道路、成田国際空港予定地及び関連事業に伴う大規模な発掘調査が行われ、その調査成果は既に報告書が刊行されている。ここでは時代ごとに主な遺跡について記述し、周辺の遺跡の概要は第１表の周辺の遺跡概要一覧表を参照されたい。

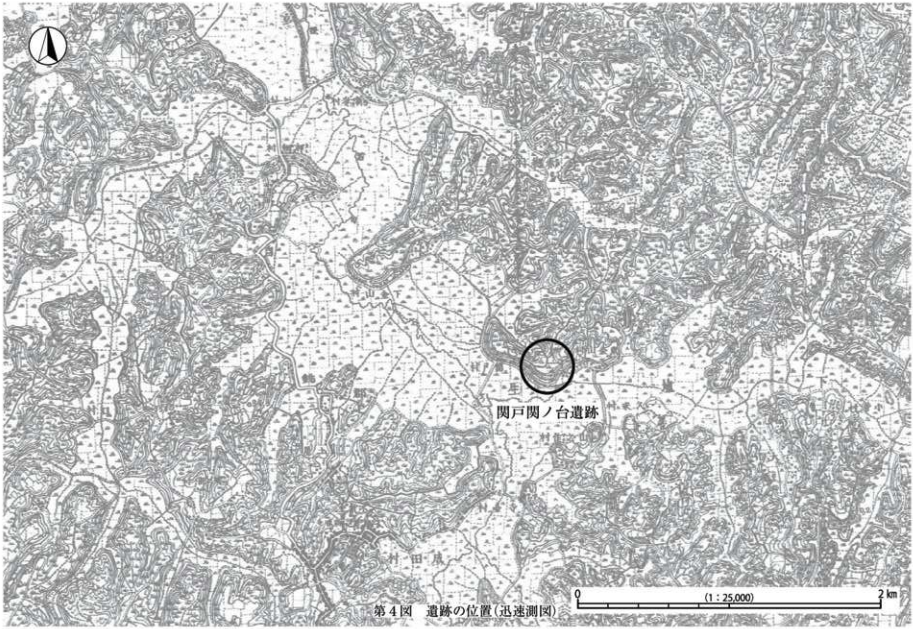
旧石器時代　旧石器時代の遺跡としては成田国際空港予定地内の遺跡群が特筆される[註2]。取香和田戸遺跡（空港№60遺跡）はⅡc層～Ⅶ層から４つの文化層（15ブロック）、東峰御幸畑東遺跡（空港№62遺跡）はⅢ層～Ⅸ層から６つの文化層（46ブロック）、十余三稲荷峰遺跡（空港№67遺跡）は信州産黒曜石を主体とする細石刃石器群が検出されているなど22遺跡から多くの石器群が検出されている。これらの遺跡群は、利根川に向かって北に流れる根木名川の支流の取香川と九十九里平野を経て太平洋に向かって南に流れる高谷川との分水嶺となる台地上に位置する。

本遺跡と同じ根木名川及びその支流の中・下流域では、旧石器時代の遺跡は極めて少なく、検出された遺構はいずれも小規模なブロックか単独出土である。本遺跡の西側台地上にある関戸谷津之台遺跡＜２＞は、Ⅸc層上部から剥片２点１ブロックが検出されている。小橋川流域では、松崎山ノ台遺跡＜５＞はⅢ層とⅨ層から尖頭器や楔形石器・剥片など19点３ブロック、雷土（Loc.37）遺跡<84>はⅢ層からナイフ形石器や敲石・削器・剥片など９点５ブロックが検出されている。小橋川の最奥部に当たる向台遺跡<95>はⅢ層から彫器や削器・石核・剥片など51点１ブロックが検出され、１ブロックの出土点数が多い。印旛沼東岸の松崎外小代内小代遺跡＜４＞はⅦ層から石核や敲石・剥片など183点１ブロックとⅦ層～Ⅸ層から石核や剥片８点１ブロックが検出されている。

縄文時代　早期の遺跡は、成田国際空港予定地内遺跡群で竪穴住居跡を中心とした集落が複数検出されている。木の根拓美遺跡（空港№６遺跡）は竪穴住居跡８軒、東峰御幸畑西遺跡（空港№61遺跡）は竪穴住居跡３軒・炉穴14基・陥穴16基、十余三稲荷峰遺跡（空港№67遺跡）は竪穴住居跡18軒・炉穴109基・陥穴153基などが検出されている。木の根拓美遺跡（空港№６遺跡）は県指定文化財に指定された三角形の土偶が出土したことでも注目される[註2]。取香川の中流域では、本遺跡は陥穴11基、馬場扇ノ作遺跡<29>は陥穴４基が検出されている。印旛沼東岸及び印旛沼に注ぐ江川流域では、松崎外小代内小代遺跡＜４＞は竪穴住居跡１軒・土坑６基・陥穴19基、橋賀台Ⅱ遺跡<93>・橋賀台Ⅰ遺跡<94>は竪穴住居跡13軒・炉穴３基、上人塚遺跡<97>は竪穴住居跡７軒・炉穴15基など集落跡が検出されている。

前期は明確な遺構が検出された遺跡は極めて少なく、印旛沼東岸の松崎外小代内小代遺跡＜４＞で竪穴住居跡１軒、江川流域の橋賀台Ⅱ遺跡<93>で竪穴住居跡２軒が検出されているだけである。

中期は遺跡の数が増加し、流域ごとに複数の集落跡が検出されている。取香川右岸の台地上にある野毛平木戸下向山遺跡<17>は竪穴住居跡41軒・土坑42基、隣接する野毛平植出遺跡<18>は竪穴住居跡１軒・土坑１基が検出され、対岸に位置する長田雉子ヶ原遺跡などからも竪穴住居跡や掘立柱建物跡などが複数検出されている[註3]。印旛沼東岸の松崎名代遺跡<59>は竪穴住居跡４軒と中期～晩期の土坑126基が検出さ



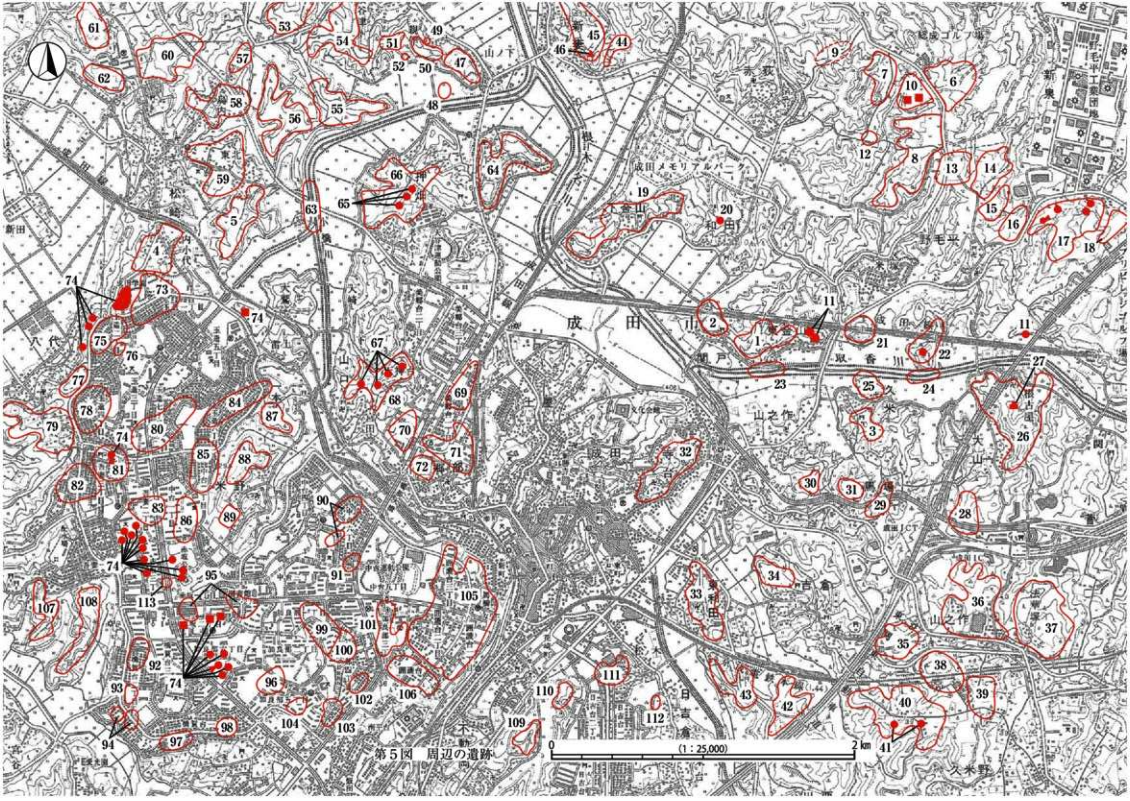
第４図　遺跡の位置（迅速測図）

れている。小橋川流域では、郷部南台遺跡<72>は竪穴住居跡６軒と中期～後期の土坑200基、囲護台遺跡群<105>は竪穴住居跡46軒と中期～後期の土坑600基以上が検出されている。

後期・晩期は遺跡の数が減少する。根木名川流域では、最奥部の台地上の小菅法華塚遺跡<37>は後期の竪穴住居跡５軒・柄鏡型住居跡２軒・土坑10基、中流域の土屋殿台(貝塚)遺跡<69>は後期の竪穴住居跡23軒・土坑125基が検出されている。印旛沼東岸では、松崎烏内遺跡<58>は竪穴住居跡１軒・土坑33基・陥穴２基、八代玉作(Loc.39)遺跡<75>は後期～晩期の竪穴住居跡６軒が検出されている。

弥生時代　本遺跡周辺地域は、櫛描き文や口縁部～胴部に斜縄文などを施す北関東系の土器群が多く見られる地域である。根木名川と取香川との合流域では、本遺跡は竪穴住居跡３軒、関戸谷津之台遺跡＜２＞は昭和55年調査分を合わせて中期～後期の竪穴住居跡71軒が検出されている。やや奥まった上流域の東和田城遺跡<33>は竪穴住居跡10軒以上、最奥部の小菅法華塚遺跡<37>は後期の竪穴住居跡３軒が検出されている。根木名川支流の小橋川の流域と印旛沼東岸地域でも中期～後期の集落が多数見られる。小橋川流域では、宝田八反目遺跡<47>は中期～古墳時代前期の竪穴住居跡115軒以上、松崎白子遺跡<55>や押畑(子の神)城<64>・押畑広台遺跡<66>などは中期や後期の竪穴住居跡などが検出されている。松崎白子遺跡の北約３㎞の利根川を臨む台地上にある南羽鳥遺跡群は、中期の竪穴住居跡・方形周溝墓・土器棺墓と後期の竪穴住居跡・土器棺墓などで構成される集落跡が検出されている[注4]。印旛沼東岸地域では、外子代(Loc.40)遺跡<73>は後期の竪穴住居跡15軒、八代玉作(Loc.39)遺跡<75>は中期の竪穴住居跡２軒が検出されているが、全体としては散発的である。印旛沼南岸地域の鹿島川流域では、中期後半の環濠集落と方形周溝墓群で構成される佐倉市六崎大崎台遺跡[注5]や後期の集落である佐倉市江原台遺跡[注6]など各時期を代表する遺跡が所在している。

古墳時代　河川流域ごとの遺跡数が増加し、特に、後期から始まる集落遺跡の増加が顕著である。根木名川中・上流域と取香川流域では、本遺跡や関戸谷津之台遺跡＜２＞・東和田城遺跡<33>・小菅法華塚遺跡<37>は弥生時代～後期まで集落が続くが、関戸谷津之台遺跡は中期に古墳が作られるようになり、小規模な集落へと変わっていく。野毛平高台遺跡<21>は前期から始まる集落で前期～中期の竪穴住居跡12軒、後期の竪穴住居跡17軒・土坑30基が検出されている。小菅大山遺跡群Ⅰ<26>は後期から集落が始まると思われる。小橋川流域では、根木名川との合流部付近にある宝田八反目遺跡<47>や松崎白子遺跡<55>・押畑(子の神)城<64>は弥生時代から続く集落であるが、存続期間は前期又は中期までで、後期には続かないと思われる。上流域では、石橋台２遺跡<90>は弥生時代から続く集落であるが、後期の竪穴住居跡65軒が検出され、この時期が主体となると思われる。石塚(Loc.20)遺跡<86>と印旛沼東岸の外子代(Loc.40)遺跡<73>・八代玉作(Loc.39)遺跡<75>も弥生時代～前期又は中期まで続く集落であるが、前二者は玉作工房跡、後者は石製模造品工房跡を伴うもので、ほかの集落とは性格をやや異にするものと思われる。後期になると小橋川流域では、郷部加定地遺跡<71>や囲護台遺跡群<105>は新たに集落が現れ、郷部加定地遺跡は後期～奈良時代の竪穴住居跡336軒・土坑376基、囲護台遺跡群は竪穴住居跡236軒・鍛冶工房跡１軒・大形土坑２基などが検出され、奈良・平安時代まで集落として継続している。印旛沼東岸地域では、松崎外小代内小代遺跡＜４＞や松崎山ノ台遺跡＜５＞・松崎遠原遺跡<60>などは後期から集落が現れる。松崎外小代内小代遺跡は竪穴住居跡45軒、松崎山ノ台遺跡は竪穴住居跡23軒、松崎遠原遺跡は竪穴住居跡12軒などが検出されており、いずれの遺跡も台地の一部の調査であることから、本来は囲護台遺跡群に匹敵する規模の集落であると思われる。


成田
成田メモリアルパーク
成田ゴルフ場
新泉
野毛平工業団地
野毛平
芝山
和田
芝山
芝山
芝山

古墳については、小橋川と印旛沼に注ぐ江川の分水嶺に沿って築造されている公津原古墳群<74>がこの地域を代表する古墳群である[注7]。八代台古墳群、天王・船塚古墳群、瓢塚古墳群の３つの古墳群からなり、総数で前方後円墳６基・円墳88基・方墳34基で構成される。４世紀前半～７世紀末まで造営され、その中でも６世紀～７世紀に築造されたものが多く、周辺地域における後期の集落遺跡の増加と軌を一にする。天王・船塚古墳群の南東部には公津原埴輪生産遺跡<113>があり、県内で２か所しか見つかっていない埴輪窯跡１基と竪穴状遺構４軒が検出されている。本遺跡の北東側の広い範囲に野毛平古墳群<11>があり、５世紀～７世紀の前方後円墳や円墳などが調査されている。関戸谷津之台遺跡でも円墳８基が検出され、取香川右岸の台地上ある古墳などとともに野毛平古墳群の一部を構成していたと考えられる。

奈良・平安時代　根木名川と取香川流域では、関戸谷津之台遺跡＜２＞・久米砦遺跡＜３＞・野毛平高台遺跡<21>・小菅大山遺跡群Ⅰ<26>・東和田城遺跡<33>・小菅法華塚遺跡<37>などは古墳時代後期から集落が続き、野毛平木戸下向山遺跡<17>や野毛平植出遺跡<18>はこれまで居住地として利用されなかったが、新たに集落が作られるようになる。小橋川中・上流域では、郷部加定地遺跡<71>や郷部南台遺跡<72>・戸崎Ⅳ（Loc.33A・B）遺跡<80>・雷土（Loc.37）遺跡<84>・石橋台２遺跡<90>・中台遺跡<101>・囲護台遺跡群<105>などの古墳時代後期から集落が続く遺跡を中心にして、さらに、郷部松ノ下（Loc.16・17）遺跡<99>や加良部（Loc.15）遺跡<100>・南囲護台遺跡<106>など新たな集落がその周辺地に拡大する。囲護台遺跡群は奈良時代の竪穴住居跡226軒、平安時代の竪穴住居跡118軒・掘立柱建物跡37棟などが検出され、古墳時代後期から連綿と続く中心的な集落と考えられる。南囲護台遺跡は部分的な発掘調査であるが、その成果から集落が台地全域に広がると考えられる。加良部（Loc.15）遺跡は竪穴住居跡66軒・掘立柱建物跡16棟など多くの遺構が検出され、その中の掘立柱建物跡の一つは四面廂を持ち、村落内寺院の可能性が考えられる。印旛沼東岸地域では、松崎外小代内小代遺跡＜４＞や松崎烏内遺跡<58>・松崎名代遺跡<59>・松崎遠原遺跡<60>などは古墳時代後期から引き続き集落が形成されている。松崎外小代内小代遺跡は竪穴住居跡３軒・掘立柱建物跡15棟・竪穴状遺構11基など、松崎烏内遺跡は昭和58年に行われた調査で竪穴住居跡26軒・掘立柱建物跡1棟・土坑51基が検出されており、いずれの遺跡ともに更なる遺構の広がりが想定される。

中・近世　城館跡は根木名川とその支流の取香川流域の台地上に見られ、右岸には北から一の陣屋遺跡<44>・下金山城<19>・関戸谷津之台遺跡＜２＞、左岸には寺台城跡<32>・久米砦遺跡＜３＞・小菅城<27>が所在し、寺台城跡の南側対岸には東和田城遺跡<33>が所在する。小橋川との合流地点には押畑（子の神）城<64>、それより南側のやや奥まった台地上には土屋殿台（貝塚）遺跡<69>が所在する。部分的な発掘調査のため全容について不明な遺跡が多いが、東和田城遺跡は全域を発掘調査した数少ない遺跡である。城跡は南北約450m・東西約250mの範囲に及び、郭３か所とそれらに伴う掘立柱建物跡や地下式坑・土坑・柵列など多数の遺構が検出されている。出土遺物などから16世紀後半の時期を中心に使われた戦国後期の「番城」であり、成田市では最大規模の城跡と位置付けられている[注8]。台地整形区画など屋敷跡と思われる遺跡としては、本遺跡や松崎外小代内小代遺跡＜４＞・松崎烏内遺跡<58>・松崎名代遺跡<59>・郷部加定地遺跡<71>があげられる。郷部加定地遺跡を除く４遺跡は、いずれも地下式坑や土坑・柵列・溝などを伴う台地整形区画が検出されている。墓域としては、赤荻屋下遺跡＜９＞や赤荻馬場遺跡<20>・小菅離山遺跡<36>・吉倉遺跡群Ⅱ<39>・松ノ木台遺跡<111>などで塚の存在が確認され、野毛平高台遺跡<21>は火葬墓・土坑墓10基が検出されている。

注１　千葉県県土整備部北千葉道路建設事務所発行「北千葉道路パンフレット」を参考にした。
注２　1981『木の根-成田市木の根№５、№６遺跡発掘調査報告書-』財団法人千葉県文化財センター
1994『新東京国際空港埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅷ』千葉県文化財センター調査報告第244集
2000『新東京国際空港埋蔵文化財発掘調査報告書ⅩⅢ』千葉県文化財センター調査報告第385集
2004『新東京国際空港埋蔵文化財発掘調査報告書ⅩⅨ』千葉県文化財センター調査報告第483集
2004『新東京国際空港埋蔵文化財発掘調査報告書ⅩⅩ』千葉県文化財センター調査報告第485集
2000『千葉県の歴史　資料編　考古Ⅰ(旧石器・縄文時代)』　千葉県
注３　1989『ニュー東京空港ゴルフ場造成地内埋蔵文化財調査報告書(Ⅱ)』財団法人印旛郡市文化財センター発掘調査報告書第31集
注４　1997『南羽鳥遺跡群Ⅱ』財団法人印旛郡市文化財センター発掘調査報告書第133集
2000『南羽鳥遺跡群Ⅳ』財団法人印旛郡市文化財センター発掘調査報告書第156集
注５　1985～1987『大崎台遺跡発掘調査報告Ⅰ』『同Ⅱ』『同Ⅲ』佐倉市大崎台Ｂ地区遺跡調査会
注６　1979『江原台』江原台第1遺跡発掘調査団
注７　1998『千葉県重要古墳群測量調査報告書-成田市公津原古墳群-』千葉県教育委員会
2003『千葉県の歴史 資料編 考古２(弥生・古墳時代)』千葉県
注８　1995『千葉県所在中近世城館跡詳細分布調査報告書Ⅰ-旧下総国地域-』千葉県教育委員会
1998『千葉県の歴史 資料編 中世１ 考古資料』千葉県

参考文献

文１　1956『成田史談』創刊号　成田史談会
文２　1959『成田史談』第5号　成田史談会
文３　1960『成田市の古墳群』　成田史談会
文４　1969『成田市東和田遺跡埋蔵文化財発掘調査報告書』　栗本佳弘
文５　1971『成田市の文化財』第２輯　成田市教育委員会
文６　1973『成田市中囲護台遺跡発掘調査報告』成田市遺跡調査報告第１集　成田市教育委員会
文７　1974『成田市の文化財』第５輯　成田市教育委員会
文８　1974『下総国の玉作遺跡』　寺村光晴　雄山閣
文９　1975『公津原』　千葉県企業庁
文10　1975『遺跡日吉倉』　日吉倉遺跡調査団
文11　1977『成田市の文化財』第７・８輯　成田市教育委員会
文12　1978『成田市の文化財』第９輯　成田市教育委員会
文13　1979『成田市の文化財』第10輯　成田市教育委員会
文14　1979『千葉県文化財センター研究紀要4』　財団法人千葉県文化財センター
文15　1980『成田市の文化財』第11集　成田市教育委員会
文16　1980『成田新線建設事業地内埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅰ』　財団法人千葉県文化財センター
文17　1981『公津原Ⅱ』　財団法人千葉県文化財センター
文18　1983『成田新線建設事業地内埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅱ(関戸遺跡)』　財団法人千葉県文化財センター
文19　1983『成田市中世城郭址調査報告書』　成田市中世城郭址調査団　成田市史編さん室
文20　1984『千葉県成田市殿台遺跡の調査』『奈和』第22号　藤下昌信ほか　奈和同人会
文21　1984『成田市郷部北遺跡群調査概要(加定地・殿台遺跡)』　成田市郷部北遺跡調査会
文22　1985『東関東自動車道埋蔵文化財調査報告書Ⅰ-成田地区-』　財団法人千葉県文化財センター
文23　1985『成田市松崎白子、大袋台畑・塔之下遺跡発掘調査報告書』　成田市松崎・大袋遺跡調査会
文24　1985『主要地方道成田安食線道路改良事業地内埋蔵文化財調査報告書Ⅰ』　財団法人千葉県文化財センター
文25　1986『成田市史　中世・近世編』　成田市
文26　1987『成田新住宅市街地内埋蔵文化財調査報告書　山口雷土遺跡』　財団法人千葉県文化財センター
文27　1988『千葉県成田市押畑子の神域跡発掘調査報告書』　財団法人印旛郡市文化財センター発掘調査報告書第24集
文28　1990『囲護台遺跡発掘調査報告書』　財団法人印旛郡市文化財センター発掘調査報告書第34集
文29　1990『成田都市計画事業成田駅西口土地区画整理事業地内埋蔵文化財発掘調査報告書』成田市囲護台遺跡発掘調査団
文30　1990『平成元年度成田市内遺跡群発掘調査報告書』　成田市教育委員会

文31　1990『新東京国際空港埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅵ』千葉県文化財センター調査報告第177集
文32　1990『ニュー東京空港ゴルフ場造成地内埋蔵文化財調査報告書(Ⅲ)』　財団法人印旛郡市文化財センター発掘調査報告書第32集
文33　1991『財団法人印旛郡市文化財センター年報７-平成２年度-』　財団法人印旛郡市文化財センター
文34　1991『平成２年度　成田市内遺跡群発掘調査報告書』　成田市教育委員会
文35　1992『成田市下金山城跡発掘調査報告書』　成田市下金山城調査会
文36　1992『財団法人印旛郡市文化財センター年報８-平成３年度-』　財団法人印旛郡市文化財センター
文37　1993『成田市の文化財 第24集 -埋蔵文化財発掘調査報告書-』　成田市教育委員会
文38　1993『主要地方道成田安食線地方道道路改良事業に伴う埋蔵文化財調査報告書Ⅱ』　千葉県文化財センター調査報告第229集
文39　1994『平成５年度　成田市内遺跡発掘調査報告書』　成田市教育委員会
文40　1994『千葉県文化財センター 研究紀要15』　財団法人千葉県文化財センター
文41　1995『埋蔵文化財調査報告書２』　成田市教育委員会
文42　1995『小菅法華塚Ⅰ・Ⅱ遺跡』　財団法人印旛郡市文化財センター発掘調査報告書第92集
文43　1996『南囲護台遺跡(第１地点)』　財団法人印旛郡市文化財センター発掘調査報告書第106集
文44　1996『平成７年度　成田市内遺跡群発掘調査報告書』　成田市教育委員会
文45　1996『成田市松崎遠原遺跡』　千葉県文化財センター調査報告第282集
文46　1997『成田市郷部北遺跡発掘調査報告書　第１分冊　第２分冊』　成田市郷部北遺跡調査会
文47　1997『千葉県埋蔵文化財分布地図(１)－東葛飾・印旛地区(改訂版)－』　千葉県教育委員会
文48　1997『財団法人印旛郡市文化財センター年報12-平成７年度-』　財団法人印旛郡市文化財センター
文49　1998『千葉県の歴史　資料編　考古３(奈良・平安時代)』　千葉県
文50　1998『北囲護台遺跡』　財団法人印旛郡市文化財センター発掘調査報告書第137集
文51　1998『馬場扇作遺跡』　財団法人印旛郡市文化財センター発掘調査報告書第139集
文52　1998『南囲護台遺跡(第２地点)』　財団法人印旛郡市文化財センター発掘調査報告書第142集
文53　2001『大生城跡・関戸砦跡』　財団法人印旛郡市文化財センター発掘調査報告書第182集
文54　2001『平成12年度成田市内遺跡発掘調査報告書』　成田市教育委員会
文55　2002『下金山城跡』　財団法人印旛郡市文化財センター発掘調査報告書第197集
文56　2004『南囲護台遺跡(第４地点)』　財団法人印旛郡市文化財センター発掘調査報告書第218集
文57　2005『松ノ木台遺跡発掘調査報告書』　富里市文化財報告書第３集
文58　2006『南囲護台遺跡(第３地点)』　財団寶辞任場郡市文化財センター発掘調査報告書第235集
文59　2007『成田市押畑広台遺跡』　千葉県教育振興財団調査報告第569集
文60　2008『平成19年度成田市内遺跡発掘調査報告書』　成田市教育委員会
文61　2008『成田市東和田城跡』　財団法人印旛郡市文化財センター発掘調査報告書第267集
文62　2009『成田新高速鉄道・北千葉道路埋蔵文化財発掘調査報告書１』　千葉県教育振興財団調査報告第618集
文63　2009『平成20年度成田市内遺跡発掘調査報告書』　成田市教育委員会
文64　2011『成田新高速鉄道・北千葉道路埋蔵文化財発掘調査報告書５』　千葉県教育振興財団調査報告第659集
文65　2011『平成22年度成田市内遺跡発掘調査報告書』　成田市教育委員会
文66　2012『南囲護台遺跡(第７地点)』　財団法人印旛郡市文化財センター発掘調査報告書第309集
文67　2013『平成24年度成田市内遺跡発掘調査報告書』　成田市教育委員会
文68　2013『郷部南台遺跡』　公益財団法人印旛郡市文化財センター発掘調査報告書第322集
文69　2013『松崎名代遺跡』　公益財団法人印旛郡市文化財センター発掘調査報告書第327集
文70　2016『寺台城跡(第１・２・３・４・５次)』　公益財団法人印旛郡市文化財センター発掘調査報告書第348集
文71　2016『平成27年度成田市内遺跡発掘調査報告書』　成田市教育委員会
文72　2016『成田ニュータウンの遺跡展 旅沼に栄えた文化 津原再発見』　図録 益財団法人千葉県教育振興財団
文73　2018『平成30年度千葉県の博物館・文化財行政』　千葉県教育庁教育振興部文化財課
文74　2019『成田市関戸谷津之台遺跡』　千葉県教育委員会埋蔵文化財調査報告第31集
文75　2019『平成31年度千葉県の博物館・文化財行政』　千葉県教育庁教育振興部文化財課

第１表　周辺の遺跡概要一覧表

番号	遺跡名	旧石器	縄文	弥生	古墳	奈良・平安	中・近世	文献
1	関戸関ノ台遺跡	①Ⅶ層～第４ブロック７点（石核・剥片）	①縄文11基	①後期壺穴３軒	①中期～後期壺穴14軒・土坑３基・溝１条 ②中期土坑１基	①平安壺穴２軒・土坑11基 ②平安土坑１基	①台地整形区画２か所，土地整形３基，掘立１棟，壺穴状11基，地下式坑２基，土坑基１基，土坑31基，ピット群７か所，溝１条	①本郷台書 1-X33
2	関戸谷津之台遺跡	①Ⅶ層１ブロック２点（剥片）	①４早期～晩期土器片・石器少量	②①中期後半～後期壺穴71軒	②①中期～後期壺穴45軒・土坑２基	②①平安壺穴５軒・溝１条 ②平安土坑２基	①郭，腰曲輪，空堀，堀底道 ②土壺穴状１基，土坑２基，溝１条，板碑片 ③腰曲輪４か所	①文25-2 X18 ②X53-1 X74
3	久米登遺跡		③縄穴３基		②①中期～後期壺穴45軒・土坑２基	②①奈良壺穴２軒	①腰曲輪，土塁，空堀，櫓台，土橋 ②土台地整形区画１か所，掘立９棟，土坑墓１基等	①文25-2 X73 ②X75
4	松崎外小代内小代遺跡	①Ⅶ層１ブロック183点（石核・最石・剥片），Ⅶ～Ⅸ層１ブロック８点（石核・剥片）	①早期壺穴１軒・土坑６基・縄穴19基，前期壺穴1軒 ②中穴２基　④壺穴１軒		①後期壺穴45軒	①掘立15棟，壺穴状11基，井戸３基，土坑９基 ③壺穴３軒	①地下式坑16基，土坑墓１基，土坑墓基，溝15条，櫓列２基，ピット群７か所，台地整形１基，堀土塁１基 ③溝１条	①X64-2 X65 ②X67-1 X71
5	松崎山ノ台遺跡	①Ⅶ層出土（Ⅶ～Ⅸ層・Ⅶ層）２か所，第層２ブロック12点（父面器・敲石石器・剥器・剥片），五層１ブロック７点（剥器・敲石石器・剥片）	①なし	①後期壺穴２軒	①後期～終末期壺穴23軒、方墳１基	①なし	①なし	①文62
6	西和泉谷収台遺跡					土師器		○文47
7	赤沢前原遺跡			後期（加曽利B・安行1）土器		平安土師器		○文47
8	赤沢西向遺跡			後期（加曽利B・安行1）土器	土師器			○文47
9	赤沢屋下遺跡						近世塚	○文47
10	赤沢清水台遺跡			後期（加曽利B・安行1）土器	土師器			○文47
11	野毛平古墳群				①浅間台古墳・円墳１基（7世紀） ②浅間台古墳001号墳・円墳１基（5世紀） ③前方後円墳（6世紀後～末） ④円墳３基（後期）	①溝３条	①なし	①文２・X14 ②X16-3 X22 ③X22
12	赤沢谷ノ田遺跡		前期（黒浜）土器					○文47
13	野毛平泉台Ⅱ遺跡					平安土師器		○文47
14	野毛平泉台Ⅰ遺跡		中期（加曽利E Ⅳ）土器		土師器	土師器		○文47
15	野毛平上之内遺跡		中期～後期（加曽利E Ⅰ～Ⅱ Ⅲ）土器					○文47
16	野毛平東方遺跡					土師器		○文47
17	野毛平木戸下向山遺跡	①なし ②なし ③なし ④なし ⑤第一Ⅳ層１点（ナイフ形石器）、第一Ⅶ層２点（剥片）	①なし ②中期加曽利E第一E3b期壺穴28軒・土坑55基 ③中期阿玉台期壺穴１軒・土坑１基 ④なし ⑤なし ⑥なし ⑦中期壺穴12軒・土坑13基、縄文～平安ピット群数百基 ⑧なし	①なし ②なし ③なし ④なし ⑤なし ⑥なし ⑦なし ⑧なし	①なし ②なし ③なし ④なし ⑤なし ⑥なし ⑦なし ⑧なし	①平安壺穴18軒、土坑１基、溝１条 ②平安壺穴17軒・掘立９棟・土坑７基 ③平安壺穴18軒・掘立７棟、土坑２基 ④土坑２基 ⑤奈良壺穴２軒、方形周溝１基 ⑥壺穴25軒、土坑89基、平安掘立１棟・鍛冶工房１基 ⑦壺穴26軒、掘立６棟、土坑72基、溝１条、平安土器埋整場１か所 ⑧平安壺穴８軒・土坑８基・掘立１棟・製鉄関連遺構１か所	①時期不明土坑７基、溝１条 ②掘立１棟・溝２条・時期不明土坑61基 ③土坑４基、時期不明土坑３基 ④なし ⑤なし ⑥なし ⑦溝１条、櫓列３条 ⑧区画塀	①文31 X32 ②X32-1 X39 ③X22-1 X33 ④X33-9 X36
18	野毛平植出遺跡		①なし ②中期壺穴１軒・土坑１基	①なし ②なし	①後期古墳１基・周溝状遺構１基 ②なし	①平安壺穴16軒・掘立17棟・土坑４基 ②平安21軒・土坑26基、土器埋整場１か所	①なし ②なし	①X32 X33
19	下安山城	①なし ②なし	①なし ②なし	①なし ②なし	①なし ②なし	①平安土坑１基 ②なし	①土塁１条、薬研堀１条、堀底道１条 ②郭、腰曲輪10か所	①文35 X55
20	赤沢馬場遺跡						近世塚	○文47
21	野毛平高台遺跡	①なし	①なし	①なし	前期～中期壺穴12軒、後期17軒、後期浜錐土坑30基、時期不明壺穴15軒	①平安壺穴５軒	①火葬墓・土坑墓10基	①X16
22	野毛平浅間遺跡	①なし	①なし	①なし	①中期壺穴１軒	①なし	①道路跡１条	①X16
23	東方低地遺跡		早期～後期（茅山～諸磯）土器		土師器			○文47
24	取香川低地入遺跡		①前期（関山）土器			①平安土器ガ石井ヲ「山井」「大井」「伊井」墨書林水辺に係る祭祀遺構）		①文7 X13 X41
25	久米（只尾）遺跡		前期・後期土器					○文１ X15
26	小首大山遺跡群１	①なし	①なし	①なし	①後期壺穴25軒・土坑５基、時期不明壺穴33軒	①掘立５棟、壺穴15軒（奈良10、平安５）、平安土坑１基	①溝２条、近世塚１基・土坑１基、時期不明土坑30基	①X22
27	小首城					平安土師器	①郭、堀２条（中世）	①X22
28	大山御所台遺跡					平安土師器		○文47
29	馬場原ノ作遺跡		①早期縄穴４基	①なし	①なし	①壺穴17軒、掘立４棟、土坑５基	①台地整形区画１か所	①X44　X51
30	山ノ作前山遺跡					平安土師器		○文47
31	馬場大場佐四遺跡		後期（加曽利B Ⅰ・Ⅱ）土器					○文47
32	寺台城跡					①土坑１基	①平場４か所、土塁２基、堀１条、ピット群１条、粘土採掘穴３基、土坑１基、台地整形２か所、詳細部遺構１か所、溝１条	○文19 X70
33	東和田城遺跡		①土坑３基 ②縄穴１基	①壺穴４軒 ②壺穴36軒（弥生中期～古墳後期）	①壺穴26軒、土坑６基 ②中期壺穴２軒	①奈良土師器 ②壺穴３軒・時期不明１軒、土坑11基、溝１条	①カワラケ ②掘立２棟、土坑30基・時期不明８基、地下式坑９基、溝８条、土塁１条 ③掘立４棟、地下式坑１基、土坑86基、櫓列２条、道路２条、溝８条 ④台地整形１か所、溝１条、土坑１基 ⑤台地整形１か所、土坑11基、小ピット11基、溝４条	①文19 X34 ②X33 X36 ③X61 X48 ④X61 X48

番号	遺跡名	旧石器	縄文	弥生	古墳	奈良・平安	中・近世	文献
34	吉倉下口遺跡		早期(井草・夏島)土器					○文47
35	吉倉六本山遺跡					土師器		○文47
36	小谷瀬山遺跡					平安土師器	近世陶	○文47
37	小倉法華塚遺跡		①墓穴7軒(早期1・中期1・後期5)、後期鈴鹿型信期2軒、土坑10基	①後期墓穴3軒	①墓穴15軒(前期3・後期一奈良12)	①平安墓穴2軒、掘立3棟、時期不明墓穴11軒・土坑66基		①文42
38	駒井野天神前遺跡					平安土師器		○文47
39	吉倉遺跡群Ⅱ		後期(堀之内・加曽利B II)土器			土師器	近世陶	○文47
40	吉倉遺跡群		中・後期(加曽利E・B)土器		土師器			○文47
41	久米野古墳群				円墳6基			○文3
42	東和田遺跡群Ⅱ		土器			土師器・須恵器		○文47
43	東和田遺跡群		前期(黒浜・諸磯B)土器			土師器		○文4
44	一の神屋遺跡						館跡・郭	○文19
45	新妻大久保遺跡				土師器		①土坑墓	○文47①文15
46	新妻(貝塚)遺跡		早期(茅山)土器					○文15
47	宝田八反目(貝塚)遺跡			①中期~古墳中期墓穴60軒以上 ②中期~古墳中期墓穴55軒以上	①古墳1基 ②円墳3基			①文30②文34
48	宝田下栗山低地遺跡					土師器・須恵器		○文47
49	宝田八反目(貝塚)遺跡		後期(加曽利B・安行I)土器					○文15
50	宝田関ノ台Ⅱ遺跡				土師器			○文47
51	宝田関ノ台1遺跡				土師器			○文47
52	宝田横穴							○文47
53	宝田山越(貝塚)遺跡		中期(阿玉台・加曽利E II)土器					○文15
54	宝田遺跡群Ⅰ				土師器	土師器		○文47
55	松崎白子遺跡		①早期炉穴1基	①中期未墓穴2軒	①前期墓穴2軒	①平安墓穴4軒・土坑2基		①文23
56	松崎市ノ坪遺跡					平安土師器		○文47
57	松崎諏訪遺跡				土師器			○文47
58	松崎島内遺跡	①なし ②なし	①後期(堀之内)墓穴1軒・土坑33基・陥穴2基 ②早期~後期土器 ③縄穴1基	①なし ②なし	①後期(7世紀代)墓穴4軒 ②なし	①墓穴26軒、掘立1棟、土坑51基 ②平安土坑1基、縄跡時期不明墓穴25軒・土坑3基・溝2条・掘立数基、土師器・須恵器 ③墓穴2軒 ④墓穴1軒、ピット多数	①内地整形1小所、墓穴状2基、溝8条 ②近世陶器・土器 ③墓穴状3基、土坑4基、溝3条 ④中世粘土結土坑2基、土坑2基	①文24②文27 ③文38④文57
59	松崎名代遺跡		①中期土坑2基 ②中期(阿玉台・加曽利E)墓穴4軒、中期~後期土坑85基、中期~晩期土坑41基		②後期墓穴2軒・土坑2基	①墓穴4軒、土坑3基	①中世土坑5基・貼土貼土坑1基・ピット20基以上 ②内地整形2小所、地下式坑2基、土坑2基(製鉄関連1)、溝8条	①文63②文69
60	松崎遺原遺跡	①V~V層1点(ナイフ形石器)、 ②なし	①なし ②炉跡1基	①なし ②なし	①後期(7世紀中~)墓穴12軒 ②なし	①奈良墓穴3軒、平安墓穴1軒 ②奈良墓穴3軒・溝1条	①なし ②中世柱穴8基・土坑4基	①文38②文45
61	下福田君作遺跡	①なし	①墓穴5軒	①なし	①祭祀跡1小所	①なし	①近世陶1基	①文38
62	大竹遺跡群Ⅱ				土師器			○文47
63	小張川原遺跡		後期(加曽利B・安行I)土器					○文47
64	押畑(子の神)城		①なし	①中期後半墓穴1軒・方形周溝墓1基、後期墓穴1軒	①前期墓穴3軒・土坑1基	①なし	①中世土器1基	○文19①文27
65	宝田・押畑古墳群				前方後円墳1基、円墳9基			○文47
66	押畑広台遺跡	①なし	①なし	①後期墓穴2軒	①後期(6世紀)墓穴3軒	①墓穴3軒	①土坑1基、土坑同1基、土坑墓7基、ピット群1基、溝7条	①文59
67	山口古墳群				円墳4基			○文47
68	山口天神台宮田遺跡				土師器			○文47
69	土屋殿台(貝塚)遺跡		①後~晩期墓穴23軒・土坑125基・遺物包含層1小所		①中~後期墓穴25軒		①中世曲輪・掘立2棟・溝8条	①文5 文20 文21 文46 文69
70	郷部立野遺跡				①後期墓穴2軒・土坑1基			①文21 文46 文69
71	郷部加定地遺跡		①墓穴16軒、炉穴9基、土坑多数(縄文~平安54基)	①なし	①後期~奈良墓穴336軒・土坑376基	①平安土坑20基	①中世掘立7棟・土坑26基・井戸1基・柵列4基・溝24条	①文11 文12 文21 文46 文69
72	郷部衝台遺跡		①中期墓穴6軒、中~後期土坑約200基 ②中期土坑8基 ③墓穴5軒、土坑10基		①後期墓穴約50軒	②墓穴13軒・掘立1棟		①文21 文46 文69 ②文68 ③文71
73	外子代(Loc.40)遺跡	②なし	②なし	②後期墓穴15軒	①円墳3基 ②前期墓穴22軒・工作工房8軒	②墓穴37軒・掘立6棟		①文9 ②文17 文49 文72
74	公津原古墳群				①弧塚古墳群32基(円墳18・方墳15) ②天王・船塚古墳群20基(帆立貝1・円墳11・方墳8) ③八代台古墳群6基(円墳3・方墳3)		②近世塚1基、土坑2基	①~③文9

番号	遺跡名	旧石器	縄文	弥生	古墳	奈良・平安	中・近世	文献
75	八代玉作(Loc.30)遺跡	①なし	①後期~晩期(堀之内~縄山)竪穴6軒	①中期末竪穴2軒	①前期竪穴9軒・玉作工房7軒			①文17　文72
76	八代玉作遺跡				①中期竪穴3軒・玉作工房3軒			①文8
77	八代右内遺跡				土師器	土師器		○文47
78	後原(Loc.34)遺跡					土師器、須恵器		○文47
79	八代四田遺跡				土師器	土師器		○文47
80	戸崎B(Loc.33A・B)遺跡	①なし	①なし	①なし	①後期竪穴7軒	①竪穴6軒		①文17
81	戸崎1・B遺跡					①竪穴5軒		①文17
82	引地(Loc.29)遺跡	①なし	①なし	①なし	①後期竪穴9軒	①竪穴14軒、掘立1棟	①近世竪穴区1基	①文17
83	多代台遺跡		早期(茅山)土器			土師器		○文47
84	雲土(Loc.37)遺跡	①第Ⅱ5ブロック9点(ナイフ形石器・削器・最石・調片)	①竪穴2軒、陥穴12基、土坑15基、炉穴4基	①なし	①後期竪穴2軒	①竪穴11軒	①近世土坑4基	①文26
85	新山遺跡		土器			土師器		○文47
86	石塚(Loc.20)遺跡	②なし	②なし	②中期末~竪穴5軒	①円墳2基、方墳2基 ②中期竪穴4軒・石製模造品工房9軒	②竪穴54軒、掘立9棟、製鉄関連遺構10基、溝6条		①文9 ②文17　文49 文72
87	米野一本松遺跡				後期土師器			○文47
88	米野屋敷裏遺跡		早期(茅山)土器		後期土師器			○文47
89	米野中台遺跡		①なし	①なし	①中期方形周溝1基	①奈良竪穴1軒、平安竪穴2軒・掘立2棟	①なし	①文37
90	石張台2遺跡		①早期(茅山下層)炉穴1基	①竪穴4軒(北関東系)	①前期~中期竪穴5軒、後期竪穴65軒	①平安竪穴7軒 ②平安竪穴4軒		①文9 ②文17
91	石張台1遺跡		①中期(加曽利E)土器			①土師器		①文9
92	横賀台第遺跡		①前期土器			①平安土師器		①文9
93	横賀台Ⅱ遺跡		①竪穴14軒(早期田戸下層12・前期諸磯1~浮島1)、早期炉穴1基					①文9
94	横賀台1遺跡		①早期(茅山下層)竪穴1軒・炉穴2基		①中期竪穴2軒、後期竪穴2軒			①文9
95	岡台遺跡	①遺物集中地点(第Ⅱ)1か所(石器(都器1・削器6・調片22・石核2等)	①なし	①なし	①前期竪穴18軒・方形周溝2基、V字溝1条	①なし		①文9　文17
96	西中学校遺跡					平安土師器		○文47
97	上人塚遺跡		①早期(茅山式)竪穴7軒・炉穴15基			①平安竪穴4軒		①文9
98	金塚遺跡					①竪穴1軒		①文9
99	鳴部松ノ下(Loc.16-17)遺跡	②なし	②なし	②なし	①方墳(後期末)1基	②竪穴68軒、竪穴状1基、土坑1基		①文9 ②文17　文49
100	加良部(Loc.15)遺跡	①なし	①なし	①なし	①なし	①竪穴66軒、掘立16棟(9世紀中四面廂建物1棟)、溝1条、土域多数		①文17　文49 文72
101	中台遺跡	①なし	①なし	①なし	①後期竪穴50軒	①竪穴93軒、掘立6棟		①文17
102	新山Ⅱ(Loc.7)遺跡	①なし	①中期(加曽利E Ⅲ)竪穴1軒	①なし	①なし	①竪穴8軒、ピット状遺構1基		①文9
103	新山1(Loc.1)遺跡	①なし	①中穴1基	①なし	①なし	①奈良竪穴21軒		①文9
104	加良部台(Loc.2)遺跡					竪穴、土師器、須恵器		○文47
105	岡護台遺跡群		①中期(加曽利E Ⅲ)竪穴3軒・土坑5基 ②中期(加曽利E末)竪穴41軒、中期末竪穴伏せ墓、早期炉穴1基、中期後~後期初頭穴7基・土坑64基 ③中期(加曽利E Ⅲ)竪穴2軒・土坑6基 ④縄穴1基		①後期竪穴200軒・土坑1基 ②後期竪穴6軒 ③後期竪穴50軒・鍛冶工房1基・大壁土坑2基・土坑11基	①奈良竪穴2軒 ②奈良竪穴236軒、平安竪穴118軒・掘立37棟・1坑2基、特殊石列竪穴50軒 ③奈良竪穴5軒、平安竪穴8軒 ④竪穴15軒、掘立7棟、台地整形区画1か所、井戸1基、土坑15基 ⑤竪穴1軒 ⑥奈良竪穴1軒	①機列3条 ③溝13条、土坑19基	①文6・7　文29 ②文28・2　文50 ③文60・6　文63
106	南岡護台遺跡	①なし ②なし	①土坑4基 ②なし ③土坑1基 ④中期土坑2基 ⑤なし ⑥なし			①奈良竪穴8軒、平安竪穴2軒・掘立5棟 ②奈良竪穴5軒、平安竪穴3軒・掘立1棟 ③奈良竪穴1軒 ④奈良竪穴1軒、溝1条 ⑤竪穴17軒、掘立2棟、土坑31基 ⑥竪穴2軒、溝1条 ⑦奈良竪穴1軒 ⑧竪穴13軒、掘立5棟、土坑2基 ⑨平安竪穴1軒	⑤溝3条、土坑2基	①文13・2　文52 ②文14・1　文54 ③文28・6　文60 ④文55・8　文66 ⑨文67
107	台方下下平遺跡				土師器	土師器		○文47
108	台方下平遺跡				土師器	土師器		○文47
109	不動ヶ岡大田遺跡		前期(黒浜)土器		土師器	土師器		○文47
110	不動ヶ岡鎧田遺跡		前期(黒浜)土器			土師器		○文47
111	松ノ木台遺跡 〈富里市〉				①後期(7世紀後半)方墳1基 ②後期竪穴5軒・土坑4基・溝3条	①平安竪穴1軒・土坑3基	①近世墓1基	①文10　文文57
112	日吉台、五斗蒔遺跡 〈富里市〉		土器					○文47
113	会津原補輪牛産遺跡				①中期(5世紀後半)補輪窯跡1基・竪穴遺構4軒			①文9　文40

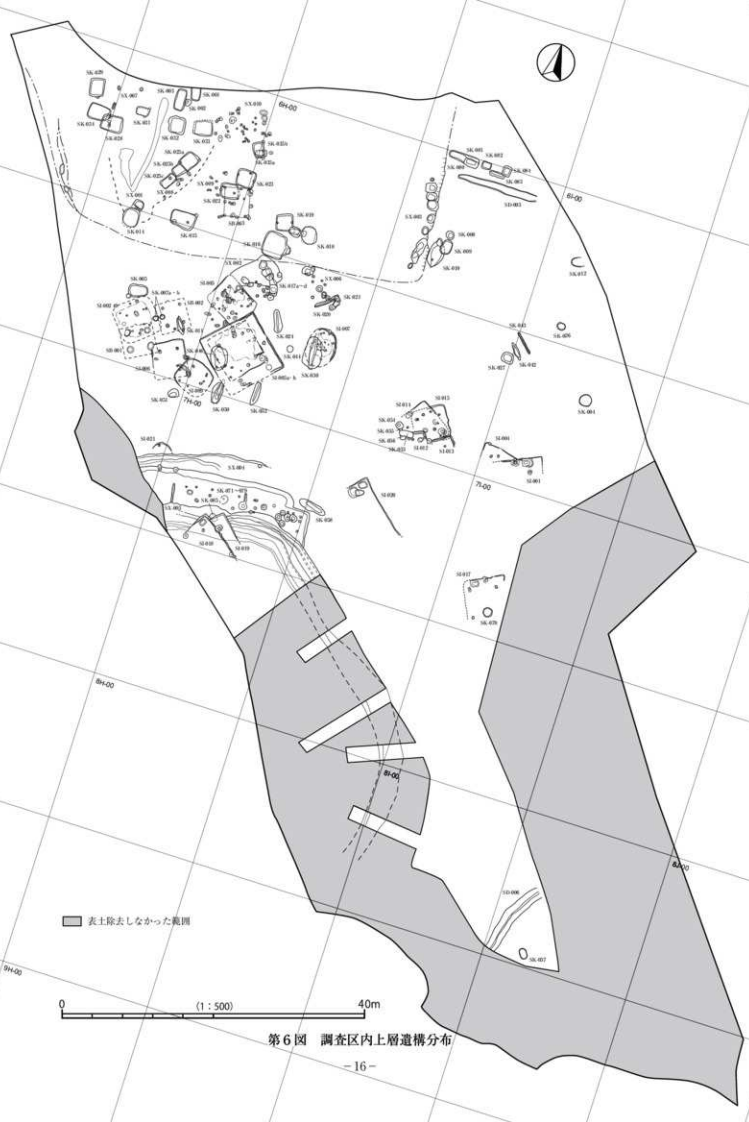
第２章　調査の成果

第１節　遺跡の概要（第６図、第２～４表）

今回の発掘調査で検出した遺構は、旧石器時代～中・近世までの幅広い時代にわたるものであるが、比較的平坦な北側半分に集中し、南側の痩せ尾根部分にはほとんど遺構が検出されなかった。時代ごとの内容では、旧石器時代はⅥ層～Ⅶ層から石核・剥片７点が出土したブロック1か所が検出され、そのほか単独出土石器として石核・剥片12点が出土した。縄文時代は調査区の中央部に陥穴11基が検出され、特に、6H-50・6H-55・7H-00・7H-55グリッドの内側に集中している。弥生時代は後期の竪穴住居跡３軒が調査区の西側にまとまって検出された。古墳時代は中期の竪穴住居跡６軒・土坑２基と後期の竪穴住居跡８軒・土坑１基・溝１条が検出され、竪穴住居跡と土坑は調査区の中央部にまとまり、溝は調査区南側の台地先端部を横断するように作られている。奈良・平安時代は竪穴住居跡２軒・土坑11基が検出された。竪穴住居跡は調査区西側に近接して作られ、土坑は調査区全域に広がっている。中・近世は台地整形区画２か所・土地整形遺構３基・掘立柱建物跡１棟・竪穴状遺構11基・地下式坑２基・土坑墓１基・土坑31基・土坑群（ピット群）７か所・溝１条が検出された。台地整形区画は北側と南側に分かれ、北側台地整形区画の中に掘立柱建物跡・竪穴状遺構・地下式坑の全てと多くの土坑や土坑群（ピット群）が含まれている。台地整形区画以外の場所では、土坑とピット群がわずかに見られるだけである。弥生時代～奈良・平安時代の遺構の分布は、中・近世の台地整形区画以外の範囲にあることから、台地整形区画造成に伴って多くの遺構が壊されたと推測される。それを裏付けるように、台地整形区画や中・近世の竪穴状遺構・土坑などからこれらの時代の遺物が多く出土している。

第２表　竪穴住居跡等一覧表　（　）推定値：＜　＞現存値　単位：主軸・幅m　床面積㎡

遺構番号	位　置	主軸方向	主軸	幅	床面積	炉・カマド	貯蔵穴	壁溝	時　期	備　考
SI-001	6I-81-90~92	N-26°-W	<2.4>	<5.5>	－	北西	北	一部	古墳後期	SI-004と重複
SI-002	6G-77-87-88-97	N-37°-W	(5.4)	(5.3)	(27.4)	北西	なし	なし	弥生後期	
SI-003a	6H-70~72-80~82-90~92	N-44°-W	(8.5)	(8.2)	(66.0)	北西	東	一部	古墳中期	SI-005と重複
SI-003b	6H-70-71-80~82-90-91	N-44°-W	(6.1)	(5.8)	(35.7)	不明	東	一部	古墳中期	
SI-004	6I-80-90-91	N-10°-W	<2.0>	<4.8>	－	不明	不明	なし	古墳中期	SI-001と重複
SI-005	6H-60-61-70-71	N-61°-W	(5.7)	(4.5)	(23.6)	中央・南	なし	一部	古墳中期	SI-003と重複
SI-006	6G-88-89-98-99	N-64°-E	4.5	(4.9)	(20.9)	北東	南東	一部	古墳後期	
SI-007	6H-63-64-73-74-83-84	N-5°-E	(5.2)	(3.9)	(15.2)	中央	なし	一部	弥生後期	
SI-009	6G-99、6H-90、7G-09、7H-00	N-65°-W	4.6	4.2	(16.8)	西	なし	なし	弥生後期	SI-006と重複
SI-012	6H-97-98	N-33°-W	<1.2>	<1.4>	－	不明	北東	あり	古墳後期	SI-013~015と重複
SI-013	6H-98-99	N-32°-W	<1.4>	<3.7>	－	北西	不明	あり	古墳後期	SI-012・014・015と重複
SI-014	6H-87-88-97-98	N-36°-E	<2.1>	<1.9>	－	北東	東・西	なし	古墳後期	SI-012・013・015と重複
SI-015	6H-87-88-98	N-32°-W	<4.2>	<1.7>	－	不明	不明	なし	古墳中期	SI-012~014と重複
SI-017	7I-30-31	N-28°-W	<0.6>	<4.1>	－	北	西	なし	古墳後期	
SI-018	7H-31-32-41~43	N-36°-E	<7.0>	<3.4>	－	不明	北・南西	全周？	古墳後期	SI-019と重複
SI-019	7H-32-42-43	N-44°-E	<4.4>	<2.2>	－	不明	北	なし	古墳中期	SI-018と重複
SI-020	7H-16-17-26~28	N-43°-E	<8.6>	<2.7>	－	不明	北	なし	古墳後期	
SB-001	6G-87-88-97-98	N-28°-W	2.1	2.8	－	不明	不明	不明	奈良・平安	竪穴住居跡
SB-002	6G-78-79-88-89	N-33°-W	2.4	2.2	－	不明	不明	不明	奈良・平安	竪穴住居跡
SB-003	6G-39-49、6H-30-40	N-14°-W	－	－	－	－	－	－	中・近世	掘立柱建物跡 ２間×２間
SI-008・010・011・016　欠番										



第６図　調査区内上層遺構分布

第3表　竪穴状遺構・土坑等一覧表

（　）推定値：＜　＞現存値

遺構番号	種　別	位　置	長軸方向	計測値：m			時　期	備　考
				長軸	短軸	深さ		
SI-021	土坑	7G-29、7H-20	N-21°-W	(3.60)	(2.80)	0.10	古墳中期	
SK-001	土坑	6G-07	N-9°-W	<1.60>	1.20	0.24	中・近世	粘土貼り
SK-002	土坑	6G-17	－	0.90	0.90	0.20	中・近世	粘土貼り
SK-003	土坑	6G-06・07・16・17	N-3°-W	2.84	1.40	0.32	中・近世	粘土貼り
SK-004	土坑	6I-62	－	1.68	1.68	0.36	奈良・平安	
SK-005	土坑	6G-77	N-77°-E	2.60	1.60	0.64	奈良・平安	
SK-007a	土坑	6G-88	N-88°-E	0.75	0.65	0.48	奈良・平安	
SK-007b	土坑	6G-88	－	77.00	0.77	0.11	奈良・平安	
SK-008	土坑	6H-26	－	1.12	1.12	0.40	奈良・平安	「黄井」墨書
SK-009	土坑	6H-26・36	N-6°-E	2.00	1.36	0.52	奈良・平安	
SK-010	陥穴	6H-26・36	N-1°-E	4.10	1.98	1.06	縄文	
SK-011	陥穴	6G-89	N-29°-W	2.53	0.80	1.84	縄文	
SK-012	土坑	6I-20・21	N-80°-E	<1.30>	1.20	0.20	奈良・平安	
SK-014	地下式坑	6G-46・56	N-0°-E	2.68	2.15	2.32	中・近世	
SK-015	竪穴状遺構	6G-47・48・57・58	N-90°-E	3.28	2.24	0.32	中・近世	
SK-016	竪穴状遺構	6H-41・51	N-4°-E	3.32	3.04	0.25	中・近世	
SK-017a	土坑	6H-51	N-6°-E	1.16	0.96	0.37	中・近世	SX-002と重複
SK-017b	土坑	6H-51	N-45°-E	1.28	0.82	0.17	中・近世	SX-002と重複
SK-017c	土坑	6H-51	N-35°-E	1.10	0.80	0.59	中・近世	SX-002と重複
SK-017d	土坑	6H-61	N-12°-W	1.14	1.00	0.30	中・近世	SX-002と重複
SK-018	地下式坑	6H-31・32・41・42	N-2°-W	2.30	2.05	1.80	中・近世	SK-019と重複
SK-019	竪穴状遺構	6H-31・41	N-15°-W	2.24	2.24	0.44	中・近世	SK-018と重複
SK-020	陥穴	6H-53・63	N-42°-E	3.36	0.48	0.37	縄文	
SK-021	土坑	6H-53	N-36°-W	0.90	0.56	0.50	古墳後期	
SK-022	竪穴状遺構	6G-39	N-80°-E	2.53	2.00	0.42	中・近世	
SK-023	竪穴状遺構	6G-29・39、6H-20・30	N-90°-E	2.50	2.34	0.47	中・近世	
SK-024	陥穴	6H-62・72	N-22°-W	3.65	0.90	1.33	縄文	
SK-025a	竪穴状遺構	6G-27・28・37・38	N-31°-E	2.30	1.93	0.39	中・近世	
SK-025b	土坑	6G-37	N-33°-E	<1.52>	1.40	0.22	中・近世	
SK-025c	土坑	6G-37・47	N-32°-E	2.21	1.18	0.14	中・近世	
SK-026	土坑	6I-41	N-84°-W	1.12	0.96	0.76	奈良・平安	
SK-027	土坑墓	6H-59・69、6I-50・60	N-87°-W	1.60	1.36	0.96	中・近世	
SK-028	竪穴状遺構	6G-24・25	N-89°-E	2.92	2.04	0.36	中・近世	SK-034と重複
SK-029	竪穴状遺構	6G-14	N-29°-W	2.46	1.90	0.58	中・近世	一部粘土貼り
SK-030	陥穴	6H-73・83	N-6°-W	4.18	1.56	1.80	縄文	
SK-031	土坑	6G-15・16	N-87°-E	1.70	1.08	0.88	中・近世	粘土貼り
SK-032	竪穴状遺構	6G-16・17・26・27	N-7°-W	2.32	2.16	0.44	中・近世	
SK-033	竪穴状遺構	6G-17・18	N-78°-E	(2.56)	(2.12)	0.64	中・近世	一部粘土貼り
SK-034	竪穴状遺構	6G-24	N-90°-E	2.88	2.00	0.87	中・近世	粘土貼り、SK-028と重複
SK-035a	土坑	6G-19・20、6H-10・20	N-71°-E	(1.52)	(0.88)	0.50	中・近世	SK-035bと重複
SK-035b	土坑	6G-19・20、6H-10・20	N-21°-W	(1.94)	1.52	0.67	中・近世	SK-035aと重複
SK-042	陥穴	6H-59、6I-50	N-41°-W	2.56	0.68	0.72	縄文	
SK-043	陥穴	6H-59、6I-50	N-45°-W	3.24	0.28	0.24	縄文	
SK-044	土坑	6H-72	N-6°-E	0.89	0.79	－	古墳中期	
SK-046	陥穴	6H-80・81・90・91	N-23°-W	3.22	2.24	1.89	縄文	
SK-050	陥穴	6H-90・91、7H-00・01	N-2°-E	3.30	0.96	2.01	縄文	
SK-051	土坑	7G-09	N-58°-E	1.39	0.74	0.86	中・近世	
SK-052	陥穴	6H-92	N-4°-E	3.14	0.86	1.43	縄文	
SK-053	土坑	6H-97	N-84°-E	1.90	0.79	0.86	中・近世	
SK-054	土坑	6H-97	－	1.07	0.98	0.45	中・近世	
SK-055	土坑	6H-97	－	0.45	<0.2>	0.19	中・近世	
SK-056	土坑	6H-97	－	0.73	<0.64>	0.18	中・近世	
SK-057	土坑	8I-46	N-39°-W	1.46	0.92	0.20	奈良・平安	
SK-058	陥穴	7H-24・25	N-76°-W	3.76	1.24	1.12	縄文	
SK-070	土坑	7I-41	－	1.24	1.24	0.21	奈良・平安	「冨」墨書
SK-071	土坑	7H-34	N-85°-W	(1.06)	0.89	0.64	中・近世	SX-004内
SK-072	土坑	7H-34	N-5°-E	1.07	0.86	0.52	中・近世	SX-004内
SK-073	土坑	7H-34	N-43°-W	0.78	0.72	0.47	中・近世	SX-004内
SK-074	土坑	7H-34	N-34°-W	0.95	0.69	0.42	中・近世	SX-004内

遺構番号	種　別	位　　置	長軸方向	計測値：m			時　期	備　　考
				長軸	短軸	深さ		
SK-075	土坑	7H-34	N-10°-E	0.87	0.81	0.46	中・近世	SX-004内
SK-076	土坑	7H-31	N-85°-E	0.76	0.64	0.12	中・近世	SX-004内
SK-077	土坑	7H-32	－	(1.12)	<1.10>	0.56	中・近世	SX-004内
SK-078	土坑	7H-32・33	N-88°-E	1.16	1.00	0.49	中・近世	SX-004内
SK-079	土坑	7H-33	N-2°-E	0.76	0.70	0.21	中・近世	SX-004内
SK-080	土坑	6H-06	N-83°-W	<2.26>	1.94	0.25	中・近世	
SK-081	土坑	6H-06	N-83°-W	1.92	1.41	0.71	中・近世	
SK-082	土坑	6H-07	N-90°-W	1.38	0.96	0.32	中・近世	
SK-083	土坑	6H-07	N-88°-W	2.10	0.63	0.45	中・近世	
SK-084	土坑	6H-07・08	N-8°-E	1.36	1.08	0.32	中・近世	
SK-085	土坑	7H-32・42	N-54°-W	(1.24)	<0.72>	－	奈良・平安	
SX-001	土地整形遺構	6G-25～28・35～38・45～47・56・57	－	13.00	9.00	－	中・近世	北舞台地整形区画内
SX-002	ピット群	6H-50・51・60・61	－	6.80	5.90	－	中・近世	ピット17基
SX-003	土坑群	6H-15・16・25・26・35・36・45・46	－	13.00	－	－	中・近世	土坑８基
SX-004	土地整形遺構	7H-11～13・20～25・30～35、7G-29・39	－	<24.00>	<7.00>	－	中・近世	南舞台地整形区画内 平場状
SX-005	土地整形遺構	7H-30～35・40～46ほか	－	<54.00>	<20.00>	－	中・近世	南舞台地整形区画内 階段状
SX-006	ピット群	6H-52・53・63	－	4.50	5.30	－	中・近世	ピット14基
SX-007	ピット群	6G-14・15・24・25	－	7.00	4.00	－	中・近世	柵列 ピット７基
SX-008	ピット群	6G-27・28・37・38・47	－	7.00	4.00	－	中・近世	柵列 ピット７基
SX-009	ピット群	6G-29・38・39・49、6H-40	－	8.00	7.00	－	中・近世	ピット17基
SX-010	ピット群	6G-08・09・18・19・28・29、6H-10・20	－	9.00	6.00	－	中・近世	ピット41基
SK-006・013・036～041・045・047～049・059～69　欠番								

第４表　溝一覧表　　<　　>現存値

遺構番号	位　　置	走行方向	計測値：m			時　期	備　　考
			総延長	幅	深さ		
SD-003	6H-06～09	N-90°-E	<10.6>	0.86 ～ 1.16	0.05 ～ 0.24	中・近世	
SD-006	8I-25・26・35・36・45	N-24°-E	<9.7>	1.30 ～ 1.75	0.58 ～ 0.89	古墳時代	
SD-001・002・004・005・007～011　欠番							

第２節　旧石器時代の遺構と遺物

１　第１ブロック（第７・８図、第５表、図版５・24）

6H-70グリッドに所在する。樹枝状台地突端の平坦面に位置する。南北方向３ｍ・東西方向１ｍの範囲に７点の石器が出土した、僅少かつ小規模なブロックである。出土層位はいずれもⅥ層とⅦ層の境界面である。ただし、6H-70グリッド付近のローム層はⅥ層上面まで削平されており、上層遺構の底面がⅥ層中位、一部の深い土坑がⅨa層まで達している。ブロックに重複する上層遺構を重ね合わせると、見かけ上の石器の広がりが、上層遺構の間隙を縫って残された石器の分布であることが分かる。したがって、本ブロックは後世の削平の影響を受けており、本来の全容を保っていない可能性が高い。

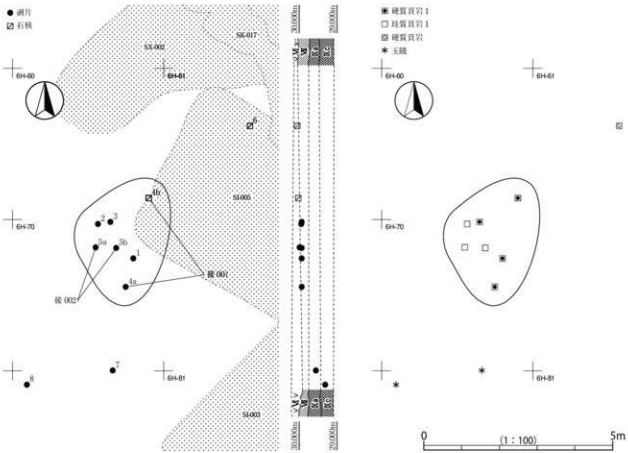
定型的な石器は認められず、剥片・石核類と接合資料のみで構成される。大型の石刃ないし剥片をブランクとし、特徴的なリダクションを行う資料が出土している。

使用されている石材は、均質な硬質頁岩と珪質頁岩のみである。２母岩に分類した。

硬質頁岩１（母岩番号：001・第８図）自然面は残存個体がないため不明である。剥離面は黒褐色（Hue10YR 3/2）である。所により黒褐色斑が延びる。油脂光沢がある。

珪質頁岩１（母岩番号：002・第８図）自然面は明褐色（Hue7.5YR 5/6）、剥離面はにぶい黄橙色（Hue10YR 6/3）で、所により明色部分が混ざる。節理面は灰白色（Hue10YR 7/1）である。微光沢があるが、油脂光沢の発達が弱いことから珪質頁岩とした。

１～３は剥片である。１・３は硬質頁岩１の剥片である。打点が浅く、打面は線状に近い。２は珪質頁岩１の剥片である。背面の剥離は、稜線が不明瞭なものは自然面とした。



第7図　第1ブロック器種別・母岩別分布図

第5表　旧石器時代石器属性表　　現存値（　）

挿図番号	石器集中	出土層位	器種	石材	母岩番号	接合番号	計測値：mm　g				グリッド	遺物番号	位置情報：m		
							最大長	最大幅	最大厚	重量			X値	Y値	標高
第8図-1	1B	Ⅵ	剥片	HSh	001		20.9	9.4	2.8	0.5	6H-70	4	-22765.025	45043.265	29.947
第8図-2	1B	Ⅵ	剥片	SSh	002		21.7	28.4	7.8	4.1	6H-70	6	-22764.115	45042.331	29.930
第8図-3	1B	Ⅵ	剥片	HSh	001		18.6	15.1	3.2	0.7	6H-70	7	-22764.061	45042.659	29.961
第8図-4a	1B	Ⅵ	剥片	HSh	001	001	42.8	11.8	3.0	2.0	6H-70	5	-22765.777	45043.063	29.937
第8図-4b	1B	Ⅵ	石核	HSh	001	001	55.8	21.2	17.2	16.1	6H-60	2	-22763.430	45043.674	30.068
第8図-5a	1B	Ⅵ	剥片	SSh	002	002	41.5	15.2	11.5	3.6	6H-70	2	-22764.733	45042.269	30.000
第8図-5b	1B	Ⅵ	剥片	SSh	002	002	(32.1)	16.9	7.6	4.9	6H-70	3	-22764.748	45042.813	29.956
第9図-6	外	Ⅵ	石核	HSh			44.4	28.0	12.2	15.1	6H-61	2	-22761.524	45046.352	30.038
第9図-7	外	Ⅸa	剥片	Cc			18.1	22.8	6.7	2.4	6H-70	8	-22767.985	45042.721	29.526
第9図-8	外	Ⅸc	剥片	Cc			(19.8)	(26.5)	2.6	1.4	6H-80	2	-22768.362	45040.449	29.317
第9図-9	外	不明	剥片	HSh			(40.7)	59.9	8.9	19.8	7G-07	1	－	－	－
第9図-10	外	不明	剥片	HSh			24.2	31.6	5.6	2.6	6H-93	1	－	－	－
第9図-11	外	不明	剥片	Ho			38.3	27.1	13.2	8.5	SK-052	1	－	－	－
第9図-12	外	不明	剥片	Ho			25.1	13.8	4.9	1.2	6H-92	4	－	－	－
第9図-13	外	不明	剥片	Ch			52.3	41.2	9.2	15.1	6H-92	5	－	－	－
	外	不明	剥片	Ho			33.5	15.7	5.4	2.6	SK-052	1	－	－	－
	外	不明	剥片	Ho			15.4	25.1	4.4	1.9	SK-052	1	－	－	－
	外	不明	剥片	Ho			(11.2)	17.1	6.3	1.3	SK-052	1	－	－	－
	外	不明	剥片	Ho			(10.5)	23.2	6.4	1.7	SK-052	1	－	－	－

4は硬質頁岩1の石核1点と石刃1点の接合資料である。厚手の石刃ないし剥片をブランクとして、小石刃や剥片を剥離する資料である。4bの右側面のポジティブ面は、末端がウートラパッセ状になる。また、右側面下部と裏面の剥離面は、このポジティブ面よりも古く、裏面下部の剥離面は更に古いポジティブ面である可能性が高い。したがって、ブランク剥出に先立つ複数段階の剥片剥離工程が想定でき、剥片石核の底面を取り込んで剥離された石刃ないし剥片がブランクであると推測される。剥片剥離は、まず、4の上下に打面を設定し、正面と両側面を作業面として進められる。下面は単剥離打面、上面は調整打面である。小石刃を連続的に剥離しており、この過程で4aが剥離されている。その後、打面を正面に転移し、左側面を作業面として幅広の剥片を剥離している。作業面には顕著な頭部調整が残っている。最終的に残核4bが遺跡内に残されている。

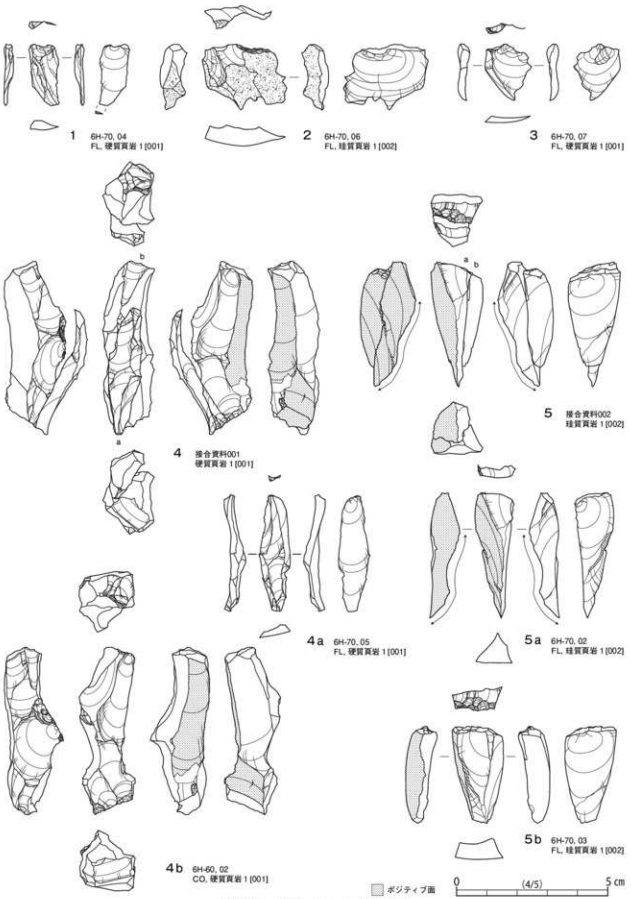
5は珪質頁岩1の石刃2点の接合資料である。剥片をブランクとし、小口面の作業面から石刃を剥離する資料である。5の左側面はポジティブ面である。正面の剥離面はポジティブ面よりも新しく、右側面の剥離面がそれよりも新しい。したがって、ブランクを用意したのち、石刃剥離に先立って、小口面の作業面が作り出されていることが分かる。剥片剥離は、まず、上面に打面を作出し、小口面になった正面を作業面として石刃剥離が進められ、5aが剥離される。その後、裏面側から打面更新と正面側から顕著な打面調整を施して5bが剥離される。残核は検出されていない。なお、正面背稜に微細剥離が連続するが、パティナが新しいためガジリの可能性が高い。

2　単独出土(第9図、第5表、図版25)

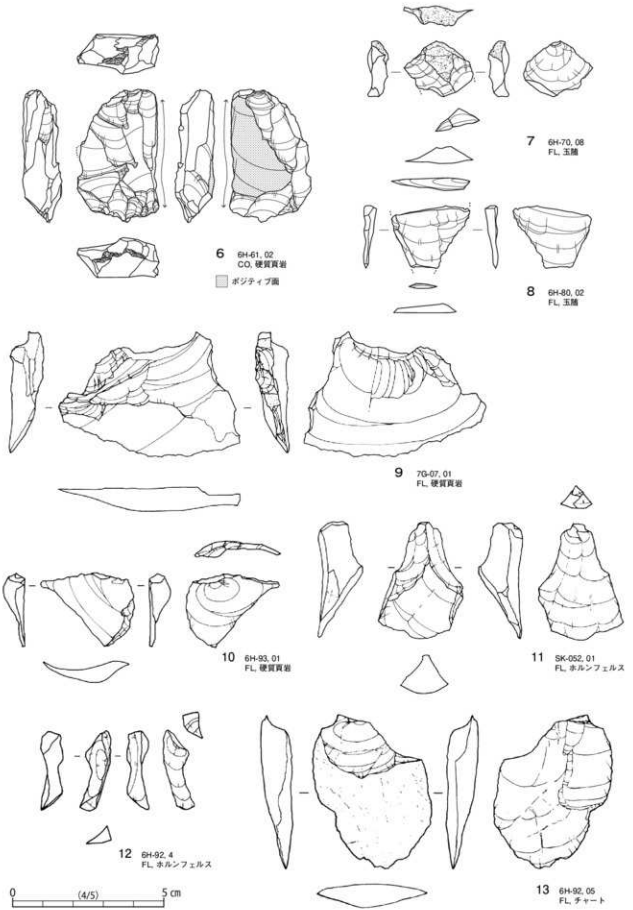
6は石核である。6H-61グリッドで、Ⅵ層とⅦ層の境界面から出土した。第1ブロックから離れるため単独出土としたが、出土層位・石材・剥離工程を考慮すると、第1ブロックと同一の文化層に帰属する可能性が高い。石質は硬質頁岩であるが、ブロック内出土の硬質頁岩1とは異なる。剥離面はにぶい黄褐色(Hue10YR 5/3)で、薄墨のような暗色部が斑に混ざり、油脂光沢がある。厚手の石刃をブランクとして、小石刃・剥片を剥離する石核である。裏面に広いポジティブ面が残る。また、ブランク時の背面が右側面と背面に残存し、左側面にも並行して僅かに残存する。したがって、ブランクは厚手で両側縁が並行する石刃であり、腹面の状況から見て、残存している部分はリダクションが進んだ石刃の端部であると推測される。右側縁には、裏面(素材時の腹面)に微細剥離痕、表面(素材時の背面)に線状痕が認められる。剥片剥離は上下に打面を設定し、表裏両面を作業面として進められ、小石刃・剥片類を剥離している。上面は線状打面で、下面は単剥離打面である。打面直下に連続する小剥離は、両極剥離に由来する可能性が高い。

7・8は玉髄の剥片で、6H-80グリッドのⅨa層下部から出土した。剥離面は黄色を帯び半透明である。

9～13は上層調査時に遺構埋土やグリッド一括遺物として出土した石器のうち、旧石器時代に帰属すると判断した資料を図示した。いずれも剥片である。9は6H-93グリッドから出土した硬質頁岩の剥片である。石質は第1ブロックの硬質頁岩2に似るが、やや黄色を帯びる。10は7G-07グリッドから出土した硬質頁岩の剥片である。石質は第1ブロックの硬質頁岩1に似ている。背面や縁辺の細かい剥離は全てガジリである。11～13は6H-92グリッド及び上層遺構のSK-052から出土した剥片である。11・12はホルンフェルスの剥片である。図示した石器以外にも、同様の石質のホルンフェルスの剥片4点が付近から出土している。13はチャートの剥片である。



第8図　第1ブロック出土石器


6 6H-61, 02
CO, 硬質頁岩
ポジティブ面
7 6H-70, 08
FL, 玉髄
8 6H-80, 02
FL, 玉髄
9 7G-07, 01
FL, 硬質頁岩
10 6H-93, 01
FL, 硬質頁岩
11 SK-052, 01
FL, ホルンフェルス
12 6H-92, 4
FL, ホルンフェルス
13 6H-92, 05
FL, チャート
0
(4/5)
5 cm

第９図　単独出土石器

第３節　縄文時代の遺構と遺物

１　陥穴

検出した陥穴は11基であり、形状や深さから陥穴と判断した。多くの遺構からは時期を特定できるような遺物が出土していないため、各遺構の詳細な時期は判断しがたい。陥穴は平面形の形態から、２パターンに分類することができる。ひとつは平面形が長楕円形のもので、SK-011・020・024・042・043・052・058が該当する。もうひとつは平面形が楕円形のもので、SK-010・030・046・050が該当する。分布の状況は、6H-50グリッドから南に20m、東に20mの範囲に濃密な分布範囲が認められるが、平面形パターンによる分布の傾向は認められない。

SK-010（第10図、第３表、図版６）

6H-26･36グリッドに所在する。北東部分の一部はSK-009に壊されている。平面形は楕円形で、長軸方向はN-１°-Eである。規模は長軸長4.10m・短軸長1.98mである。確認面からの深さは北側で1.06m、中央から南側で0.7m～0.8mである。南側の底面は、側壁よりも外側に抉るように作られている。南側の壁寄りに深さ25cmほどのピットがあるが、性格は不明である。埋土の堆積状況は、発掘調査時の所見ではローム粒を多量に含んだ黄褐色土が主体となっている。

本遺構に伴う遺物は出土していない。

SK-011（第10図、第３表、図版６）

6G-89グリッドに所在する。北東部分の一部はSB-002の柱穴に壊されている。平面形は長楕円形で、長軸方向はN-29°-Wである。規模は長軸長2.53m・短軸長0.80mで、確認面からの深さは1.84mである。長軸方向の壁は底面から袋状に立ち上がり、一旦広がった後、垂直に立ち上がる。

本遺構に伴う遺物は出土していない。

SK-020（第10図、第３表、図版６）

6H-53･63グリッドに所在する。北東部分はSK-021・SX-006に壊されている。平面形は長楕円形で、長軸方向はN-42°-Eである。規模は遺存部分から推測し、長軸長3.36m・短軸長0.48mで、確認面からの深さは0.37mである。短軸方向の断面形はＶ字状である。深さは浅いが、遺構の形状から陥穴と判断した。

遺物は出土していない。

SK-024（第10図、第３表、図版６）

6H-62･72グリッドに所在する。平面形は長楕円形で、長軸方向はN-22°-Wである。規模は長軸長3.65m・短軸長0.90mで、確認面からの深さは1.33mである。短軸方向の断面形はＶ字状である。

遺物は出土していない。

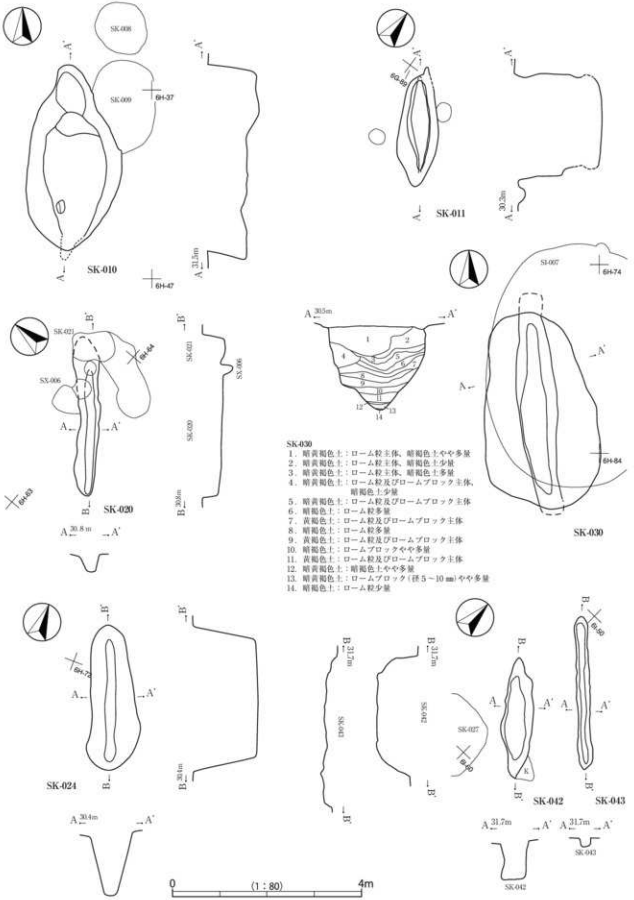
SK-030（第10図、第３表、図版６）

6H-73･83グリッドに所在する。SI-007の床面精査中に検出したものである。平面形は楕円形で、長軸方向はN-６°-Wである。規模は長軸長4.18m・短軸長1.56mで、確認面からの深さは1.80mである。長軸方向の底面は、側壁よりも外側に抉るように作られている。短軸方向の断面形は緩やかなＶ字状である。埋土は中層から下層にかけて、暗褐色土と黄褐色土が交互に堆積している。

遺物は出土していない。

SK-042（第10図、第３表、図版６）

6H-59・6I-50グリッドに所在する。北東約１mにSK-043が近接し、本遺構と平行に並んでいる。南東部



第10図　SK-010・011・020・024・030・042・043

分の一部は撹乱を受けている。平面形は長楕円形で、長軸方向はN-41°-Wである。規模は長軸長2.56m・短軸長0.68mで、確認面からの深さは0.72mである。短軸方向の断面形は箱形である。

遺物は出土していない。

SK-043（第10図、第３表、図版６）

6H-59・6I-50グリッドに所在する。南西約１mにSK-042が近接し、本遺構と平行に並んでいる。平面形は長楕円形で、長軸方向はN-45°-Wである。規模は長軸長3.24m・短軸長0.28mで、確認面からの深さは0.24mである。短軸方向の断面形は椀形である。深さは浅いが、SK-042との位置関係や方向などから一連の遺構と考え、陥穴と判断した。

遺物は出土していない。

SK-046（第11図、第３表、図版７）

6H-80・81・90・91グリッドに所在する。SI-003a・bの床面精査中に検出したものである。平面形は楕円形で、長軸方向はN-23°-Wである。規模は長軸長3.22m・短軸長2.24mで、確認面からの深さは北側の深いところで1.89mである。短軸方向の断面形は箱形である。埋土は中層から下層にかけて、ロームブロックを主体とした黄褐色土が厚く堆積し、人為的に埋め戻されたと推測される。

遺物は出土していない。

SK-050（第11図、第３・７表、図版７・50）

6H-90・91・7H-01グリッドに所在する。中央上部は溝状の撹乱に削平されている。平面形は楕円形で、長軸方向はN-２°-Eである。規模は長軸長3.30m・短軸長0.96mで、確認面からの深さは2.01mである。長軸方向の底面は、側壁よりも外側に抉るように作られている。埋土はロームブロックやローム粒を主体とした暗黄褐色土が厚く堆積し、所々に暗褐色土が挟まれ、人為的に埋め戻されたと推測される。

遺物は13層の上面付近から、石器が１点出土した。１は黒曜石製の石核である。長さ27.9㎜・幅29.9㎜・厚さ13.8㎜である。

SK-052（第12図、第３表、図版７）

6H-92グリッドに所在する。平面形は長楕円形で、長軸方向はN-４°-Eである。規模は長軸長3.14m・短軸長0.86mで、確認面からの深さは1.43mである。長軸方向の北側底面は、側壁よりも外側に抉るように作られているが、南側は緩やかに立ち上がる。短軸方向の断面形はV字状である。

本遺構に伴う遺物は出土していない。

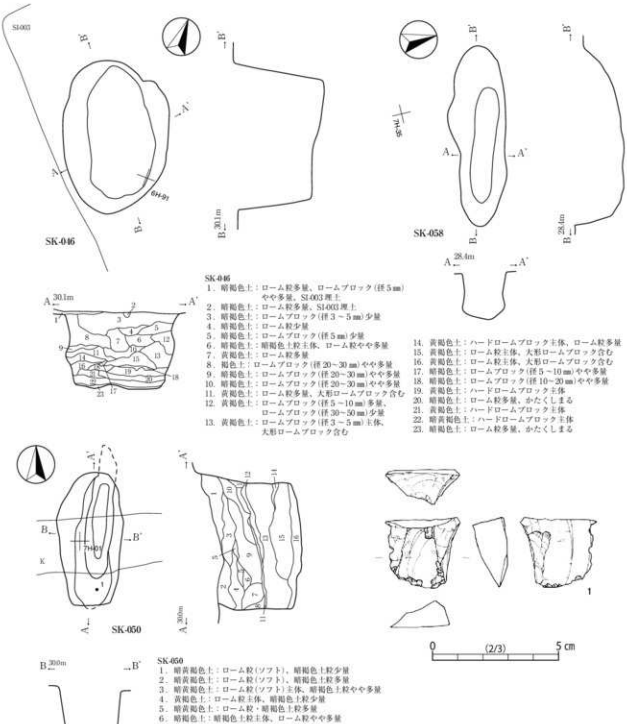
SK-058（第11図、第３表、図版６）

7H-24・25グリッドに所在する。南側上部は溝状の撹乱に削平されている。平面形は長楕円形で、長軸方向はN-76°-Wである。規模は長軸長3.76m・短軸長1.24mで、確認面からの深さは1.12mである。短軸方向の断面形は袋状である。

本遺構に伴う遺物は出土していない。

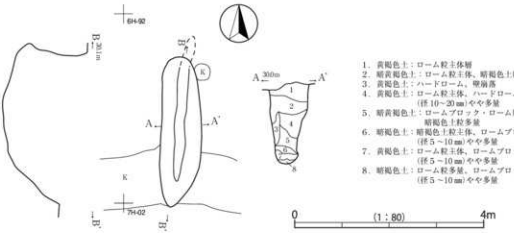
２　遺構外出土の遺物（第13図、第６・７表、図版26）

今回の調査範囲における縄文時代の遺構は陥穴のみで、そこからは当該時期の土器は出土していない。また、本遺跡全体としても縄文時代の遺物は極めて少ない。グリッド一括や出土遺構に伴わない遺物のうち９点を図示することができた。土器は中期後半～後期前半の時期のものである。



第11図　SK-046・050・058

1・2は加曽利E式後半の深鉢である。1は口縁部の破片で、欠損しているが突起が付されたものと推測される。その下から隆線で口縁部の区画が形成されている。隆線貼付後に単節縄文LRが施される。2



第12図　SK-052

は胴部破片で、単節縄文LRが施された後に２本の縦位の沈線が引かれ、沈線間が磨り消される。３・４は加曽利E式～称名寺式の胴部破片で、櫛歯状工具で蛇行した沈線が引かれる。５は称名寺式の深鉢で、口縁部である。やや細い沈線でＪ字文が施されるが、縄文は認められない。また、内面には稜が作り出される。６は堀之内式の深鉢である。口縁部の破片で、全体に単節縄文RLが横・縦・横と、方向を変えながら施された後、円形の押捺文が施される。

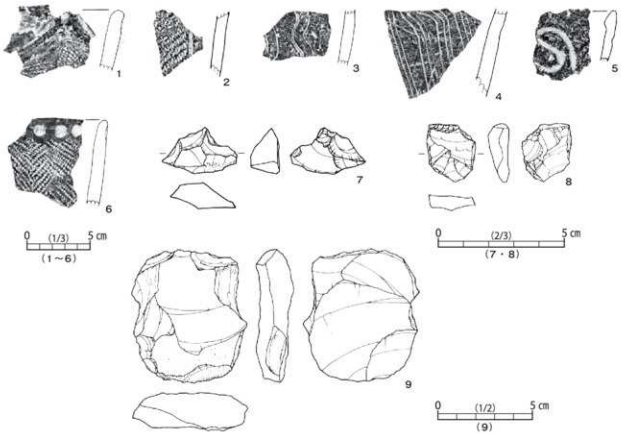
７～９は石器である。７は石核で、石材はチャートである。縁辺には調整剥離が施されている。長さ18㎜・幅30㎜・厚さ12㎜である。８はチャート製の楔形石器である。上面及び左側面は打面調整により平坦に整えられ、その後に両極打法により、対となる面にも剥離が加えられている。縁辺には一部押圧剥離が施されている部分が見られる。長さ23.2㎜・幅19.6㎜・厚さ8.3㎜である。９は打製石斧である。石材は花崗岩で、長さ70.3㎜・幅60.4㎜・厚さ20.1㎜・重さ101.19gである。分銅型打製石斧を再加工したと考えられる。刃部の表面は摩耗しており、側面は両極剥離により再調整が施されている。

第６表　縄文土器観察表

遺構	挿図番号	型式	器種	法量(cm)	遺存度	胎土	色調・焼成	技法	備考
遺構外	第13図-1	加曽利E	深鉢	口径 － 底径 － 器高 －	口縁部	小石	内面 にぶい黄褐色(10YR5/4) 外面 にぶい黄褐色(10YR5/4) 焼成 良好	内面 － 外面 － 底外面 －	隆線＋単節縄文LR SI-002
	第13図-2	加曽利E	深鉢	口径 － 底径 － 器高 －	胴部	石英	内面 明褐色(7.5YR5/6) 外面 にぶい黄褐色(10YR5/4) 焼成 良好	内面 － 外面 － 底外面 －	単節縄文LR＋磨消懸垂文 SI-002
	第13図-3	加曽利E～称名寺	深鉢	口径 － 底径 － 器高 －	胴部	小石	内面 黒褐色(10YR3/2) 外面 にぶい黄褐色(10YR5/4) 焼成 良好	内面 － 外面 － 底外面 －	櫛歯状工具による沈線文 SI-009
	第13図-4	加曽利E～称名寺	深鉢	口径 － 底径 － 器高 －	胴部	白色粒子	内面 灰黄褐色(10YR6/2) 外面 にぶい黄褐色(10YR5/4) 焼成 良好	内面 － 外面 － 底外面 －	櫛歯状工具による沈線文 SX-002
	第13図-5	称名寺	深鉢	口径 － 底径 － 器高 －	口縁部	雲母粒	内面 にぶい黄褐色(10YR6/4) 外面 にぶい黄褐色(10YR5/4) 焼成 良好	内面 － 外面 － 底外面 －	J字文 SI-003a
	第13図-6	堀之内	深鉢	口径 － 底径 － 器高 －	口縁部	雲母粒	内面 明黄褐色(10YR7/6) 外面 にぶい黄褐色(10YR5/4) 焼成 良好	内面 － 外面 － 底外面 －	単節縄文RL＋円形の押捺文 SI-018

第７表　縄文時代石器属性表

遺構番号	挿図番号	遺物番号	種類	石材	法量：mm　g				備考
					最大長	最大幅	最大厚	重量	
SK-050	第11図-1	2	石核	黒曜石	27.9	29.9	13.8	8.95	
遺構外	第13図-7	SI-009-1	石核	チャート	18.0	30.0	12.0	5.00	
	第13図-8	6G-97-1	楔形石器	チャート	23.2	19.6	8.3	4.16	
	第13図-9	SH-003-1	打製石斧	花崗岩	70.3	60.4	20.1	101.19	



第13図　遺構外出土の遺物

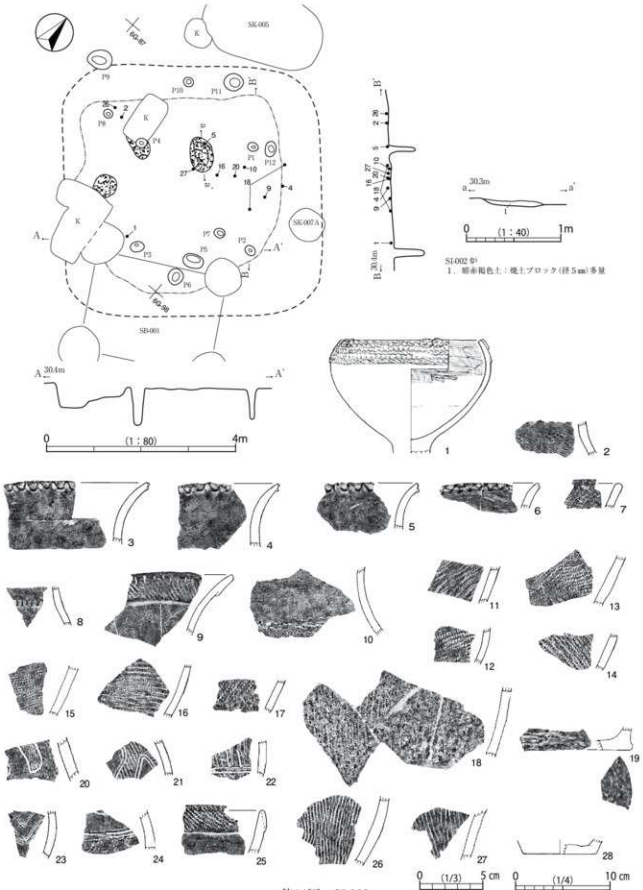
第４節　弥生時代の遺構と遺物

今回の調査では、弥生時代の竪穴住居跡３軒を検出した。これらの遺構は全て調査区の北西側で検出された。遺物は土器、石器が出土した。土器はほぼ全て破片資料だが、台部と欠損するが器形の分る台付鉢を１点図示することができた。土器は遺構外でも多く出土しており、遺構外出土の遺物として掲載した。

１　竪穴住居跡

SI-002（第14図、第２・８表、図版７・８・26）

6G-77・87・88・97グリッドに所在する。南側でSB-001と重複し、本遺構の方が古い。全体的に撹乱や削平が著しく、壁や壁溝は検出できなかった。炉と主柱穴４基を検出し、それらの位置から主軸方向や形状を推測した。平面形は隅丸方形で、主軸方向はN-37°-Wと推測される。規模はいずれも推定で主軸長5.44m・幅5.28mで、床面積は27.4㎡である。炉は北西壁側の主柱穴の間にある。P4の周囲及びその南側で焼土化した部分を２か所検出したが、本遺構に伴う炉であるかは不明である。ピットは12基検出した。P1～P4は主柱穴で、P1は径80㎝前後、床面からの深さは56㎝である。P2は径22㎝前後、床面からの深さは62㎝である。P3は長径31㎝・短径21㎝、床面からの深さは76㎝である。P4は径22㎝前後、床面からの深さは68㎝である。P5は長径44㎝・短径28㎝、床面からの深さは29㎝で、出入口ピットと判断した。P6～P12は本遺構に伴う可能性があるが、性格は不明である。埋土は最大で７㎝の厚さで確認し、発掘調査時の所見ではロームブロック（径３㎜～５㎜）やローム粒を少量含む暗褐色土が堆積している。


SK-005
SK-007A
SB-001
SI-002 炉1
1．明赤褐色土：焼土ブロック（径5㎝）多量
(1：80)
(1：40)
(1/3)
(2～27)
(1/4)
(1～28)

第14図　SI-002

図示できた遺物は28点である。1～19は後期中葉を主体とする土器である。1～8は南関東系の土器である。1は複合口縁の台付鉢である。台部は欠損している。口縁部はZ字状結節文が2段3列施され、竹管による刺突(7～8つ)を施した円形浮文を2個単位で、5か所に貼り付けている。台部との破断面は被熱の痕跡があり、体部内面にはススが付着している。床面付近に据えられた状態で出土していることから、台部が欠損した後に、煮炊き用の鉢として使用したものと推測される。2は壺の頸部で、S字状結節文と単節斜縄文が施される。3～8は甕である。3～6は波状口縁で、3～5は棒状工具による外側押圧が施され、押圧の間に親指の爪と思われる跡が見られる。6は棒状工具による交互押圧である。7は破断面を磨滅させて口唇部にした擬似口縁部で、網目状撚糸文が施される。8は頸部下端部で、輪積痕の下端部に縄文原体以外の工具による刻みが施される。9～19は北関東系の土器である。9は壺の口縁部～頸部である。口縁部は複合口縁で、外面に2条絡め撚糸文、上端部にヘラ状工具による刻みが施される。頸部はヘラ描き縦区画文と斜格子文が施される。10～18は甕の胴部である。10はS字状結節文3段と単節斜縄文が施される。11～18は単節斜縄文が施される。19は甕の底部で、網代痕が見られる。

20～24は中期後葉の土器である。20・21は宮ノ台式の壺胴部で、20は無節斜縄文を地文とし、沈線で区画した舌状文あるいは結紐文が施される。21は単節斜縄文を地文とし、2本櫛描き結紐文が施される。いずれも文様間の縄文は磨り消している。22～24は北関東系の壺の胴部で、2本櫛描き文が施される。22は横走文と縦走文、23は山形文と横走文、24は渦巻き文と単節斜縄文LRが施される。

25～27は中期末葉～後期初頭の土器である。25は鉢の口縁部で、複合口縁である。口唇部と口縁部に単節斜縄文が施される。26・27は甕の胴部で、いずれも撚糸文が施される。28は底部で、施文等が残っていないため時期の判断が難しいが、ほかの遺物との比較から中期後葉～後期中葉のものと推測される。

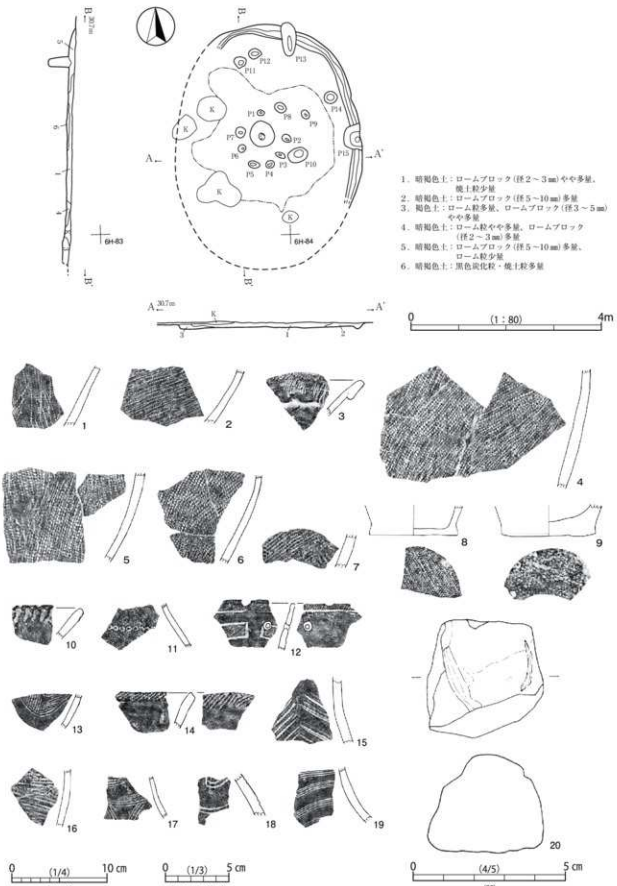
本遺構の時期は、遺物の様相と出土状況から後期中葉と考えられ、南関東系の土器がやや目立つ点が特徴としてあげられる。

SI-007(第15図、第2・8表、図版8・26)

6H-63・64・73・74・83・84グリッドに所在する。遺存状態が悪く、北側～東側の壁及び壁溝の一部と炉、床面の硬化範囲を検出した。平面形は楕円形で、主軸方向はN-5°-Eと推測される。規模は推定で主軸長5.15m・幅3.94mで、確認面からの深さは0.20mである。床面積は推定で15.2㎡である。炉は中心からやや北側に寄った位置で検出した。ピットは15基検出し、全て本遺構に伴う可能性があるが、主柱穴及び貯蔵穴と判断できるものはなかった。P1～P9・P11・P12は小形で径15㎝～25㎝・深さ8㎝～26㎝である。P10は長径43㎝・短径32㎝・深さ54㎝、P13は長径72㎝・短径29㎝・深さ36㎝、P14は径26㎝・深さ45㎝、P15は長径50㎝・短径37㎝・深さ32㎝である。

遺物は全て遺構内一括で取り上げたもので、図示できたものは土器19点と砥石1点である。1～9は後期初頭を主体とする北関東系の土器である。1・2は壺の胴部で、いずれも撚糸文が施される。3～9は甕である。3は複合口縁で、口唇部と口縁部に撚糸文が施される。4～7は胴部で、4・6は単節斜縄文が施される。7は0段多条の単節縄文が羽状に施される。8・9は底部である。8は網代痕、9は網目圧痕が見られる。10・11は南関東系の甕である。10は波状口縁部で、縄文原体による押捺が施される。11は胴部で、竹管による連続円形刺突文が施される。

12～19は中期の土器である。12は中期前葉～中葉の可能性のある、北関東系の甕の口縁部～胴部である。口縁部は内外面と口唇部に無節斜縄文が施され、下端部はヘラ描き沈線で胴部と区画される。胴部外面は


1．暗褐色土：ロームブロック（径2～3㎝）やや多量、
焼土粒少量
2．暗褐色土：ロームブロック（径5～10㎝）多量
3．褐色土：ローム粒多量、ロームブロック（径3～5㎝）
やや多量
4．暗褐色土：ローム粒やや多量、ロームブロック
（径2～3㎝）多量
5．暗褐色土：ロームブロック（径5～10㎝）多量、
ローム粒少量
6．暗褐色土：黒色炭化粒・焼土粒多量
0 (1：80) 4m
0 (1/4) 10 cm
(8・9)
0 (1/3) 5 cm
(1～7・10～19)
0 (4/5) 5 cm
(20)

第15図　SI-007

ヘラ描き沈線による横長の区画文が連続して描かれ、内側に無節斜縄文が施される。文様以外の器面は、内外面ともにヘラ磨きが施される。焼成後の補修孔がある。13～16は宮ノ台式と推測される土器である。13は壺の胴部である。２本櫛描きで曲線の区画文が描かれ、内部に単節斜縄文が施される。14～16は甕である。14は口縁部で、口唇部と内面に単節斜縄文が施される。15・16は胴部で、15は２本～３本の櫛描き縦走羽状文、16は条痕文が施される。17・18は足洗式と推測される壺である。17は頸部で、３本櫛描き横走文と山形文が施される。18は胴部で、２本櫛描き渦巻文が施される。19は北関東系の壺の頸部で、４本櫛描き横走文と連弧文が施される。

20は砂岩製の砥石である。下半部は欠損している。最大長39.0㎜・最大幅38.0㎜・最大厚32.0㎜・重量58.00ｇである。

図示できた遺物は中期と後期の遺物が同量程度であるが、非掲載分の遺物も考慮すると後期初頭と推測される遺物が多いことから、本遺構の時期は後期初頭と判断した。

SI-009（第16図、第２・８表、図版９・10・27）

6G-99・6H-90・7G-09・7H-00グリッドに所在する。北西側でSI-006と重複し、本遺構の方が古い。南側は溝状の撹乱を受け、壁は検出できなかった。平面形は隅丸長方形で、主軸方向はN-65°-Wと推測される。規模は主軸長4.60m・幅4.23m、床面積は16.8㎡で、確認面からの深さは0.23mである。壁溝はない。炉は北西壁側の主柱穴の間で検出した。ピットは８基検出した。P1～P3は主柱穴で、P1は径24cm前後で、床面からの深さは38cmである。P2は長径41cm・短径28cmで、床面からの深さは17cmである。P3は径26cm前後で、床面からの深さは42cmである。P4～P8は本遺構に伴う可能性があるが、性格は不明である。

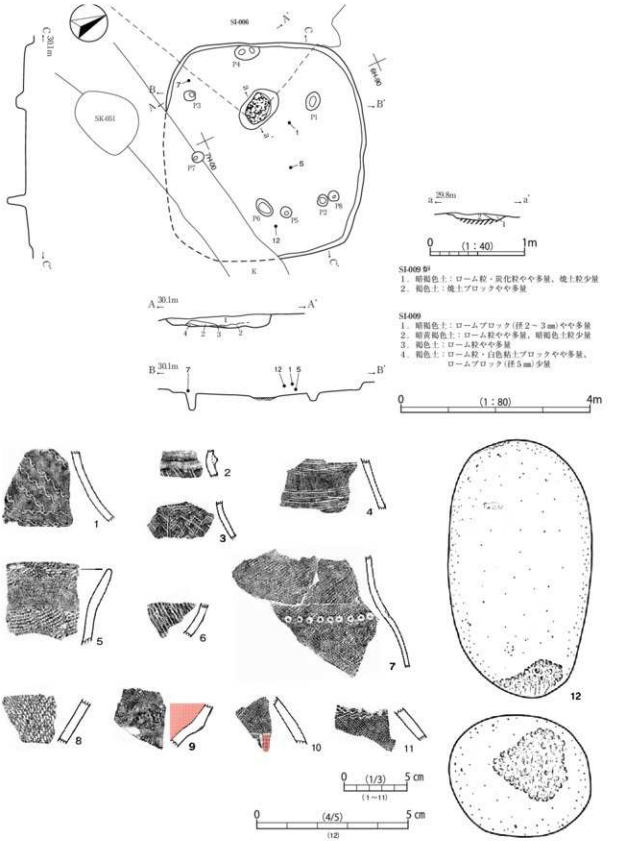
図示できた遺物は土器11点と敲石１点である。１～５は中期の土器である。１は宮ノ台式と推測される壺の頸部で、Ｚ字状結節文が３条単位で斜位と横位に施されている。２～５は北関東系の土器である。２～４は壺の頸部である。２は断面三角形の突帯が巡り、その下に２本櫛描き斜行文が施される。３は２本櫛描き文で横と縦に区画され、区画内に２本櫛描き連続鋸歯状文が施される。４は２本櫛描き横走文が無文帯を挟んで施される。５は甕の口縁部～胴部の破片で、口唇部と口縁部及び頸部無文帯を挟んだ胴部に単節斜縄文が施される。

６～11は後期の土器である。６は壺の胴部で撚糸文が施される。７は甕の頸部で単節斜縄文を地文とし、胴部上半を帯状に磨り消して竹管による刺突文が１列施される。刺突文より下は地文の上から無節縄文が施される。８は甕の胴部で単節斜縄文が施される。

９～11は南関東系の壺である。９は口縁部～頸部、10・11は胴部である。９は有段口縁で単節縄文が羽状に施され、下端部には縄文原体による刻みが施される。内面は赤彩される。10は単節の羽状縄文を地文として沈線により区画され、縄文を磨り消した区画内は赤彩される。11はＳ字状結節文と単節の羽状縄文が施される。

12は敲石で完存している。上面・下面に敲打痕が見られる。石材は安山岩もしくは礫岩と推測される。最大長84.0㎜・最大幅47.0㎜・最大厚40.0㎜・重量225.40ｇである。

中期後葉～後期の遺物がほぼ同量出土し、床面付近の遺物も両時期のものが存在するため、本遺構の時期判断は難しいが後期と判断した。


SI-006
SK-051
30.1m
29.8m
SI-009 Pit
1．暗褐色土：ローム粒・炭化粒やや多量、焼土粒少量
2．褐色土：焼土ブロックやや多量
SI-009
1．暗褐色土：ロームブロック（径2～3cm）やや多量
2．暗黄褐色土：ローム粒やや多量、暗褐色土粒少量
3．褐色土：ローム粒やや多量
4．褐色土：ローム粒・白色粘土ブロックやや多量、ロームブロック（径5cm）少量
(1：40)
(1：80)
(1/3)
(1～11)
(4/5)
(12)

第16図　SI-009

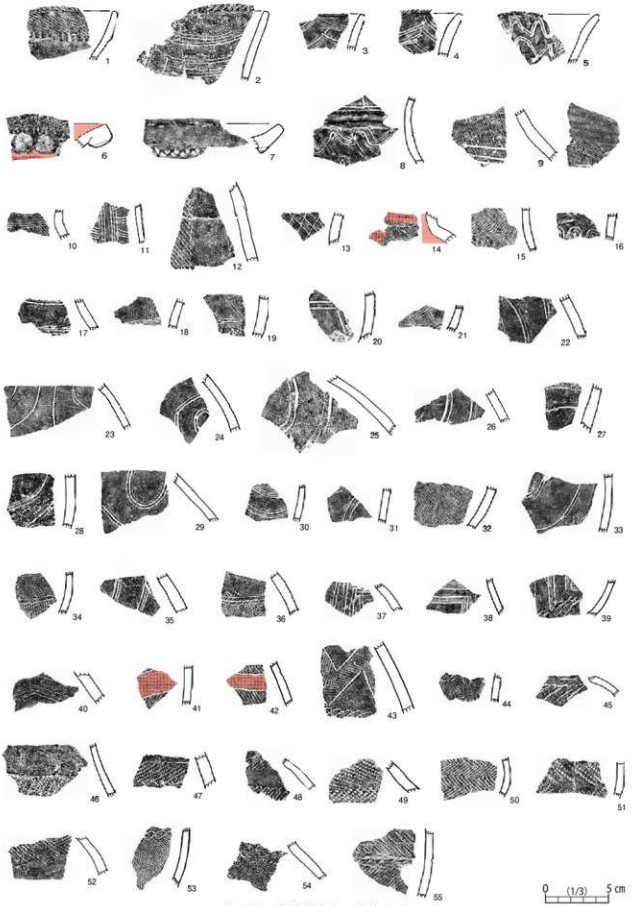
2　遺構外出土の遺物（第17～19図、第８表、図版28～30）

ここではグリッド一括や出土遺構に伴わない遺物をまとめ、土器168点を図示することができた。後期初頭～中葉を主体としつつ、中期後葉～中期末の土器も出土する点は遺構内出土の土器と同様である。以下、器種・部位・文様の特徴で分けて記載した。

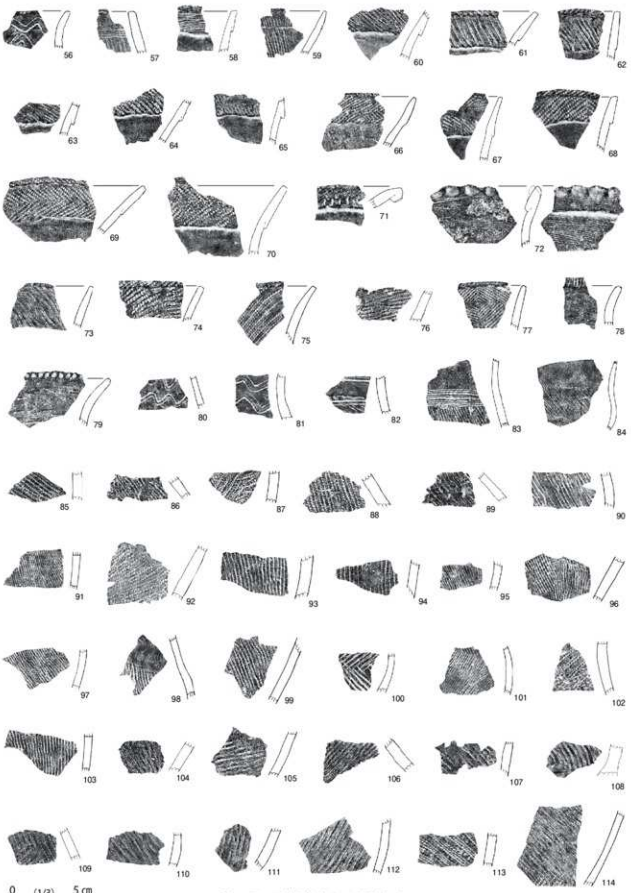
１は鉢で複合口縁である。口唇部と口縁部外面に無節斜縄文が施され、口縁部下端部に縄文原体による刻みが施される。

２～55は壺である。２～７は口縁部である。２・４は２本櫛描き連弧文が施され、２は口唇部に縄文原体による刻み、４は口唇部に単節斜縄文が施される。３は４本櫛描き連弧文が施される。５は口唇部に単節縄文、口縁部外面に２本櫛描き波状文が施される。６・７は複合口縁である。６は口唇部に単節斜縄文、口縁部に指頭押圧が施される。内外面は赤彩される。７は口唇部が平坦に仕上げられ、口縁部下端にヘラ状工具による刻みが施される。８～15は頸部である。８～11は櫛描き文が施されるものである。８は断面が三角形の突帯が付けられ、その上に２本櫛描き縦・横区画文、その下に２本櫛描き波状文が施される。９は横走文が施される。10は３本櫛描き横走文の下に細かい櫛描き文が施される。11は３本櫛描き縦区画文によるスリットと３本櫛描き横走文が施される。12・13はヘラ描き沈線が施されるものである。12は縦区画文によるスリットと斜め方向の沈線文、13は斜格子文が施される。14・15は単節縄文が羽状に施されるもので、14はＳ字状結節文により無文帯と区画される。内面と外面無文帯は赤彩され、縄文施文帯は円形に赤彩が施される。16～55は胴部である。16～40は櫛描き文が施されるものである。16は２本櫛描き波状文が描かれ、その中に刺突が施される。17は４本以上の櫛描き横走文、18は６本櫛描き横走文と縦走文が施される。19・20は櫛描き横走文と重菱形文の一部と思われる斜行文が施されるものである。19は横走文の下に単節斜縄文が施される。21は３本櫛描き斜格子文と単節斜縄文が施される。22～36は櫛描き渦巻文が施される、いわゆる足洗式土器である。22は３本櫛描き渦巻文と、その上部に連弧文と横の接続線が施される。23～28は２本櫛描き、29～31は３本櫛描き渦巻文が施される。32～34は２本櫛描き渦巻文と単節斜縄文が施される。35は３本櫛描き渦巻文と撚糸文、36は３本櫛描き渦巻文と単節斜縄文が施される。37～39は２本又は４本櫛描き重四角文が施されるものである。39は重四角文の下に単節斜縄文が施される。40は６本櫛描き縦走羽状文が施される。41～43は単節斜縄文を地文とし、沈線による区画文を施して区画外の縄文を磨り消すものである。41・42は無文部分が赤彩される。43は鋸歯状区画の下にＳ字状結節文が施される。44は縄文原体押圧による山形文が施される。45～52は撚糸文又は単節斜縄文が施されるものである。45は撚糸文、46～48は単節斜縄文、49～52は単節の羽状縄文が施される。53～55は結節文と単節斜縄文が施されるものである。53はＳ字状結節文と単節の羽状縄文、54はＺ字状結節文と単節斜縄文、55は単節の羽状縄文の上にＺ字状結節文が施される。

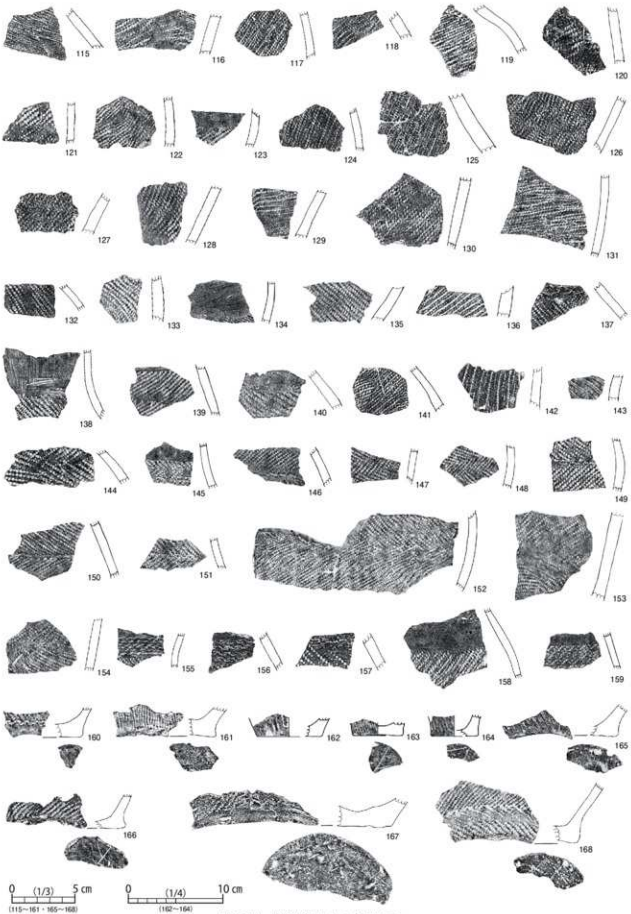
56～168は甕である。56～79は口縁部である。56・57は単口縁で櫛描き文が施されるものである。56は２本櫛描き波状文、57はかなり細かい４本櫛描き波状文で区画し、その下に２条絡め撚糸文が施される。58～71は複合口縁で、撚糸文ないし単節斜縄文が施されるものである。58～60は撚糸文が施される。58は口唇部と口縁部、59は口唇部と口縁部・胴部外面、60は口縁部に施される。61は２条絡め撚糸文、62は３条絡め撚糸文が口唇部と口縁部に施される。63～65は単節斜縄文が施される。66は口唇部と口縁部に無節斜縄文が施され、口縁部の一部には口唇部と同じ原体の無節斜縄文が施される。67は口唇部内側に単節斜縄文、外側に無節斜縄文が施文され、施文により先端部は尖っている。口縁部は口唇部と同じ原体による



第17図　遺構外出土の遺物（1）



第18図　遺構外出土の遺物（2）



第19図　遺構外出土の遺物（3）

羽状縄文が施される。68～70は口唇部に単節斜縄文、口縁部に単節縄文が羽状に施される。71は口縁部に単節斜縄文、下端部に縄文原体による刻みが施される。72は内面に輪積の段を明瞭に残し、折返し口縁状に作り出している。口縁部は指頭交互押圧による波状口縁である。73～77は単口縁で、撚糸文ないし単節斜縄文が施されるものである。73は口唇部と口縁部に２条絡め撚糸文が施される。74・75は口唇部と口縁部に単節斜縄文が施される。76は口縁部に単節斜縄文が施されるが、口唇部はほとんど遺存していない。77は口唇部に単節斜縄文が施され、口縁部は単節の羽状縄文が途中で向きを変えて施される。78・79は口縁部が無文で、78はヘラ状工具、79は棒状工具により口唇部に刻みが施される。80～159は胴部である。80～83は櫛描き文が施されるものである。80・81は２本櫛描き波状文が施される。82は２本櫛描き横走文と無節斜縄文、83は３本櫛描き横走文と撚糸文が施される。84～154は撚糸文ないし縄文が施されるものである。84～101は撚糸文が施される。98は上部の撚糸文を磨り消している。100は撚糸文が羽状に施される。101は撚糸文と単節斜縄文が施される。102～108は２条絡め撚糸文が施される。109は上部に３条、下部に２条絡め撚糸文が施される。110～113は３条絡め撚糸文が施される。114・115は２条絡め撚糸文と単節斜縄文が施される。116～139は単節斜縄文が施される。138は上部にやや粗いヘラナデを施し、縄文の一部を磨り消している。139は上部に無文帯がある。140は無節斜縄文が施される。141～143は附加条縄文が施される。144～154は単節の羽状縄文が施される。150は０段多条の単節縄文を用いる。155～159は結節文が施されるものである。155・156は上部から順に無文帯・多条のＳ字状結節文・単節斜縄文が施される。157はＳ字状結節文と単節斜縄文が施される。158は結節の種類は不明であるが、無文帯を挟んで単節斜縄文が施される。159は上部が無文帯で、多条のＳ字状結節文が施される。160～168は底部である。160はＳ字状結節文と単節斜縄文、161～163は撚糸文、164・165は２条絡め撚糸文、166・167は単節斜縄文、168は単節の羽状縄文が施される。167の底部には布目擦じ紐痕跡が見られる。

第８表　弥生土器観察表

（　）推定値　＜　＞現存値

遺構	図版番号	種類	器種	法量(cm)	遺存度	胎土	色調・焼成	技法	備考
SI-002	第14図-1	弥生	台付鉢	口径 14.0 底径 － 器高 <11.5>	鉢部35%	石英粒・雲母粒	内面 明赤褐色(2.5YR5/8) 外面 明赤褐色(2.5YR5/8) 焼成 良好	内面 ハケ ヘラナデ 外面 ヘラナデ 底外面 －	複合口縁　2字状結節文状 2段 3列＋円形浮文 2個単位 3か所
	第14図-2	弥生	甕	口径 － 底径 － 器高 －	頸部	雲母粒・砂粒・石英粒	内面 にぶい橙色(7.5YR7/4) 外面 橙色(7.5YR6/6) 焼成 良好	内面 － 外面 ヘラナデ 底外面 －	S字状結節文＋単節縄文以上
	第14図-3	弥生	甕	口径 － 底径 － 器高 －	口縁部	石英粒・雲母粒・白色砂粒	内面 にぶい橙色(10YR6/4) 外面 黒褐色(10YR3/2) 焼成 良好	内面 ヘラナデ 外面 ヘラナデ 底外面 －	棒状工具外側押圧による波状口縁　櫛描の爪痕
	第14図-4	弥生	甕	口径 － 底径 － 器高 －	口縁部	石英粒・雲母粒・白色砂粒	内面 にぶい橙色(10YR6/4) 外面 黒褐色(10YR3/2) 焼成 良好	内面 ハケ 外面 ヘラナデ ヘラ指り 底外面 －	棒状工具外側押圧による波状口縁　櫛描の爪痕
	第14図-5	弥生	甕	口径 － 底径 － 器高 －	口縁部	石英粒・雲母粒・白色砂粒	内面 橙色(7.5YR6/6) 外面 橙色(7.5YR7/6) 焼成 良好	内面 ヘラナデ 外面 ヘラナデ 底外面 －	棒状工具外側押圧による波状口縁　櫛描の爪痕
	第14図-6	弥生	甕	口径 － 底径 － 器高 －	口縁部	石英粒・雲母粒・白色砂粒	内面 褐灰色(10YR4/1) 外面 黒褐色(7.5YR3/1) 焼成 良好	内面 ヘラナデ 外面 ヘラナデ 底外面 －	棒状工具交互押圧による波状口縁
	第14図-7	弥生	甕	口径 － 底径 － 器高 －	頸部口縁部	雲母粒・砂粒・石英粒	内面 明赤褐色(5YR5/6) 外面 橙色(5YR6/6) 焼成 良好	内面 ヘラ磨き 外面 － 底外面 －	口将部を再生　櫛目状擬糸文
	第14図-8	弥生	甕	口径 － 底径 － 器高 －	頸部	石英粒・白色粒・雲母粒	内面 にぶい赤褐色(5YR5/4) 外面 橙色(5YR6/6) 焼成 良好	内面 ヘラナデ 外面 － 底外面 －	輪積痕＋縄文原体以外の工具による刻み
	第14図-9	弥生	甕	口径 － 底径 － 器高 －	口縁部～頸部	石英粒・雲母粒・白色砂粒	内面 にぶい橙色(7.5YR6/4) 外面 黒褐色(7.5YR3/1) 焼成 良好	内面 ヘラナデ 外面 ヘラナデ 底外面 －	複合口縁　2条絡め撚糸文＋ヘラ状工具による刻み ヘラ描き縦区画文・斜格子文
	第14図-10	弥生	甕	口径 － 底径 － 器高 －	頸部	雲母粒・砂粒・石英粒	内面 にぶい橙色(7.5YR7/4) 外面 にぶい橙色(7.5YR6/4) 焼成 良好	内面 ハケ 外面 ハケ 底外面 －	S字状結節文以降＋単節縄文以上
	第14図-11	弥生	甕	口径 － 底径 － 器高 －	頸部	雲母粒・石英粒・砂粒	内面 橙色(5YR7/6) 外面 橙色(7.5YR7/6) 焼成 良好	内面 撚糸調整 外面 － 底外面 －	単節縄文以上
	第14図-12	弥生	甕	口径 － 底径 － 器高 －	頸部	石英粒・雲母粒・砂粒	内面 橙色(5YR6/6) 外面 黒褐色(10YR3/1) 焼成 良好	内面 ヘラナデ 外面 － 底外面 －	単節縄文以上
	第14図-13	弥生	甕	口径 － 底径 － 器高 －	頸部	雲母粒・砂粒・石英粒	内面 褐灰色(10YR5/1) 外面 にぶい橙色(7.5YR6/4) 焼成 良好	内面 ヘラナデ 外面 － 底外面 －	単節縄文以上
	第14図-14	弥生	甕	口径 － 底径 － 器高 －	頸部	雲母粒・砂粒・石英粒	内面 橙色(7.5YR6/6) 外面 にぶい橙色(7.5YR6/4) 焼成 良好	内面 ざらつく 外面 ざらつく 底外面 －	単節縄文以上
	第14図-15	弥生	甕	口径 － 底径 － 器高 －	頸部	雲母粒・石英粒・砂粒	内面 灰褐色(10YR4/2) 外面 黒褐色(10YR3/2) 焼成 良好	内面 ヘラナデ 外面 － 底外面 －	単節縄文以上

遺構	図版番号	種別	器種	法量(cm)	遺存度	胎土	色調・焼成	技法	備考
SI-002	第14図-16	弥生	甕	口径 – 底径 – 器高 –	側部	石英粒・小石・雲母粒	内面 橙色(7.5YR6/6) 外面 褐灰色(10YR4/1) 焼成 良好	内面 ざらつく 外面 – 底外面 –	早期鵜又L
	第14図-17	弥生	甕	口径 – 底径 – 器高 –	側部	小石・石英粒	内面 にぶい橙色(7.5YR7/4) 外面 にぶい橙色(7.5YR6/4) 焼成 良好	内面 荒れている 外面 – 底外面 –	早期鵜又L
	第14図-18	弥生	甕	口径 – 底径 – 器高 –	側部	石英粒・小石・雲母粒	内面 にぶい橙色(7.5YR6/4) 外面 にぶい橙色(7.5YR6/4) 焼成 良好	内面 ざらつく 外面 – 底外面 –	早期鵜又BL
	第14図-19	弥生	甕	口径 – 底径 – 器高 –	底部	石英粒・雲母粒	内面 黒褐色(5YR3/1) 外面 橙色(5YR6/6) 焼成 良好	内面 ヘラナデ 外面 ヘラナデ 底外面 網代痕	
	第14図-20	弥生	甕	口径 – 底径 – 器高 –	側部	雲母粒・砂粒・石英粒	内面 にぶい黄橙色(10YR6/2) 外面 にぶい褐色(10YR5/4) 焼成 良好	内面 ヘラナデ 外面 ヘラ磨き 底外面 –	沈線による舌状文あるいは鋸文＋無節縄文L
	第14図-21	弥生	甕	口径 – 底径 – 器高 –	側部	雲母粒・砂粒	内面 にぶい橙色(7.5YR6/4) 外面 明褐色(7.5YR5/6) 焼成 良好	内面 ヘラナデ 外面 ヘラ磨き 底外面 –	2本櫛描き結紐文＋早期鵜又LR
	第14図-22	弥生	甕	口径 – 底径 – 器高 –	側部	雲母粒・白色砂粒	内面 橙色(7.5YR6/6) 外面 にぶい橙色(7.5YR6/4) 焼成 良好	内面 ヘラナデ 外面 – 底外面 –	2本櫛描き横走文＋縄走文
	第14図-23	弥生	甕	口径 – 底径 – 器高 –	側部	白色砂粒	内面 にぶい黄橙色(10YR7/4) 外面 灰黄褐色(10YR5/2) 焼成 良好	内面 ヘラナデ 外面 – 底外面 –	2本櫛描き山形文＋横走文
	第14図-24	弥生	甕	口径 – 底径 – 器高 –	側部	石英粒・白色砂粒	内面 橙色(7.5YR7/6) 外面 にぶい黄橙色(10YR7/3) 焼成 良好	内面 ヘラナデ 外面 – 底外面 –	2本櫛描き波巻文＋早期鵜又LR
	第14図-25	弥生	鉢	口径 – 底径 – 器高 –	口縁部	石英粒・雲母粒・砂粒	内面 にぶい黄橙色(10YR6/2) 外面 灰黄褐色(10YR4/2) 焼成 良好	内面 ハケ 外面 ヘラ磨り 底外面 –	櫛合口縁 口唇部・口縁部早期鵜又RL
	第14図-26	弥生	甕	口径 – 底径 – 器高 –	側部	雲母粒・石英粒・砂粒	内面 黒褐色(10YR3/1) 外面 にぶい黄橙色(10YR5/4) 焼成 良好	内面 ヘラナデ 外面 – 底外面 –	撚糸文
	第14図-27	弥生	甕	口径 – 底径 – 器高 –	側部	雲母粒・石英粒・砂粒	内面 褐灰色(10YR4/1) 外面 明赤褐色(5YR5/6) 焼成 良好	内面 ヘラナデ 外面 – 底外面 –	撚糸文R
	第14図-28	弥生	甕	口径 – 底径 7.8 器高 <13.6>	底部	石英粒・白色砂粒	内面 橙色(7.5YR6/6) 外面 にぶい橙色(7.5YR5/3) 焼成 良好	内面 ヘラナデ 外面 ヘラナデ 底外面 ヘラナデ	
	第15図-1	弥生	甕	口径 – 底径 – 器高 –	側部	小石	内面 明褐色(7.5YR5/8) 外面 明褐色(7.5YR5/6) 焼成 良好	内面 ヘラ磨き 外面 – 底外面 –	撚糸文L
	第15図-2	弥生	甕	口径 – 底径 – 器高 –	側部	白色砂粒	内面 にぶい橙色(7.5YR6/4) 外面 灰黄褐色(10YR4/2) 焼成 良好	内面 ヘラ磨き 外面 – 底外面 –	撚糸文L
	第15図-3	弥生	甕	口径 – 底径 – 器高 –	口縁部	白色砂粒	内面 にぶい黄橙色(10YR5/3) 外面 黒褐色(10YR3/2) 焼成 良好	内面 ヘラナデ 外面 – 底外面 –	櫛合口縁 口唇部・口縁部撚糸文R
	第15図-4	弥生	甕	口径 – 底径 – 器高 –	側部	白色砂粒・小石	内面 明黄褐色(10YR6/2) 外面 灰黄褐色(10YR5/2) 焼成 良好	内面 ヘラナデ 外面 – 底外面 –	早期鵜又LR
	第15図-5	弥生	甕	口径 – 底径 – 器高 –	側部	白色砂粒・小石	内面 明黄褐色(10YR6/6) 外面 灰黄褐色(10YR5/2) 焼成 良好	内面 荒れている 外面 – 底外面 –	早期鵜又R
	第15図-6	弥生	甕	口径 – 底径 – 器高 –	側部	白色砂粒	内面 にぶい橙色(10YR4/3) 外面 灰黄褐色(10YR4/2) 焼成 良好	内面 ヘラ磨き 外面 – 底外面 –	早期鵜又R
	第15図-7	弥生	甕	口径 – 底径 – 器高 –	側部	白色砂粒	内面 にぶい黄橙色(10YR5/3) 外面 にぶい橙色(7.5YR6/4) 焼成 良好	内面 ヘラナデ 外面 – 底外面 –	早期鵜又 0段多条LR+0段多条RL
	第15図-8	弥生	甕	口径 – 底径 – 器高 –	底部	小石・石英粒	内面 褐灰色(10YR4/1) 外面 にぶい橙色(7.5YR5/3) 焼成 良好	内面 ナデ 外面 ヘラナデ 底外面 網代痕	
SI-007	第15図-9	弥生	甕	口径 – 底径 – 器高 –	底部	白色砂粒・石英粒	内面 橙色(5YR6/6) 外面 にぶい橙色(7.5YR5/4) 焼成 良好	内面 ナデ 外面 – 底外面 網目圧痕	
	第15図-10	弥生	甕	口径 – 底径 – 器高 –	口縁部	石英粒・雲母粒	内面 にぶい黄橙色(10YR5/3) 外面 にぶい黄橙色(10YR6/4) 焼成 良好	内面 ヘラナデ 外面 ヘラナデ 底外面 –	波状口縁 縄文原体による押圧
	第15図-11	弥生	甕	口径 – 底径 – 器高 –	側部	白色砂粒・小石	内面 明褐色(7.5YR5/6) 外面 にぶい橙色(7.5YR6/3) 焼成 良好	内面 ヘラ磨き 外面 – 底外面 –	竹管による連続円形刺突文
	第15図-12	弥生	甕	口径 – 底径 – 器高 –	口縁部	雲母粒	内面 にぶい黄橙色(10YR5/2) 外面 褐灰色(2.5YR4/2) 焼成 良好	内面 ヘラ磨き 外面 ヘラ磨き 底外面 –	口縁部内外面 口唇部無節縄文L＋ヘラ描き沈線区画 ヘラ描き横長区画文＋無節縄文L 刺突文
	第15図-13	弥生	甕	口径 – 底径 – 器高 –	側部	雲母粒・石英粒	内面 浅黄色(2.5YR7/4) 外面 浅黄色(2.5YR7/4) 焼成 良好	内面 ヘラナデ 外面 – 底外面 –	2本櫛描きによる文様＋早期鵜又LR
	第15図-14	弥生	甕	口径 – 底径 – 器高 –	口縁部	白色砂粒	内面 にぶい黄色(10YR6/4) 外面 橙色(7.5YR6/6) 焼成 良好	内面 ヘラナデ 外面 ヘラナデ 底外面 –	口唇部一口縁部内面早期鵜又LR
	第15図-15	弥生	甕	口径 – 底径 – 器高 –	側部	石英粒	内面 にぶい黄橙色(10YR5/3) 外面 黒褐色(10YR3/2) 焼成 良好	内面 ヘラ磨き 外面 – 底外面 –	2本～3本櫛描き縄走結節文
	第15図-16	弥生	甕	口径 – 底径 – 器高 –	側部	白色砂粒・石英粒	内面 褐灰黄色(2.5Y4/2) 外面 褐オリーブ褐色(2.5YR3/3) 焼成 良好	内面 – 外面 – 底外面 –	条痕文
	第15図-17	弥生	甕	口径 – 底径 – 器高 –	胴部	白色砂粒・小石	内面 灰黄褐色(10YR6/2) 外面 にぶい黄橙色(10YR7/4) 焼成 良好	内面 ヘラナデ 外面 – 底外面 –	3本櫛描き横走文2段＋山形文
	第15図-18	弥生	甕	口径 – 底径 – 器高 –	側部	小石・石英粒・白色砂粒	内面 明黄褐色(10YR6/6) 外面 にぶい黄橙色(10YR7/4) 焼成 良好	内面 ヘラナデ 外面 – 底外面 –	2本櫛描き波巻文
	第15図-19	弥生	甕	口径 – 底径 – 器高 –	胴部	石英粒・小石	内面 にぶい黄橙色(10YR6/4) 外面 灰黄褐色(10YR4/2) 焼成 良好	内面 ヘラナデ 外面 – 底外面 –	4本櫛描き横走文・連弧文
SI-009	第16図-1	弥生	甕	口径 – 底径 – 器高 –	胴部	白色砂粒・石英粒・雲母粒	内面 橙色(7.5YR6/6) 外面 にぶい黄橙色(7.5YR5/3) 焼成 良好	内面 ハケ 外面 – 底外面 –	3条単位工字状結節文
	第16図-2	弥生	甕	口径 – 底径 – 器高 –	胴部	白色砂粒	内面 にぶい橙色(7.5YR5/4) 外面 黒褐色(10YR3/2) 焼成 良好	内面 ヘラナデ 外面 – 底外面 –	胴面三角形の突帯 2本櫛描き斜行文
	第16図-3	弥生	甕	口径 – 底径 – 器高 –	胴部	白色砂粒	内面 にぶい黄橙色(10YR7/3) 外面 にぶい黄橙色(10YR7/4) 焼成 良好	内面 ヘラナデ 外面 – 底外面 –	2本櫛描き縦・横区画＋2本櫛描き連続鋸歯状文
	第16図-4	弥生	甕	口径 – 底径 – 器高 –	胴部	白色砂粒	内面 橙色(5YR6/6) 外面 にぶい橙色(7.5YR5/4) 焼成 良好	内面 ヘラナデ 外面 – 底外面 –	2本櫛描き横走文
	第16図-5	弥生	甕	口径 – 底径 – 器高 –	口縁部～胴部	白色砂粒・石英粒	内面 橙色(5YR6/6) 外面 橙色(7.5YR4/3) 焼成 良好	内面 ヘラナデ 外面 ヘラナデ 底外面 –	早期鵜又LR
	第16図-6	弥生	甕	口径 – 底径 – 器高 –	胴部	白色砂粒・小石	内面 橙色(7.5YR6/2) 外面 にぶい橙色(7.5YR6/4) 焼成 良好	内面 ヘラ磨き 外面 – 底外面 –	撚糸文R

遺構	図版番号	種 類	器 種	法 量(cm)	遺存度	胎 土	色調・焼成	技 法	備 考
SI-009	第16図 -7	陸外	甕	口径 – 底径 – 器高 –	胴部	白色砂粒	内面 にぶい黄橙色(10YR5/4) 外面 灰黄褐色(10YR4/2) 焼成 良好	内面 ヘラナデ 外面 – 底外面 –	地文平縄構文LR+竹管による連続刺突文+無節縄文R
	第16図 -8	陸外	甕	口径 – 底径 – 器高 –	胴部	白色砂粒・石英粒	内面 灰黄褐色(10YR4/2) 外面 にぶい黄橙色(10YR6/4) 焼成 良好	内面 ヘラナデ 外面 – 底外面 –	早節縄文LR
	第16図 -9	陸外	壺	口径 – 底径 – 器高 –	口縁部～胴部	白色砂粒・石英粒	内面 にぶい橙色(7.5YR6/4) 外面 橙色(7.5YR7/4) 焼成 良好	内面 赤彩 外面 – 底外面 –	早節縄文RL+LR 縄文原体による刻み
	第16図 -10	陸外	壺	口径 – 底径 – 器高 –	胴部	白色砂粒	内面 にぶい黄橙色(10YR7/2) 外面 にぶい黄橙色(10YR7/4) 焼成 良好	内面 – 外面 赤彩 底外面 –	地文羽状縄文RL+LR 沈線区画
	第16図 -11	陸外	壺	口径 – 底径 – 器高 –	胴部	白色砂粒	内面 灰白(7.5YR8/2) 外面 橙色(7.5YR6/6) 焼成 良好	内面 – 外面 – 底外面 –	S字状結節文 羽状縄文RL+LR
遺構外	第17図 -1	陸外	鉢	口径 – 底径 – 器高 –	口縁部	白色砂粒	内面 黒褐色(7.5YR3/2) 外面 にぶい橙色(7.5YR6/4) 焼成 良好	内面 ヘラ磨き 外面 ヘラナデ 底外面 –	櫛合口縁 無節縄文R+縄文原体による刻み
	第17図 -2	陸外	壺	口径 – 底径 – 器高 –	口縁部	雲母粒・小石	内面 にぶい橙色(7.5YR6/4) 外面 橙色(7.5YR6/6) 焼成 良好	内面 ヘラナデ 外面 – 底外面 –	口唇部早節縄文LR 2本撚糸き連続文
	第17図 -3	陸外	壺	口径 – 底径 – 器高 –	口縁部	白色砂粒・石英粒	内面 灰黄褐色(10YR4/2) 外面 黒褐色(10YR3/1) 焼成 良好	内面 ヘラナデ 外面 – 底外面 –	4本撚糸き連続文
	第17図 -4	陸外	壺	口径 – 底径 – 器高 –	口縁部	白色砂粒・小石	内面 にぶい橙色(7.5YR7/4) 外面 浅黄橙色(7.5YR8/4) 焼成 良好	内面 ヘラナデ 外面 – 底外面 –	口唇部端部早節縄文LR 2本撚糸き連続文
	第17図 -5	陸外	壺	口径 – 底径 – 器高 –	口縁部	雲母粒・白色砂粒・石英粒	内面 にぶい橙色(7.5YR7/4) 外面 にぶい橙色(7.5YR7/4) 焼成 良好	内面 ヘラナデ 外面 ヘラナデ 底外面 –	口唇部早節縄文 2本撚糸き波状文
	第17図 -6	陸外	壺	口径 – 底径 – 器高 –	口縁部	雲母粒	内面 明赤褐色(5YR5/6) 外面 明赤褐色(5YR5/6) 焼成 良好	内面 ヘラ磨き 赤彩 外面 ヘラ磨き 赤彩 底外面 –	櫛合口縁 口唇部早節縄文LR 口縁部指頭押圧
	第17図 -7	陸外	壺	口径 – 底径 – 器高 –	口縁部	白色砂粒・石英粒	内面 明赤褐色(5YR5/6) 外面 明赤褐色(5YR5/6) 焼成 良好	内面 ヘラナデ 外面 ヘラナデ 赤彩 底外面 –	櫛合口縁 口縁部下端へ少し工具による刻み
	第17図 -8	陸外	壺	口径 – 底径 – 器高 –	頸部	石英粒・小石	内面 にぶい黄橙色(10YR5/4) 外面 にぶい黄橙色(10YR5/4) 焼成 良好	内面 ヘラナデ 外面 ハケ 底外面 –	2本撚糸き羽状縄文+横区画文 横面三角形の空間 2本撚糸き波状文
	第17図 -9	陸外	壺	口径 – 底径 – 器高 –	頸部	白色砂粒・石英粒	内面 橙色(7.5YR6/6) 外面 にぶい赤橙色(5YR5/4) 焼成 良好	内面 ハケ ナデ 外面 ハケ 底外面 –	撚糸き縄文
	第17図 -10	陸外	壺	口径 – 底径 – 器高 –	頸部	雲母粒	内面 橙色(7.5YR7/6) 外面 にぶい橙色(7.5YR7/4) 焼成 良好	内面 ヘラナデ 外面 ヘラナデ 底外面 –	3本撚糸き縄文+山形文
	第17図 -11	陸外	壺	口径 – 底径 – 器高 –	頸部	白色砂粒	内面 にぶい黄橙色(10YR5/2) 外面 にぶい黄橙色(10YR5/2) 焼成 良好	内面 ヘラナデ 外面 ヘラナデ 底外面 –	3本撚糸き羽状縄文スリット+縄文文
	第17図 -12	陸外	壺	口径 – 底径 – 器高 –	頸部	白色砂粒・小石	内面 橙色(7.5YR6/6) 外面 明褐色(7.5YR5/6) 焼成 良好	内面 ヘラナデ 外面 ヘラナデ 底外面 –	ヘラ描き羽状縄文スリット+斜行文 輪郭痕
	第17図 -13	陸外	壺	口径 – 底径 – 器高 –	頸部	白色砂粒	内面 にぶい黄橙色(10YR6/4) 外面 にぶい黄橙色(10YR5/3) 焼成 良好	内面 ヘラ磨き 外面 – 底外面 –	ヘラ描き斜格子文
	第17図 -14	陸外	壺	口径 – 底径 – 器高 –	頸部	白色砂粒	内面 にぶい黄橙色(10YR6/4) 外面 にぶい橙色(7.5YR7/4) 焼成 良好	内面 赤彩 見れている 外面 赤彩 底外面 –	S字状結節文+早節縄文RL+LR 縄文施文帯同形に赤彩
	第17図 -15	陸外	壺	口径 – 底径 – 器高 –	頸部	白色砂粒・雲母粒	内面 橙色(5YR6/6) 外面 にぶい橙色(7.5YR5/4) 焼成 良好	内面 ヘラ磨き 外面 – 底外面 –	早節縄文RL+LR
	第17図 -16	陸外	壺	口径 – 底径 – 器高 –	頸部	石英粒	内面 灰黄褐色(10YR6/2) 外面 にぶい橙色(7.5YR7/4) 焼成 良好	内面 ヘラナデ 外面 ヘラナデ 底外面 –	2本撚糸き波状文+刺突
	第17図 -17	陸外	壺	口径 – 底径 – 器高 –	頸部	雲母粒・白色砂粒	内面 褐灰色(10YR4/1) 外面 にぶい黄橙色(10YR5/3) 焼成 良好	内面 ヘラナデ 外面 ヘラナデ 底外面 –	4本以上の撚糸き縄文文
	第17図 -18	陸外	壺	口径 – 底径 – 器高 –	頸部	砂粒	内面 灰褐色(7.5YR4/2) 外面 橙色(7.5YR6/6) 焼成 良好	内面 ヘラナデ 外面 ヘラナデ 底外面 –	6本撚糸き縄文+縄文文
	第17図 -19	陸外	壺	口径 – 底径 – 器高 –	頸部	石英粒・小石	内面 明褐色(7.5YR5/6) 外面 にぶい黄橙色(10YR7/4) 焼成 良好	内面 ヘラナデ 外面 – 底外面 –	4本撚糸き変菱形文+縄文文 早節縄文LR
	第17図 -20	陸外	壺	口径 – 底径 – 器高 –	頸部	雲母粒	内面 暗褐色(10YR3/4) 外面 灰黄褐色(10YR4/2) 焼成 良好	内面 ナデ 外面 ハケ 底外面 –	2本撚糸き菱形文+重菱形文
	第17図 -21	陸外	壺	口径 – 底径 – 器高 –	頸部	雲母粒・白色砂粒	内面 明黄褐色(10YR6/6) 外面 黒褐色(10YR3/2) 焼成 良好	内面 ヘラ磨き 外面 – 底外面 –	3本撚糸き斜格子文+横文文 早節縄文LR
	第17図 -22	陸外	壺	口径 – 底径 – 器高 –	頸部	石英粒・小石	内面 にぶい黄橙色(10YR6/3) 外面 にぶい黄橙色(10YR7/3) 焼成 良好	内面 ヘラナデ 外面 ヘラナデ 底外面 –	3本撚糸き波状文+横振幅線
	第17図 -23	陸外	壺	口径 – 底径 – 器高 –	頸部	小石・雲母粒	内面 にぶい黄橙色(10YR7/4) 外面 にぶい黄橙色(10YR6/4) 焼成 良好	内面 見れている 外面 – 底外面 –	2本撚糸き波状文
	第17図 -24	陸外	壺	口径 – 底径 – 器高 –	頸部	石英粒・雲母粒・白色砂粒	内面 灰黄褐色(10YR4/2) 外面 にぶい黄橙色(10YR6/4) 焼成 良好	内面 ヘラナデ 外面 ヘラ磨き 底外面 –	2本撚糸き波状文
	第17図 -25	陸外	壺	口径 – 底径 – 器高 –	頸部	砂礫・石英粒	内面 橙色(7.5YR6/6) 外面 橙色(7.5YR6/6) 焼成 良好	内面 見れている 外面 ヘラナデ 底外面 –	2本撚糸き波状文
	第17図 -26	陸外	壺	口径 – 底径 – 器高 –	頸部	白色砂粒・石英粒・砂粒	内面 橙色(7.5YR6/6) 外面 橙色(7.5YR6/6) 焼成 良好	内面 ヘラナデ 外面 ヘラナデ 底外面 –	2本撚糸き波状文
	第17図 -27	陸外	壺	口径 – 底径 – 器高 –	頸部	石英粒・雲母粒	内面 黒褐色(10YR3/2) 外面 にぶい黄橙色(10YR5/2) 焼成 良好	内面 – 外面 ナデ 底外面 –	2本撚糸き波状文
	第17図 -28	陸外	壺	口径 – 底径 – 器高 –	頸部	小石	内面 にぶい黄橙色(10YR7/3) 外面 灰黄褐色(10YR6/2) 焼成 良好	内面 – 外面 ナデ 底外面 –	2本撚糸き波状文
	第17図 -29	陸外	壺	口径 – 底径 – 器高 –	頸部	雲母粒・白色砂粒・石英粒	内面 灰褐色(7.5YR4/2) 外面 にぶい褐色(7.5YR5/4) 焼成 良好	内面 ヘラナデ 外面 ヘラナデ 底外面 –	3本撚糸き波状文
	第17図 -30	陸外	壺	口径 – 底径 – 器高 –	頸部	雲母粒	内面 浅黄橙色(10YR8/3) 外面 にぶい黄橙色(10YR7/2) 焼成 良好	内面 – 外面 ヘラナデ 底外面 –	3本撚糸き波状文
	第17図 -31	陸外	壺	口径 – 底径 – 器高 –	頸部	石英粒	内面 明黄褐色(10YR6/6) 外面 にぶい黄橙色(10YR5/4) 焼成 良好	内面 – 外面 ヘラ磨き 底外面 –	3本撚糸き波状文
	第17図 -32	陸外	壺	口径 – 底径 – 器高 –	頸部	小石	内面 灰褐色(7.5YR5/2) 外面 にぶい黄橙色(10YR7/4) 焼成 良好	内面 ヘラナデ 外面 – 底外面 –	2本撚糸き波状文+早節縄文LR
	第17図 -33	陸外	壺	口径 – 底径 – 器高 –	頸部	石英粒	内面 にぶい黄橙色(10YR5/2) 外面 灰黄褐色(10YR5/2) 焼成 良好	内面 ヘラナデ 外面 ヘラナデ 底外面 –	2本撚糸き波状文+早節縄文LR

遺構	図版番号	種 別	器 種	法 量(cm)	遺存度	胎 土	色調・焼成	技 法	備 考
遺構外	第172図-34	陶不	碗	口径 – 底径 – 器高 –	側部	石英粒・雲母粒	内面 にぶい黄橙色(10YR7/4) 外面 にぶい黄橙色(10YR6/3) 焼成 良好	内面 ヘラナデ 外面 ヘラナデ 底外面 –	2本櫛描き波状文+単節縄文LR
	第172図-35	陶不	碗	口径 – 底径 – 器高 –	側部	白色砂粒・石英粒・砂粒	内面 にぶい褐色(7.5YR5/3) 外面 褐色(7.5YR6/6) 焼成 良好	内面 ヘラナデ 外面 ヘラナデ 底外面 –	3本櫛描き波状文+擬糸文R
	第172図-36	陶不	碗	口径 – 底径 – 器高 –	側部	石英粒	内面 灰褐色(7.5YR6/2) 外面 褐色(7.5YR6/6) 焼成 良好	内面 ヘラナデ 外面 – 底外面 –	3本櫛描き波状文+単節縄文LR
	第172図-37	陶不	碗	口径 – 底径 – 器高 –	側部	白色砂粒	内面 褐色(7.5YR6/6) 外面 褐色(7.5YR6/6) 焼成 良好	内面 ヘラナデ 外面 – 底外面 –	2本櫛描き重四角文
	第172図-38	陶不	碗	口径 – 底径 – 器高 –	側部	雲母粒・白色砂粒	内面 灰黄褐色(10YR4/2) 外面 黄褐色(10YR5/2) 焼成 良好	内面 ヘラナデ 外面 ヘラ磨き 底外面 –	4本櫛描き重四角文
	第172図-39	陶不	碗	口径 – 底径 – 器高 –	側部	雲母粒・白色砂粒	内面 灰黄褐色(10YR4/2) 外面 黄褐色(10YR5/2) 焼成 良好	内面 ヘラナデ 外面 – 底外面 –	4本櫛描き重四角文+無節縄文L
	第172図-40	陶不	碗	口径 – 底径 – 器高 –	側部	雲母粒・石英粒・砂礫	内面 にぶい黄橙色(10YR5/4) 外面 にぶい黄橙色(7.5YR6/4) 焼成 良好	内面 荒れている 外面 ヘラナデ 底外面 –	6本櫛描き編走羽状文
	第172図-41	陶不	碗	口径 – 底径 – 器高 –	側部	石英粒	内面 明褐色(5YR5/6) 外面 明赤褐色(5YR5/6) 焼成 良好	内面 ヘラナデ 外面 赤彩 底外面 –	沈線区画+単節縄文LR 無文部分赤彩
	第172図-42	陶不	碗	口径 – 底径 – 器高 –	側部	雲母粒・白色砂粒・石英粒	内面 褐色(7.5YR6/6) 外面 明黄褐色(10YR7/6) 焼成 良好	内面 ヘラナデ 外面 赤彩 底外面 –	沈線区画+単節縄文RL 無文部分赤彩
	第172図-43	陶不	碗	口径 – 底径 – 器高 –	側部	白色砂粒	内面 赤褐色(5YR4/6) 外面 灰褐色(7.5YR4/2) 焼成 良好	内面 ヘラナデ 外面 ヘラ磨き 底外面 –	沈線鋸歯状区画+単節縄文R L S字状結節文
	第172図-44	陶不	碗	口径 – 底径 – 器高 –	側部	石英粒・小石	内面 褐色(7.5YR6/6) 外面 にぶい黄橙色(10YR5/3) 焼成 良好	内面 ヘラナデ 外面 ヘラ磨き 底外面 –	藏文格押圧による山形文
	第172図-45	陶不	碗	口径 – 底径 – 器高 –	側部	白色砂粒・石英粒	内面 にぶい黄橙色(10YR7/3) 外面 にぶい黄橙色(10YR6/3) 焼成 良好	内面 ヘラナデ 外面 ヘラナデ 底外面 –	磨糸文
	第172図-46	陶不	碗	口径 – 底径 – 器高 –	側部	小石・雲母粒	内面 にぶい橙色(7.5YR7/4) 外面 褐色(7.5YR6/6) 焼成 良好	内面 ヘラナデ 外面 ヘラナデ 底外面 –	単節縄文LR
	第172図-47	陶不	碗	口径 – 底径 – 器高 –	側部	白色砂粒・石英粒	内面 褐色(7.5YR7/6) 外面 褐色(7.5YR7/6) 焼成 良好	内面 ヘラナデ 外面 ヘラナデ 底外面 –	単節縄文LR
	第172図-48	陶不	碗	口径 – 底径 – 器高 –	側部	砂粒	内面 にぶい橙色(7.5YR7/4) 外面 明赤褐色(5YR5/6) 焼成 良好	内面 荒れている 外面 ナデ 底外面 –	単節縄文LR
	第172図-49	陶不	碗	口径 – 底径 – 器高 –	側部	白色砂粒・石英粒	内面 褐色(5YR6/6) 外面 灰褐色(5YR4/2) 焼成 良好	内面 荒れている 外面 – 底外面 –	羽状縄文LL+LR
	第172図-50	陶不	碗	口径 – 底径 – 器高 –	側部	白色砂粒	内面 にぶい黄橙色(10YR7/4) 外面 にぶい黄橙色(10YR5/3) 焼成 良好	内面 ヘラ磨き 外面 – 底外面 –	羽状縄文LL+LR
	第172図-51	陶不	碗	口径 – 底径 – 器高 –	側部	石英粒・小石	内面 明黄褐色(10YR7/6) 外面 にぶい黄橙色(10YR7/4) 焼成 良好	内面 荒れている 外面 – 底外面 –	羽状縄文LL+LR
	第172図-52	陶不	碗	口径 – 底径 – 器高 –	側部	白色砂粒・石英粒・砂粒	内面 浅黄色(2.5YR8/4) 外面 にぶい黄橙色(7.5YR7/4) 焼成 良好	内面 ヘラナデ 外面 ヘラナデ 底外面 –	羽状縄文LR+RL
	第172図-53	陶不	碗	口径 – 底径 – 器高 –	側部	雲母粒	内面 にぶい橙色(7.5YR6/3) 外面 暗褐色(7.5YR3/4) 焼成 良好	内面 ヘラナデ 外面 – 底外面 –	S字状結節文+羽状縄文LR+LR
	第172図-54	陶不	碗	口径 – 底径 – 器高 –	側部	砂粒	内面 褐色(7.5YR7/6) 外面 にぶい橙色(7.5YR7/3) 焼成 良好	内面 ヘラナデ 外面 赤彩 底外面 –	Z字状結節文+単節縄文RL
	第172図-55	陶不	碗	口径 – 底径 – 器高 –	側部	石英粒	内面 にぶい黄橙色(10YR6/4) 外面 黄褐色(10YR5/1) 焼成 良好	内面 ヘラナデ 外面 ヘラナデ 底外面 –	羽状縄文LR+L+Z字結節文
	第186図-56	陶小	壺	口径 – 底径 – 器高 –	口縁部	石英粒・雲母粒・小石	内面 にぶい黄橙色(10YR5/3) 外面 にぶい黄橙色(10YR5/3) 焼成 良好	内面 ヘラナデ 外面 ヘラナデ 底外面 –	2本櫛描き波状文
	第186図-57	陶小	壺	口径 – 底径 – 器高 –	口縁部	白色砂粒	内面 明黄褐色(10YR6/6) 外面 にぶい黄橙色(10YR7/4) 焼成 良好	内面 ヘラ磨き 外面 – 底外面 –	4本櫛描き波状文+2条線の間赤彩文R
	第186図-58	陶小	壺	口径 – 底径 – 器高 –	口縁部	白色砂粒・石英粒	内面 にぶい赤褐色(5YR5/4) 外面 にぶい黄橙色(7.5YR5/4) 焼成 良好	内面 ヘラナデ 外面 ヘラナデ 底外面 –	複合口縁 磨糸文L
	第186図-59	陶小	壺	口径 – 底径 – 器高 –	口縁部	白色砂粒・石英粒	内面 褐色(7.5YR7/6) 外面 にぶい橙色(7.5YR7/4) 焼成 良好	内面 ヘラナデ 外面 – 底外面 –	複合口縁 磨糸文L
	第186図-60	陶小	壺	口径 – 底径 – 器高 –	口縁部	白色砂粒・石英粒	内面 褐色(7.5YR7/6) 外面 赤褐色(7.5YR6/6) 焼成 良好	内面 ヘラナデ 外面 ヘラナデ 底外面 –	複合口縁 磨糸文L
	第186図-61	陶小	壺	口径 – 底径 – 器高 –	口縁部	白色砂粒	内面 褐色(7.5YR6/3) 外面 黒褐色(7.5YR3/2) 焼成 良好	内面 ヘラナデ 外面 – 底外面 –	複合口縁 2条線の磨糸文R
	第186図-62	陶小	壺	口径 – 底径 – 器高 –	口縁部	石英粒	内面 にぶい黄橙色(10YR6/3) 外面 灰黄褐色(10YR4/2) 焼成 良好	内面 ヘラナデ 外面 荒れている 底外面 –	複合口縁 3条線の磨糸文R
	第186図-63	陶小	壺	口径 – 底径 – 器高 –	口縁部	白色砂粒・雲母粒・石英粒	内面 暗褐色(10YR3/3) 外面 にぶい黄橙色(10YR6/3) 焼成 良好	内面 ヘラ磨き 外面 ヘラ磨き 底外面 –	複合口縁 単節縄文RL
	第186図-64	陶小	壺	口径 – 底径 – 器高 –	口縁部	石英粒	内面 明黄褐色(10YR6/6) 外面 灰黄褐色(10YR4/2) 焼成 良好	内面 ヘラナデ 外面 ヘラナデ 底外面 –	複合口縁 単節縄文RL
	第186図-65	陶小	壺	口径 – 底径 – 器高 –	口縁部	白色砂粒・小石	内面 にぶい黄橙色(10YR5/4) 外面 黄褐色(10YR5/2) 焼成 良好	内面 ヘラナデ 外面 ヘラナデ 底外面 –	複合口縁 単節縄文LR
	第186図-66	陶小	壺	口径 – 底径 – 器高 –	口縁部	白色砂粒	内面 にぶい黄橙色(10YR6/4) 外面 にぶい黄橙色(7.5YR5/4) 焼成 良好	内面 ヘラナデ 外面 – 底外面 –	複合口縁 無節縄文LR 無節縄文L+無節縄文R
	第186図-67	陶小	壺	口径 – 底径 – 器高 –	口縁部	石英粒・雲母粒	内面 にぶい黄橙色(10YR5/4) 外面 にぶい黄橙色(10YR5/3) 焼成 良好	内面 ヘラナデ 外面 ヘラナデ 底外面 –	複合口縁 口唇部内外面・口縁部外面単節縄文RL+無節縄文R
	第186図-68	陶小	壺	口径 – 底径 – 器高 –	口縁部	石英粒	内面 にぶい黄橙色(10YR7/3) 外面 にぶい黄橙色(10YR6/4) 焼成 良好	内面 ヘラナデ 外面 ヘラナデ 底外面 –	複合口縁 単節縄文LR 単節縄文LR+RL
	第186図-69	陶小	壺	口径 – 底径 – 器高 –	口縁部	白色砂粒	内面 にぶい黄橙色(10YR6/3) 外面 にぶい黄橙色(10YR5/3) 焼成 良好	内面 ヘラナデ 外面 ヘラナデ 底外面 –	複合口縁 単節縄文RL 単節縄文RL+LR
	第186図-70	陶小	壺	口径 – 底径 – 器高 –	口縁部	白色砂粒・石英粒	内面 黒褐色(7.5YR3/1) 外面 にぶい赤褐色(5YR5/4) 焼成 良好	内面 ヘラ磨き 外面 ヘラ磨き 底外面 –	複合口縁 単節縄文 単節縄文RL+LR
	第186図-71	陶小	壺	口径 – 底径 – 器高 –	口縁部	白色砂粒	内面 褐色(5YR6/6) 外面 にぶい橙色(7.5YR6/4) 焼成 良好	内面 ヘラ磨き 外面 ヘラ磨き 底外面 –	複合口縁 単節縄文LR+縄文原体による組A

遺構	図版番号	種別	器種	法量(cm)	遺存度	胎土	色調・焼成	技法	備考
道路外	第16図-72	弥生	壺	口径 – 底径 – 器高 –	口縁部	石英粒	内面 明褐色(7.5YR5/8) 外面 明褐色(7.5YR5/8) 焼成 良好	内面 ハケ 外面 ハケ 底外面 –	複合口縁状 指頭交互押圧による波状口縁
	第16図-73	弥生	壺	口径 – 底径 – 器高 –	口縁部	白色砂粒・小石	内面 にぶい黄橙色(10YR5/4) 外面 明黄褐色(10YR7/6) 焼成 良好	内面 ヘラナデ 外面 – 底外面 –	2条鋸の摺糸文
	第16図-74	弥生	壺	口径 – 底径 – 器高 –	口縁部	白色砂粒	内面 にぶい黄橙色(10YR5/3) 外面 にぶい黄橙色(10YR4/3) 焼成 良好	内面 ヘラナデ 外面 – 底外面 –	単節縄文LR
	第16図-75	弥生	壺	口径 – 底径 – 器高 –	口縁部	雲母粒	内面 にぶい黄橙色(10YR7/4) 外面 灰黄褐色(10YR6/2) 焼成 良好	内面 ヘラ磨き 外面 – 底外面 –	単節縄文LR
	第16図-76	弥生	壺	口径 – 底径 – 器高 –	口縁部	白色砂粒・石英粒	内面 にぶい黄橙色(10YR6/4) 外面 にぶい黄橙色(10YR5/3) 焼成 良好	内面 荒れている 外面 – 底外面 –	単節縄文LR 口将部遺存状態不良
	第16図-77	弥生	壺	口径 – 底径 – 器高 –	口縁部	石英粒	内面 橙色(7.5YR6/6) 外面 にぶい黄橙色(10YR6/4) 焼成 良好	内面 ヘラナデ 外面 – 底外面 –	単節縄文LR 羽状縄文LR+RL+LR+LR
	第16図-78	弥生	壺	口径 – 底径 – 器高 –	口縁部	雲母粒・小石	内面 にぶい黄橙色(10YR7/4) 外面 にぶい黄橙色(10YR6/4) 焼成 良好	内面 ヘラナデ 外面 ヘラナデ 底外面 –	口将部ヘラ状工具による刻み
	第16図-79	弥生	壺	口径 – 底径 – 器高 –	口縁部	白色砂粒・雲母粒・石英粒	内面 にぶい黄橙色(10YR6/4) 外面 暗褐色(10YR3/3) 焼成 良好	内面 ヘラ磨き 外面 ヘラナデ 底外面 –	口将部横状工具による刻み
	第16図-80	弥生	壺	口径 – 底径 – 器高 –	頸部	雲母粒・白色砂粒	内面 橙色(7.5YR6/6) 外面 にぶい黄橙色(10YR6/4) 焼成 良好	内面 ヘラナデ 外面 ヘラナデ 底外面 –	2本櫛描き波状文
	第16図-81	弥生	壺	口径 – 底径 – 器高 –	頸部	雲母粒・白色砂粒	内面 にぶい黄橙色(10YR7/4) 外面 にぶい黄橙色(10YR5/3) 焼成 良好	内面 ヘラナデ 外面 ヘラナデ 底外面 –	2本櫛描き波状文
	第16図-82	弥生	壺	口径 – 底径 – 器高 –	頸部	白色砂粒	内面 橙色(7.5YR6/6) 外面 暗褐色(10YR3/3) 焼成 良好	内面 ヘラナデ 外面 ヘラナデ 底外面 –	2本櫛描き横走文+無節縄文
	第16図-83	弥生	壺	口径 – 底径 – 器高 –	頸部	石英粒	内面 にぶい黄橙色(10YR5/4) 外面 黒褐色(10YR3/2) 焼成 良好	内面 ヘラナデ 外面 ヘラ磨き 底外面 –	3本櫛描き横走+摺糸文L
	第16図-84	弥生	壺	口径 – 底径 – 器高 <5.6>	頸部	雲母	内面 にぶい黄橙色(10YR6/4) 外面 黒褐色(10YR3/2) 焼成 良好	内面 ヘラナデ 外面 ヘラナデ 底外面 –	摺糸文L
	第16図-85	弥生	壺	口径 – 底径 – 器高 –	頸部	白色砂粒・石英粒	内面 にぶい橙色(7.5YR6/4) 外面 にぶい黄橙色(10YR5/3) 焼成 良好	内面 ヘラナデ 外面 – 底外面 –	摺糸文L
	第16図-86	弥生	壺	口径 – 底径 – 器高 –	頸部	白色砂粒・石英粒	内面 橙色(7.5YR6/6) 外面 橙色(7.5YR7/4) 焼成 良好	内面 ヘラナデ 外面 – 底外面 –	摺糸文R
	第16図-87	弥生	壺	口径 – 底径 – 器高 –	頸部	小石・雲母粒	内面 明黄褐色(10YR6/3) 外面 明黄褐色(10YR6/6) 焼成 良好	内面 ヘラナデ 外面 – 底外面 –	摺糸文L
	第16図-88	弥生	壺	口径 – 底径 – 器高 –	頸部	白色砂粒・雲母	内面 橙色(7.5YR7/6) 外面 橙色(5YR6/6) 焼成 良好	内面 荒れている 外面 – 底外面 –	摺糸文R
	第16図-89	弥生	壺	口径 – 底径 – 器高 –	頸部	白色砂粒・石英粒・雲母粒	内面 褐灰色(10YR4/1) 外面 にぶい黄橙色(10YR7/4) 焼成 良好	内面 ヘラナデ 外面 – 底外面 –	摺糸文R
	第16図-90	弥生	壺	口径 – 底径 – 器高 –	頸部	白色砂粒・雲母粒・石英粒	内面 明褐色(7.5YR5/6) 外面 褐色(10YR4/4) 焼成 良好	内面 ヘラナデ 外面 – 底外面 –	摺糸文L
	第16図-91	弥生	壺	口径 – 底径 – 器高 –	頸部	石英粒	内面 にぶい黄橙色(10YR7/3) 外面 にぶい黄橙色(10YR6/4) 焼成 良好	内面 ヘラナデ 外面 – 底外面 –	摺糸文L
	第16図-92	弥生	壺	口径 – 底径 – 器高 –	頸部	白色砂粒・石英粒・雲母粒	内面 明赤褐色(5YR5/6) 外面 赤褐色(5YR4/8) 焼成 良好	内面 荒れている 外面 – 底外面 –	摺糸文R
	第16図-93	弥生	壺	口径 – 底径 – 器高 –	頸部	白色砂粒・雲母粒・石英粒	内面 灰黄褐色(10YR4/2) 外面 灰黄褐色(10YR5/2) 焼成 良好	内面 ヘラナデ 外面 – 底外面 –	摺糸文L
	第16図-94	弥生	壺	口径 – 底径 – 器高 –	頸部	白色砂粒・雲母粒	内面 明黄褐色(10YR6/8) 外面 にぶい黄橙色(10YR6/4) 焼成 良好	内面 ヘラナデ 外面 – 底外面 –	摺糸文L
	第16図-95	弥生	壺	口径 – 底径 – 器高 –	頸部	雲母粒・石英粒・白色砂粒	内面 黒褐色(10YR3/2) 外面 黒褐色(7.5YR3/1) 焼成 良好	内面 ヘラ磨き 外面 – 底外面 –	摺糸文R
	第16図-96	弥生	壺	口径 – 底径 – 器高 –	頸部	白色砂粒・雲母粒	内面 にぶい褐色(7.5YR5/4) 外面 にぶい黄橙色(10YR7/3) 焼成 良好	内面 ヘラナデ 外面 – 底外面 –	摺糸文R
	第16図-97	弥生	壺	口径 – 底径 – 器高 –	頸部	石英粒・白色砂粒	内面 にぶい黄橙色(10YR6/4) 外面 黒褐色(10YR3/2) 焼成 良好	内面 ヘラナデ 外面 – 底外面 –	摺糸文L
	第16図-98	弥生	壺	口径 – 底径 – 器高 –	頸部	白色砂粒	内面 橙色(7.5YR7/6) 外面 橙色(7.5YR6/6) 焼成 良好	内面 ヘラナデ 外面 ヘラナデ 底外面 –	摺糸文L
	第16図-99	弥生	壺	口径 – 底径 – 器高 –	頸部	雲母粒・石英粒	内面 灰黄褐色(10YR6/2) 外面 にぶい黄橙色(10YR5/4) 焼成 良好	内面 ヘラナデ 外面 – 底外面 –	摺糸文L
	第16図-100	弥生	壺	口径 – 底径 – 器高 –	頸部	雲母粒・小石	内面 にぶい黄橙色(10YR6/4) 外面 黒褐色(10YR3/1) 焼成 良好	内面 ヘラナデ 外面 – 底外面 –	摺糸文R(羽状)
	第16図-101	弥生	壺	口径 – 底径 – 器高 –	頸部	白色砂粒・雲母粒	内面 黒褐色(10YR3/2) 外面 灰黄褐色(10YR4/2) 焼成 良好	内面 ヘラナデ 外面 – 底外面 –	摺糸文R+単節縄文RL
	第16図-102	弥生	壺	口径 – 底径 – 器高 –	頸部	白色砂粒・雲母粒	内面 にぶい黄橙色(10YR6/2) 外面 にぶい黄橙色(10YR7/3) 焼成 良好	内面 ヘラナデ 外面 – 底外面 –	2条鋸の摺糸文R
	第16図-103	弥生	壺	口径 – 底径 – 器高 –	頸部	雲母粒・石英粒	内面 にぶい黄橙色(10YR7/4) 外面 明黄褐色(10YR6/6) 焼成 良好	内面 ヘラナデ 外面 – 底外面 –	2条鋸の摺糸文R
	第16図-104	弥生	壺	口径 – 底径 – 器高 –	頸部	白色砂粒・雲母粒	内面 橙色(7.5YR6/6) 外面 黒褐色(7.5YR3/1) 焼成 良好	内面 ヘラナデ 外面 – 底外面 –	2条鋸の摺糸文L
	第16図-105	弥生	壺	口径 – 底径 – 器高 –	頸部	白色砂粒・雲母粒	内面 にぶい褐色(7.5YR5/4) 外面 にぶい黄橙色(10YR7/3) 焼成 良好	内面 ヘラナデ 外面 – 底外面 –	2条鋸の摺糸文R
	第16図-106	弥生	壺	口径 – 底径 – 器高 –	頸部	白色砂粒・雲母粒	内面 にぶい黄橙色(10YR7/4) 外面 にぶい橙色(7.5YR7/4) 焼成 良好	内面 ヘラナデ 外面 – 底外面 –	2条鋸の摺糸文R
	第16図-107	弥生	壺	口径 – 底径 – 器高 –	頸部	白色砂粒・石英粒	内面 にぶい黄橙色(10YR5/3) 外面 灰黄褐色(10YR5/2) 焼成 良好	内面 ヘラナデ 外面 – 底外面 –	2条鋸の摺糸文
	第16図-108	弥生	壺	口径 – 底径 – 器高 –	頸部	白色砂粒・小礫	内面 褐灰色(10YR4/1) 外面 黒色(5YR2/1) 焼成 良好	内面 ヘラナデ 外面 – 底外面 –	2条鋸の摺糸文R+L
	第16図-109	弥生	壺	口径 – 底径 – 器高 –	頸部	白色砂粒・雲母粒	内面 にぶい橙色(7.5YR6/3) 外面 にぶい橙色(7.5YR6/4) 焼成 良好	内面 ヘラナデ 外面 – 底外面 –	2条鋸の摺糸文+3条鋸の摺糸文

遺構	図版番号	種別	器種	法量(cm)	遺存度	胎土	色調・焼成	技法	備考
遺構外	第160図 -110	陶不	壺	口径 – 底径 – 器高 –	胴部	白色砂粒・黒母粒	内面 橙色(7.5YR6/6) 外面 橙色(7.5YR6/6) 焼成 良好	内面 ヘラナデ 外面 – 底外面 –	3条線の燃糸文II + I + I
	第160図 -111	陶不	壺	口径 – 底径 – 器高 –	胴部	白色砂粒・石英粒	内面 黒褐色(10YR3/1) 外面 にぶい黄橙色(10YR7/4) 焼成 良好	内面 ヘラナデ 外面 – 底外面 –	3条線の燃糸文II + I + I
	第160図 -112	陶不	壺	口径 – 底径 – 器高 –	胴部	白色砂粒	内面 にぶい黄橙色(10YR7/2) 外面 にぶい黄橙色(10YR7/4) 焼成 良好	内面 ヘラナデ 外面 – 底外面 –	3条線の燃糸文
	第160図 -113	陶不	壺	口径 – 底径 – 器高 –	胴部	白色砂粒・黒母粒	内面 黒褐色(10YR3/2) 外面 灰黄褐色(10YR4/2) 焼成 良好	内面 ヘラナデ 外面 – 底外面 –	3条線の燃糸文II
	第160図 -114	陶不	壺	口径 – 底径 – 器高 –	胴部	白色砂粒	内面 にぶい黄橙色(10YR7/2) 外面 黄褐色(10YR5/8) 焼成 良好	内面 ヘラナデ 外面 – 底外面 –	2条線の燃糸文L + 平節縄文LR
	第160図 -115	陶不	壺	口径 – 底径 – 器高 –	胴部	白色砂粒・小石	内面 にぶい橙色(7.5YR7/4) 外面 明赤褐色(5YR5/6) 焼成 良好	内面 ヘラナデ 外面 – 底外面 –	2条線の燃糸文II + L + 平節縄文RL
	第160図 -116	陶不	壺	口径 – 底径 – 器高 –	胴部	石英粒・小石	内面 褐色(7.5YR4/4) 外面 暗褐色(7.5YR3/4) 焼成 良好	内面 荒れている 外面 – 底外面 –	平節縄文LR
	第160図 -117	陶不	壺	口径 – 底径 – 器高 –	胴部	白色砂粒・石英粒	内面 にぶい褐色(7.5YR5/4) 外面 にぶい黄橙色(10YR6/3) 焼成 良好	内面 ヘラ磨き 外面 – 底外面 –	平節縄文LR
	第160図 -118	陶不	壺	口径 – 底径 – 器高 –	胴部	白色砂粒	内面 にぶい褐色(7.5YR5/3) 外面 橙色(5YR6/6) 焼成 良好	内面 ヘラ磨き 外面 – 底外面 –	平節縄文LR
	第160図 -119	陶不	壺	口径 – 底径 – 器高 –	胴部	白色砂粒・石英粒	内面 黒褐色(10YR3/1) 外面 にぶい黄橙色(10YR6/4) 焼成 良好	内面 ヘラナデ 外面 – 底外面 –	平節縄文LR
	第160図 -120	陶不	壺	口径 – 底径 – 器高 –	胴部	白色砂粒・石英粒	内面 橙色(7.5YR6/6) 外面 明赤褐色(5YR5/6) 焼成 良好	内面 ヘラナデ 外面 – 底外面 –	平節縄文LR
	第160図 -121	陶不	壺	口径 – 底径 – 器高 –	胴部	白色砂粒・石英粒・赤粒	内面 にぶい褐色(7.5YR5/4) 外面 明褐色(7.5YR5/6) 焼成 良好	内面 ヘラナデ 外面 – 底外面 –	平節縄文LR
	第160図 -122	陶不	壺	口径 – 底径 – 器高 –	胴部	白色砂粒・石英粒	内面 にぶい黄橙色(10YR6/2) 外面 にぶい黄橙色(10YR7/2) 焼成 良好	内面 ヘラナデ 外面 – 底外面 –	平節縄文LR
	第160図 -123	陶不	壺	口径 – 底径 – 器高 –	胴部	石英粒	内面 明黄褐色(10YR6/6) 外面 にぶい黄橙色(10YR5/4) 焼成 良好	内面 ヘラナデ 外面 – 底外面 –	平節縄文LR
	第160図 -124	陶不	壺	口径 – 底径 – 器高 –	胴部	白色砂粒・石英粒	内面 黒褐色(10YR3/2) 外面 にぶい黄橙色(10YR6/4) 焼成 良好	内面 ヘラナデ 外面 – 底外面 –	平節縄文LR
	第160図 -125	陶不	壺	口径 – 底径 – 器高 –	胴部	白色砂粒・石英粒	内面 にぶい橙色(7.5YR7/4) 外面 浅黄橙色(10YR8/4) 焼成 良好	内面 荒れている 外面 – 底外面 –	平節縄文LR
	第160図 -126	陶不	壺	口径 – 底径 – 器高 –	胴部	白色砂粒・石英粒	内面 橙色(7.5YR7/6) 外面 明赤褐色(2.5YR5/6) 焼成 良好	内面 ヘラ磨き 外面 – 底外面 –	平節縄文LR
	第160図 -127	陶不	壺	口径 – 底径 – 器高 –	胴部	白色砂粒・石英粒	内面 にぶい黄橙色(10YR7/4) 外面 にぶい黄橙色(10YR7/3) 焼成 良好	内面 荒れている 外面 – 底外面 –	平節縄文LR
	第160図 -128	陶不	壺	口径 – 底径 – 器高 –	胴部	白色砂粒・石英粒	内面 黒褐色(7.5YR3/1) 外面 褐色(7.5YR4/3) 焼成 良好	内面 荒れている 外面 荒れている 底外面 –	平節縄文LR
	第160図 -129	陶不	壺	口径 – 底径 – 器高 –	胴部	白色砂粒・黒母粒	内面 にぶい黄橙色(10YR7/4) 外面 明黄褐色(10YR6/6) 焼成 良好	内面 荒れている 外面 – 底外面 –	平節縄文LR
	第160図 -130	陶不	壺	口径 – 底径 – 器高 –	胴部	白色砂粒・黒母粒	内面 黒褐色(10YR3/2) 外面 灰黄褐色(10YR5/2) 焼成 良好	内面 荒れている 外面 – 底外面 –	平節縄文LR
	第160図 -131	陶不	壺	口径 – 底径 – 器高 –	胴部	石英粒	内面 にぶい黄橙色(10YR7/2) 外面 にぶい黄橙色(10YR6/4) 焼成 良好	内面 荒れている 外面 – 底外面 –	平節縄文LR
	第160図 -132	陶不	壺	口径 – 底径 – 器高 –	胴部	白色砂粒・黒色砂粒・石英粒	内面 褐色(5YR6/6) 外面 褐色(5YR6/6) 焼成 良好	内面 荒れている 外面 – 底外面 –	平節縄文RL
	第160図 -133	陶不	壺	口径 – 底径 – 器高 –	胴部	白色砂粒・石英粒	内面 褐色(5YR6/6) 外面 褐色(7.5YR7/6) 焼成 良好	内面 荒れている 外面 – 底外面 –	平節縄文RL
	第160図 -134	陶不	壺	口径 – 底径 – 器高 –	胴部	白色砂粒・石英粒	内面 灰黄褐色(10YR4/2) 外面 黒褐色(10YR3/2) 焼成 良好	内面 ヘラ磨き 外面 ヘラ磨き 底外面 –	平節縄文RL
	第160図 -135	陶不	壺	口径 – 底径 – 器高 –	胴部	小石・白色砂粒	内面 明褐色(7.5YR5/6) 外面 にぶい褐色(7.5YR5/4) 焼成 良好	内面 荒れている 外面 – 底外面 –	平節縄文LR
	第160図 -136	陶不	壺	口径 – 底径 – 器高 –	胴部	白色砂粒	内面 にぶい黄橙色(10YR7/2) 外面 にぶい黄橙色(10YR6/4) 焼成 良好	内面 ヘラナデ 外面 – 底外面 –	平節縄文RL
	第160図 -137	陶不	壺	口径 – 底径 – 器高 –	胴部	白色砂粒	内面 褐色(5YR7/6) 外面 褐色(7.5YR7/6) 焼成 良好	内面 ヘラナデ 外面 – 底外面 –	平節縄文RL
	第160図 -138	陶不	壺	口径 – 底径 – 器高 –	胴部	石英粒	内面 にぶい黄橙色(10YR6/4) 外面 黒褐色(10YR3/2) 焼成 良好	内面 ヘラナデ 外面 ヘラナデ 底外面 –	平節縄文LR
	第160図 -139	陶不	壺	口径 – 底径 – 器高 –	胴部	白色砂粒・石英粒	内面 にぶい黄橙色(10YR6/4) 外面 にぶい黄橙色(10YR5/3) 焼成 良好	内面 ヘラナデ 外面 – 底外面 –	0段多条平節縄文LR
	第160図 -140	陶不	壺	口径 – 底径 – 器高 –	胴部	白色砂粒・石英粒	内面 明赤褐色(2.5YR5/6) 外面 灰褐色(5YR5/2) 焼成 良好	内面 ナデ 外面 – 底外面 –	無節縄文LR
	第160図 -141	陶不	壺	口径 – 底径 – 器高 –	胴部	白色砂粒・石英粒	内面 にぶい黄橙色(10YR7/4) 外面 にぶい黄橙色(10YR7/3) 焼成 良好	内面 荒れている 外面 – 底外面 –	附加条縄文
	第160図 -142	陶不	壺	口径 – 底径 – 器高 –	胴部	白色砂粒・石英粒	内面 黒褐色(10YR3/2) 外面 にぶい黄橙色(10YR7/3) 焼成 良好	内面 ヘラナデ 外面 – 底外面 –	附加条縄文
	第160図 -143	陶不	壺	口径 – 底径 – 器高 –	胴部	黒母粒	内面 にぶい黄橙色(10YR7/3) 外面 浅黄橙色(10YR8/4) 焼成 良好	内面 ナデ 外面 – 底外面 –	附加条縄文RL + L 2本
	第160図 -144	陶不	壺	口径 – 底径 – 器高 –	胴部	白色砂粒・石英粒	内面 灰褐色(7.5YR4/2) 外面 褐色(7.5YR4/3) 焼成 良好	内面 ヘラナデ 外面 – 底外面 –	羽状縄文II + RL
	第160図 -145	陶不	壺	口径 – 底径 – 器高 –	胴部	白色砂粒・黒母粒	内面 暗褐色(10YR3/3) 外面 暗褐色(10YR3/3) 焼成 良好	内面 ヘラ磨き 外面 ヘラナデ 底外面 –	羽状縄文RL + LR
	第160図 -146	陶不	壺	口径 – 底径 – 器高 –	胴部	白色砂粒	内面 にぶい黄橙色(10YR5/3) 外面 にぶい黄橙色(10YR7/4) 焼成 良好	内面 ヘラナデ 外面 – 底外面 –	羽状縄文LR + RL
	第160図 -147	陶不	壺	口径 – 底径 – 器高 –	胴部	石英粒	内面 褐色(10YR5/6) 外面 黒褐色(10YR3/2) 焼成 良好	内面 ヘラナデ 外面 – 底外面 –	羽状縄文RL + LR

遺構	図版番号	種類	器種	法量(cm)	遺存度	胎土	色調・地成	技法	備考
遺構外	第100図 -148	赤彩	壺	口径 – 底径 – 器高 –	胴部	石英粒	内面 にぶい黄橙色(10YR6/4) 外面 にぶい黄橙色(10YR6/4) 断面 良好	内面 ヘラナデ 外面 – 底外面 –	須恵器文LL+LR
	第100図 -149	赤彩	壺	口径 – 底径 – 器高 –	胴部	石英粒・雲母粒	内面 明褐色(7.5YR5/6) 外面 灰褐色(7.5YR4/2) 断面 良好	内面 ヘラナデ 外面 – 底外面 –	須恵器文LL+LR
	第100図 -150	赤彩	壺	口径 – 底径 – 器高 –	胴部	石英粒	内面 にぶい黄橙色(10YR6/4) 外面 明黄褐色(10YR6/2) 断面 良好	内面 ヘラナデ 外面 – 底外面 –	平節縄文0段多条LR+0段多条RL
	第100図 -151	赤彩	壺	口径 – 底径 – 器高 –	胴部	白色砂粒	内面 にぶい黄橙色(10YR6/4) 外面 灰黄褐色(10YR5/2) 断面 良好	内面 ヘラナデ 外面 – 底外面 –	須恵器文LL+LR
	第100図 -152	赤彩	壺	口径 – 底径 – 器高 –	胴部	白色砂粒・石英粒	内面 明褐色(7.5YR5/6) 外面 褐色(7.5YR4/3) 断面 良好	内面 荒れている 外面 – 底外面 –	須恵器文LL+LR
	第100図 -153	赤彩	壺	口径 – 底径 – 器高 –	胴部	雲母粒・石英粒	内面 にぶい黄橙色(10YR5/3) 外面 明黄褐色(10YR6/6) 断面 良好	内面 ヘラ磨き 外面 – 底外面 –	須恵器文LR+RL
	第100図 -154	赤彩	壺	口径 – 底径 – 器高 –	胴部	白色砂粒・雲母粒	内面 黒褐色(10YR3/2) 外面 明黄褐色(10YR6/6) 断面 良好	内面 ヘラ磨き 外面 – 底外面 –	須恵器文LR+RL
	第100図 -155	赤彩	壺	口径 – 底径 – 器高 –	胴部	雲母粒	内面 黒褐色(10YR3/6) 外面 にぶい黄橙色(10YR5/3) 断面 良好	内面 ヘラナデ 外面 – 底外面 –	6段2字状結節文+平節縄文RL
	第100図 -156	赤彩	壺	口径 – 底径 – 器高 –	胴部	雲母粒・白色砂粒・石英粒	内面 黒褐色(7.5YR3/1) 外面 灰褐色(7.5YR4/2) 断面 良好	内面 ヘラナデ 外面 – 底外面 –	多段2字状結節文+平節縄文
	第100図 -157	赤彩	壺	口径 – 底径 – 器高 –	胴部	石英粒・砂粒	内面 にぶい橙色(7.5YR7/4) 外面 にぶい橙色(7.5YR7/4) 断面 良好	内面 ヘラナデ 外面 – 底外面 –	S字状結節文+平節縄文RL
	第100図 -158	赤彩	壺	口径 – 底径 – 器高 –	胴部	石英粒・雲母粒	内面 灰褐色(10YR4/1) 外面 黒褐色(10YR3/1) 断面 良好	内面 ヘラ磨き 外面 ナデ 底外面 –	結節文+平節縄文LR
	第100図 -159	赤彩	壺	口径 – 底径 – 器高 –	胴部	石英粒	内面 灰黄褐色(10YR4/2) 外面 灰黄褐色(10YR4/2) 断面 良好	内面 ヘラナデ 外面 ヘラナデ 底外面 –	S字結節文
	第100図 -160	赤彩	壺	口径 – 底径 – 器高 –	底部	白色砂粒・雲母粒	内面 にぶい黄橙色(10YR7/3) 外面 にぶい黄橙色(10YR7/4) 断面 良好	内面 ヘラナデ 外面 – 底外面 本葉痕	平節縄文RL+S字状結節文
	第100図 -161	赤彩	壺	口径 – 底径 – 器高 –	底部	白色砂粒・砂粒	内面 にぶい橙色(7.5YR6/4) 外面 にぶい橙色(7.5YR6/4) 断面 良好	内面 ヘラナデ 外面 底外面 本葉痕	撚糸文L
	第100図 -162	赤彩	壺	口径 – 底径 (6.6) 器高 –	底部	石英粒・小石	内面 灰褐色(7.5YR5/2) 外面 にぶい褐色(7.5YR5/4) 断面 良好	内面 – 外面 – 底外面 –	撚糸文L
	第100図 -163	赤彩	壺	口径 – 底径 (5.5) 器高 –	底部	石英粒・小石	内面 にぶい黄橙色(10YR6/4) 外面 褐色(7.5YR5/4) 断面 良好	内面 – 外面 底外面 本葉痕	撚糸文R
	第100図 -164	赤彩	壺	口径 – 底径 (5.0) 器高 –	底部	石英粒・小石	内面 にぶい橙色(7.5YR6/4) 外面 褐色(7.5YR6/6) 断面 良好	内面 ヘラナデ 外面 底外面 本葉痕	2条撚の撚糸文L+R
	第100図 -165	赤彩	壺	口径 – 底径 (3.4) 器高 –	底部	白色砂粒・石英粒	内面 にぶい橙色(5YR6/4) 外面 にぶい黄橙色(10YR6/4) 断面 良好	内面 ヘラナデ 外面 底外面 本葉痕	2条撚の撚糸文L
	第100図 -166	赤彩	壺	口径 – 底径 (3.6) 器高 –	底部	白色砂粒・石英粒	内面 にぶい橙色(7.5YR6/4) 外面 褐色(5YR7/6) 断面 良好	内面 ヘラナデ 外面 底外面 本葉痕	平節縄文LR
	第100図 -167	赤彩	壺	口径 – 底径 (5.4) 器高 –	底部40%	雲母粒・白色砂粒・石英粒・砂粒	内面 にぶい黄橙色(10YR6/4) 外面 にぶい黄橙色(10YR7/4) 断面 良好	内面 荒れている 外面 – 底外面 布目痕	平節縄文LR
	第100図 -168	赤彩	壺	口径 – 底径 (4.2) 器高 –	底部	白色砂粒・石英粒・小石	内面 にぶい赤褐色(5YR5/4) 外面 黒色(5YR1/7.5) 断面 良好	内面 荒れている 外面 – 底外面 本葉痕	須恵器文LR+RL

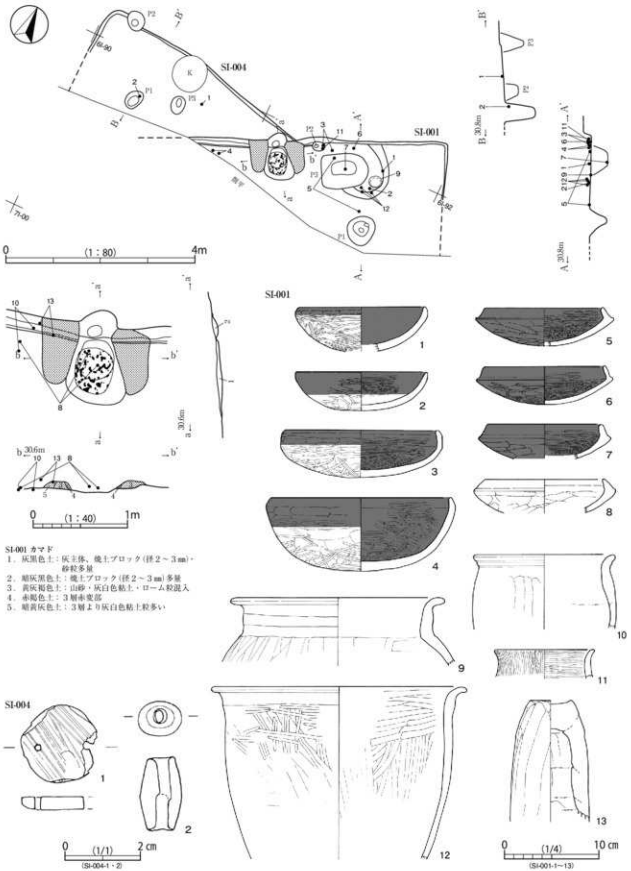
第５節　古墳時代の遺構と遺物

今回の調査では古墳時代中期～後期の竪穴住居跡を14軒検出した。竪穴住居跡以外では土坑３基と溝１条を検出した。古墳時代の遺構は一部を除き調査区の中央付近に分布し、現地形の標高35m～37mの樹枝状台地の平坦面に集中している。台地の南東部は削平の影響が強く、時期の特定はやや困難なものが多いが、竪穴住居跡からは土器類を中心に遺物が豊富に出土した。特筆すべき点は完形の土鈴２点が出土したことである。土鈴が出土した竪穴住居跡の遺存状態は悪いが、千葉県内での出土は珍しい。

１　竪穴住居跡

SI-001（第20図、第２・９・10表、図版10・31）

6I-81・90～92グリッドに所在する。南側の大部分は撹乱により削平されている。西側でSI-004と重複し、本遺構のカマドが遺存することから、本遺構の方が新しいと判断される。平面形は方形と推測され、主軸方向はN-26°-Wである。推定規模は一辺７m前後で、確認面からの深さは0.23mである。カマドは北西壁中央に付設され、袖の構築材は山砂で、壁から70cmほど遺存している。火床部は浅く窪み、被熱し赤化している。壁溝は深さ平均４cmで、カマドの袖を除去した結果、袖部の下にも巡るが、カマド右側のP2から東側には巡らないことを確認した。ピットは３基検出した。P1は主柱穴で径63cm・深さ61cmである。P2は径28cm・深さ12cmで、壁柱穴の可能性も考えられる。カマド右側にあるP3は貯蔵穴で、長径98cm・短径



第20図　SI-001・004

72cm・深さ63cmである。貯蔵穴の東側周辺はわずかに窪んでいる。

遺物の遺存状態は、遺構の南側が削平され、埋土も大部分が削平されているため、総じて良好ではない。1～8は土師器杯である。1・2は小振りの杯である。1は口縁部が若干内傾し、口唇部は摩滅している。口縁部はヘラナデ調整が施される。体部外面はヘラ削りの後、非常に丁寧なヘラ磨き調整が施される。口縁部外面と内面は黒色処理される。2は口縁部が開きながら立ち上がる。内面は非常に丁寧なヘラ磨き調整が施され、外面はヘラ削りの後、ナデとやや粗いヘラ磨き調整が施される。口縁部～体部内外面は黒色処理される。3はやや大振りの杯である。口縁部は垂直に立ち上がり、口唇部はやや内傾する。粗いヘラ磨き調整が施される。内外面が所々赤みを帯びるが、赤彩ではなく胎土の発色と考えられる。口縁部外面と内面は黒色処理される。4は大振りで深い杯である。口縁部はやや内傾する。口縁部～体部の一部と内面は黒色処理される。5～8は須恵器模倣杯である。5～7は口縁部に丁寧なヘラ磨き調整が施され、8は口縁部にヨコナデ調整が施される。5～7は内外面ともに黒色処理される。5は口縁部が強く内傾し、稜が張り出している。6は薄手の杯である。口縁部は摩滅する。7は口唇部が著しく摩滅しており、再調整されていると考えられる。8は稜が張り出さないが、口縁部が強く内傾する。9～11は土師器甕である。9は大形の甕の破片で、貯蔵穴脇の窪みから正位の状態で出土した。頸部～口縁部は垂直に立ち上がり、口唇部は強く外反する。外面は胴部ヘラ削りの後に、頸部にヘラナデを施し、最後に口縁部にヨコナデ調整が施される。10は口縁部～胴部破片である。器面は荒れ、調整は不明瞭である。内外面の色調は赤みを帯びる。11は小形の甕の口縁部～頸部の破片である。外面は縦方向、内面は横方向の丁寧なヘラ磨き調整が施される。器面の色調は赤みを帯びる。12は土師器甑である。下部でやや広がり始め、胴部は垂直に立ち上がり、口縁部は強く外反する。外面は口縁部にヨコナデの後、粗いヘラ磨き調整が施される。内面は縦方向のヘラナデの後、口縁部に横方向のヘラナデ調整が施される。13は土製支脚である。高杯の脚柱部のような形状である。頂部～脚柱部中位が遺存する。カマド袖付近から出土した。脚柱部は輪積による中空の円筒形で、頂部と接合する。内面接着部のナデが十分でないことから、脚柱部を積み上げた後に頂部を貼り付けていると考えられる。外面はケズリが施され、内面はヨコナデと頂部付近は指頭圧痕が見られる。出土位置と形状から支脚と判断した。

本遺構の時期は古墳時代後期と推測される。

SI-004（第20図、第2・11表、図版31）

6I-80・90・91グリッドに所在する。南側の大部分は撹乱により削平されている。東側でSI-001と重複し、本遺構の方が古い。平面形・規模は遺存状態が悪いため不明であるが、主軸方向はN-10°-Wと推測される。確認面からの深さは3cmに満たない。ピットは3基検出した。P1は径44cm・深さ65cmで、位置と深さから主柱穴と判断した。P2は長径40cm・短径30cm・深さ50cm、P3は長径40cm・短径30cm・深さ25cmで、本遺構に伴うと思われるが、性格は不明である。

遺物の出土数は遺構の大部分が削平されているため少なく、遺存状態は悪い。1は滑石製の有孔円板である。一部欠損しているが、2か所の穿孔が確認できる。2は珪化木製の棗玉である。両側から穿孔しているが、実測図下側の穿孔は器体の中軸を通っていない。図示したもののほかに、土師器の小破片が出土している。

本遺構の時期は、遺物や遺構からは判断できず、SI-001との重複関係から古墳時代中期～後期と推測される。

SI-003a・b（第21・22図、第２・９・10表、図版11・31）

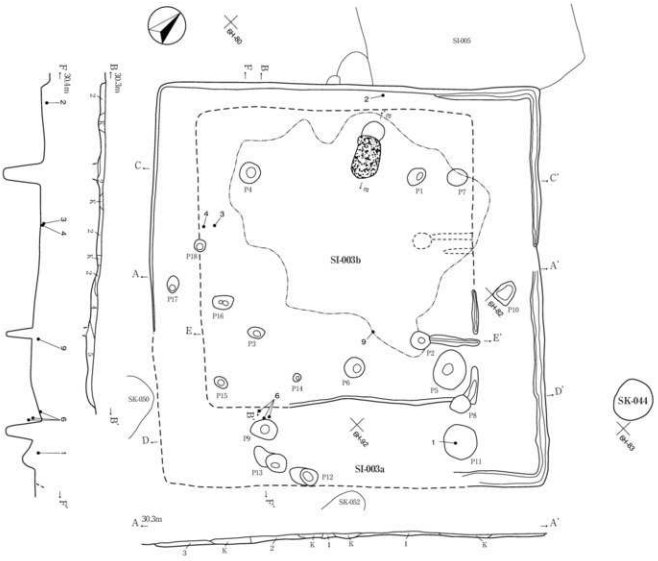
6H-70～72・80～82・90～92グリッドに所在する。北西側でSI-005と重複し、本遺構が新しい。南西側の床面の下にはSK-046（陥穴）がある。確認面からの深さが浅く、壁の立ち上がりがほとんど確認できず、壁溝によって平面形を確認することができた。南側は撹乱により削平され、壁溝も検出できなかった。本遺構は２軒の竪穴住居跡が重複したもので、外側の竪穴住居跡003aの貼床除去中に内側の竪穴住居跡003bの壁溝などを検出した。両遺構は埋土の堆積状況からは切り合い関係が認められず、各辺の向きがほぼ同じであることと主柱穴の位置などから、主柱穴P4を基点として四方に（003bから003aへ）拡張されたと推測される。P1～P11は主柱穴や貯蔵穴として帰属する竪穴住居跡を推測することができたが、P12～P18は性格やどちらの竪穴住居跡に帰属するのか不明である。

003aは、平面形は方形で、主軸方向はN-44°-Wと推測される。規模はいずれも推定で、主軸長8.45m・幅8.20mで、確認面からの深さは0.16mである。炉は北西壁側の主柱穴の間で検出し、長軸長92cm・短軸長56cmで、不整な楕円形である。壁溝は北西壁から南東壁にかけて検出した。北西側で途切れていることから、全周しないと考えられる。平面図の一点破線の範囲は床面の硬化部分である。003aの主柱穴はP4・P7～P9の４本で、P4は径46cm・深さ81cm、P7は長径42cm・短径36cm、P8は長径42cm・短径38cm、P9は長径58cm・短径42cm・深さ66cmである。南東壁際にあるP11は径74cmで、貯蔵穴と推測される。北東壁際のほぼ中央にあるP10は長径48cm・短径37cm・深さ36cmで、出入口ピットと推測される。P7・P8・P11については上端のみの記録であり、詳細な形状と深さは不明である。

003bは、平面形は方形で、主軸方向は003aと同じと推測される。規模はいずれも推定で、主軸長6.10m・幅5.75mで、003aの床面からの深さは南東側で0.04mである。壁溝は北東側で部分的に検出したものの、全周はしないと推測される。間仕切り溝については、P2から壁溝に延びるもののほかに、現場写真にのみ記録されているものがあり、挿図中に破線で位置等の概略を示した。主柱穴はP1～P4の４本で、P1は長径44cm・短径34cm・深さ65cm、P2は径40cm・深さ30cm、P3は長径36cm・短径24cm・深さ56cm、P4は径46cm・深さ81cmである。P5は長径84cm・短径68cm・深さ34cmで、東側隅にあり貯蔵穴と推測される。P6は径44cm・深さ37cmで、南東壁際のほぼ中央にあり出入口ピットと推測される。

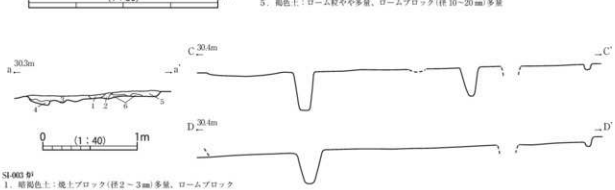
出土遺物は、拡張後の003aに伴う可能性が高いため、出土位置に関わらずまとめて記載した。１は土師器杯である。体部は平底の底部から大きく開き、口縁部はやや内傾して立ち上がる。杯部と底部内外面はヘラナデ調整が施され、内外面ともに赤彩される。２・３は土師器高杯の脚部である。ラッパ状に外反する屈曲脚で、脚柱部は円柱状で、裾部は強く屈曲して直線的に広がる。２は脚柱部内面にヘラ削り調整が施されるが、輪積痕が見られる。３は脚柱部が若干膨らみ、内外面はヘラ削り調整が施され、外面は赤彩される。４～９は土師器甕である。４・５は口縁部である。４は複合口縁で頸部が「く」の字状に屈曲する。頸部は縦方向のヘラナデ調整が施される。５は頸部が直線的に立ち上がった後、口縁部は緩やかに外反する。口縁部内面は横方向のハケ目が残る。６は球形の胴部～底部で、胴部外面は被熱し器面が荒れ、ススが付着する。内面に輪積痕がわずかに見られる。７～９は平底の底部である。７は推定底径が8.1cmと大きく器厚が薄手であるのに対し、８・９は底径が小さく器厚が厚手である。８は底部に木葉痕が見られる。10～12は土玉である。10は完形で、上部から穿孔されたと推測される。11は外面及び孔内部が黒色であり、炭素の吸着によるものと推測される。外面はヘラ磨きが施される。12は小形の土玉の破片である。

本遺構の時期は、いずれも出土遺物から古墳時代中期と推測される。



SI-003

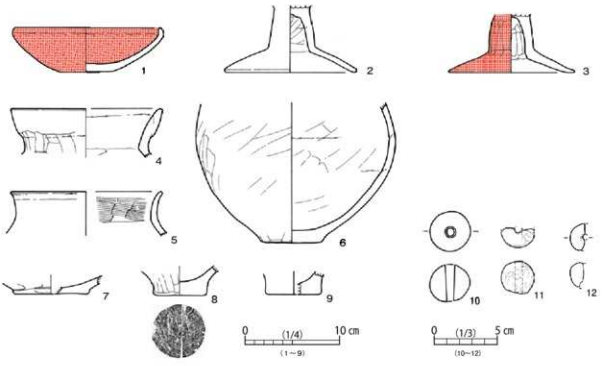
1．暗褐色土：ローム粒やや多量、ロームブロック(径5㎝)・焼土粒少量
2．暗褐色土：ローム粒多量、ロームブロック(径5㎝)やや多量、炭化粒若干
3．暗褐色土：ローム粒多量、ロームブロック(径5㎝)やや多量、焼土粒・炭化粒含む
4．暗褐色土：ローム粒やや多量、ロームブロック(径3～5㎝)多量
5．褐色土：ローム粒やや多量、ロームブロック(径10～20㎝)多量



SI-003 炉

1．暗褐色土：焼土ブロック(径2～3㎝)多量、ロームブロック(径2～3㎝)やや多量
2．暗褐色土：焼土ブロック(径2～3㎝)・ロームブロック(径2～3㎝)少量
3．暗赤褐色土：焼土粒・焼土ブロック(径2～3㎝)多量
4．暗赤灰色土：焼土粒多量、灰含む
5．暗赤褐色土：焼土ブロック(径2～3㎝)・焼土粒やや多量
6．暗赤色土：焼土粒多量、焼土ブロック(径2～3㎝)やや多量

第21図　SI-003a･b（1）・SK-044



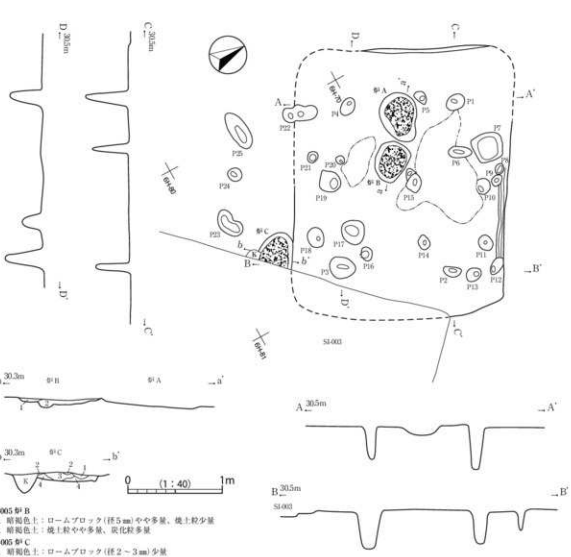
第22図　SI-003a･b（２）

SI-005（第23図、第２・９表、図版11・31）

6H-60・61・70・71グリッドに所在する。南側でSI-003aと重複し、本遺構の方が古い。発掘調査時に本遺構の南側で炉Cを検出したことから、もう一軒竪穴住居跡が重複して存在すると想定していたが、主柱穴となるようなピットなどは検出できなかった。本遺構も確認面から深さが浅く、遺存状態が良くない。平面形は隅丸長方形で、主軸方向はN-61°-Wと推測される。推定の規模は主軸長5.68m・幅4.50mで、確認面からの深さは0.14mである。壁溝は北東壁で一部検出したが、おそらく全周しないと推測される。炉は北西壁寄りの主柱穴の間に２基検出した。北側の炉Aは長軸長108cm・短軸長80cmの不整な楕円形である。断面形は扁平な皿状で、土層の堆積状況は不明である。南側の炉Bは長軸長88cm・短軸長64cmの楕円形である。断面形は扁平な皿状で、一部が深くなっている。炉A・Bの周辺に床面の硬化部分（平面図の一点破線の範囲）が見られた。炉Cは南東側半分ほどがSI-003aに削平されているが、平面形は楕円形になると推測される。現存の長軸長72cm・推定の短軸長80cmで、掘り込みは比較的しっかりしている。ピットは周辺のものも含め25基検出し、P1～P4が主柱穴である。P1は径42cm・深さ90cm、P2は径38cm・深さ69cm、P3は径57cm・深さ88cm、P4は径40cm・深さ68cmである。そのほかのピットは平面形・規模・深さともにまちまちで、性格は不明である。

図示できた遺物は３点である。１～３は土師器甕である。１は複合口縁で頸部が「く」の字状に屈曲する。口唇部は面取りされる。口縁部内面と頸部内外面は縦方向のヘラナデ調整が施される。口縁部外面に輪積痕が見られる。２・３は平底の底部である。２は内外面ともにヘラナデが施される。３は径が小さく、内面は摩滅しているが、内外面にヘラナデが施される。

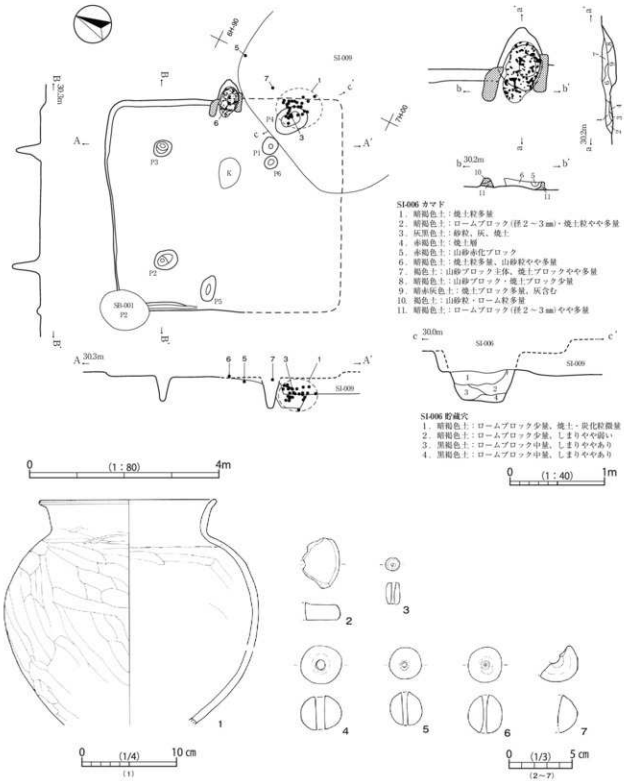
本遺構の時期は、平面形や出土遺物などから古墳時代中期と推測される。



第23図　SI-005

SI-006（第24図、第２・９・10表、図版12・32）

6G-88・89・98・99グリッドに所在する。南側の大部分は撹乱により削平され、遺存状態は良くない。南東側でSI-009（弥生時代）と重複し、本遺構の方が新しい。西側隅で奈良・平安時代のSB-001のP2と重複する。発掘調査時には南東側にもう一軒竪穴住居跡が重複していると想定し、006A・006Bの遺構番号を付して調査を進めたが、プランや主柱穴などが明確にされなかったことから、整理作業時に単独の竪穴住居跡と判断し、遺構番号も006として報告することとした。平面形は方形で、主軸方向はN-64°-Eと推測される。規模は主軸長4.46m・推定幅4.86mで、確認面からの深さは0.12mである。壁溝は南西壁沿いに一部見られる。カマドは北東壁の中央に付設されている。袖の構築材は山砂で、壁から40㎝ほどが遺存して



第24図　SI-006

いる。煙道部は壁を40cmほど掘り込み、奥壁は火床面から約30°の角度で立ち上がる。ピットは６基検出し、主柱穴はP1～P3である。P1は長径38cm・短径30cm・深さ51cm、P2は長径51cm・短径40cm・深さ58cm、P3は長径36cm・短径34cm・深さ53cmである。南東隅にあるP4は貯蔵穴で、長径63cm・短径52cm・深さ34cmであ

る。南西壁際にあるP5は長径56cm・短径28cm・深さ20cmで、出入口ピットと推測される。

図示できた遺物は、土器１点と土製品６点である。１は土師器甕である。胴部上部が最大径となる球形の胴部である。口縁部は、頸部で直立気味に緩やかに外反し、口唇部で大きく外反する。胴部外面はヘラ削りで、胴部中位～下半部は斜めに、胴部上半部は横方向に行っている。口縁部内外面はヨコナデ、胴部内面はヘラナデ調整が施される。２～７は土製品である。２は紡錘車と推測される。縁辺は若干摩滅している。孔は上部から一度に開けられたと推定される。３は管玉である。孔を開けた後に、上下面が平らになるよう調整が施される。４～７は土玉である。４・５は上部から孔が開けられ、６は上下から孔が開けられたと推測される。４は被熱のため表面が剥落している。６はほかの土玉と比較し、孔径が小さい。７は土玉の破片である。

本遺構の時期は、出土遺物から古墳時代中期後葉～後期初頭と推測される。

SI-012（第25図、第２表、図版12・13）

6H-97・98グリッドに所在する。北側でSI-014・015、東側でSI-013と重複し、本遺構が最も新しい。西側には中・近世土坑SK-053・056が掘り込まれている。南側は大きく撹乱により削平されるなど遺存状態は悪く、壁溝によって北東隅を検出した。平面形は方形で、主軸方向はN-33°-Wと推測される。床面は撹乱により斜めに削平され、壁溝から南に向かって傾斜している。壁溝の深さは約５cmである。ピットは４基検出した。P2は貯蔵穴で、長径81cm・短径58cm・深さ27cmである。そのほかのピットは性格不明である。

遺物の遺存状態も良好ではなく、図示できるものはない。

本遺構の時期は、ほかの竪穴住居跡との重複関係から古墳時代後期と推測される。

SI-013（第25・26図、第２・９・10表、図版12・13・32）

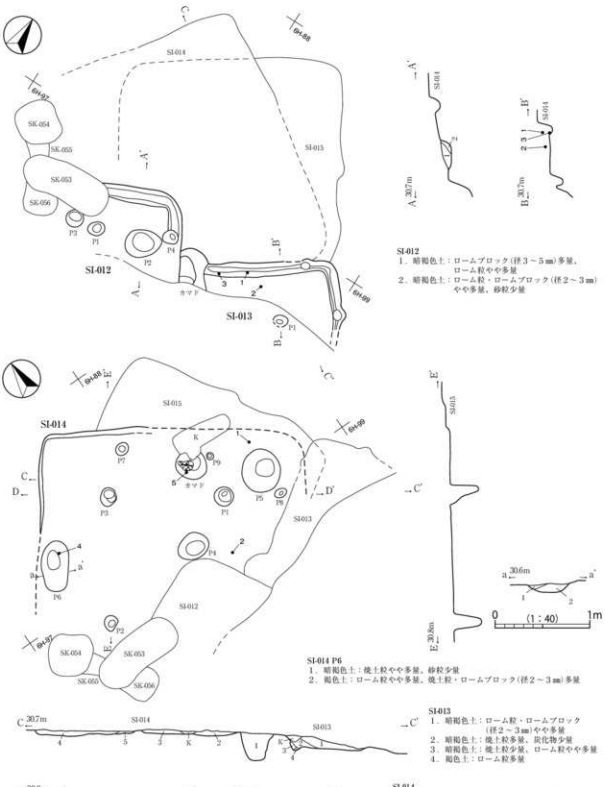
6H-98・99グリッドに所在する。北側でSI-014・015、西側でSI-012と重複し、本遺構の方がSI-012よりも古く、SI-014・015よりも新しい。南側は大きく撹乱により削平され遺存状態は悪く、カマドから北隅の一部を検出した。平面形は方形で、主軸方向はN-32°-Wと推測される。確認面からの深さは45cmである。カマドは北西壁に付設されているが、遺存状態が悪く、山砂や焼土粒・灰などの範囲を検出しただけで、袖部や火床部は検出できなかった。壁溝の深さは約５cmで、カマド付近で途切れている。検出したピット（P1）は主柱穴と考えられるが、撹乱による削平を受けている。現存規模は径33cm・深さ27cmである。

図示できた遺物は土器２点、土製品１点、石製品１点である。１は土師器杯である。器高が低く、口縁部は緩やかに立ち上がる。内面は細かなミガキ調整が施され、内外面は黒色処理される。２は土師器甕の底部である。底部の器厚は厚いが、胴部の器厚は上部に向かってかなり薄くなっている。３は土製支脚で、表面は被熱し剥落が著しい。４は砂岩製の砥石破片である。表裏両面を使用している。最大長56.0mm・最大幅63.0mm・最大厚30.0mm・重量128.51ｇである。

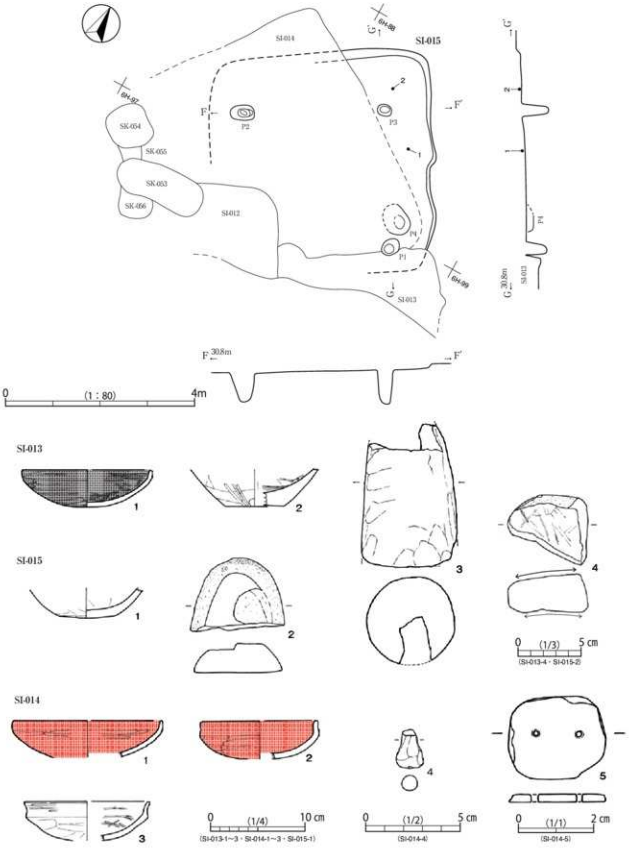
本遺構の時期は、出土遺物から古墳時代後期と推測される。

SI-014（第25・26図、第２・９～11表、図版13・32）

6H-87・88・97・98グリッドに所在する。東側でSI-015、南側でSI-012・013と重複し、本遺構の方がSI-012・013より古く、SI-015より新しい。南西側は中・近世土坑SK-053～056に掘り込まれている。平面形は方形で、主軸方向はN-36°-Eと推測される。規模は一辺約６mで、確認面からの深さは0.12mである。カマドは北東壁寄りの中央部に付設されたと推測される。壁際は撹乱を受け、遺存するのは火床部だけで袖部は検出できなかったが、土層断面の調査記録や写真などからカマドと判断した。ピットは９基検出し、



第25図　SI-012～015（1）



第26図　SI-012～015（2）

主柱穴はP1～P3である。P1は径42cm・深さ58cm、P2は径34cm・深さ56cm、P3は径42cm・深さ60cmである。東隅のP5と西壁寄りのP6は貯蔵穴で、P5は径79cm・深さ56cm、P6は長径106cm・短径58cm・深さ17cmである。

遺物の遺存状態は良好ではなく、図示できたものは土器３点・土製品１点・石製品１点である。１～３は土師器杯である。１・２は内外面が赤彩される。１は器高が低く、口縁部は緩やかに立ち上がる。口唇部は使用により、かなり摩滅している。器面は被熱し剥落する。外面にススが付着している。２は口縁部が垂直に立ち上がり、口唇部はわずかに外反する。口縁部は使用により摩滅している。３は口縁部と体部の境に明瞭な稜を作り出すものである。口縁部は垂直に立ち上がった後にやや外反する。内外面は細かなヘラ磨き調整が施される。４は小形土製品の一部と推測される。指ナデによって上部に細くひねり上げており、スタンプ状である。上部は欠損している。５はほぼ完形の滑石製の有孔円板である。２か所に穿孔されている。

本遺構の時期は、出土遺物から古墳時代後期と推測される。

SI-015（第26図、第２・９表、図版13・32）

6H-87・88・98グリッドに所在する。西側でSI-014、南側でSI-012・013と重複し、本遺構が最も古い。遺構の遺存状態は悪く、確認面からの深さも浅い。ほかの遺構と重複しない部分で壁の掘り込みを検出した。平面形は方形で、主軸方向はN-32°-Wと推測される。規模は一辺約4.5mで、確認面からの深さは0.08mである。ピットは４基検出し、主柱穴はP1～P3である。P1は径39cm・深さ48cm、P2は径51cm・深さ59cm、P3は径35cm・深さ61cmである。P4は西側の半分をSI-014のP5に切られているが、貯蔵穴と推測され現存長50cm・深さ９cmである。

遺物の遺存状態は良好ではなく、図示できたものは土器１点と石器１点である。１は土師器坩の底部である。底部は若干丸みを帯びている。２は砂岩製の敲石である。表面と裏面が使用によって平らになっており、上面には敲打痕が見られる。最大長44.0mm・最大幅50.0mm・最大厚15.5mm・重量39.49ｇである。

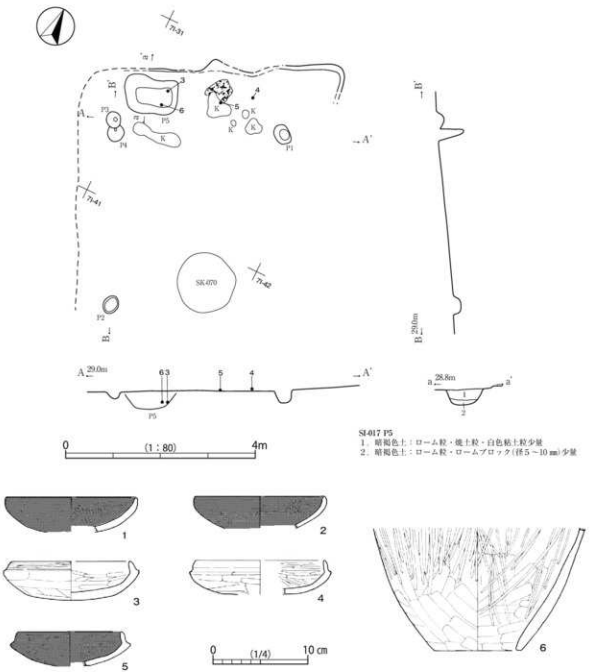
本遺構の時期は、出土遺物と重複関係から古墳時代中期と推測される。

SI-017（第27図、第２・９表、図版14・32）

7I-30・31グリッドに所在する。遺構の掘り込みが浅く、北壁と北壁寄りの床面の一部だけを検出した。北壁の状況から平面形は方形で、主軸方向はN-28°-Wと推測される。規模は一辺約５mと推測され、確認面からの深さは0.09mである。発掘調査時の所見では、北壁際に焼土と一部に山砂が見られたことから、カマドの存在を想定したが、袖部や火床部は検出できなかった。ピットは５基検出し、主柱穴はP1～P3である。P1は径41cm・深さ30cm、P2は径42cm・深さ16cm、P3は径36cm・深さ35cmである。P5は貯蔵穴と推測され、長軸長113cm・短軸長79cm・深さ40cmである。

図示できた遺物は土器６点である。１～５は土師器杯で、全て口径に対して器高が低いものである。１・２は口縁部が緩やかに内湾して立ち上がる椀形の杯で、内外面が黒色処理される。１は外面がヘラナデ、内面がヘラ磨き調整が施される。口縁部は摩滅が著しい。２は内外面にヘラ磨き調整が施される。３～５は須恵器模倣杯で、外面に明瞭な稜を作り、口縁部がやや内傾する。いずれも内外面はヘラナデないしヘラ磨き調整が施され、５は内外面が黒色処理される。６は土師器甑である。内外面ともに斜め・横方向のヘラケズリの後、縦・斜め方向の丁寧なヘラミガキ調整が施される。

本遺構の時期は、出土遺物から古墳時代後期と推測される。



第27図　SI-017

SI-018（第28・29図、第２・９・10表、図版14・15・32・33）

7H-31・32・41～43グリッドに所在する。遺跡の南西側にある小支谷の傾斜面中にあり、大部分は南側台地整形区画のSX-005によって削平されているため、北西側の壁付近と壁溝の一部などしか検出できなかった。北東側でSI-019と重複し、本遺構の方が新しい。平面形は方形又は長方形で、主軸方向はN-36°-Eと推測される。壁は北隅と西側の一部で検出し、確認面からの深さは斜面地のため５㎝～80㎝と幅がある。北東側で壁溝を検出し、本遺構の平面形などを推定することができた。壁溝の深さは８㎝である。ピットは４基検出した。P1は主柱穴、P2・P3は貯蔵穴と推測される。P1は径46㎝・短径33㎝・深さ67㎝である。

P2は長軸長93cm・短軸長66cm・深さ59cm、P3は長軸長74cm・短軸長62cm・深さ６cmである。P4は径60cm・深さ44cmで、壁溝と重複する場所にあり、壁柱穴と推測されるが、SI-019の主柱穴の可能性もある。

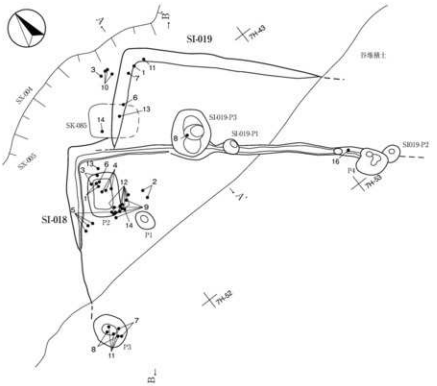
遺物は壁が最もよく遺存している北隅とP3内から出土した。図示できた遺物は土器12点、ミニチュア土器２点、土製品１点である。１～６は土師器杯である。１・２は口縁部が緩やかに内湾して立ち上がる椀形の杯である。１は口唇部の摩滅が著しく、外面はヘラナデ、内面はヘラ磨き調整が施され、内外面が黒色処理される。２は口縁部がやや直線的に立ち上がり、外面はヘラナデ、内面はヘラ磨き調整が施され、内面が黒色処理される。３～５は須恵器模倣杯で、外面に明瞭な稜を作り、口縁部が内傾する。３・４は扁平な丸底で、５はやや深い丸底である。いずれも内外面はヘラ磨き調整が施され、３は内外面が黒色処理される。５は口唇部の摩滅が著しい。６は口縁部が内湾して立ち上がる深い椀形の杯である。口縁部は短く内傾する。外面は丁寧なヘラナデ調整、内面は細かなヘラ磨き調整が施される。７～12は土師器甕である。７・８は口縁部が短く直立気味に外反し、口径が胴部径よりも小さい。胴部と口縁部の間に稜を作り出す。９～11は口縁部が大きく外反する。９は口径と胴部径がほぼ同じで、胴部外面は縦方向のヘラ削りの後、横方向のヘラナデ調整が施される。10・11は球形の胴部になると推測される。11は口縁部と胴部の境に明瞭な稜が作り出される。12は口縁部を欠損するが、10・11と同じ大きく外反する口縁部をもつ甕と推測される。外面は縦方向のヘラ削りの後、横方向のヘラナデ調整が施される。13は土師器甑である。口縁部は外反し、底部に向かってすぼまる鉢形の甑と推測される。胴部内面は丁寧なヘラ磨き調整が施される。14・15はミニチュア土器で、手捏ね成形である。いずれも平底で体部はほぼ垂直に立ち上がる。16は小形の土玉である。上部から穿孔されている。表面はヘラナデないしヘラ磨きの後、黒色処理され光沢を帯びている。装飾品として使用されていたと推測される。

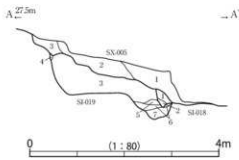
本遺構の時期は、出土遺物から古墳時代後期と推測される。

SI-019（第28・29図、第２・９～11表、図版14・15・33）

7H-32・42・43グリッドに所在する。SI-018と同様に遺跡の南西側にある小支谷の傾斜面中にあり、大部分は南側台地整形区画のSX-005に削平されている。南西側はSI-018と重複し、本遺構の方が古いため北隅部分の壁付近の一部しか検出できなかった。北西壁に奈良・平安時代の土坑SK-085が掘り込まれている。平面形は方形又は長方形で、主軸方向はN-44°-Eと推測される。規模は遺存状態が悪く、現状で主軸長4.4m・幅2.24mで、確認面からの深さは0.40m～0.97mと幅がある。ピットは３基検出した。P1・P2は主柱穴、P3は貯蔵穴と推測される。P1は径38cm・深さ64cm、P2は径32cm・深さ47cmである。P3は長径98cm・短径82cm・深さ80cmである。

遺構の遺存状態は良くないが、遺物の数量は多く、図示できた遺物は土器10点、須恵器１点、ミニチュア土器１点、石製品１点、土製品１点、砥石１点である。１～６は土師器杯である。１は半球形の扁平な杯で、体部に接合痕が見られる。外面はヘラナデ調整、内面は丁寧なヘラ磨き調整が施される。２～４は須恵器模倣杯である。２は口径に対して器高がやや高い。内面の口縁部近くに輪積痕が残る。内外面は丁寧な細かなヘラ磨き調整が施され、体部外面を除いて赤彩される。３・４は外面に明瞭な稜を作り口縁部が内傾する。３は口縁部から底部にかけて亀裂が見られ、口縁部・体部に摩滅や欠損部がないことや出土位置が床面よりかなり上であることなどから、ほとんど使用されずに投棄されたと推測される。底部～体部外面はヘラ削りで、そのほかは丁寧なヘラ磨き調整が施される。４は口唇部が全て欠損し体部外面は摩滅している。内外面は丁寧なヘラ磨き調整が施され、黒色処理される。５は体部が浅く、口縁部は体部との境に



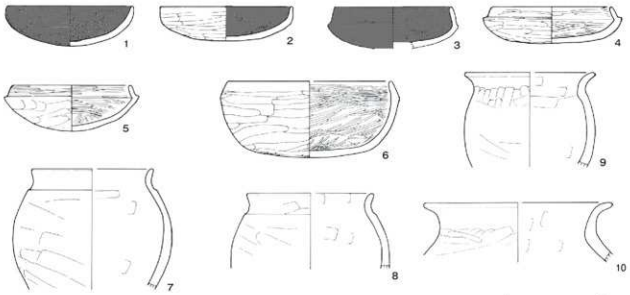


SI-018
1．褐色土：ロームブロック（径10～20 mm）多量
2．褐色土：ロームブロック（径2～3 mm）やや多量

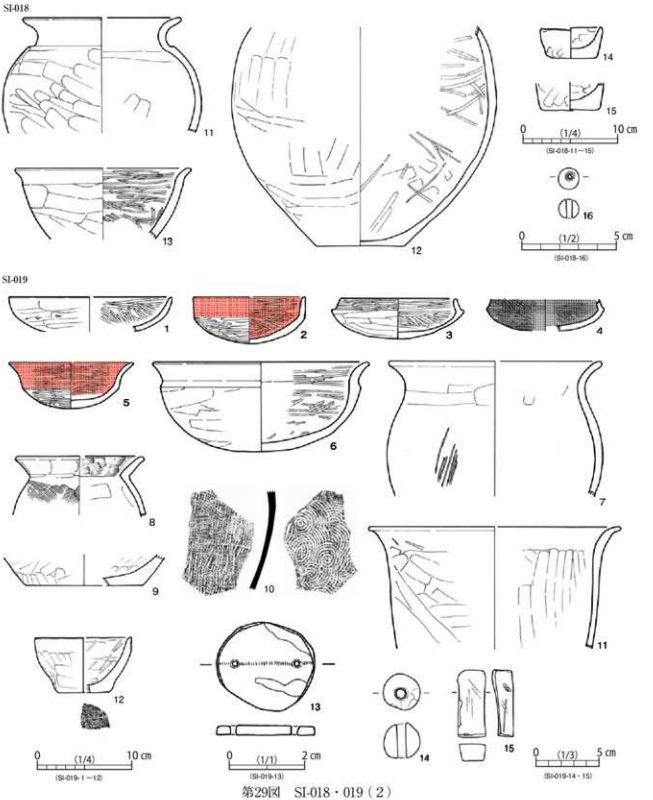
SI-019
3．暗褐色土：ロームブロック（径2～3 mm）（径5～10 mm）やや多量
4．褐色土：ローム粒多量
5．暗褐色土：ローム粒やや多量，ロームブロック（径10 mm）少量
6．褐色土：ローム粒・ロームブロック（径2～3 mm）（径5～10 mm）多量
7．褐色土：ローム粒・ロームブロック（径2～3 mm）多量，
暗褐色土粒やや多量，白色粘土ブロック少量

SX-005
1．暗褐色土：焼土粒若干
2．褐色土：ロームブロック（径5 mm前後）やや多量，焼土粒・粘土ブロック少量
3．褐色土：ローム粒多量，ロームブロック（径5～5 mm）やや多量

SI-018



第28図　SI-018・019（1）



第29図　SI-018・019（2）

稜を作って大きく外反しながら立ち上がる。内外面ともにヘラ磨き調整が施され、体部外面と底部内外面を除いて赤彩される。6は大形の杯である。口縁部は体部との境に明瞭な稜を作り出し、大きく外反し短く立ち上がる。7～9は土師器甕である。7は口縁部が緩やかに外反する。外面はヘラナデ調整と擦痕が

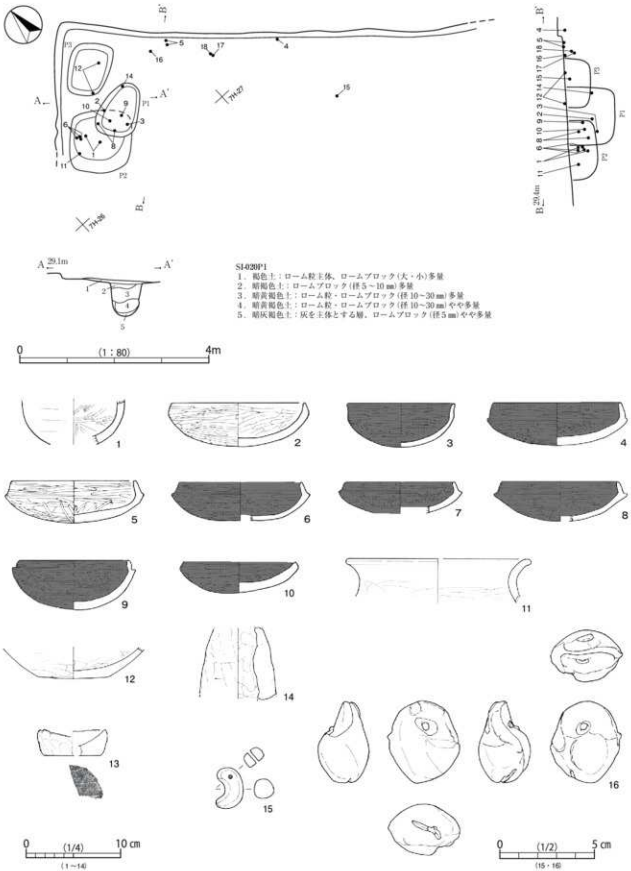
見られる。内面は剥落が激しく調整がほとんど確認できないが、わずかにヘラ状工具痕が確認できる。8は口縁部が「く」の字状に屈曲する甕である。口縁部内面は横方向、胴部外面は斜め方向のハケ調整が施される。9は甕の底部で大形の甕になると推測される。内外面ともに縦方向のヘラ削りの後、ヘラナデ調整が施される。10は須恵器甕の胴部片である。外面は平行タタキ、内面は同心円文の当て具痕が見られる。11は土師器甑である。口縁部は若干外反する。外面は斜め方向のヘラ削り及びヘラナデ調整で、内面は縦方向のヘラナデ調整が施される。12はミニチュア土器である。手捏ね成形で平底である。内面に輪積痕、底部に木葉痕が見られる。13は滑石製の有孔円板で、2か所に穿孔されている。表裏面とも孔と孔の間とその延長線上に、石材の節理面に摩滅痕が確認できる。これは孔に紐などを通して使用した際に生じたものと推測される。14は土玉である。上部から穿孔され、ナデ調整が施される。15は凝灰岩製の砥石である。表裏面と右側面、左側面の一部に擦痕がある。最大長53.0㎜・最大幅22.0㎜・最大厚13.0㎜・重量28.04ｇである。

出土土器は6が床面近く、8が貯蔵穴内から出土し、いずれも古い要素をもつもので、そのほかのものは床面から高く、SI-018出土土器に類似するもので明らかに新しい要素をもつものである。よって、本遺構の時期は、出土遺物に中期と後期の土器が混在しているが、SI-018との重複関係からも古墳時代中期と推測される。

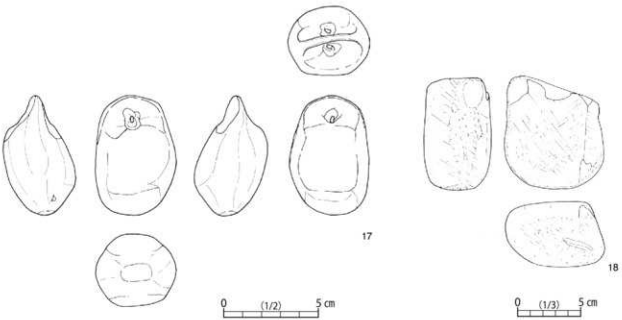
SI-020（第30・31図、第2・9・10表、図版16・34・35・40）

7H-16・17・26～28グリッドに所在する。北隅と北東の壁を検出し、竪穴住居跡と判断した。本遺構の発掘調査時の記録は遺物出土状況図・ピットセクション図・ピットに関する現場写真だけで、第30図に示した平面図・エレベーション図はこれらをもとに推定復元したものである。平面形は方形又は長方形で、主軸方向はN-43°-Eと推測される。規模は推定幅約9ｍで、確認面からの深さは約0.1ｍである。ピットは3基検出し、遺物の出土状況や現場写真などから、いずれも貯蔵穴で作り替えが行われたと推測される。推定規模は、P1は長軸長120㎝・短軸長86㎝・深さ80㎝、P2は長軸長130㎝・短軸長120㎝・深さ60㎝、P3は長軸長114㎝・短軸長106㎝・深さ60㎝である。主柱穴やカマドは検出されていない。

遺構の遺存状態は良くないが、遺物は壁際や貯蔵穴内から多く出土し、図示できた遺物は土器12点、ミニチュア土器1点、土製品4点、石器1点である。1は土師器坩の胴部と推測される。胴部外面は被熱し荒れている。内面はヘラ磨き調整が施される。2～10は土師器杯である。2・3は椀形の杯である。2は口縁部がやや内傾し、外面は丁寧なヘラ磨き調整が施される。3は口縁部がわずかに外反気味に立ち上がり、口径に対して器高がやや高い。内外面ともにヘラ磨き調整が施され、黒色処理される。口唇部は摩耗している。4～10は須恵器模倣杯である。いずれも口縁部は内傾する。内外面はヘラ磨き調整が施され、5以外は内外面ともに黒色処理される。4は口縁部外面と体部内面の一部に、胎土を後から追加して貼り付けた痕跡が見られる。その部分は当初のヘラ磨き調整とは方向が異なり、明らかにヘラ磨き調整がやり直されていることから、作成途中に何らかの不具合が生じ（亀裂が生じる等）、それを修復した跡と推測される。9は口径に対して器高が大きい半球形の杯である。口唇部は摩耗している。11・12は土師器甕である。11は口縁部で外反する。胴部内外面は横方向のヘラナデである。12は底部で外面ヘラ削り、内面ヘラナデ調整が施される。13はミニチュア土器で、手捏ね成形である。内面は剥落が著しい。底部は木葉痕が見られる。14は土製支脚である。粘土紐を巻き上げて作られた様子が確認でき、上下の破断面は粘土紐の面である。内外面ともにナデ成形である。15は土製勾玉である。ヘラナデないしヘラ磨き調整が施される。


SI-020P1
1．褐色土：ローム粒主体、ロームブロック（大・小）多量
2．暗褐色土：ロームブロック（径5～10㎝）多量
3．暗黄褐色土：ローム粒・ロームブロック（径10～30㎝）多量
4．暗黄褐色土：ローム粒・ロームブロック（径10～30㎝）やや多量
5．暗灰褐色土：灰を主体とする層、ロームブロック（径5㎝）やや多量
0 (1：80) 4m
0 (1/4) 10 cm
(1～14)
0 (1/2) 5 cm
(15・16)

第30図　SI-020（1）



第31図　SI-020（２）

16・17は完形の土鈴である。なお、ここでは遺物の形状などを記載し、内部構造や製作方法などの詳細については、第３章まとめで記載する。16は平面形が楕円形で、断面形は吊手が板状である。内部は中空で、小石１個と粘土粒３個が入っているが、内部は空間が狭く、揺らしてもほとんど音が鳴らない。17は平面形が長楕円形で、断面形は体部が楕円形で吊手が板状である。内部は中空で、粘土粒２個が入っており、揺らすと音が鳴る。18は砂岩製の砥石である。表面・上面・右側面及び下面の一部に研磨痕が確認できる。左側面や下面には擦痕が見られる。最大長89.0㎜・最大幅78.0㎜・最大厚51.5㎜・重量522.05ｇである。

本遺構の時期は、出土遺物から古墳時代後期と推測される。

２　土坑

SI-021（第32図、第３・９表、図版35）

7G-29・7H-20グリッドに所在する。南側でSX-004と重複し、遺構の大部分はSX-004により削平されているため遺存状況が悪い。発掘調査時は竪穴住居跡としていたが、推定の平面形や規模と台地縁辺部にあることなどが関戸砦跡の３号土坑に類似することから、土坑と判断した。平面形は楕円形で、長軸方向はN-21°-Wと推測される。規模はいずれも推定で長軸長3.6m、短軸長2.8mで、確認面からの深さは約0.1mである。P1は径30㎝で、床面からの深さは15㎝である。

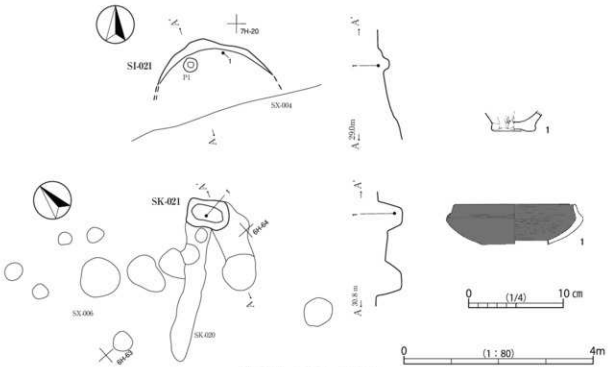
図示できた遺物は1点だけである。１は甕の底部で、中央がやや上げ底となる。

本遺構の時期は、関戸砦跡３号土坑との類似から古墳時代中期と推測される。

SK-021（第32図、第３・９表、図版16・35）

6H-53グリッドに所在する。SX-006ピット群の中にある。平面形は長方形で、長軸方向はN-36°-Wである。規模は長軸長90㎝・短軸長56㎝で、確認面からの深さは50㎝である。竪穴住居跡に伴う土坑（貯蔵穴）であった可能性があるが、周辺に柱穴などは検出されていない。

図示できた遺物は土器１点である。１は土師器杯で、須恵器模倣杯である。口縁部は内傾し、口縁部内



第32図　SI-021・SK-021

外面及び体部内面は丁寧なヘラ磨き調整が施され、内外面ともに黒色処理される。

本遺構の時期は、出土遺物から古墳時代後期と推測される。

SK-044（第21図、第３表）

6H-72グリッドに所在する。SI-003a・bに隣接するが、遺物出土状況の記録しかないため、正確な規模等は不明である。平面形は楕円形で、長軸方向はN- 6°-Eと推測される。規模は長軸長89㎝・短軸長79㎝で、深さは不明である。

遺物は土師器破片が30点ほど出土した。図示できたものはないが、内外面が赤彩される深い椀形の杯や、外面がヘラナデされる球形の胴部をもつ甕の破片などが見られる。

本遺構の時期は、破片資料ではあるが出土遺物から古墳時代中期と推測される。

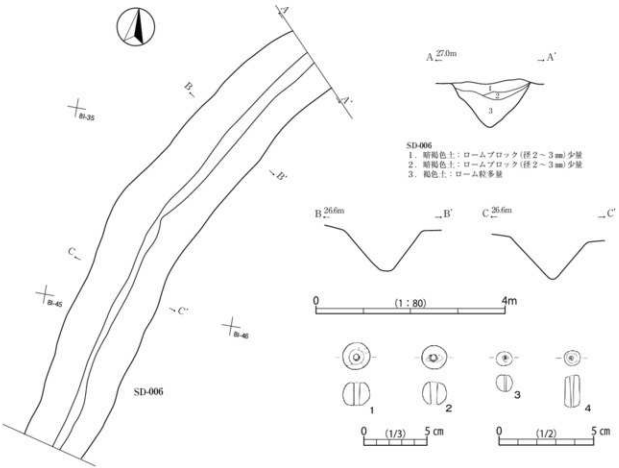
３　溝

SD-006（第33図、第４・10表、図版15・35）

8I-25・26・35・36・45グリッドに所在する。北東から南西に延びる溝で、危険防止のために表土除去しなかった範囲に続いている。走行方向はN-24°-Eである。調査できた範囲での総延長は9.7mで、幅1.30m～1.75m・深さ0.58m～0.89mである。断面形はV字状である。

図示できた遺物は土玉３点と管玉１点である。図示したもののほかには土師器杯や甕の小破片が出土している。１～３は土玉である。全て片側から穿孔される。１は穿孔した両面を削り平坦面を作り出している。４は土製の管玉である。外面はナデ成形で、片側から穿孔される。３・４は１・２に比べて小形であることから、装飾品として使用されたと推測される。

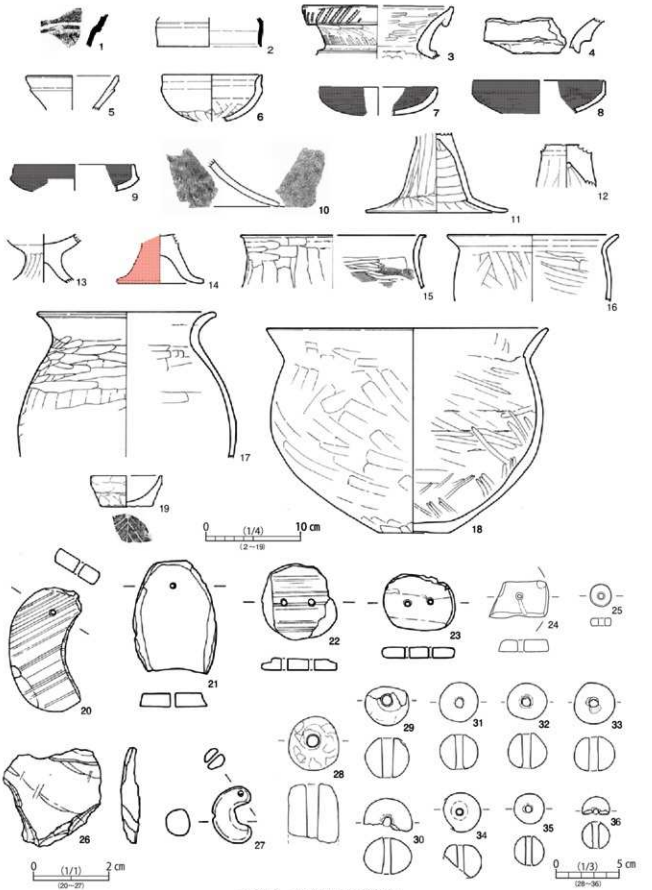
本遺構の時期は、出土遺物から古墳時代後期と推測される。



第33図　SD-006

4　遺構外出土の遺物（第34図、第９～11表、図版35・36）

ここでは、グリッド出土遺物と他の時代の遺構中に混入したと判断された遺物について記載する。１・２は須恵器である。１は甕の口縁部下部～頸部である。口縁部下端に沈線が引かれ、それを挟んだ口縁部と頸部に櫛描き波状文が施される。内外面には自然釉が見られる。２は蓋の口縁部～体部である。口縁部の体部に対する比率が大きく、口唇部はシャープな作りである。１・２ともにTK208型式と見られる。３・４は土師器壺で、いずれも複合口縁である。３は口縁部～頸部で、口縁部外面には櫛歯状工具を押圧した文様が施される。頸部には断面三角形の突帯が付けられる。内外面ともに細かなヘラ磨き調整が施される。いわゆる「パレススタイル壺」を模倣したものと推測される。４は口縁部付近の破片である。口縁部は頸部から大きく外反する。胎土は白色で外来系土器と推測される。５は有段口縁の小形壺である。口縁部はナデ、それ以外はヘラナデ調整が施される。６～９は土師器杯である。６は深い椀形で、口縁部は短く外反して立ち上がる。７は扁平な椀形である。内外面ともにヘラ磨き調整が施され、黒色処理される。８・９は須恵器模倣杯である。８は口縁部が垂直気味に立ち上がり、９はやや内傾する。いずれも内外面ともに丁寧なヘラ磨き調整が施され、黒色処理される。10は土師器器台の裾部破片である。裾部は大きく「ハ」の字状に開く。内面は粗いヘラ磨き、外面はハケ調整が施される。11～14は土師器高杯の脚部である。11は脚柱部が中膨らみした円柱状で、裾部が強く屈曲して開く屈曲脚である。脚柱部内外面はヘラナデ調整



第34図　遺構外出土の遺物

が施される。12は内外面ともにヘラナデ調整が施され、わずかに残る杯部内面は赤彩される。13・14は脚部が短く「ハ」の字状に開くものである。14は裾部が短く強く外反する。外面は赤彩される。15～18は土師器甕である。15は口縁部～胴部上半で、口縁部は頸部の屈曲がほとんどなく直立気味に立ち上がり、口唇部は摘み上げるように強く外反する。内面はハケ成形の後、横方向のヘラナデ調整が施される。胴部外面は縦方向のヘラナデ成形、頸部～口縁部は横方向のヘラナデ調整が施される。器表面は被熱し一部白く変色している。16は口縁部～胴部で、胴部はほとんど張らず、口縁部は「く」の字状に屈曲する。内外面はヘラナデである。17は長胴の甕で、口縁部は外反する。口縁部内面に輪積痕が見られる。内面は横方向のナデ調整が施される。外面は縦方向のヘラ削りの後、横方向のナデ調整が施される。18は器高に対して口径が大きい甕で、口縁部が「く」の字状に屈曲する。内面の口縁部と体部の境に輪積痕が見られる。外面はヘラナデ、内面はヘラナデの後、粗いヘラ磨き調整が施される。19はミニチュア土器で手捏ね成形である。外面は輪積痕、底部は木葉痕が見られる。

20～26は石製品である。20は滑石製の勾玉である。屈曲は緩やかで、厚さは薄く断面形は扁平である。表裏面・側面は研磨痕が筋状に残る。21は滑石製の剣形模造品である。剣先部分が欠損する。表裏面・側面は平滑であるが、角は大部分が欠損している。22～24は滑石製の有孔円板である。22・23は２か所に穿孔される。22は左右の側面が欠損する。表裏面に研磨痕が筋状に残り、側面の成形もやや粗い。23は上下の側面が欠損する。表裏面は比較的平滑で、側面も22と比べると平滑である。24は右側の側面と孔が１つだけ遺存し、大部分が欠損する。表裏面・側面は平滑である。25は滑石製の臼玉である。正面形はほぼ正円で、断面は扁平である。中央に穿孔が施される。表裏面・側面は平滑である。26は滑石の剥片である。成形痕が見られないことから、未成品と推測される。

27～36は土製品である。27は勾玉である。表面から孔が穿たれる。屈曲部にしわが寄り外側に亀裂が見られることから、紐状の粘土を折り曲げて成形したと推測される。28は円筒形の管状土錘である。粗いナデが施される。29～36は土玉で29・30はやや大形、31～34は中形、35・36は小形である。29は片側から穿孔した後、孔の両端を調整する。30は上下から穿孔したと推測される。31～33・35・36は上部から穿孔される。35は穿孔した後、孔の両端を調整する。34は摩滅が著しく調整等は不明である。

第９表　古墳時代土器観察表

（　）推定値　＜　＞現存値

遺構	掲載番号	種類	器種	法量(cm)	遺存度	胎土	色調・焼成	技法	備考
SI-001	第208図・1	土師器	杯	口径（13.4） 底径 － 器高 ＜4.7＞	30%	石英粒・白色砂粒	内面 褐色(7.5YR4/3) 外面 にぶい赤褐色(5YR4/4) 焼成 良好	内面 ナデ ヘラ磨き 外面 ナデ ヘラ磨き 底外面 ヘラ磨き	内外面黒色処理
	第208図・2	土師器	杯	口径 14.9 底径 － 器高 5.1	40%	白色砂粒	内面 にぶい褐色(7.5YR5/3) 外面 都色(7.5YR6/6) 焼成 良好	内面 ナデ ヘラ磨き 外面 ナデ ヘラ磨き 底外面 ヘラナデ	内外面黒色処理
	第208図・3	土師器	杯	口径（16.0） 底径 － 器高 5.0	70%	石英粒・白色砂粒	内面 にぶい黄褐色(10YR5/3) 外面 都色(10YR6/3) 焼成 良好	内面 ナデ ヘラ磨き 外面 ナデ ヘラ磨き 底外面 ヘラ磨き	内外面黒色処理
	第208図・4	土師器	杯	口径（18.0） 底径 － 器高 7.7	55%	石英粒・白色砂粒	内面 黒色(7.5YR2/1) 外面 にぶい褐色(7.5YR5/4) 焼成 良好	内面 ナデ ヘラ磨き 外面 ナデ ヘラ磨き 底外面 ヘラ磨き	内外面黒色処理
	第208図・5	土師器	杯	口径（12.4） 底径 － 器高 4.0	60%	雲母粒・小礫	内面 褐色(7.5YR4/4) 外面 にぶい褐色(7.5YR5/4) 焼成 良好	内面 ナデ ヘラ磨き 外面 ナデ ヘラ磨き 底外面 ヘラ磨き	内外面黒色処理
	第208図・6	土師器	杯	口径 12.7 底径 － 器高 4.0	90%	雲母粒・砂粒	内面 黒褐色(7.5YR3/1) 外面 にぶい褐色(7.5YR5/4) 焼成 良好	内面 ナデ ヘラ磨き 外面 ナデ ヘラ磨き 底外面 ヘラ磨き	内外面黒色処理
	第208図・7	土師器	杯	口径 （12.3） 底径 － 器高 ＜3.7＞	15%	石英粒・白色砂粒	内面 にぶい黄褐色(10YR5/3) 外面 褐灰色(10YR4/1) 焼成 良好	内面 ナデ ヘラ磨き 外面 ナデ ヘラ磨き 底外面 －	内外面黒色処理
	第208図・8	土師器	杯	口径 （12.6） 底径 － 器高 ＜3.6＞	35%	赤色粒子・白色砂粒	内面 都色(7.5YR6/6) 外面 都色(7.5YR6/6) 焼成 良好	内面 ナデ ヘラ磨き 外面 ナデ ヘラ磨き 底外面 －	
	第208図・9	土師器	甕	口径 （22.6） 底径 － 器高 ＜7.2＞	口縁部～胴部上半	黒色小石・白色砂粒	内面 都色(5YR6/6) 外面 にぶい都色(5YR6/4) 焼成 良好	内面 ナデ ヘラナデ 外面 ナデ ヘラ磨き 底外面 －	
	第208図・10	土師器	甕	口径 （15.0） 底径 － 器高 ＜7.9＞	口縁部～胴部	石英粒・小石	内面 明赤褐色(5YR5/6) 外面 明赤褐色(5YR5/6) 焼成 良好	内面 荒れている 外面 荒れている 底外面 －	
	第208図・11	土師器	甕	口径 16.6 底径 － 器高 ＜13.1＞	口縁部	白色砂粒・黒色砂粒	内面 都色(5YR6/6) 外面 赤褐色(5YR4/8) 焼成 良好	内面 ナデ 外面 ヘラ磨き 底外面 －	

遺構	掲載番号	種別	器種	法量(cm)	遺存度	胎土	色調・焼成	技法	備考
SI-001	第202図 -12	土師器	甕	口径 -(27.0) 底径 - 器高 <18.2>	口縁部～側部中位	石英粒・小石	内面 橙色(5YR6/6) 外面 明赤褐色(5YR5/6) 断面 良好	内面 ナデ ヘラヨウチ 外面 ナデ ヘラ磨き ヘラ削り 底外面 -
SI-003 a-b	第221図 -1	土師器	杯	口径 15.3 底径 5.4 器高 4.7	80%	雲母粒・小石	内面 橙色(5YR6/6) 外面 にぶい橙色(7.5YR6/4) 断面 良好	内面 ナデ ヘラナデ 外面 ナデ ヘラナデ 底外面 ヘラナデ	底部外面も含めの内外面赤彩
	第221図 -2	土師器	高杯	口径 - 底径 14.0 器高 <8.2>	脚部	雲母粒・黒色小石・白色小石	内面 橙色(5YR6/6) 外面 橙色(5YR6/6) 断面 良好	内面 ヘラ削り ヘラナデ ナデ 外面 ヘラナデ ナデ 底外面 -	外面被熱し、器面荒れている
	第221図 -3	土師器	高杯	口径 - 底径 13.3 器高 <8.2>	脚部85%	石英粒・雲母粒	内面 灰褐色(10YR6/2) 外面 浅黄橙色(7.5YR8/4) 断面 良好	内面 ナデ ヘラナデ ナデ 外面 ヘラナデ ナデ 底外面 -	外面赤彩
	第221図 -4	土師器	甕	口径 - 底径 - 器高 <5.2>	口縁部～脚部	石英粒・小石	内面 にぶい黄橙色(10YR6/3) 外面 橙色(7.5YR6/6) 断面 良好	内面 ナデ ヘラナデ ナデ 外面 ナデ ヘラナデ 底外面 -	櫛合口縁
	第221図 -5	土師器	甕	口径 -(16.0) 底径 - 器高 <4.7>	口縁部～脚部20%	石英粒・雲母粒・小礫	内面 橙色(5YR6/6) 外面 橙色(5YR6/6) 断面 良好	内面 ヘラナデ ハケ ナデ 外面 ナデ ヘラ削り 底外面 -	
	第221図 -6	土師器	甕	口径 - 底径 6.4 器高 <11.6>	側部中位～底部	石英粒・雲母粒・小石	内面 褐色(7.5YR4/3) 外面 にぶい橙色(7.5YR6/4) 断面 良好	内面 ヘラナデ 外面 ヘラ削り 底外面 ヘラ削り	外面被熱し、器面荒れている 外面スス付着
	第221図 -7	土師器	甕	口径 - 底径 4.1 器高 <2.0>	底部	石英粒・白色砂粒	内面 褐色(7.5YR5/4) 外面 赤褐色(5YR4/6) 断面 良好	内面 ヘラナデ 外面 ヘラ削り 底外面 ヘラ削り	
	第221図 -8	土師器	甕	口径 - 底径 5.7 器高 <3.2>	底部	石英粒・小石	内面 にぶい橙色(7.5YR6/4) 外面 明赤褐色(5YR5/6) 断面 良好	内面 ヘラナデ 外面 ヘラナデ 底外面 木葉痕	
	第221図 -9	土師器	甕	口径 - 底径 4.8 器高 <2.0>	底部	雲母粒・白色砂粒	内面 橙色(5YR6/8) 外面 橙色(5YR6/8) 断面 良好	内面 ヘラナデ 外面 ヘラ削り 底外面 木葉痕	底部外面中央凹成
SI-005	第223図 -1	土師器	甕	口径 - 底径 - 器高 <5.1>	口縁部～脚部	石英粒・赤色砂粒	内面 にぶい灰黄褐色(10YR4/2) 外面 にぶい灰黄褐色(10YR4/2) 断面 良好	内面 ヘラナデ ナデ 外面 ヘラナデ ナデ 底外面 -	櫛合口縁
	第223図 -2	土師器	甕	口径 - 底径 (10.0) 器高 <3.6>	底部	石英粒・赤色砂粒	内面 赤褐色(5YR4/6) 外面 明赤褐色(5YR5/6) 断面 良好	内面 ヘラナデ 外面 ヘラナデ 底外面 ヘラナデ	
	第223図 -3	土師器	甕	口径 - 底径 4.9 器高 <2.3>	底部	白色砂粒・小石	内面 灰褐色(5YR4/2) 外面 にぶい赤褐色(5YR5/4) 断面 良好	内面 ナデ 外面 ヘラナデ 底外面 ナデ	
SI-006	第224図 -1	土師器	甕	口径 - 底径 - 器高 <23.7>	口縁部～側部下半	石英粒・雲母粒・砂粒	内面 橙色(7.5YR6/6) 外面 にぶい橙色(7.5YR6/3) 断面 良好	内面 ヘラナデ ナデ 外面 ナデ ヘラ削り 底外面 -	胴部内面にススト付着
SI-013	第226図 -1	土師器	杯	口径 (13.8) 底径 - 器高 3.9	25%	白色砂粒	内面 灰褐色(7.5YR4/2) 外面 にぶい橙色(7.5YR5/4) 断面 良好	内面 ヘラ磨き 外面 ヘラナデ ヘラ磨き 底外面 -	内外面黒色処理
	第226図 -2	土師器	甕	口径 - 底径 (6.2) 器高 <6.0>	底部	白色砂粒・小石	内面 にぶい赤褐色(5YR5/3) 外面 明褐色(5YR5/6) 断面 良好	内面 ヘラナデ ヘラ磨き 外面 ヘラ削り ヘラ磨き 底外面 ヘラ削り	
SI-014	第228図 -1	土師器	杯	口径 (15.8) 底径 - 器高 <3.0>	口縁部～体部	石英粒・小石・雲母	内面 にぶい橙色(7.5YR6/4) 外面 にぶい橙色(7.5YR6/4) 断面 良好	内面 ヘラナデ 外面 ヘラナデ 底外面 -	内外面赤彩
	第228図 -2	土師器	杯	口径 (12.4) 底径 - 器高 4.0	30%	白色砂粒・雲母	内面 赤褐色(2.5YR4/6) 外面 にぶい赤褐色(5YR5/4) 断面 良好	内面 ヘラナデ 外面 ヘラ削り ナデ 底外面 -	内外面赤彩
	第228図 -3	土師器	杯	口径 (13.2) 底径 - 器高 4.1	20%	白色砂粒・小石	内面 明褐色(5YR5/6) 外面 赤褐色(5YR4/6) 断面 良好	内面 ヘラナデ ヘラ磨き 外面 ヘラ削り ヘラナデ ヘラ磨き 底外面 -	
SI-015	第228図 -1	土師器	壺	口径 -(8.0) 底径 - 器高 <3.2>	側面下位～底部	白色砂粒・白小石	内面 明褐色(5YR5/6) 外面 赤褐色(5YR4/6) 断面 良好	内面 ヘラナデ 外面 ヘラ削り 底外面 ヘラ削り	
SI-017	第227図 -1	土師器	杯	口径 (13.9) 底径 - 器高 <3.6>	30%	石英粒・雲母	内面 明褐色(7.5YR3/2) 外面 褐色(7.5YR4/4) 断面 良好	内面 ヘラナデ 外面 ヘラナデ 底外面 -	内外面黒色処理
	第227図 -2	土師器	杯	口径 (13.8) 底径 - 器高 <3.4>	20%	雲母	内面 にぶい褐色(7.5YR5/3) 外面 にぶい褐色(7.5YR5/3) 断面 良好	内面 ヘラ磨き 外面 ヘラナデ ヘラ磨き 底外面 ヘラ削り	内外面黒色処理
	第227図 -3	土師器	杯	口径 (12.6) 底径 - 器高 4.1	50%	石英粒・雲母	内面 にぶい橙色(7.5YR7/4) 外面 にぶい橙色(7.5YR6/3) 断面 良好	内面 ヘラナデ ヘラ磨き 外面 ヘラ削り ヘラナデ ヘラ磨き 底外面 -	
	第227図 -4	土師器	杯	口径 (13.6) 底径 - 器高 <3.6>	20%	石英粒・雲母	内面 橙色(7.5YR6/6) 外面 にぶい黄橙色(10YR6/4) 断面 良好	内面 ヘラ磨き 外面 ヘラナデ 底外面 -	
	第227図 -5	土師器	杯	口径 (11.0) 底径 - 器高 <3.5>	20%	雲母	内面 にぶい黄橙色(10YR5/3) 外面 にぶい黄橙色(10YR4/3) 断面 良好	内面 ヘラ磨き 外面 ヘラ削り ヘラナデ 底外面 -	内外面黒色処理
	第227図 -6	土師器	甕	口径 - 底径 9.2 器高 13.0	40%	石英粒・小石	内面 にぶい橙色(7.5YR6/4) 外面 にぶい黄橙色(7.5YR7/8) 断面 良好	内面 ヘラ削り ヘラ磨き 外面 ヘラ削り ヘラ磨き 底外面 ヘラナデ	
SI-018	第228図 -1	土師器	杯	口径 13.2 底径 - 器高 4.2	40%	石英粒・雲母・小石	内面 にぶい橙色(7.5YR7/4) 外面 にぶい橙色(7.5YR6/3) 断面 良好	内面 ヘラナデ ヘラ磨き 外面 ヘラ削り ヘラナデ 底外面 -	内外面黒色処理
	第228図 -2	土師器	杯	口径 (14.0) 底径 - 器高 3.7	30%	石英粒・雲母・小石	内面 灰褐色(7.5YR4/1) 外面 褐色(7.5YR6/6) 断面 良好	内面 ヘラナデ ヘラ磨き 外面 ヘラ削り ヘラナデ 底外面 -	内面黒色処理
	第228図 -3	土師器	杯	口径 12.4 底径 - 器高 4.4	35%	白色砂粒・雲母	内面 黒褐色(7.5YR3/2) 外面 灰褐色(7.5YR4/2) 断面 良好	内面 ヘラナデ ヘラ磨き 外面 ヘラ削り ヘラナデ 底外面 -	内外面黒色処理
	第228図 -4	土師器	杯	口径 12.6 底径 - 器高 3.8	75%	黒色砂粒・雲母	内面 褐色(7.5YR6/6) 外面 にぶい橙色(7.5YR6/4) 断面 良好	内面 ヘラナデ ヘラ磨き 外面 ヘラ削り ヘラナデ ヘラ磨き 底外面 -	
	第228図 -5	土師器	杯	口径 12.4 底径 - 器高 4.9	85%	雲母	内面 にぶい橙色(7.5YR6/4) 外面 褐色(7.5YR6/6) 断面 良好	内面 ヘラナデ ヘラ磨き 外面 ヘラ削り ヘラナデ 底外面 -	
	第228図 -6	土師器	杯	口径 (17.6) 底径 - 器高 8.0	45%	石英粒・雲母	内面 にぶい橙色(7.5YR6/4) 外面 褐色(7.5YR6/6) 断面 良好	内面 ヘラナデ ヘラ磨き 外面 ヘラ削り ヘラナデ 底外面 ヘラ磨き	
	第228図 -7	土師器	甕	口径 - 底径 - 器高 <12.8>	20%	石英粒・雲母	内面 明褐色(7.5YR5/6) 外面 褐色(7.5YR6/6) 断面 良好	内面 ヘラナデ 外面 ヘラ削り ヘラナデ 底外面 -	
	第228図 -8	土師器	甕	口径 (13.2) 底径 - 器高 <3.0>	10%	石英粒	内面 褐色(7.5YR4/3) 外面 褐色(7.5YR4/3) 断面 良好	内面 ヘラナデ 外面 ヘラ削り ヘラナデ 底外面 -	
	第228図 -9	土師器	甕	口径 (13.5) 底径 - 器高 <10.0>	30%	石英粒・雲母	内面 褐色(7.5YR6/6) 外面 明褐色(7.5YR5/6) 断面 良好	内面 ヘラナデ 外面 ヘラ削り ヘラナデ 底外面 -	
	第228図 -10	土師器	甕	口径 (20.0) 底径 - 器高 <8.3>	口縁部	石英粒・雲母	内面 褐色(7.5YR7/6) 外面 褐色(7.5YR7/6) 断面 良好	内面 ヘラナデ 外面 ヘラ削り ナデ 底外面 -	
	第228図 -11	土師器	甕	口径 (16.8) 底径 - 器高 <12.2>	口縁部～側部中位	白色砂粒・石英粒	内面 褐色(7.5YR4/3) 外面 明褐色(7.5YR5/6) 断面 良好	内面 ヘラナデ 外面 ヘラ削り ヘラナデ 底外面 -	

遺構	掲載番号	種類	器種	法量(cm)	遺存度	胎土	色調・焼成	技法	備考
SI018	第29図-12	土師器	甕	口径 – 底径 9.2 器高 <23.1>	胴部～底部	石英粒・雲母・小石	内面 橙色(7.5YR6/6) 外面 褐色(7.5YR4/3) 焼成 良好	内面 ヘラナデ ヘラ削り 外面 ヘラ削り ヘラナデ 底外面 –	
	第29図-13	土師器	椀	口径 13.6 底径 – 器高 <7.6>	口縁部～体部中位	石英粒・雲母・小石	内面 にぶい黄橙色(10YR6/3) 外面 明赤褐色(5YR5/8) 焼成 良好	内面 ヘラナデ ヘラ削り ヘラナデ 外面 ヘラ削り ヘラナデ 底外面 –	
	第29図-14	土師器	ミニチュア	口径 6.6 底径 5.5 器高 3.3	70%	石英粒	内面 にぶい褐色(7.5YR5/4) 外面 橙色(7.5YR6/6) 焼成 良好	内面 ヘラナデ 外面 ヘラナデ 底外面 ナデ	
	第29図-15	土師器	ミニチュア	口径 – 底径 6.0 器高 3.0	50%	雲母	内面 にぶい黄橙色(10YR6/4) 外面 にぶい黄橙色(10YR6/4) 焼成 良好	内面 ヘラナデ 外面 ヘラナデ 底外面 ナデ	
SI019	第29図-1	土師器	杯	口径 (17.3) 底径 – 器高 <3.7>	口縁部～体部	石英粒・雲母	内面 明褐色(7.5YR5/6) 外面 にぶい黄橙色(7.5YR5/4) 焼成 良好	内面 ヘラ削り 外面 ヘラナデ 底外面 –	
	第29図-2	土師器	杯	口径 (11.9) 底径 – 器高 5.0	40%	石英粒・雲母	内面 赤褐色(5YR4/6) 外面 黒褐色(5YR2/2) 焼成 良好	内面 ヘラナデ ヘラ削り 外面 ヘラ削り ヘラナデ ヘラ削り 底外面 ナデ	内外面赤彩
	第29図-3	土師器	杯	口径 12.4 底径 – 器高 4.3	100%	雲母・小石	内面 黒褐色(7.5YR7/8) 外面 橙色(7.5YR7/6) 焼成 良好	内面 ヘラ削り 外面 ヘラ削り ヘラ削り 底外面 –	口縁部～底部にかけて亀裂
	第29図-4	土師器	杯	口径 – 底径 – 器高 <3.6>	25%	石英粒	内面 にぶい橙色(7.5YR5/4) 外面 にぶい橙色(7.5YR5/3) 焼成 良好	内面 ヘラナデ ヘラ削り 外面 ヘラナデ ヘラ削り 底外面 –	内外面黒色処理
	第29図-5	土師器	杯	口径 (13.2) 底径 – 器高 <4.9>	20%	雲母	内面 にぶい橙色(7.5YR6/4) 外面 橙色(7.5YR7/6) 焼成 良好	内面 ヘラナデ ヘラ削り 外面 ヘラナデ ヘラ削り 底外面 –	内外面赤彩
	第29図-6	土師器	杯	口径 (23.0) 底径 – 器高 9.5	40%	石英粒・雲母	内面 にぶい橙色(7.5YR6/4) 外面 にぶい橙色(7.5YR5/4) 焼成 良好	内面 ヘラナデ ヘラ削り 外面 ヘラ削り ヘラナデ 底外面 –	
	第29図-7	土師器	甕	口径 (22.6) 底径 – 器高 <14.2>	口縁部～胴部	雲母	内面 橙色(7.5YR7/6) 外面 にぶい黄橙色(10YR6/4) 焼成 良好	内面 ヘラナデ 外面 ヘラナデ 底外面 –	
	第29図-8	土師器	甕	口径 (13.2) 底径 – 器高 <6.5>	口縁部～胴部	石英粒	内面 にぶい橙色(7.5YR5/3) 外面 橙色(7.5YR4/4) 焼成 良好	内面 ヘラナデ ハケ 外面 ヘラナデ ハケ 底外面 –	
	第29図-9	土師器	甕	口径 – 底径 (13.6) 器高 <3.5>	胴部～底部	石英粒	内面 にぶい黄橙色(10YR6/4) 外面 にぶい黄橙色(10YR5/3) 焼成 良好	内面 ヘラナデ 外面 ヘラ削り ヘラナデ 底外面 ナデ	
	第29図-10	須恵器	甕	口径 – 底径 – 器高 <10.7>	胴部	石英粒	内面 灰色(10Y4/1) 外面 灰色(10Y5/1) 焼成 良好	内面 当て具痕 外面 ナデ 底外面 –	
	第29図-11	土師器	椀	口径 (26.7) 底径 – 器高 <13.0>	口縁部～胴部	石英粒	内面 明褐色(7.5YR5/6) 外面 橙色(7.5YR4/4) 焼成 良好	内面 ヘラナデ 外面 ヘラ削り ヘラナデ 底外面 –	
	第29図-12	土師器	ミニチュア	口径 (10.2) 底径 (6.1) 器高 <5.8>	25%	雲母・小石	内面 橙色(7.5YR7/6) 外面 にぶい橙色(7.5YR7/4) 焼成 良好	内面 ヘラナデ ヘラ削り 外面 ヘラナデ 底外面 未調整	
	第30図-1	土師器	埦	口径 – 底径 – 器高 <4.8>	40%	白色砂粒・石英粒	内面 にぶい橙色(7.5YR6/4) 外面 明褐色(7.5YR5/6) 焼成 良好	内面 見れている 外面 – 底外面 未調整	被熱
	第30図-2	土師器	杯	口径 – 底径 – 器高 <4.8>	80%	石英粒・雲母	内面 にぶい黄橙色(10YR7/4) 外面 黒褐色(10YR3/2) 焼成 良好	内面 ヘラナデ ヘラ削り 外面 ヘラナデ ヘラ削り 底外面 ヘラナデ	
	第30図-3	土師器	杯	口径 11.3 底径 – 器高 4.6	80%	石英粒	内面 にぶい橙色(7.5YR7/4) 外面 橙色(7.5YR7/3) 焼成 良好	内面 ヘラナデ ヘラ削り 外面 ヘラナデ ヘラ削り 底外面 –	内外面黒色処理
	第30図-4	土師器	杯	口径 13.6 底径 – 器高 4.5	85%	雲母	内面 にぶい橙色(7.5YR5/4) 外面 橙色(7.5YR6/6) 焼成 良好	内面 ヘラナデ ヘラ削り 外面 ヘラナデ ヘラ削り 底外面 –	内外面黒色処理
	第30図-5	土師器	杯	口径 13.2 底径 – 器高 4.5	80%	石英粒・雲母・小石	内面 にぶい橙色(7.5YR6/4) 外面 橙色(7.5YR6/5) 焼成 良好	内面 ヘラナデ ヘラ削り 外面 ヘラナデ ヘラ削り 底外面 –	
	第30図-6	土師器	杯	口径 (13.0) 底径 – 器高 <4.0>	45%	小石	内面 橙色(7.5YR4/3) 外面 にぶい橙色(7.5YR5/3) 焼成 良好	内面 ヘラナデ ヘラ削り 外面 ヘラナデ ヘラ削り 底外面 –	内外面黒色処理
	第30図-7	土師器	杯	口径 (11.5) 底径 – 器高 <3.3>	30%	雲母	内面 にぶい黄橙色(10YR5/4) 外面 にぶい黄橙色(10YR5/3) 焼成 良好	内面 ヘラナデ ヘラ削り 外面 ヘラナデ ヘラ削り 底外面 –	内外面黒色処理
	第30図-8	土師器	杯	口径 12.2 底径 – 器高 <4.2>	50%	雲母	内面 橙色(7.5YR6/6) 外面 にぶい橙色(7.5YR6/4) 焼成 良好	内面 ヘラナデ ヘラ削り 外面 ヘラナデ ヘラ削り 底外面 –	内外面黒色処理
	第30図-9	土師器	杯	口径 11.6 底径 – 器高 5.2	98%	雲母	内面 橙色(7.5YR4/4) 外面 にぶい橙色(7.5YR5/4) 焼成 良好	内面 ヘラナデ ヘラ削り 外面 ヘラナデ ヘラ削り 底外面 –	内外面黒色処理
	第30図-10	土師器	杯	口径 – 底径 – 器高 <3.4>	50%	雲母	内面 にぶい橙色(7.5YR5/3) 外面 灰褐色(7.5YR4/2) 焼成 良好	内面 ヘラ削り 外面 ヘラナデ ヘラ削り 底外面 –	内外面黒色処理
	第30図-11	土師器	甕	口径 (19.6) 底径 – 器高 <4.7>	口縁部～胴部	石英粒・雲母	内面 灰褐色(7.5YR6/2) 外面 にぶい橙色(7.5YR6/4) 焼成 良好	内面 ヘラナデ 外面 ヘラナデ 底外面 –	
	第30図-12	土師器	甕	口径 – 底径 7.5 器高 <3.4>	底部～胴部下位	石英粒・雲母	内面 赤褐色(5YR4/6) 外面 明赤褐色(5YR5/6) 焼成 良好	内面 ヘラ削り ヘラナデ 外面 ヘラ削り ヘラナデ 底外面 ヘラ削り ヘラナデ	
	第30図-13	土師器	ミニチュア	口径 (7.0) 底径 (6.0) 器高 2.8	30%	雲母粒	内面 橙色(7.5YR5/4) 外面 橙色(7.5YR6/6) 焼成 良好	内面 ナデ 外面 ナデ 底外面 未調整	
SI021	第32図-1	土師器	甕	口径 – 底径 47 器高 –	底部	石英粒・白色砂粒	内面 灰褐色(7.5YR4/2) 外面 にぶい橙色(7.5YR6/4) 焼成 良好	内面 ヘラナデ 外面 ヘラ削り 底外面 ヘラナデ	
SK-021	第32図-1	土師器	杯	口径 (12.6) 底径 – 器高 <4.2>	口縁部～体部25%	石英粒・雲母粒・白色砂粒	内面 にぶい橙色(7.5YR7/3) 外面 橙色(7.5YR6/6) 焼成 良好	内面 ヘラ削り 外面 ヘラ削り 底外面 –	内外面黒色処理
遺構外	第34図-1	須恵器	鐘	口径 – 底径 – 器高 –	胴部	白色砂粒	内面 灰オリーブ色(5Y4/2) 外面 灰オリーブ色(5Y4/2) 焼成 良好	内面 – 外面 – 底外面 –	鐘鋳き流鉄文 内外面白色釉 610-53－1
	第34図-2	須恵器	蓋	口径 (11.1) 底径 – 器高 <3.1>	口縁部～体部	白色砂粒・小石	内面 明オリーブ色(5GY4/1) 外面 灰色(5Y4/1) 焼成 良好	内面 ロクロナデ 外面 ロクロナデ 底外面 –	SI-007-1
	第34図-3	土師器	甕	口径 (16.6) 底径 – 器高 <3.6>	口縁部～胴部	石英粒・雲母粒・小石	内面 にぶい橙色(7.5YR5/3) 外面 明褐色(7.5YR5/6) 焼成 良好	内面 ヘラナデ ヘラ削り 外面 ヘラナデ ヘラ削り 底外面 –	口縁部外面鋸歯状沈文による押印 胴部断面三角形の内容 7G-29-2
	第34図-4	土師器	甕	口径 – 底径 – 器高 –	5%	白色砂粒・雲母	内面 にぶい橙色(10YR6/2) 外面 にぶい黄橙色(10YR5/3) 焼成 良好	内面 ヘラナデ 外面 ヘラ削り ヘラナデ 底外面 –	SI-012-4
	第34図-5	土師器	甕	口径 (9.8) 底径 – 器高 <3.7>	口縁部～胴部	石英粒・白色砂粒	内面 にぶい橙色(7.5YR5/4) 外面 にぶい橙色(7.5YR5/3) 焼成 良好	内面 ナデ ヘラナデ 外面 ヘラナデ 底外面 –	7G-09-1
	第34図-6	土師器	杯	口径 (10.6) 底径 – 器高 <5.0>	30%	白色砂粒・砂粒	内面 にぶい橙色(5YR6/4) 外面 にぶい橙色(7.5YR6/4) 焼成 良好	内面 ナデ ヘラナデ 外面 ナデ ヘラナデ ヘラ削り 底外面 –	SK-018-3

遺構	掃図番号	種別	器種	法量(cm)	遺存度	胎土	色調・焼成	技法	備考
道構外	第34図-7	土師器	杯	口径（124） 底径 － 器高 <3.0>	20%	白色砂粒・石英粒	内面 黒褐色(7.5YR3/1) 外面 褐色(7.5YR4/3) 焼成 良好	内面 ヘラナデ ヘラ磨き 外面 ヘラ削り ヘラ磨き 底外面 －	内外面黒色処理 SX-005-4
	第34図-8	土師器	杯	口径（140） 底径 － 器高 <3.5>	口縁部～体部	白色砂粒	内面 にぶい赤褐色(5YR5/4) 外面 にぶい橙色(7.5YR6/4) 焼成 良好	内面 ヘラナデ ヘラ磨き 外面 ヘラナデ ヘラ磨き 底外面 －	内外面黒色処理 SI-016-4
	第34図-9	土師器	杯	口径（126） 底径 － 器高 <2.6>	口縁部～体部	雲母	内面 にぶい赤褐色(5YR4/3) 外面 にぶい橙色(7.5YR6/4) 焼成 良好	内面 ヘラナデ ヘラ磨き 外面 ヘラ削り ヘラナデ 底外面 －	内外面黒色処理 SI-016-21
	第34図-10	土師器	器台	口径 － 底径 － 器高 <3.0>	脚部10%	微細砂粒	内面 橙色(7.5YR6/6) 外面 橙色(7.5YR6/6) 焼成 良好	内面 ヘラナデ 外面 ハケ 底外面 －	SI-019-1
	第34図-11	土師器	高杯	口径 － 底径（15.0） 器高 <8.4>	脚部	石英粒・白色砂粒・砂粒	内面 明赤褐色(5YR5/6) 外面 明赤褐色(5YR5/6) 焼成 良好	内面 ナデ ヘラナデ 外面 ヘラナデ ナデ 底外面 －	SK-014-5
	第34図-12	土師器	高杯	口径 － 底径 － 器高 <4.5>	脚部	雲母粒・白色砂粒・砂粒	内面 にぶい橙色(5YR7/4) 外面 にぶい橙色(5YR7/4) 焼成 良好	内面 ヘラナデ 外面 ヘラナデ 底外面 －	杯部内面赤彩 SK-018-4
	第34図-13	土師器	高杯	口径 － 底径 － 器高 <3.2>	杯部～脚部	白色砂粒・砂粒	内面 黒褐色(5YR3/1) 外面 明赤褐色(2.5YR5/6) 焼成 良好	内面 ヘラナデ ナデ 外面 ヘラナデ 底外面 －	6G-46-1
	第34図-14	土師器	高杯	口径 － 底径（9.1） 器高 <3.2>	脚部50%	石英粒・雲母粒・砂粒	内面 にぶい黄褐色(10YR5/2) 外面 明赤褐色(5YR5/3) 焼成 良好	内面 ヘラナデ 外面 ヘラナデ 底外面 －	外面赤彩 SK-050-4
	第34図-15	土師器	甕	口径（19.6） 底径 － 器高 <5.6>	口縁部～側部上位	白色砂粒・雲母	内面 にぶい黄橙色(10YR7/3) 外面 にぶい橙色(7.5YR6/4) 焼成 良好	内面 ハケ ヘラナデ 外面 ヘラ削り ヘラナデ 底外面 －	SI-012-3、SK-056-2
	第34図-16	土師器	甕	口径（18.2） 底径 － 器高 <7.1>	口縁部～側部上位	石英粒・雲母粒・白色砂粒	内面 褐灰色(7.5YR4/1) 外面 にぶい橙色(7.5YR6/3) 焼成 良好	内面 ナデ ヘラナデ 外面 ナデ ヘラ削り 底外面 －	SK-014-4
	第34図-17	土師器	甕	口径 18.9 底径 － 器高 <15.5>	口縁部～側部中位	石英粒・雲母	内面 にぶい橙色(7.5YR6/4) 外面 橙色(7.5YR6/6) 焼成 良好	内面 ヘラナデ 外面 ヘラ削り ヘラナデ 底外面 －	SX-005-4
	第34図-18	土師器	甕	口径（20.6） 底径 7.3 器高 21.7	60%	石英粒	内面 にぶい橙色(7.5YR7/4) 外面 橙色(7.5YR6/6) 焼成 良好	内面 ヘラナデ ヘラ磨き 外面 ヘラ削り ヘラナデ 底外面 ヘラナデ	SK-054-4・7・8・10～16
	第34図-19	土師器	ミニチュア	口径（7.6） 底径（3.6） 器高 3.3	30%	雲母	内面 橙色(7.5YR6/6) 外面 にぶい橙色(7.5YR6/4) 焼成 良好	内面 ヘラナデ 外面 ヘラナデ 底外面 未調整	7H-20-1

第10表　古墳時代土製品観察表

＜　＞現存値

遺構番号	掃図番号	遺物番号	種類	法量：mm　g 最大長	最大幅	最大厚	孔径	重量	色調	備考
SI-001	第20図-13	22.23,25	支脚	<128.0>	－	－	－	－	にぶい褐色(7.5YR5/3)	
SI-003a・b	第22図-10	SH-001-1	土玉	36.0	32.0	－	7.0	24.53	橙色(7.5YR7/6)	
	第22図-11	B-1	土玉	<25.0>	<27.0>	－	－	<9.48>	黒色(7.5YR7/1)	
	第22図-12	A-1	土玉	<19.0>	<21.0>	－	－	<4.2>	にぶい橙色(7.5YR6/4)	
SI-006	第24図-2	1	紡錘車	<40.0>	<26.0>	14.0	－	<16.28>	にぶい橙色(7.5YR6/4)	
	第24図-3	SI-009-17	管玉	17.0	11.0	－	3.0	2.33	橙色(7.5YR6/6)	
	第24図-4	SI-009-1	土玉	36.0	32.0	－	7.0	24.53	橙色(7.5YR7/6)	
	第24図-5	SI-009-2	土玉	26.0	25.0	－	6.0	16.08	黄灰色(2.5YR4/1)	
	第24図-6	3	土玉	29.0	29.0	－	6.0	22.51	にぶい黄橙色(10YR6/4)	
	第24図-7	SI-009-5	土玉	<31.0>	<33.0>	－	<9.0>	<14.79>	にぶい黄橙色(10YR7/4)	
SI-013	第26図-3	6	支脚	<150.0>	－	－	－	－	にぶい褐色(7.5YR5/4)	
SI-014	第26図-4	5	小形土製品	<30.0>	22.0	12.0	－	<10.31>	にぶい黄橙色(10YR6/4)	
SI-018	第29図-16	3	土玉	10.0	11.0	－	2.0	1.19	黒褐色(10YR3/1)	黒色処理
SI-019	第29図-14	48	土玉	28.0	29.0	－	7.0	19.81	橙色(7.5YR6/6)	
SI-020	第30図-14	52	支脚	75.0	－	－	－	－	褐色(7.5YR4/4)	
	第30図-15	39	勾玉	21.2	14.3	10.0	1.3	2.40	にぶい黄橙色(10YR7/3)	
	第30図-16	31	土鈴	43.5	37.0	27.0	3.5～4.5	25.94	にぶい黄橙色(10YR6/4)	
	第31図-17	53	土鈴	63.0	43.0	39.0	2.0～4.5	62.75	にぶい橙色(7.5YR6/4)	
SD-006	第33図-1	1	土玉	18.0	21.0	－	4.0	8.00	橙色(7.5YR6/6)	
	第33図-2	2	土玉	18.0	19.0	－	4.5	5.50	明黄褐色(10YR7/6)	
	第33図-3	1	土玉	9.0	8.5	－	1.0	0.57	橙色(7.5YR6/6)	
	第33図-4	1	管玉	17.0	8.0	－	1.3	1.27	にぶい黄褐色(10YR5/3)	
道構外	第34図-27	7H-26-4	勾玉	15.0	10.0	－	1.3	0.77	明黄褐色(10YR6/6)	
	第34図-28	SI-016-5	管状土錘	<46.5>	41.0	－	8.5	<88.41>	橙色(7.5YR7/6)	
	第34図-29	SX-004-11	土玉	34.0	31.5	－	7.5	<30.74>	明黄褐色(10YR6/6)	
	第34図-30	SK-016-1	土玉	29.0	38.0	－	<6.0>	<22.5>	にぶい黄褐色(10YR5/3)	
	第34図-31	6G-51-1	土玉	28.0	30.0	－	6.0	25.00	にぶい橙色(7.5YR7/4)	
	第34図-32	6G-89-1	土玉	27.0	32.0	－	8.0	23.30	にぶい橙色(10YR7/4)	
	第34図-33	6H-53-1	土玉	27.0	32.0	－	8.0	26.53	橙色(5YR7/6)	
	第34図-34	SK-051-1	土玉	<26.0>	<29.0>	－	5.0	<16.98>	にぶい黄色(2.5YR6/3)	
	第34図-35	6H-99-1	土玉	23.0	24.0	－	5.0	13.00	にぶい赤褐色(5YR5/4)	
	第34図-36	SK-018-1	土玉	21.0	21.5	－	<5.0>	<6.18>	赤褐色(2.5YR4/6)	

第11表　古墳時代石製品観察表　　<　>現存値

遺構番号	挿図番号	遺物番号	種類	石材	法量：mm　g					備考
					最大長	最大幅	最大厚	孔径	重量	
SI-004	第20図-1	3	有孔円板	滑石(片岩)	21.0	20.0	3.3	1.5	2.48	
	第20図-2	2	棗玉	珪化木	19.0	11.5	－	2.0～3.5	1.49	
SI-014	第26図-5	4	有孔円板	滑石	－	26.0	2.0	1.5	2.86	
SI-019	第29図-13	39	有孔円板	滑石	－	26.0	2.5	1.5	3.09	
遺構外	第34図-20	SK-022-1	勾玉	滑石	33.0	19.0	4.0	1.5	5.09	
	第34図-21	7H-26-1	剣形品	滑石	<30.0>	22.0	3.5	1.5	4.41	
	第34図-22	SK-018-1	有孔円板	滑石	20.0	20.0	3.0	1.5	2.07	
	第34図-23	6G-97-1	有孔円板	滑石	15.0	19.0	3.0	1.0	2.00	
	第34図-24	SX-004-1	有孔円板	滑石	<9.7>	<16.0>	3.0	1.5	<0.91>	
	第34図-25	SX-004-5	臼玉	滑石	－	5.5	2.0	2.0	0.13	
	第34図-26	SK-019-1	剥片	滑石(片岩)	26.5	26.0	5.0	－	4.47	

第６節　奈良・平安時代の遺構と遺物

奈良・平安時代の遺構は竪穴住居跡２軒と土坑11基を検出した。２軒の竪穴住居跡は発掘調査時に柱穴だけが検出されたことから、１間×１間の掘立柱建物跡と判断し「SB」の記号を付けて調査したものであるが、検出された柱穴の規模や本遺跡ではこれら以外に掘立柱建物跡が検出されていないことなどから、竪穴住居跡の主柱穴と判断した。竪穴住居跡は主軸方向をほぼ同じにして近接している。土坑は分布に偏りがなく調査区全体に散在している。削平を受け遺存状態が良好ではない遺構が多いが、杯類を中心に多くの遺物が出土した。

１　竪穴住居跡

SB-001（第35図、第２・12表、図版16・36）

6G-87・88・97・98グリッドに所在する。北側でSI-002と、東側でSI-006と重複し、本遺構の方が新しい。カマドや床面などは検出できなかった。ピット間の芯々距離はP1とP2が2.1m、P2とP3が2.8mである。P1とP2を結んだ方向を主軸方向とするとN-28°-Wである。ピットの規模は、P1は径79cm・深さ22cm、P2は径11cm・深さ29cm、P3は径89cm・深さ31cm、P4は径93cm・深さ19cmである。

遺物は土師器小破片が主体で、図示できたものは土師器甕１点だけである。１は平底の底部である。胴部外面は筋状のヘラ磨きが施され、常総型の甕と推測される。内面と底部外面はヘラナデ調整が施される。

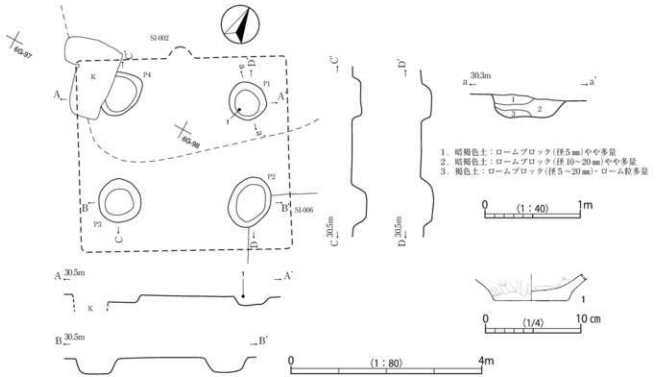
本遺構の時期は、出土遺物から奈良・平安時代と推測される。

SB-002（第36図、第２表）

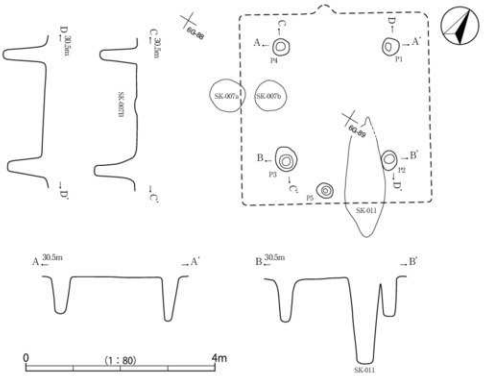
6G-78・79・88・89グリッドに所在する。カマドや床面などは検出できなかった。ピットは５基検出し、P1～P4は主柱穴である。ピット間の芯々距離はP1とP2が2.39m、P2とP3が2.19mである。P1とP2を結んだ方向を主軸方向とするとN-33°-Wである。ピットの規模は、P1は径34cm・深さ70cm、P2は径37cm・深さ90cm、P3は径41cm・深さ81cm、P4は径53cm・深さ85cmである。P5は径37cm・深さ37cmで、位置関係から出入口ピットと推測される。

遺物は出土していない。

本遺構の時期は、SB-001と主軸方向が類似することから奈良・平安時代と推測される。



第35図　SB-001



第36図　SB-002

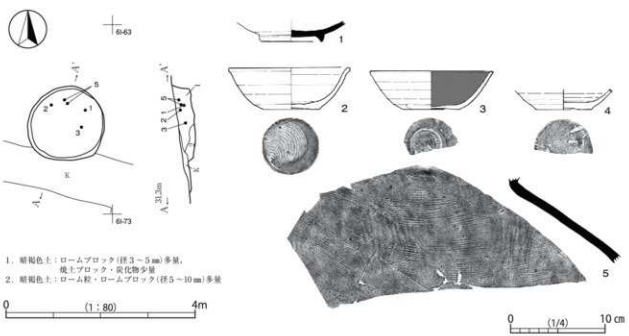
2　土坑

SK-004（第37図、第３・12表、図版16・36）

6I-62グリッドに所在する。南側の上端は溝状の撹乱により削平されている。平面形はほぼ正円形である。規模は径1.68mで、確認面からの深さは0.36mである。壁はほぼ垂直に立ち上がり、底面は比較的平坦である。

遺物は多数出土しているが、いずれも遺存状態は悪い。図示できたものは灰釉陶器１点、土師器３点、須恵器１点である。1は灰釉陶器椀の底部破片である。底部は回転糸切り離しの後、ナデ調整が施され、三日月高台が付く。体部内外面に浸け掛けされた灰釉が見られる。猿投窯編年による折戸53号窯式期のものと推測される。２～４はロクロ土師器杯である。２は底部回転糸切り離しの後、周縁部に手持ちヘラ削り調整が施される。３は底部回転糸切り離しの後、体部下端部と底部周縁部に手持ちヘラ削り調整が施され、内面は黒色処理される。４は底部回転糸切り離し、無調整である。５は須恵器大甕の頸部～胴部上半の破片である。頸部外面はナデ、胴部外面は横方向の平行タタキの後、ナデ調整が施され、タタキ痕を消している。胴部内面はナデ調整が施される。

本遺構の時期は、出土遺物１～３の特徴から10世紀前葉と推測される。



第37図　SK-004

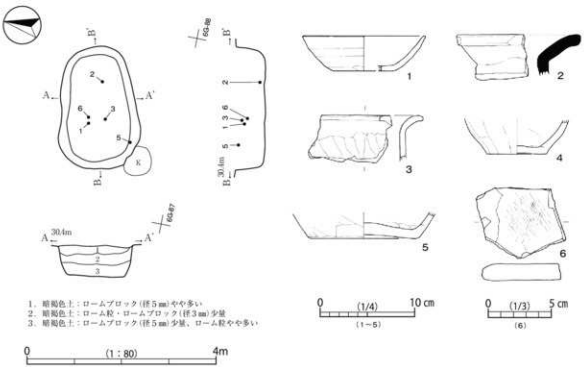
SK-005（第38図、第３・12表、図版17・36）

6G-77グリッドに所在する。南西の一部は撹乱を受けている。平面形は隅丸長方形であるが、西側がやや幅広である。長軸方向はN-77°-Eである。規模は長軸長2.60m・短軸長1.60mで、確認面からの深さは0.64mである。底面はほぼ平坦である。埋土はレンズ状に堆積し自然堆積と推測される。

出土遺物は破片資料がほとんどで、底面より高い位置から出土したものが多い。図示できた遺物は土師器４点、土師質須恵器１点、砥石１点である。１はロクロ土師器杯である。底部回転糸切り離しの後、周縁部と体部下端部に手持ちヘラ削り調整を施す。２は土師質須恵器甕の口縁部～頸部である。口縁部はか

まぼこ状に膨らむ複合口縁で、頸部で「く」の字状に強く屈曲する。器厚は全体的として厚みがある。内外面ともにナデ調整が施される。頸部の長さが異なるが、SK-085の５の土師質須恵器甕に類似する。３～５は土師器甕である。３は口縁部～胴部上半で、口縁部が大きく外反する長胴の甕になると推測される。胴部外面はヘラ削り、そのほかはナデ調整が施される。４は小形甕の底部である。胴部外面はヘラ削り、内面はヘラナデ調整が施される。底部に何らかの圧痕が見られるが、詳細は不明である。５は底径が大きく、わずかに上げ底になる。胴部外面と底部はヘラ削り、内面はナデである。６は凝灰岩製の砥石である。表面が使用され、裏面は剥離面である。最大長56.0mm・最大幅72.0mm・最大厚13.0mm・重量72.00ｇである。

本遺構の時期は、出土遺物１の特徴から９世紀後葉と推測される。



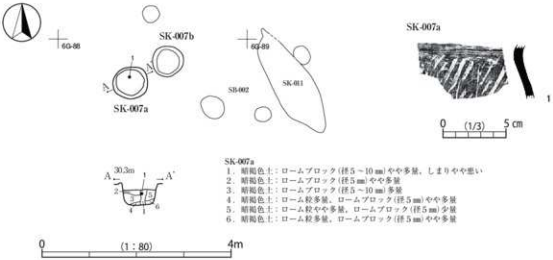
第38図　SK-005

SK-007 a・b（第39図、第３・12表、図版36）

6G-88グリッドに所在する。近接する２つの土坑で南西側のものをａ、北東側のものをｂとした。ａは平面形が正円に近い楕円形で、長軸方向はN-88°-Eである。規模は長軸長75cm・短軸長65cmで、確認面からの深さは48cmである。ｂは平面形がほぼ正円形である。規模は径77cmで、確認面からの深さは11cmである。ｂはａに比べて浅く、性格の異なる遺構である可能性もある。埋土はａのみ記録があり、全体にローム粒子・ロームブロックを多く含む層が堆積している。

遺物はａからのみ出土し、図示できたものは１点である。１は土師質須恵器甕の頸部下部～体部の破片である。外面は平行タタキ、内面はヘラナデが施される。そのほかに土師器小破片が出土している。

本遺構の時期は、出土遺物から奈良・平安時代と推測される。



第39図　SK-007a･b

SK-008（第40図、第３・12表、図版17・37・39）

6H-26グリッドに所在する。南約10cmにSK-009が近接する。SK-009との関係は、出土遺物に接合関係が見られることと両遺構ともに遺物が底面から浮いた状態で出土していることから、遺物の同時一括廃棄と遺構の同時埋没が想定される。平面形はほぼ正円形で、底面は東側に偏る。規模は径1.12mで、確認面からの深さは0.40mである。

遺物は多数出土しているが、遺存状態が良好な個体は少ない。図示できた遺物は土器５点である。１～５はロクロ土師器杯である。１は底部回転糸切り離し、無調整である。体部外面に横位で「賣井」と墨書される。２は底部回転糸切り離しの後、体部下端部に手持ちヘラ削り調整を施す。体部外面に線状のロクロ目が強く残る。３は底部に手持ちヘラ削り調整が施される。４は底部回転糸切り離しの後、無調整である。５は底部回転糸切り離しの後、体部下端部に手持ちヘラ削り調整を施す。２・４は遺構内一括で取り上げた遺物であるが、SK-009の一括資料と接合している。

本遺構の時期は、出土遺物１～３の特徴から10世紀前葉と推測される。

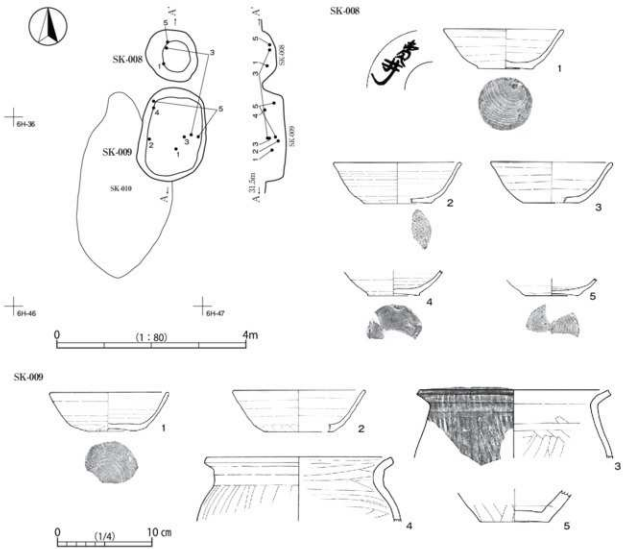
SK-009（第40図、第３・12表、図版17・37）

6H-26・36グリッドに所在する。北約10cmにSK-008が近接する。平面形は楕円形で、長軸方向はN-６°-Eである。規模は長軸長2.0m・短軸長1.36mで、確認面からの深さは0.52mである。発掘調査時の所見では埋土に焼土ブロックや灰・炭化物が多く含まれる。

遺物は多数出土しているが、遺存状態が良好なものは少ない。図示できた遺物は土器５点である。１・２はロクロ土師器杯である。１は底部回転糸切り離しの後、体部下端部と底部周縁部に手持ちヘラ削り調整が施される。体部内面にロクロ目が強く残る。２は底部回転糸切り離し、無調整である。体部下端部に手持ちヘラ削り調整が施される。３～５は土師器甕である。３は口縁部～胴部上半で、口縁部は強く外反し口唇部は摘まみ上がる。外面は口縁部外面まで縦方向の平行タタキが行われ、口縁部外面にはナデ調整が施される。内面はヘラナデ及びナデ調整が施される。４は口縁部～胴部上半で、口唇部はわずかに摘まみ上がる。口縁部内外面はナデ、体部外面はヘラ削り、体部内面はヘラナデが施される。５は底部破片である。体部外面は縦方向のヘラケズリ、体部内面はナデが施される。底部に何らかの圧痕が見られるが、

詳細は不明である。

本遺構の時期は、出土遺物１・２の特徴から９世紀後葉と推測される。



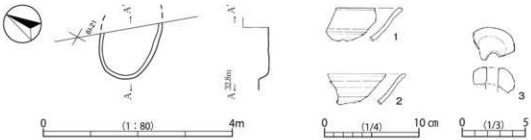
第40図　SK-008・009

SK-012（第41図、第３・12表、図版17・36）

6I-20・21グリッドに所在する。東側は調査区外である。南約８ｍにSK-026がある。平面形は楕円形で、長軸方向はN-80°-Eと推測される。規模は現存長軸長1.3ｍ・短軸長1.2ｍで、確認面からの深さは0.20ｍである。断面形は逆台形で、底面はやや平坦である。

遺物は多数出土しているが、いずれも小破片で遺存状態は悪い。図示できた遺物は土器２点と土製品１点である。１・２はロクロ土師器杯である。いずれも体部外面にロクロ目が強く残る。２は体部下端部に手持ちヘラ削り調整が施される。３は土玉で大部分が欠損する。法量は現存値で長20.0㎜・幅32.0㎜・孔径10.0㎜・重量14.90ｇである。

本遺構の時期は、破片資料ではあるが、出土遺物１・２の特徴から９世紀後葉と推測される。



第41図　SK-012

SK-026（第42図、第３・12表、図版17・37）

6I-41グリッドに所在する。北約８ｍにSK-012がある。平面形は楕円形で、長軸方向はN-84°-Wである。規模は長軸長1.12ｍ・短軸長0.96ｍで、確認面からの深さは0.76ｍである。埋土は全体的に少量の炭化粒を含んだ土層が堆積している。

遺物は多数出土しているが、いずれも遺存状態は悪い。図示できた遺物は土器９点、須恵器１点である。１～４はロクロ土師器杯である。１は高台付き杯で、足高の高台が付く。底部は高台を貼り付けた後のナデ痕が渦巻き状に明瞭に残り、中心部は三角錐状に尖る。内面は黒色処理され、杯部底面に焼成前の「一」の字状のヘラ描きがされる。２～４はやや大ぶりの杯で、全て底部は回転糸切り離し、無調整である。５～８は土師器甕である。５～７は口縁部～胴部上半で、口縁部は短く口唇部が摘まみ上がる。口縁部内外面はナデ、胴部外面はヘラ削り、胴部内面はヘラナデが施される。８は底部で、外面はヘラ削り、内面はナデが施される。５と８は色調や器面の特徴から同一個体であると推測される。９は須恵器甕の胴部である。胴部外面は横方向の平行タタキ、胴部内面はナデとヘラナデが施される。10は土師器甑の底部で、多孔である。胴部外面はヘラ削り、胴部内面はヘラナデが施される。

本遺構の時期は、出土遺物１の特徴から10世紀前葉と推測される。

SK-057（第43図、第３・12表、図版15・37）

8I-46グリッドに所在する。本遺跡で最も南側で検出された遺構である。西３ｍに古墳時代の溝SD-006がある。平面形は楕円形で、長軸方向はN-39°-Wである。規模は長軸長1.46ｍ・短軸長0.92ｍで、確認面からの深さは0.20ｍである。

出土遺物は土師器の小破片が大部分である。図示できた遺物は須恵器１点と鉄製品１点である。１は土師質須恵器甕である。胴部外面は縦方向の平行タタキの後、下半部にヘラ削りが施される。胴部内面はナデ調整である。２は刀子の刀身部である。現存刀身長54.0㎜・身幅11.0㎜・背幅2.5㎜である。

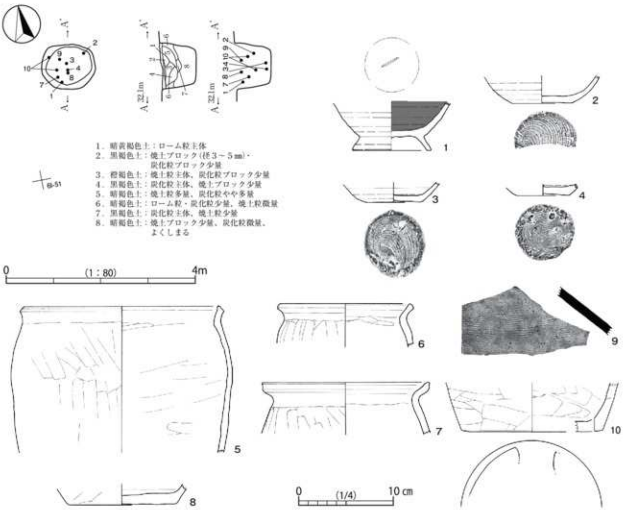
本遺構の時期は、出土遺物から奈良・平安時代と推測される。

SK-070（第44図、第３・12表、図版14・37・39）

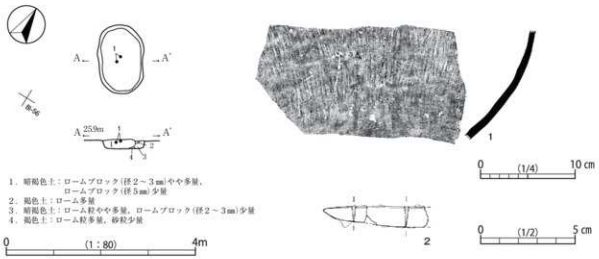
7I-41グリッドに所在する。古墳時代の竪穴住居跡SI-017の推定範囲内にある。平面形はほぼ正円形である。規模は径1.24ｍで、確認面からの深さは0.21ｍである。

図示できた遺物は土器１点で、そのほかに土師器甕の小破片がわずかに出土した。１はロクロ土師器杯で、底部回転糸切り離しの後、体部下端部に手持ちヘラ削り調整が施される。完形品で体部外面に正位で「冨」が墨書される。内外面ともに器面がやや荒れる。

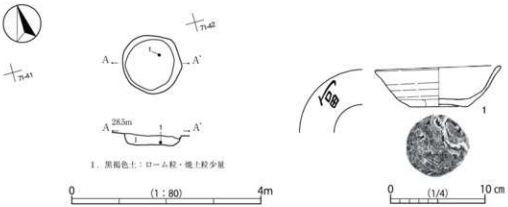
本遺構の時期は、出土遺物１の特徴から９世紀後葉と推測される。



第42図　SK-026



第43図　SK-057



第44図　SK-070

SK-085（第45図、第３・12表、図版15・38）

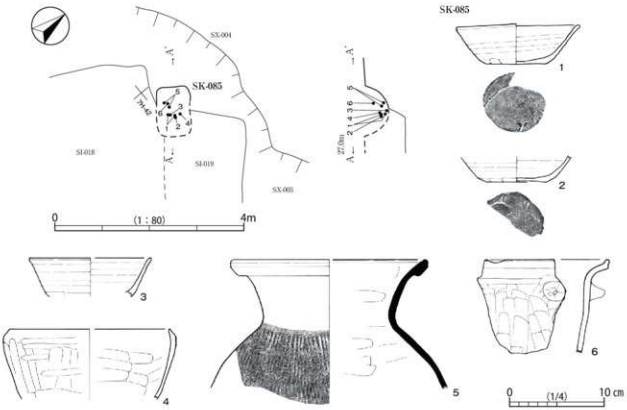
7H-32・42グリッドに所在する。発掘調査時に古墳時代の竪穴住居跡SI-019の一部と考えていたもので、整理作業時に出土遺物の時期や分布範囲・標高などからSI-019と時期・性格が異なる土坑と判断し、新たに遺構番号を付したものである。あわせて遺物もSI-019から分離した。本遺構はSI-018・019埋没後に掘り込まれ、南側台地整形区画のSX-005によって大部分が削平されたと推測される。平面形は長方形ないし楕円形で、長軸方向はN-54°-Wと推測される。規模は推定長軸長1.1m・現存短軸長0.7mで、確認面からの深さは0.50m前後と推測される。

図示できた遺物は土器５点と須恵器１点である。１～３はロクロ土師器杯である。１は底部回転糸切り離しの後、体部下端部に手持ちヘラ削り調整が施される。２は底部回転糸切り離しの後、体部下端部と底部周縁部に手持ちヘラ削り調整が施される。３は体部下端に手持ちヘラ削り調整が施される。４は土師器鉢の口縁部である。鉄鉢を模倣したものと推測される。口唇部は摩滅が著しい。口縁部は短く内傾気味に立ち上がり、体部は底部に向けてややすぼまっていく。体部外面は縦横方向のヘラ削り、体部内面は横方向のナデである。５は土師質須恵器甕で口縁部～胴部上半である。口縁部は複合口縁で、頸部は緩やかに「く」の字状に屈曲する。口縁部～頸部内外面はナデ、胴部外面は縦方向の平行タタキ、胴部内面はナデである。胴部内面に輪積痕が見られる。６は土師器甑の口縁部～胴部上半で、口縁部直下に円錐状の突起が付く。口縁部は強く外反し、口唇部は摘まみ上がる。口縁部内外面はナデ、胴部外面は縦方向のヘラ削り、胴部内面は横方向のヘラナデである。

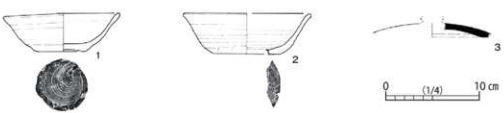
本遺構の時期は、出土遺物１の特徴から９世紀中葉と推測される。

３　遺構外出土の遺物（第46図、第12表、図版38）

ここでは、グリッド出土遺物と他の時代の遺構に混入したと判断された遺物について記載する。１・２はロクロ土師器杯である。１はほぼ完形である。体部はやや内湾気味に立ち上がり、口縁部はわずかに外反する。底部は回転糸切り離し、無調整である。２は体部が緩やかに開きながら立ち上がり、口縁部はやや外反する。底部は回転糸切り離し、無調整である。体部下端部に手持ちヘラ削り調整が施される。口縁部内面にススの付着が見られる。３は須恵器蓋である。擬宝珠形の摘みが付くと推測される。天井部外面は回転ヘラ削り調整が施される。



第45図　SK-085



第46図　遺構外出土の遺物

第12表　奈良・平安時代土器観察表

（　）推定値　<　>現存値

遺構	図版番号	種類	器種	法量(cm)	遺存度	胎土	色調・焼成	技法	備考
SB-001	第35図－1	土師器	甕	口径 － 底径 (8.0) 器高 <2.8>	底部	石英粒・雲母粒・白色砂粒	内面 明黄褐色(10YR7/6) 外面 明黄褐色(10YR7/6) 焼成 良好	内面 ヘラナデ 外面 筋状ヘラ磨き 底外面 ヘラナデ	雲龍壁塗
SK-004	第37図－1	灰釉陶器	椀	口径 － 底径 6.7 器高 <2.3>	底部～高台部	白色砂粒	内面 灰黄色(2.5YR6/2) 外面 黄灰色(2.5YR6/1) 焼成 良好	内面 ロクロナデ 外面 ロクロナデ 底外面 回転糸切り ナデ	
	第37図－2	ロクロ土師器	杯	口径 (12.8) 底径 6.0 器高 5.4	33%	雲母粒・石英粒・白色砂粒	内面 にぶい黄橙色(10YR6/3) 外面 灰黄褐色(10YR6/2) 焼成 良好	内面 ロクロナデ 外面 ロクロナデ 底外面 回転糸切り 手持ちヘラ	
	第37図－3	ロクロ土師器	杯	口径 (13.0) 底径 (6.0) 器高 5.1	35%	雲母粒・石英粒・白色砂粒	内面 黒色(10YR2/1) 外面 にぶい黄橙色(10YR6/3) 焼成 良好	内面 ヘラ磨き 外面 ロクロナデ 手持ちヘラ 底外面 回転糸切り 手持ちヘラ	内面黒色処理
	第37図－4	ロクロ土師器	杯	口径 － 底径 (6.0) 器高 <2.2>	体部～底部	石英粒・黒色砂粒	内面 にぶい橙色(7.5YR7/4) 外面 にぶい橙色(7.5YR7/4) 焼成 良好	内面 ロクロナデ 外面 ロクロナデ 底外面 回転糸切り	
	第37図－5	須恵器	甕	口径 － 底径 － 器高 －	胴部～胴部	白色砂粒・小石	内面 灰色(N4/0) 外面 灰色(N5/0) 焼成 良好	内面 ナデ 外面 ナデ 平行タタキ 底外面 －	
SK-005	第38図－1	ロクロ土師器	杯	口径 (13.0) 底径 (6.4) 器高 3.7	20%	白色砂粒・砂粒	内面 にぶい黄橙色(10YR7/3) 外面 にぶい橙色(7.5YR7/3) 焼成 良好	内面 ロクロナデ 外面 ロクロナデ 手持ちヘラ 底外面 回転糸切り 手持ちヘラ	
	第38図－2	土師質須恵器	甕	口径 － 底径 － 器高 －	口縁部	雲母粒・白色砂粒	内面 橙色(5YR6/6) 外面 橙色(5YR6/6) 焼成 良好(被覆)	内面 ナデ 外面 ナデ 底外面 －	
	第38図－3	土師器	甕	口径 － 底径 － 器高 －	口縁部	白色砂粒・小石・砂粒	内面 にぶい黄橙色(10YR7/3) 外面 にぶい黄橙色(10YR7/4) 焼成 良好	内面 ヘラナデ 外面 ナデ ヘラ削り 底外面 －	
	第38図－4	土師器	甕	口径 － 底径 6.3 器高 <3.7>	底部	白色砂粒・小石	内面 橙色(5YR6/6) 外面 にぶい橙色(5YR6/4) 焼成 良好	内面 ヘラナデ 外面 ヘラナデ 底外面 圧痕	

遺構	図版番号	種類	器種	法量(cm)	遺存度	胎土	色調・焼成	技法	備考
SK-005	第38図-5	土師器	甕	口径 – 底径 (11.8) 器高 <22.5>	底部	雲母粒・小石	内面 褐色(7.5YR4/6) 外面 暗褐色(7.5YR3/3) 焼成 良好	内面 ヘラナデ 外面 ヘラ削り 底外面 ヘラ削り	
SK-005	第39図-1	土師質須恵器	甕	口径 – 底径 – 器高 –	胴部	白色砂粒	内面 にぶい黄褐色(10YR5/3) 外面 灰黄褐色(10YR4/2) 焼成 良好	内面 ヘラナデ 外面 平行タタキ 底外面 –	
SK-008	第40図-1	ロクロ土師器	杯	口径 125 底径 59 器高 42	100%	石英粒・白色小石・砂粒	内面 橙色(7.5YR6/6) 外面 にぶい黄橙色(10YR6/4) 焼成 良好	内面 ロクロナデ 外面 ロクロナデ 底外面 回転糸切り 無調整	体部外面「資年」墨書
	第40図-2	ロクロ土師器	杯	口径 (135) 底径 (70) 器高 43	20%	石英粒・白色砂粒	内面 にぶい橙色(7.5YR6/4) 外面 にぶい橙色(7.5YR6/3) 焼成 良好	内面 ロクロナデ 外面 ロクロナデ 手持ちヘラ 底外面 回転糸切り 無調整	
	第40図-3	ロクロ土師器	杯	口径 – 底径 (60) 器高 43	50%	石英粒・白色小石	内面 橙色(7.5YR6/6) 外面 橙色(7.5YR4/1) 焼成 良好	内面 ロクロナデ 外面 ロクロナデ 底外面 手持ちヘラ削り	
	第40図-4	ロクロ土師器	杯	口径 – 底径 (55) 器高 <27>	体部下半～底部	雲母粒・白色砂粒	内面 にぶい黄橙色(10YR7/4) 外面 にぶい黄橙色(10YR7/4) 焼成 良好	内面 ロクロナデ 外面 ロクロナデ 底外面 回転糸切り 無調整	
	第40図-5	ロクロ土師器	杯	口径 – 底径 64 器高 <18>	体部下半～底部	石英粒・白色砂粒	内面 にぶい橙色(7.5YR6/4) 外面 にぶい橙色(7.5YR7/3) 焼成 良好	内面 ロクロナデ 外面 ロクロナデ 手持ちヘラ 底外面 回転糸切り 無調整	
SK-009	第40図-1	ロクロ土師器	杯	口径 (126) 底径 60 器高 41	63%	石英粒・白色砂粒・小石	内面 にぶい黄橙色(10YR7/2) 外面 灰黄褐色(10YR6/2) 焼成 良好	内面 ロクロナデ 外面 ロクロナデ 手持ちヘラ 底外面 回転糸切り 手持ちヘラ	
	第40図-2	ロクロ土師器	杯	口径 (140) 底径 (72) 器高 44	20%	石英粒・白色砂粒	内面 明赤褐色(2.5YR5/6) 外面 明赤褐色(2.5YR5/6) 焼成 良好	内面 ロクロナデ 外面 ロクロナデ 手持ちヘラ 底外面 回転糸切り 無調整	
	第40図-3	土師器	甕	口径 (205) 底径 – 器高 <72>	口縁部～胴部上半	石英粒・小石	内面 橙色(7.5YR6/6) 外面 橙色(7.5YR6/6) 焼成 良好	内面 ナデ ヘラナデ 外面 平行タタキ ナデ 底外面 –	
	第40図-4	土師器	甕	口径 (196) 底径 – 器高 <68>	口縁部～胴部上半	石英粒・白色砂粒	内面 橙色(7.5YR6/6) 外面 橙色(7.5YR6/6) 焼成 良好	内面 ナデ ヘラナデ 外面 ナデ ヘラ削り 底外面 –	
	第40図-5	土師器	甕	口径 – 底径 (72) 器高 <34>	底部	石英粒・白色砂粒	内面 にぶい黄橙色(10YR7/3) 外面 にぶい褐色(7.5YR5/4) 焼成 良好	内面 ナデ 外面 ヘラ削り 底外面 圧痕	
SK-012	第41図-1	ロクロ土師器	杯	口径 – 底径 – 器高 –	5%	微細砂粒	内面 灰褐色(7.5YR4/2) 外面 にぶい褐色(7.5YR5/3) 焼成 良好	内面 ロクロナデ 外面 ロクロナデ 底外面 –	
	第41図-2	ロクロ土師器	杯	口径 – 底径 – 器高 –	5%	石英粒	内面 にぶい褐色(7.5YR5/3) 外面 灰褐色(7.5YR4/3) 焼成 良好	内面 ロクロナデ 外面 ロクロナデ 手持ちヘラ 底外面 –	
SK-026	第42図-1	ロクロ土師器	高台付杯	口径 (64) 底径 (84) 器高 <31>	体部～高台	石英粒・小石・小礫	内面 明赤褐色(7.5YR2/1) 外面 にぶい橙色(7.5YR6/4) 焼成 良好	内面 ロクロナデ 外面 ロクロナデ 底外面 回転糸切り 無調整	杯部底面「一」字状ヘラ描き 杯部内面黒色処理
	第42図-2	ロクロ土師器	杯	口径 (64) 底径 – 器高 <29>	体部下半～底部	雲母粒・小礫	内面 褐色(7.5YR4/1) 外面 灰褐色(7.5YR4/2) 焼成 良好	内面 ロクロナデ 外面 ロクロナデ 底外面 回転糸切り 無調整	
	第42図-3	ロクロ土師器	杯	口径 – 底径 60 器高 <21>	体部～底部	小石・小礫	内面 にぶい橙色(7.5YR7/3) 外面 橙色(7.5YR6/6) 焼成 良好	内面 ロクロナデ 外面 ロクロナデ 底外面 回転糸切り 無調整	
	第42図-4	ロクロ土師器	杯	口径 – 底径 55 器高 <12>	底部	本色砂粒・白色砂粒・砂粒	内面 明赤褐色(5YR5/8) 外面 明赤褐色(5YR5/8) 焼成 良好	内面 ロクロナデ 外面 ロクロナデ 底外面 回転糸切り 無調整	
	第42図-5	土師器	甕	口径 (21.5) 底径 – 器高 <155>	口縁部～胴部	白色砂粒・小礫	内面 褐灰色(10YR4/1) 外面 明赤褐色(7.5YR5/8) 焼成 良好	内面 ナデ 外面 ナデ ヘラナデ 底外面 –	
	第42図-6	土師器	甕	口径 (144) 底径 – 器高 <46>	口縁部～胴部上半	雲母粒・石英粒・小礫	内面 にぶい橙色(7.5YR6/4) 外面 にぶい高橙色(10YR5/3) 焼成 良好	内面 ナデ ヘラナデ 外面 ナデ ヘラ削り 底外面 –	
	第42図-7	土師器	甕	口径 (176) 底径 – 器高 <56>	口縁部～胴部上半	石英粒・白色砂粒	内面 にぶい橙色(7.5YR7/4) 外面 橙色(7.5YR7/6) 焼成 良好	内面 ナデ ヘラナデ 外面 ナデ ヘラ削り 底外面 –	
	第42図-8	土師器	甕	口径 – 底径 (116) 器高 <21>	底部	石英粒・白色砂粒	内面 橙色(5YR7/6) 外面 灰色(N5/0) 焼成 良好	内面 ナデ 外面 平行タタキ 底外面 –	
	第42図-9	須恵器	甕	口径 – 底径 – 器高 –	胴部	小石	内面 灰色(N5/0) 外面 灰色(N6/1) 焼成 良好	内面 ナデ 外面 平行タタキ 底外面 –	
	第42図-10	土師器	甑	口径 – 底径 (150) 器高 <52>	底部	石英粒・小石	内面 にぶい橙色(7.5YR6/4) 外面 にぶい黄橙色(10YR6/4) 焼成 良好	内面 ヘラナデ 外面 ヘラ削り 底外面 ヘラ削り	3～4の多孔
SK-057	第43図-1	土師質須恵器	甕	口径 – 底径 – 器高 –	胴部中位～下位	雲母	内面 橙色(5YR6/6) 外面 明赤褐色(5YR5/6) 焼成 良好	内面 ヘラナデ 外面 ヘラ削り 平行タタキ 底外面 –	
SK-070	第44図-1	ロクロ土師器	杯	口径 133 底径 60 器高 43	100%	石英粒・雲母	内面 にぶい橙色(7.5YR7/4) 外面 橙色(7.5YR7/6) 焼成 良好	内面 ロクロナデ 外面 ロクロナデ 手持ちヘラ削り 底外面 回転糸切り 無調整	「頁」墨書
SK-085	第45図-1	ロクロ土師器	杯	口径 131 底径 64 器高 43	70%	石英粒・雲母	内面 明黄褐色(10YR6/6) 外面 にぶい黄橙色(10YR7/4) 焼成 良好	内面 ロクロナデ 外面 ロクロナデ 手持ちヘラ削り 底外面 回転糸切り 無調整	
	第45図-2	ロクロ土師器	杯	口径 – 底径 (64) 器高 <27>	底部～体部	雲母	内面 にぶい橙色(7.5YR7/4) 外面 にぶい橙色(7.5YR6/4) 焼成 良好	内面 ロクロナデ 外面 ロクロナデ 手持ちヘラ削り 底外面 回転糸切り 手持ちヘラ削り	
	第45図-3	ロクロ土師器	杯	口径 (130) 底径 – 器高 <41>	口縁部～体部	石英粒	内面 にぶい黄橙色(10YR7/3) 外面 にぶい黄橙色(10YR7/4) 焼成 良好	内面 ロクロナデ 外面 ロクロナデ 手持ちヘラ削り 底外面 –	
	第45図-4	土師器	鉢	口径 (171) 底径 – 器高 <74>	口縁部～体部	雲母	内面 にぶい橙色(7.5YR7/3) 外面 明褐色(7.5YR5/6) 焼成 良好	内面 ヘラナデ 外面 ヘラ削り ヘラナデ 底外面 –	
	第45図-5	土師質須恵器	甕	口径 (210) 底径 – 器高 <137>	口縁部～胴部	石英粒	内面 にぶい橙色(7.5YR6/4) 外面 橙色(7.5YR6/8) 焼成 良好	内面 ナデ 外面 タタキ ヘラナデ 底外面 –	
	第45図-6	土師器	甑	口径 – 底径 – 器高 <100>	石英粒・雲母		内面 にぶい黄橙色(10YR5/3) 外面 にぶい黄橙色(10YR6/3) 焼成 良好	内面 ヘラナデ 外面 ヘラ削り ヘラナデ 底外面 回転糸切り	
遺構外	第46図-1	ロクロ土師器	杯	口径 125 底径 54 器高 41	95%	石英粒・白色砂粒・砂粒	内面 橙色(7.5YR6/6) 外面 橙色(7.5YR7/6) 焼成 良好	内面 ロクロナデ 外面 ロクロナデ 底外面 回転糸切り 無調整	61.10-1
	第46図-2	ロクロ土師器	杯	口径 (136) 底径 (71) 器高 43	20%	白色砂粒・石英粒	内面 灰褐色(10YR4/1) 外面 灰黄褐色(10YR6/2) 焼成 良好	内面 ロクロナデ 外面 ロクロナデ 手持ちヘラ削り 底外面 回転糸切り 無調整	SK-053-1
	第46図-3	須恵器	蓋	口径 – 底径 – 器高 <15>	天井部	小石・小礫	内面 オリーブ黒色(5Y3/1) 外面 オリーブ黒色(5Y3/1) 焼成 良好	内面 ロクロナデ 外面 ロクロナデ 回転ヘラ 底外面 –	SK-015-1

第７節　中・近世の遺構と遺物

中・近世の遺構は、台地整形区画２か所・土地整形遺構３基・掘立柱建物跡１棟・竪穴状遺構11基・地下式坑２基・土坑墓１基・土坑31基・土坑群（ピット群）７か所・溝１条を検出した。遺構の分布は、北側台地整形区画と南側台地整形区画の内側を中心に分布し、遺跡の中央付近に散在するといった状況である。発掘調査時に北側台地整形区画のSX-001周辺でいくつかの溝状遺構を検出しているが、その内のSD-002については、成田市中世城郭址調査報告書において当該遺構が明らかに撹乱である趣旨の記載があることから欠番とし、出土遺物についてはSX-001の参考遺物として掲載することとした。南側台地整形区画は谷に続く台地縁辺と傾斜面を強く意識し、２回にわたって形成されたものと推測される。これら２か所の台地整形区画については、台地整形区画ごとにそれらに関連する竪穴状遺構や土坑なども併せて記載し、それ以外の遺構については遺構種別ごとに記載することにした。

１　北側台地整形区画（第47図、図版17・18）

本区画は5H-90～95、6G-01～09・11～19・21～29・32～39・43～49・53～59、6H-00～05・10～16・20～26・30～36・40～46・50・51グリッドに所在する。本区画周辺の確認面（ローム層上面）の地形を見ると、調査区北側の谷津に向かって緩やかに傾斜する等高線が乱れ、更に調査区の東西に顕著な段差を確認することができる（第47図）。これらの等高線の状況と遺構の配置から本区画の範囲は、東限をSX-003土坑群が連なる比高１ｍほどの掘り込みまで、西限を調査区西端の傾斜変換線まで、南限を等高線の間隔が詰まり始めるSK-014～016とSX-002・006との間までと推測され、東西約56ｍ・南北約20ｍと幅広い範囲に及んでいる。本区画内からは土地整形遺構１か所・掘立柱建物跡１棟・地下式坑２基・竪穴状遺構11基・土坑８基・土坑群（ピット群）５基を検出した。地形の状況や遺構の分布状況などから、本区画内を第Ⅰ～Ⅲ地区の３か所に区分することとした。第Ⅰ地区は土地整形遺構SX-001を中心とする範囲である。西端は傾斜変換線を境にして谷に面し、北側は緩やかに傾斜し、北西側は痩せ尾根に続く。東端はSX-001の「Ｖ」字状の掘り込みの東側である。標高は28.5ｍ～29.0ｍで、地下式坑と竪穴状遺構・土坑がある。第Ⅱ地区は区画内の中央部分で、SK-018を東端とする範囲である。標高は29.0ｍ～30.3ｍで、掘立柱建物跡や地下式坑・竪穴状遺構・土坑などがある。第Ⅲ地区は東側の遺構がほとんど見られない範囲である。この地区は明確な平坦面も確認できず、遺構も東端の掘り込みに沿って掘られているSX-003だけである。

区画内から出土した遺物は総じて少なく、陶器、瓦質土器の大形甕・鉢、銭貨、鉄製品などが見られるが、遺存状態の良いものはない。そのほかの遺物としては、本区画内の各遺構やグリッド一括で取り上げたものの中から弥生時代中期の土器片、古墳時代後期の須恵器・土師器破片及び石製品、奈良・平安時代のロクロ土師器破片などが出土している。特に、地下式坑の埋土から古墳時代及び奈良・平安時代の土師器片が多量に出土した。こうした遺物は、かつて本区画内に存在した各時代の遺構に伴うものであり、各時代の遺構は本区画が造成され、本区画内に各遺構が作られた際に削平され消滅したものと推測される。

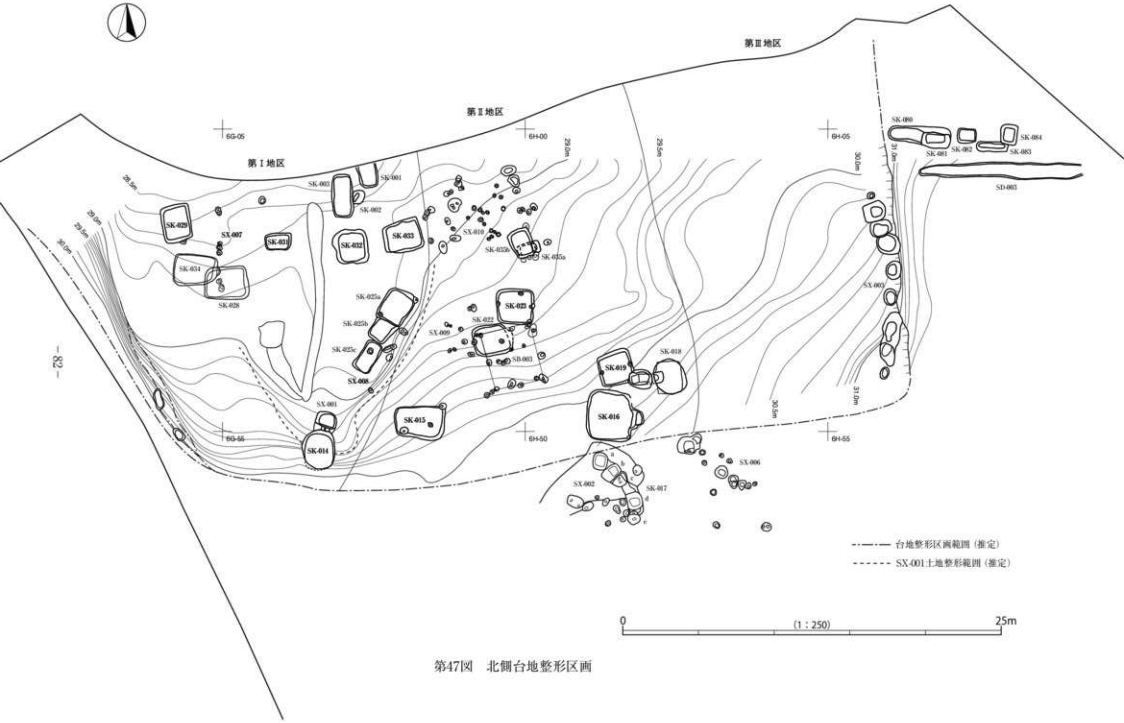
（１）　第Ⅰ地区

第Ⅰ地区は6G-03～08・12～18・22～28・33～37・43～47・54～57グリッドに所在する。この地区の遺構は土地整形遺構１か所・地下式坑１基・竪穴状遺構６基・土坑６基・土坑群（ピット群）２か所である。

土地整形遺構

SX-001（第48・49図、第３・22表、図版18・38）

6G-25～28・35～38・45～47・56・57グリッドに所在する。発掘調査時には明確な掘り込みを検出できず、



第47図　北側台地整形区画

傾斜変換線の上端部を遺構の範囲としていた。本遺構が掘り込まれる前の地形は、6G-34グリッドと6G-28グリッド付近の標高29.0mの等高線を結んだ緩やかな斜面であったと推測される。6G-56グリッド付近を頂点とする逆三角形状に緩斜面地を整形して、6G-46グリッド付近に平坦部を作り出している。規模は底辺約13.0m・高さ約９mの逆三角形の範囲である。底辺北側部分は判然としないが、6G-16グリッド周辺まで整形が及んでいた可能性も推測される。南側の逆三角形の頂点部分でSK-014と重複し、本遺構がSK-014の天井部崩壊土層を削平・整形していることから本遺構の方が新しい。このことから、SK-014の様に本遺構による整形の前に存在していた遺構と、整形に伴って作られた新しい遺構が存在すると判断できる。整形範囲内に所在するSK-025との新旧関係は不明であるが、SK-025の長軸方向が本遺構の東端の傾斜変換線に沿っていることから、本遺構とほぼ同時期に作られたと推測される。整形範囲内の中央部には南北に走る溝状遺構が検出されたが、全測図にのみ記録されているため、詳細は不明である。

図示できた遺物は瓦質土器１点と銭貨１点である。それ以外に陶器甕破片や瓦質土器破片などが出土している。また、須恵器や土師器杯破片など、古い時期の遺物も多く混入している。１は土師質土器の杯底部である。底面は回転糸切り離し、無調整である。器厚は厚く硬質である。２は南宋銭の嘉泰通寶である。書体は不明で、背文は「六」である。縁外径22.7㎜・縁内径21.3㎜・郭外径9.8㎜・郭内径6.5㎜・縁厚1.3㎜・重さ1.82ｇである。初鋳年は1201年である。腐食が進んでいる。３は区画西端部から出土した鉄銭である。SD-002出土遺物として取り上げられたが、本遺構に関連する資料として図示した。状態が悪く銭種は不明である。縁外径24.0㎜・縁内径17.0㎜・郭外径6.5㎜・郭内径5.5㎜・縁厚2.0㎜・重さ3.37ｇである。

地下式坑

SK-014（第48・49図、第３・22表、図版19・38）

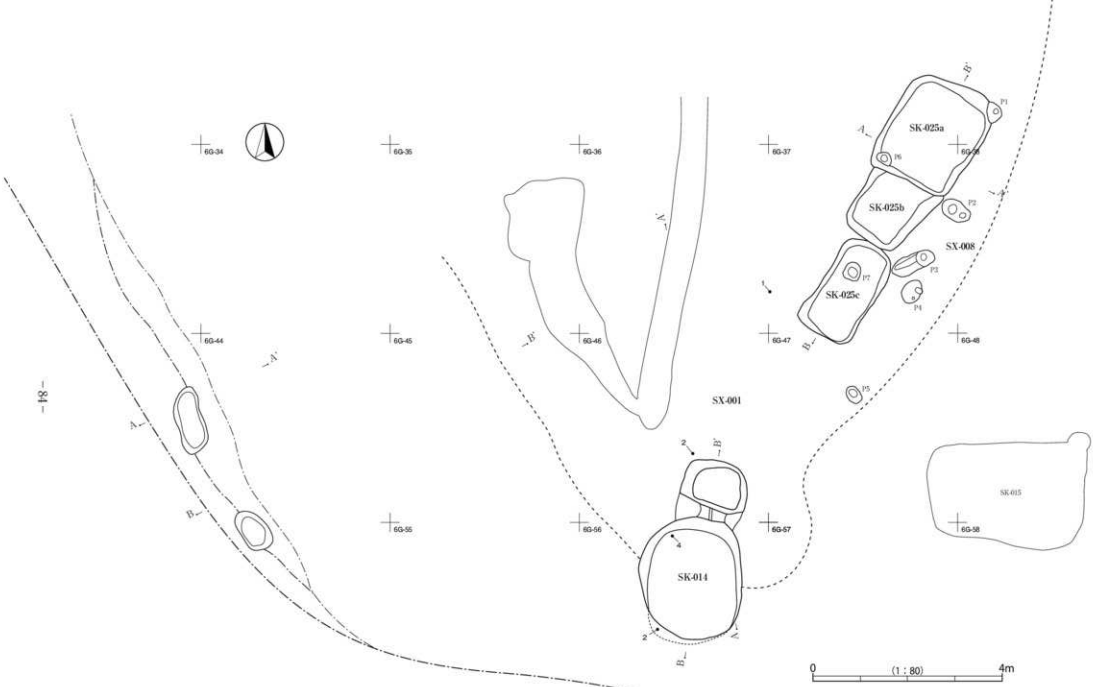
6G-46・56グリッドに所在する。北側でSX-001と重複し、本遺構の方が古い。主室の平面形は隅丸長方形である。規模は長軸長2.68m・短軸長2.15mで、確認面からの深さは1.60m～2.32mである。底面の規模は長軸長2.40m・短軸長1.84mで、長軸方向はN- 0°-Eである。底面はほぼ平坦で、南側の壁はややオーバーハングしている。出入口は北側短辺に作られ、長さ1.26m・幅1.38m・主室底面からの高さ0.67mであるが、主室側は敷居状に一段高く、その奥は0.15m低くなっている。長短軸交点から見た方向はN-16°-Eである。埋土は全体的にロームブロックやローム粒を主体とする土層で、４層の天井崩壊土が厚く堆積していることから、SX-001の土地整形に伴って壊され、埋め戻されたと推測される。

図示できた遺物は陶器１点、瓦質土器１点、カワラケ２点である。そのほかに陶器破片、土師質土器破片などが出土し、数量としては中・近世遺構の中で突出して多く出土している。１は陶器三筋壺で、外面に自然釉が掛かる。肩部～頸部破片で、肩部は丸く頸部下に２条の沈線が巡る。常滑窯製品と思われる。２は地元産の瓦質土器の捏鉢である。器厚が厚手かつ均一で、直線的に立ち上がる。口唇部端部は外側に平坦面を作り、内側は摘まみ上がる。内面は櫛描きが施される。３・４はカワラケ小皿である。器面は摩滅しているが、いずれも底部は回転糸切り離しの後、手持ちヘラ削り調整が施される。

竪穴状遺構

SK-025a（第48・49図、第３表、図版19）

6G-27・28・37・38グリッドに所在する。発掘調査時に単一遺構として調査され、整理作業時に北側から順にａ～ｃの枝番号を付け、規模によりSK-025aを竪穴状遺構、SK-025b・cを土坑とした。３つの遺構は重複しているが、新旧関係は不明である。本遺構の東側にはSX-001東端の傾斜変換線に沿ってSX-008ピッ

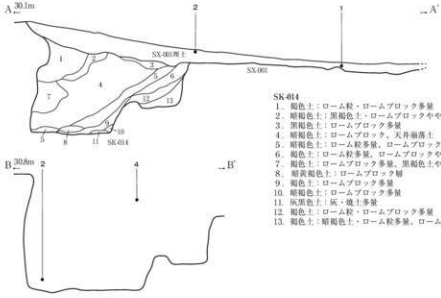


第48図　第Ⅰ地区SX-001・008・SK-014・025a～c（1）

区画西端部

1．暗褐色土：ロームブロック少量、全体に粗い
2．暗褐色土：ローム粒やや多量、ロームブロック少量、炭化物微量
3．暗褐色土：ロームブロック少量
4．褐色土：ローム粒主体、ロームブロック少量
5．暗褐色土：ローム粒やや多量、ロームブロック少量
6．暗褐色土：ロームブロックやや多量

SX-001・SK-014



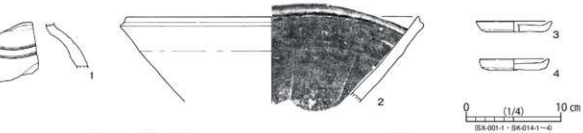
SK-014
1．褐色土：ローム粒・ロームブロック多量
2．暗褐色土：黒褐色土・ロームブロックやや多量
3．黒褐色土：ロームブロック多量
4．暗褐色土：ロームブロック、天井崩落土
5．暗褐色土：ローム粒多量、ロームブロックやや多量
6．褐色土：ローム粒多量、ロームブロックやや多量
7．褐色土：ロームブロック多量、黒褐色土やや多量
8．暗黄褐色土：ロームブロック層
9．褐色土：ロームブロック多量
10．暗褐色土：ロームブロック多量
11．灰黒色土：灰・焼土多量
12．褐色土：ローム粒・ロームブロック多量
13．褐色土：暗褐色土・ローム粒多量、ロームブロックやや多量

SK-025

1．暗褐色土：ローム粒多量、ロームブロックやや多量
2．暗褐色土：ローム粒多量、ロームブロックやや多量
3．暗褐色土：ロームブロックやや多量
4．暗褐色土：ロームブロック多量

SX-001

SK-014



第49図　第Ⅰ地区SX-001・008・SK-014・025a～c（2）

ト群が並んでいる。本遺構は長軸方向がSX-001東端の傾斜変換線とほぼ一致することから、SX-008とともにSX-001に関連する遺構であると推測される。本遺構の北東隅のP1と南西隅のP6については、P1がSX-008のP2～P5と直線状に並び、P6がその走行方向に対して垂直方向にあることから、いずれもSX-008を構成するピットと判断した。平面形は長方形で、長軸方向はN-31°-Eである。規模は長軸長2.3m・短軸長1.93mで、確認面からの深さは0.39mである。底面は平坦である。

遺物は出土していない。

SK-028（第50図、第3表、図版19）

6G-24・25グリッドに所在する。北西でSK-034と重複し、遺構内にSX-007ピット群の一部があり、本遺構の方がSK-034より新しく、SX-007ピット群よりも古い。平面形は長方形で、長軸方向はN-89°-Eである。規模は長軸長2.92m・短軸長2.04mで、確認面からの深さは0.36mである。埋土はロームブロックを少量含む暗褐色土を主体とした土層で、自然堆積である。

本遺構に伴う遺物は出土していない。

SK-029（第50図、第3表、図版19）

6G-14グリッドに所在する。南0.7mにSK-034が近接する。平面形は長方形で、長軸方向はN-29°-Wである。規模は長軸長2.46m・短軸長1.90mで、確認面からの深さは0.58mである。底面は平坦で北側半分に白色粘土が見られる。埋土は粘土粒や粘土ブロックを含んだ暗褐色土と褐色土を主体とした土層で、自然堆積である。

本遺構に伴う遺物は出土していない。

SK-032（第51図、第3表、図版19）

6G-16・17・26・27グリッドに所在する。東1.1mにSK-033が近接する。平面形は崩れた方形で、長軸方向はN-7°-Wである。規模は長軸長2.32m・短軸長2.16mで、確認面からの深さは0.44mである。底面は平坦で白色粘土が見られる。埋土は南側にローム粒やロームブロックを主体とした褐色土が厚く堆積していることから、人為的に埋め戻されたと推測される。

遺物は陶器甕や土師質土器の破片などが出土しているが、図示できるものはない。

SK-033（第51図、第3表、図版19）

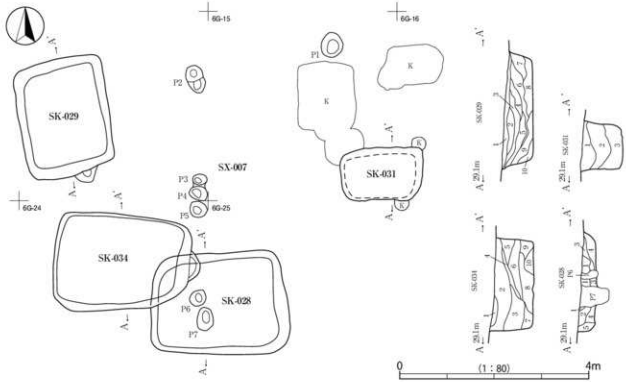
6G-17・18グリッドに所在する。西1.1mにSK-032が近接する。北側と西側の壁は、掘り過ぎて検出できなかったため土層断面図から復元した。平面形はややいびつな長方形で、長軸方向はN-78°-Eである。規模はいずれも推定で長軸長2.56m・短軸長2.12mで、確認面からの深さは0.64mである。底面は平坦で北西隅に白色粘土が見られる。埋土はローム粒やロームブロックを多量に含んだ褐色土が一方向から堆積していることから、人為的に埋め戻されたと推測される。

遺物は陶器甕や土師質土器などの破片のほかに鉄滓が出土しているが、図示できるものはない。

SK-034（第50図、第3表、図版19）

6G-24グリッドに所在する。南東でSK-028と重複し、本遺構の方が古い。平面形は不整な長方形で、長軸方向はN-90°-Eである。規模は長軸長2.88m・短軸長2.0mで、確認面からの深さは0.87mである。底面は平坦で白色粘土が見られる。埋土は白色粘土ブロックを含む暗褐色土が底面付近に堆積し、その上にロームブロックを含む暗褐色土などが堆積していることから、人為的に埋め戻されたと推測される。

本遺構に伴う遺物は出土していない。



SK-028
1．暗褐色土：ロームブロックやや多量、白色粘土ブロック少量
2．暗褐色土：ロームブロック少量
3．暗褐色土：ロームブロック多量
4．暗褐色土：ロームブロック少量
5．暗褐色土：ロームブロックやや多量

SK-029
1．褐色土：ローム粒やや多量
2．褐色土：ローム粒多量、ロームブロック・白色粘土粒少量
3．暗褐色土：ローム粒・ロームブロック少量
4．暗褐色土：ローム粒・ロームブロックやや多量、焼土ブロック微量
5．褐色土：ローム粒多量、粘土ブロック微量
6．暗褐色土：ロームブロック・粘土ブロック少量
7．暗褐色土：粘土ブロック少量
8．暗褐色土：粘土粒・粘土ブロックやや多量、焼土ブロック微量
9．褐色土：ロームブロック多量、粘土粒・粘土ブロックやや多量
10．暗褐色土：ローム粒やや多量、ロームブロック・粘土粒少量

SK-031
1．暗褐色土：ローム粒・ロームブロック少量
2．褐色土：ロームブロック多量、ロームブロック少量、粘土ブロック微量
3．暗褐色土：ロームブロック多量、ロームブロック多量、粘土ブロックやや多量

SK034
1．黒褐色土：ロームブロック少量
2．褐色土：ロームブロック多量
3．暗褐色土：ロームブロック多量
4．暗褐色土：ロームブロック少量
5．暗褐色土：ローム粒やや多量、ロームブロック少量
6．暗褐色土：ロームブロックやや多量、粘土粒やや多量
7．黒褐色土：ロームブロック多量、白色粘土ブロック少量
8．暗褐色土：ロームブロックやや多量、白色粘土ブロック少量
9．暗褐色土：ロームブロック少量、白色粘土ブロックやや多量
10．暗褐色土：ロームブロック多量、白色粘土ブロックやや多量

第50図　第Ⅰ地区SK-028・029・031・034・SX-007

土坑

SK-001（第51図、第３表、図版19）

6G-07グリッドに所在する。北側は調査区域外である。西約0.6mにSK-003が近接する。調査部分から推測し平面形は長方形で、主軸方向はN-９°-Wである。規模は現存長軸長1.6m・短軸長1.2mで、確認面からの深さは0.24mである。底面は平坦で白色粘土が見られる。埋土は白色粘土を含む明灰褐色土の単一土層である。

遺物は土師質土器などの小破片が少量出土しているが、図示できるものはない。

SK-002（第51図、第３表、図版19）

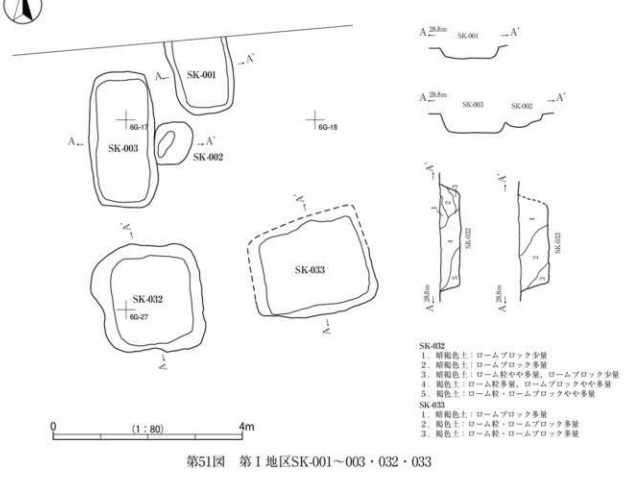
6G-17グリッドに所在する。西側でSK-003と重複するが、新旧関係は不明である。平面形は不整な円形である。規模は径90cmで、確認面からの深さは20cmである。底面は中央部が更に深くなる椀形で白色粘土が見られる。埋土は白色粘土を多く混入する灰褐色土やロームブロックをやや多量に含む灰黒色土が堆積している。

遺物は土師質土器などの小破片が少量出土しているが、図示できるものはない。

SK-003（第51図、第３表、図版19）

6G-06・07・16・17グリッドに所在する。東側でSK-002と重複するが、新旧関係は不明である。東約0.6mにSK-001、南約0.8mにSK-032が近接する。平面形は長方形で、長軸方向はN- 3°-Wである。規模は長軸長2.84m・短軸長1.4mで、確認面からの深さは0.32mである。底面は平坦で白色粘土が見られる。埋土は底面に白色粘土を混入する暗褐色土が堆積し、その上にロームブロックを主体とする褐色土や暗褐色土が堆積している。

遺物は土師質土器などの小破片が少量出土しているが、図示できるものはない。



第51図　第Ⅰ地区SK-001～003・032・033

SK-025b（第48図、第３表、図版19）

6G-37グリッドに所在する。北東側でSK-025a、南西側でSK-025cと重複するが、新旧関係は不明である。SK-025aの方が深いので北東部分は遺存していない。平面形は長方形で、長軸方向はN-33°-Eである。規模は現存長軸長1.52m・短軸長1.4mで、確認面からの深さは0.22mである。底面は平坦である。

遺物は出土していない。

SK-025c（第48図、第３表、図版19）

6G-37・47グリッドに所在する。北側でSK-025bと重複し、中央部にSX-008のP7があるが、いずれも新旧

関係は不明である。平面形は長方形で、長軸方向はN-32°-Eである。規模は長軸長2.21m・短軸長1.18mで、確認面からの深さは0.14mである。底面は平坦である。

遺物は出土していない。

SK-031（第50図、第３表、図版19）

6G-15・16グリッドに所在する。北側は一部撹乱を受ける。下端のラインは断面図等からの推定である。平面形は長方形で、主軸方向はN-87°-Eである。規模は長軸長1.7m・短軸長1.08mで、確認面からの深さは0.88mである。記録写真では底面は平坦で白色粘土が見られる。埋土はローム粒やロームブロックを多量に含む褐色土・暗褐色土が堆積し、下層ほど白色粘土粒が多く含まれる。人為的に埋め戻されたと推測される。

本遺構に伴う遺物は出土していない。

土坑群（ピット群）

SX-007（第50図、第３・13表、図版18）

6G-14・15・24・25グリッドに所在する。ピットは７基である。P6・P7がSK-028と重複し、本遺構の方が新しい。P2～P7は直線状に並び、走行方向はN-２°-Wである。P1は走行方向に対して80°東の方向にある。各ピットの規模等は第13表のとおりである。ピット間の芯々の距離はP1とP2は約3.0m、P2とP4及びP4とP7は約2.5mである。走行方向やピット間距離に一定の企画性が見られることから、柵列ないし簡易な囲いのようなものと推測される。

遺物は出土していない。

第13表　SX-007ピット計測表　　単位：m　（　）推定値　＜　＞現存値

番号	形状	長軸	短軸	深さ	番号	形状	長軸	短軸	深さ	番号	形状	長軸	短軸	深さ
P1	円形	0.52	0.47	0.26	P2	楕円形	0.59	0.37	0.53	P3	円形	0.31	0.22	0.22
P4	円形	0.40	0.30	0.22	P5	円形	0.36	0.36	0.35	P6	円形	<0.37>	<0.32>	(0.72)
P7	楕円形	<0.50>	<0.34>	(0.65)										

※P5・P6の深さは、SK-028の確認面からの深さを加えた推定数値

SX-008（第48図、第３・14表、図版19）

6G-27・28・37・38・47グリッドに所在する。ピットは７基である。P1とP6がSK-025a、P7がSK-025cの中にあるが、いずれも新旧関係は不明である。P1～P5は直線状に並び、走行方向はN-27°-Eである。P6は走行方向に対して80°、P7は走行方向に対して90°それぞれ西の方向にある。各ピットの規模等は第14表のとおりである。ピット間の芯々の距離はP1～P5が順に2.2m・1.2m・0.8m・2.5mで、P2とP6が1.7m、P4とP7が1.3mである。走行方向がSX-001の東端の傾斜変換線と同じで、ピット間距離に一定の企画性が見られることから、SX-007と同様に柵列ないし簡易な囲いのようなものと推測される。

遺物は出土していない。

第14表　SX-008ピット計測表　　単位：m　（　）推定値　＜　＞現存値

番号	形状	長軸	短軸	深さ	番号	形状	長軸	短軸	深さ	番号	形状	長軸	短軸	深さ
P1	円形	0.48	0.48	0.38	P2	楕円形	0.62	0.40	0.30	P3	楕円形	0.96	0.32	0.53
P4	長楕円形	0.53	0.38	0.68	P5	楕円形	0.40	0.27	0.37	P6	円形	0.34	0.34	0.21
P7	円形	0.40	0.40	0.38										

（2） 第Ⅱ地区

第Ⅱ地区は6G-08・09・18・19・28・29・38・39・47～49・57～59、6H-00・01・10～12・20～22・30～32・40～42・50～52グリッドに所在する。この地区の遺構は掘立柱建物跡１軒・地下式坑１基・竪穴状遺構５基・土坑２基・土坑群（ピット群）２か所である。

掘立柱建物跡

SB-003（第52図、第２・15表、図版20）

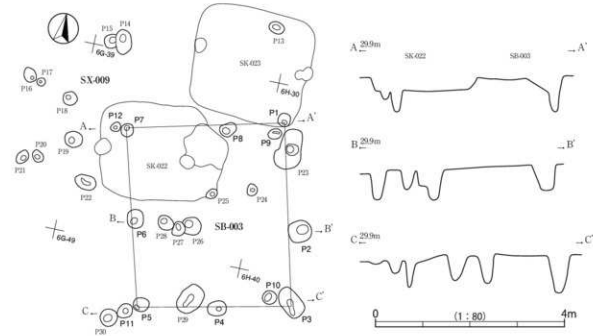
6G-39・49、6H-30・40グリッドに所在する。北側でSK-022・023と重複するが、新旧関係は不明である。発掘調査時にはSX-009ピット群との区分が明確ではなかったが、図面上の検討でP1～P12を本遺構の柱穴と判断した。記録写真でSK-023の南側に僅かな段差を確認できることから、本遺構を作る際に周辺を整地したと推測される。本遺構はP1～P7が主柱穴となる２間×２間の掘立柱建物跡である。規模は東側の桁行芯々距離が北から順に2.26m・1.6m、西側の桁行が北から順に1.96m・1.82mである。南側の梁行芯々距離が西から順に1.66m・1.48m、北側の梁行が西から2.1m・1.26mである。東側の桁行方向はN-14°-Wである。P3は平面形が楕円形であり、柱の抜取り痕跡と思われる。各ピットの規模等は第15表のとおりである。P9～P12は主柱穴と比べて小さく浅いが、主柱穴の内側ないし外側に隣接していることから、建て替えが行われたと推測される。

本遺構に伴う遺物は出土していない。

第15表　SB-003柱穴計測表　　単位：m　（　）推定値　＜　＞現存値

番号	形状	長軸	短軸	深さ	番号	形状	長軸	短軸	深さ	番号	形状	長軸	短軸	深さ
P1	円形	0.30	0.25	0.72	P2	円形	0.48	0.48	0.55	P3	楕円形	0.68	0.40	0.89
P4	円形	0.41	0.32	0.65	P5	円形	0.34	0.31	0.57	P6	円形	0.38	0.35	0.63
P7	円形	0.29	0.27	(0.63)	P8	円形	0.37	0.27	0.30	P9	円形	0.30	0.22	0.32
P10	円形	0.31	0.28	0.71	P11	円形	0.34	0.28	0.32	P12	円形	0.22	0.20	(0.38)

※P7・P12の深さは、SK-022の確認面からの深さを加えた推定数値



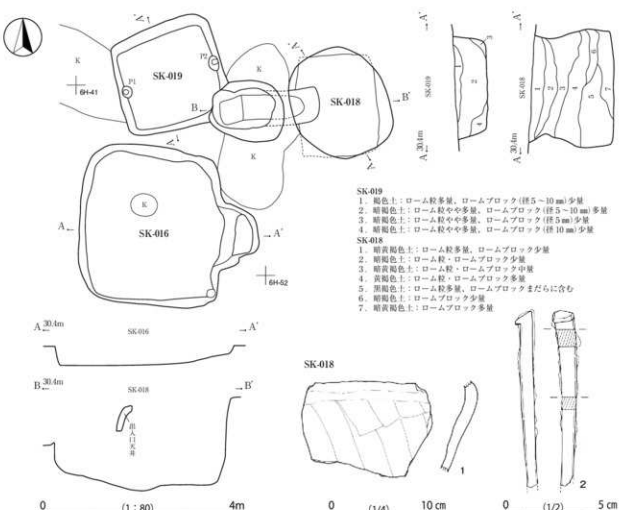
第52図　第Ⅱ地区SB-003・SX-009

地下式坑

SK-018（第53図、第３・22表、図版20・38）

6H-31・32・41・42グリッドに所在する。西側でSK-019と重複し、本遺構の方が新しい。出入口上面は撹乱を受けている。主室の平面形は隅丸長方形である。規模は長軸長2.30m・短軸長2.05mで、確認面からの深さは1.80mである。底面の形状は長方形で四隅がしっかり掘られている。底面の規模は長軸長2.12m・短軸長1.68mで、長軸方向はN- 2°-Wである。底面はほぼ平坦で出入口に続く部分は深くなり、壁はややオーバーハングするように立ち上がる。出入口は西側長辺に作られ、長さ2.26m・幅0.7mで主室底面より約0.10m低く、底面から14°の角度で出入口の立坑壁に向かって傾斜している。長短軸交点から見た方向はN-93°-Wである。主室・出入口ともに底面及び壁下部に白色粘土が見られ、SK-001などに類似している。天井部は遺構検出時に既に崩落し、出入口部分にのみ一部残存する。埋土は全体的にローム粒やロームブロックを主体とする暗黄褐色土と黒褐色土・暗褐色土などが交互に堆積していることから、人為的に埋め戻されたと推測される。

遺物は土師質土器破片などが出土し、須恵器やロクロ土師器などの古い時期の遺物が多く混入している。図示できた遺物は瓦質土器1点、鉄製品1点である。1は瓦質土器の大甕の肩部破片で、肩部は丸く外側に張



第53図　第Ⅱ地区SK-016・018・019

り出す。外面はヘラナデ、内面はナデが施される。２は鉄の角釘である。先端部が欠損している。現存長92.0㎜・最大幅11.5㎜・最大厚さ10.0㎜・現存重さ22.0ｇである。

竪穴状遺構

SK-015（第54図、第３表、図版20・38）

6G-47・48・57・58グリッドに所在する。第Ⅰ地区東端に隣接する一段高い場所にある。緩斜面に立地するため北側のプランが不明瞭であるが、平面形は長方形で、長軸方向はN-90°-Eである。規模は長軸長3.28ｍ・短軸長1.96ｍ～2.24ｍで、確認面からの深さは0.32ｍである。ピットを中央に１基と壁沿いに２基検出した。P1は径64㎝・底面からの深さ19㎝、P2は径28㎝・底面からの深さ22㎝、P3は径48㎝・底面からの深さ22㎝である。埋土は比較的大きいロームブロックを多量に含んだ暗褐色土などが堆積していることから、人為的に埋め戻されたと推測される。

遺物は、土師質土器破片などが出土し、須恵器やロクロ土師器などの古い時期の遺物が混入している。図示できた遺物は砥石1点である。１は砂岩製の砥石である。破損部の稜線上にも削痕が確認されることから、破損後も使用が継続されたと考えられる。最大長74.5㎜・最大幅30.0㎜・最大厚31.0㎜・重量96.24ｇである。

SK-016（第53図、第３表、図版20）

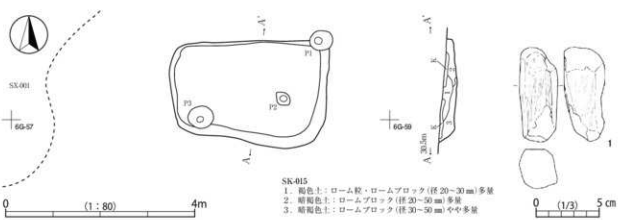
6H-41・51グリッドに所在する。北約0.2ｍにSK-019が近接する。東辺壁と底面の一部に撹乱を受けている。平面形は東辺中央に突出部のある長方形で、長軸方向はN-４°-Eである。規模は長軸長3.32ｍ・短軸長3.04ｍで、確認面からの深さは0.25ｍである。東辺突出部は底面より５㎝ほど高くなっている。

図示できる遺物は出土していない。

SK-019（第53図、第３表、図版20）

6H-31・41グリッドに所在する。南東隅でSK-018と重複し、本遺構の方が古い。西側の壁上面に撹乱を受けている。平面形はほぼ方形で、軸方向はN-15°-Wである。規模は一辺2.24ｍで、確認面からの深さは0.44ｍである。東西両壁の壁沿いの中央にピットがあり、簡易な屋根の柱跡と推測される。P1は径21㎝・底面からの深さ８㎝、P2は径34㎝・底面からの深さ22㎝である。埋土はローム粒やロームブロックを主体とする暗褐色土が厚く堆積していることから、人為的に埋め戻されたと推測される。

図示できる遺物は出土していない。



第54図　第Ⅱ地区SK-015

SK-022（第55図、第３表、図版20）

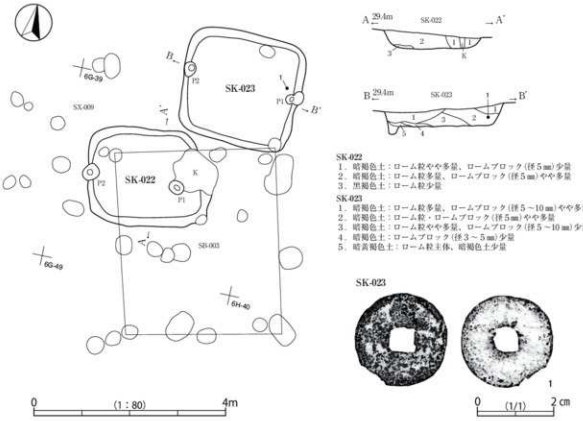
6G-39グリッドに所在する。遺構内にSB-003の柱穴とSX-009のピットがあるが、新旧関係は不明である。東側に底面まで及ぶ撹乱を受けている。北東約0.1ｍにSK-023が近接する。平面形は長方形で、長軸方向はN-80°-Eである。規模は長軸長2.53ｍ・短軸長2.0ｍで、確認面からの深さは0.42ｍである。西壁沿いの中央と東壁寄りにピットがあり、簡易な屋根の柱跡と推測される。P1は径32㎝・底面からの深さ32㎝、P2は長径30㎝・短径26㎝・底面からの深さ15㎝である。埋土はローム粒やロームブロックを多量に含む暗褐色土が厚く堆積しており、人為的に埋め戻されたと推測される。

図示できる遺物は出土していない。

SK-023（第55図、第３表、図版20・38）

6G-29・39、6H-20・30グリッドに所在する。遺構内にSB-003の柱穴とSX-009のピットがあるが、新旧関係は不明である。南西約0.1ｍにSK-022が近接する。平面形はほぼ方形で、長軸方向はN-90°-Eである。規模は長軸長2.50ｍ・短軸長2.34ｍで、確認面からの深さは0.47ｍである。東西両壁の壁沿いの中央にピットがあり、簡易な屋根の柱跡と推測される。P2は径29㎝・底面からの深さ11㎝、P4は径36㎝・底面からの深さ６㎝である。埋土はローム粒やロームブロックを含む暗褐色土であり、堆積状況から、人為的に埋め戻されたと推測される。

遺構に伴う遺物は図示した銭貨１点だけである。１は北宋銭の熙寧元宝である。書体は真書で、背文は無文である。縁外径24.5㎜・縁内径21.0㎜・郭外径7.5㎜・郭内径5.8㎜・縁厚1.0㎜・重さ2.34ｇである。初鋳年は1068年である。腐食が進んでいる。



第55図　第Ⅱ地区SK-022・023

土坑

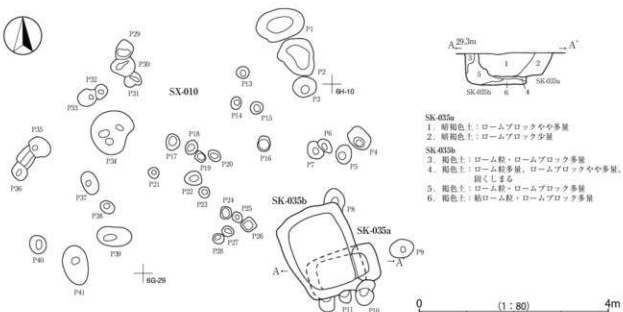
SK-035a･b（第56図、第３表、図版21）

6G-19・29、6H-10・20グリッドに所在する。発掘調査時に単一遺構として調査していたが、２基の土坑が重複していることから、南側のものをSK-035a、北側のものをSK-035bとした。埋土の状況は、SK-035bはローム粒やロームブロックを多量に含む褐色土が主体で、SK-035aはロームブロックを含む暗褐色土が主体である。土層の違いが明らかでSK-035aの方が新しい。いずれも埋土の堆積状況から人為的に埋め戻されたと推測される。周辺にSX-010ピット群があり、一部重複しているが、本遺構との新旧関係は不明である。

SK-035aは、平面形は長方形で、長軸方向はN-71°-Eである。推定規模は長軸長1.52m・短軸長0.88mで、確認面からの深さは0.50mである。南側長辺はSK-035bの南側短辺と重なる。

SK-035bは、平面形は長方形で、長軸方向はN-21°-Wである。長軸長1.94m・短軸長1.52mで、確認面からの深さは0.67mである。底面はやや丸味をおびる。

図示できる遺物は出土していない。



第56図　第Ⅱ地区SK-035a･b・SX-010

土坑群（ピット群）

SX-009（第52図、第３・16表、図版20）

6G-29・38・39・49、6H-30グリッドに所在する。SB-003とSK-022・023と重複するが、発掘調査時にはそれぞれのピットの帰属が必ずしも明確ではなく、整理作業時に図面上の検討によりSB-003とSK-022・023の柱穴を除いたP13～P30を本遺構のピットとした。ピットは17基で、比較的小形である。各ピットの規模等は第16表のとおりである。

本遺構に伴う遺物は出土していない。

第16表　SX-009ピット計測表　　単位：m　（　）推定値　<　>現存値

番号	形状	長軸	短軸	深さ	番号	形状	長軸	短軸	深さ	番号	形状	長軸	短軸	深さ
P13	円形	0.34	0.24	(0.56)	P14	楕円形	0.52	0.32	0.51	P15	円形	0.28	<0.25>	0.18
P16	円形	0.33	0.26	0.39	P17	円形	0.18	0.18	0.24	P18	円形	0.30	0.30	0.15
P19	円形	0.37	0.33	0.56	P20	円形	0.29	0.22	0.16	P21	円形	0.33	0.23	0.40
P22	楕円形	0.46	0.30	0.24	P23	楕円形	0.87	0.54	0.34	P24	円形	0.27	0.23	0.23
P25	円形	0.26	<0.20>	0.26	P26	円形	0.38	<0.35>	0.68	P27	円形	0.30	0.29	0.34
P28	円形	0.37	0.29	0.48	P29	楕円形	0.65	0.46	0.43	P30	円形	0.37	0.37	0.33

SX-010（第56図、第３・17表、図版20）

6G-08・09・18・19・28・29、6H-10・20グリッドに所在する。ピットは41基で、やや大形と小形のものがある。各ピットの規模等は第17表のとおりである。南東側でSK-035a・bと重複するが、新旧関係は不明である。発掘調査時及び整理作業時に掘立柱建物跡や柵列などの遺構を想定することはできなかった。

本遺構に伴う遺物は出土していない。

第17表　SX-010ピット計測表　　単位：m　（　）推定値　<　>現存値

番号	形状	長軸	短軸	深さ	番号	形状	長軸	短軸	深さ	番号	形状	長軸	短軸	深さ
P1	楕円形	1.03	0.65	0.65	P2	楕円形	0.90	0.70	0.39	P3	円形	0.52	0.44	0.62
P4	円形	0.51	0.40	0.26	P5	円形	0.42	0.34	0.47	P6	円形	0.38	<0.24>	0.43
P7	円形	0.40	<0.30>	0.37	P8	円形	0.45	<0.30>	0.34	P9	円形	0.53	0.40	0.65
P10	円形	<0.53>	0.38	0.36	P11	円形	<0.26>	0.26	0.24	P12	円形	<0.28>	0.32	0.20
P13	円形	0.28	0.26	0.18	P14	円形	0.27	0.22	0.10	P15	円形	0.27	0.27	0.14
P16	円形	0.31	0.28	0.12	P17	円形	0.36	0.28	0.07	P18	円形	0.33	0.25	0.05
P19	円形	0.26	0.18	0.06	P20	円形	0.29	0.22	0.09	P21	円形	0.24	0.22	0.07
P22	円形	0.38	0.28	0.11	P23	円形	0.26	0.21	0.09	P24	円形	0.27	0.23	0.07
P25	円形	0.26	0.21	0.20	P26	円形	0.30	0.28	0.12	P27	円形	0.28	0.23	0.28
P28	円形	0.26	0.22	0.22	P29	円形	0.44	0.33	0.25	P30	円形	0.48	0.43	0.23
P31	円形	0.35	<0.30>	0.16	P32	円形	0.32	0.25	0.14	P33	円形	<0.50>	0.36	0.50
P34	円形	0.92	0.84	0.40	P35	円形	0.48	0.43	0.54	P36	円形	0.36	0.30	0.29
P37	楕円形	0.50	0.32	0.41	P38	円形	0.35	0.27	0.15	P39	楕円形	0.74	0.40	0.43
P40	円形	0.38	0.38	0.22	P41	楕円形	0.85	0.52	0.41					

（３）　第Ⅲ地区

第Ⅲ地区は6H-02～05・12～16・22～26・32～36・42～46グリッドに所在する。この地区は傾斜面地には全く遺構がなく、東端の掘り込みに沿ってSX-003土坑群だけがある。

土坑群（ピット群）

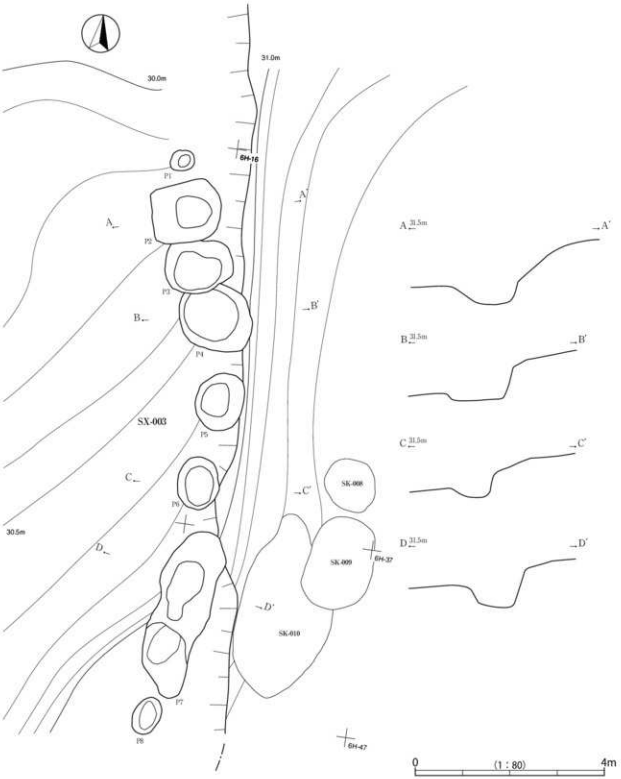
SX-003（第57図、第３・18表、図版21）

6H-15・16・25・26・35・36・45・46グリッドに所在する。土坑は８基で、南北に連なっている。土坑の多くが台地整形区画の掘り込みと重複し、埋土の記録がないため新旧関係は不明であるが、台地整形区画の東端に沿って掘られていることから、台地整形区画に関連する土坑群であると判断した。P2～P4は重複するが、新旧関係は不明である。P7は２基の土坑が重なっているように見えるが、詳細は不明である。各ピットの規模等は第18表のとおりである。平面形は円形ないし楕円形で、規模は径0.8m以下のP1・P8と径１m前後のP5・P6、長軸長1.5m前後のP2～P4に分けることができる。第18表の深さは、台地整形区画の掘り込み底面からの深さである。P2～P7については、図面や記録写真などから台地整形区画の掘り込み壁面を削って作られていることが明らかである。

遺物は出土していない。

第18表　SX-003ピット計測表　　単位：m　（　）推定値　＜　＞現存値

番号	形状	長軸	短軸	深さ	番号	形状	長軸	短軸	深さ	番号	形状	長軸	短軸	深さ
P1	円形	0.50	0.42	0.24	P2	方形	1.47	1.24	0.30	P3	楕円形	1.42	1.10	0.44
P4	楕円形	1.60	1.38	0.07	P5	楕円形	1.20	0.98	0.16	P6	楕円形	1.10	0.88	0.12
P7	長楕円形	3.56	1.18	0.23	P8	楕円形	0.79	0.58	0.16					



第57図　第Ⅲ地区SX-003

2　南側台地整形区画（第58図、図版21・22）

本区画は、7G-29・39、7H-11～13・20～25・30～35・40～46・51～57・62～68・73～79・84～89・95～99、7I-80・90・91、8H-05～09・16～19・26～19、8I-00・01・10・11・20・21グリッドに所在する。範囲は北東から南西方向16m以上、北西から南東方向60m以上である。本区画はトレンチによる確認調査で南西側の谷を臨む台地縁辺部と傾斜地を整形していることが明らかになったが、南側の範囲は土砂流出等の危険が予想されたことから、表土除去を行わず確認調査による記録作成に止めることとした。本区画は台地縁辺部に平坦面を作り出しているSX-004と、傾斜面を階段状に掘削して下部に平坦面を作り出しているSX-005の２つの土地整形遺構が重複しているものである。SX-004の範囲内には土坑９基とピット21基がある。

土地整形遺構

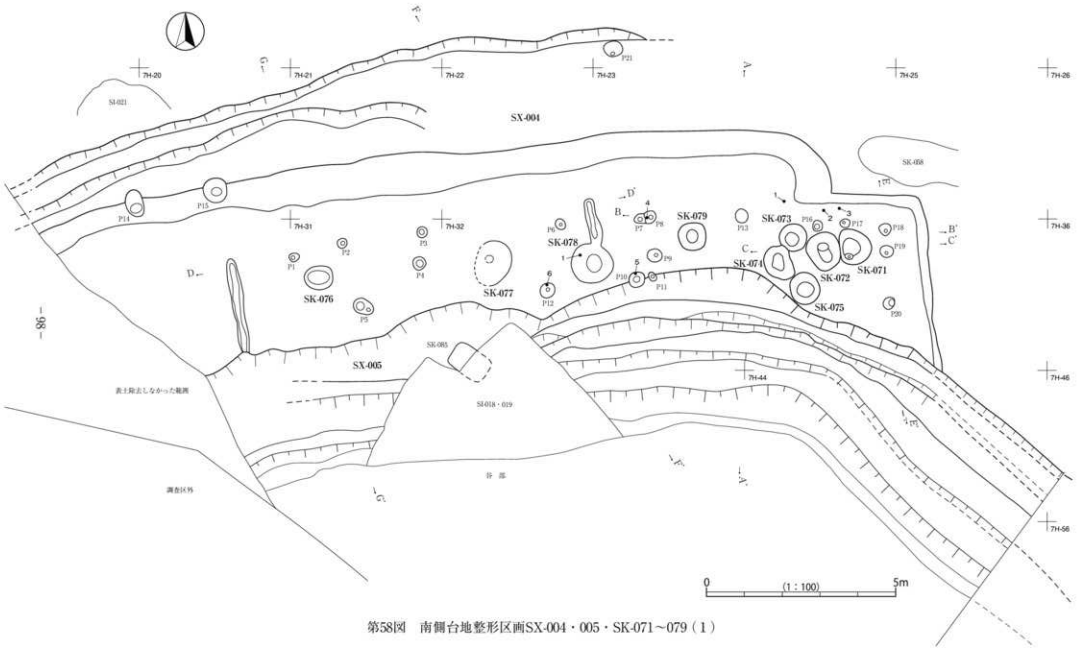
SX-004（第58・59図、第３・19・22・23表、図版21～23・39）

本遺構は、7G-29・39、7H-11～13・20～25・30～35グリッドに所在する。規模は東西24m以上・南北７ｍの範囲である。北側に２段の階段状の整形があり、その下に平場状整形が行われている。平場状整形の東端の方形に張り出している部分については、発掘調査時に竪穴住居跡と想定しSI-016の番号を付けて調査したが、整理作業において遺物や調査記録を精査した結果、竪穴住居跡ではないと判断した。西側の調査区外に接する部分は、危険防止の観点から表土除去を行わなかった。北側の階段状整形は西側の奥行きが約30cmと狭く、東側に行くほど広がるが、掘り込みは次第に不明確になる。深さはいずれも15cm～25cmである。底面は平坦ではなく、南に向かって低くなり、東西方向は地形に沿って西から東に向かって高くなっている。この中にはピットが３基ある。平場状整形は現状で幅（東西長）23m・奥行き（南北長）4.5mの範囲で遺存している。全体の形状は長方形で、東端は張り出している。北壁は西側と東側がなだらかに掘り込まれ、深さは20cm～30cmと浅い。P15とP8の間の壁は、斜めであるがしっかりと掘り込まれ、深さは60cm～80cmと深い。東端の張り出し部の壁はかなり鋭角に掘り込まれているが、深さは20cm～40cmである。内側に９基の土坑と18基のピット、２条の間仕切り状の溝がある。これらのうち２条の間仕切り状の溝端部とその内側のP1～P3は直線状に並んでいる。また、P6～P8・P13・P16～P18も多少のずれはあるものの、ほぼ直線状に並んでいる。P18～P20は東端壁に沿って直線状に並んでいる。これらの並び方向は、近接する北壁の方向ともほぼ一致することから、簡易な掘立柱建物跡などの柱穴と推測される。本遺構は奥行きが狭く、ピットや間仕切り状の溝がSX-005と重複していることなどから、本来は南側がもっと広く整形されていたが、SX-005によって削平されたと推測される。

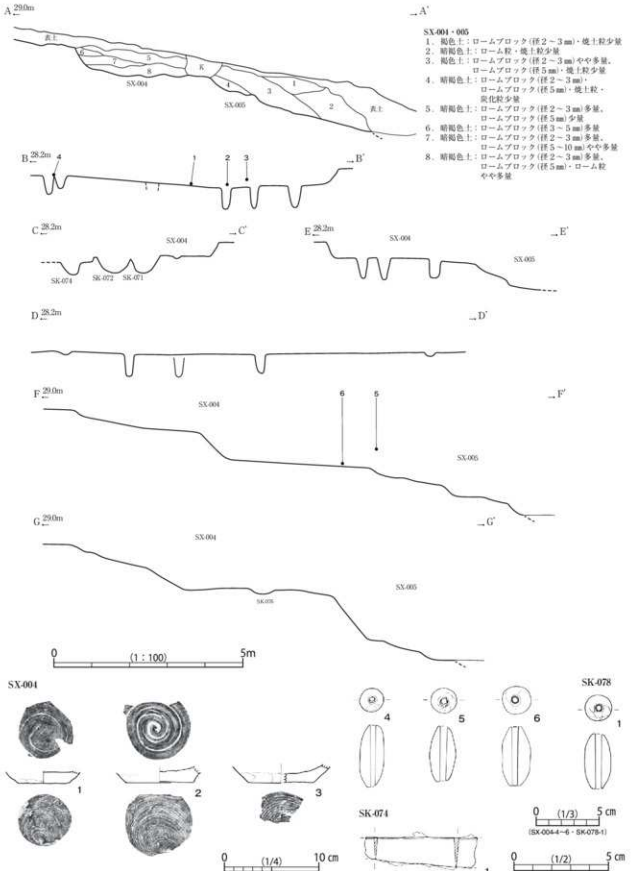
遺物は全て平場状整形部分から出土している。土師器片などの小破片が多量に出土しているが、本遺構に伴うものは少なく、図示できた遺物は土師質土器など６点である。１～３は土師質土器の杯底部である。１・２は底部内面に強いロクロナデによる凹凸が見られる。全て底部は回転糸切り離し、無調整で、体部外面はヘラ削り調整が施される。４～６は管状土錘で、紡錘形をしている。３点とも片側からの穿孔で、ナデと丁寧なミガキが施される。５・６は穿孔の後に、両端を丁寧に調整している。

SX-005（第58・59図、第３表、図版21～23）

7H-30～35・40～46・51～57・62～68・73～79・84～89・95～99、7I-80・90・91、8H-05～09・16～19・26～19、8I-00・01・10・11・20・21グリッドに所在する。本遺構が更に南側に続いていることを確認トレンチで確認したが、土砂流出等の危険が予想されたことからこの部分の表土除去は行わず、トレンチによる検出状況の記録作成に止め調査を終了した。また、表土除去を行った範囲についても、SI-018・019の壁溝



第58図　南側台地整形区画SX-004・005・SK-071～079（1）



第59図　南側台地整形区画SX-004・005・SK-071～079（2）

の一部を検出した確認面を本遺構下部の平坦面とし、それ以下は掘り下げていない。規模は推定で幅(北西～南東長)54m・奥行き(北東～南西長)20mの範囲である。本遺構の傾斜は、現地形の等高線にもはっきりと表れていることから、南西側斜面を整形した弧状の階段状遺構と推測される。SX-004底面からの深さと傾斜角度は、西端で1.8mと26°、SI-019の東端付近で1.44mと22°、SX-004の東端付近で0.95mと14°であり、東に行くほど浅く傾斜角度が緩くなっている。各段の掘り込みには、幅や高さなどに規則性は見られない。

遺物は土師器等の小破片だけで、本遺構に伴うものは出土していない。

第19表　SX-004ピット計測表　　単位：m　(　)推定値　<　>現存値

番号	形状	長軸	短軸	深さ	番号	形状	長軸	短軸	深さ	番号	形状	長軸	短軸	深さ
P1	円形	0.26	0.21	0.64	P2	円形	0.28	0.28	0.59	P3	円形	0.30	0.26	0.54
P4	円形	0.35	0.35	0.45	P5	楕円形	0.56	0.40	0.68	P6	円形	0.31	0.24	0.46
P7	円形	<0.33>	0.25	0.47	P8	円形	0.33	<0.30>	0.35	P9	円形	0.41	0.36	0.57
P10	円形	0.40	0.38	0.87	P11	円形	0.28	0.18	0.27	P12	円形	0.42	0.36	0.93
P13	円形	(0.36)	(0.36)	－	P14	楕円形	0.73	0.46	0.24	P15	円形	0.66	<0.61>	0.52
P16	円形	0.30	0.23	0.46	P17	円形	0.27	0.22	0.49	P18	円形	0.33	0.33	0.55
P19	円形	0.37	0.33	0.50	P20	円形	0.32	0.28	0.49	P21	円形	0.54	0.42	0.31

土坑

SK-071～075(第58・59図、第３表、図版21・39)

7H-34グリッドに所在する。SX-004の東端の張り出し部にあり、それぞれ重複ないし隣接するが、新旧関係は不明である。平面形は円形ないし楕円形である。規模は長径80cm～100cm・短径70cm～90cm・深さ40cm前後と類似しており、同じ目的で、ほぼ同じ場所に作り替えられたと推測される。

遺物はSK-074から鉄製品が１点出土している。１は刀子で、埋土中からの一括資料である。刀身の一部と考えられる。現存長49.0mm・幅15.0mm・厚さ3.0mm・現存の重さ10.73ｇである。

SK-076～079(第58・59図、第３・23表、図版21・39)

7H-31～33グリッドに所在する。東西にほぼ直線状に並んでいる。SK-077の西側半分は記録不備のため推定である。土坑間の距離はSK-076とSK-077が約3.8m、SK-077とSK-078が1.6m、SK-078とSK-079が1.8mであるが、いずれも北壁から約1.5mの場所にある。規模は中央のSK-077・078が径約110cm・深さ50cm前後、両脇のSK-076・079が長径76cm・短径65cm前後・深さ15cm前後である。SK-078は北側で間仕切り状の溝と接するが、溝は南側には延びていない。

遺物はSK-078から土製品が１点出土している。１は管状土錘である。SX-004の４～６の管状土錘と形状や大きさが近似した紡錘形である。ナデと磨きが施され、SX-004の５・６と同様に、上部からの穿孔の後、両端を丁寧に調整している。縦方向に接合痕が確認できる。

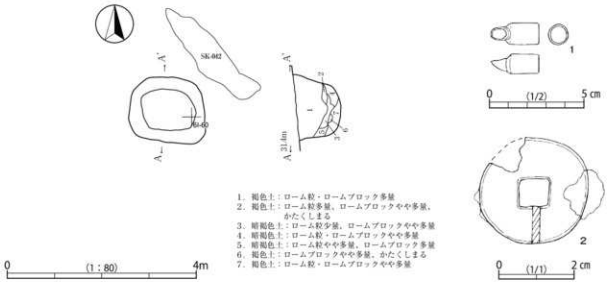
３　土坑墓

SK-027(第60図、第３表、図版23・39)

6H-59・69、6I-50・60グリッドに所在する。平面形は隅丸方形に近く、長軸方向はN-87°-Wである。規模は長軸長1.6m・短軸長1.36mで、確認面からの深さは0.96mである。底面は鍋底形である。遺構内一括で取り上げた遺物ではあるが、キセル雁首と鉄銭が出土していることから中・近世の土坑墓と判断した。

遺物は、図示したもののほかに土師器小破片が少量出土している。１はキセルの雁首である。火皿の部

分が欠損する。現存長15.5㎜・最大幅11.5㎜・孔径９㎜である。２は鉄銭である。遺存状態は悪く、銭種は不明である。縁外径28.0㎜・縁内径27.0㎜・郭外径8.5㎜・郭内径7.0㎜・縁厚2.05㎜・重さ4.0ｇである。



第60図　SK-027

4　土坑

SK-017a～d（第61図、第３表、図版23）

6H-51・61グリッドに所在する。４基の方形の土坑が隣接して掘られており、各土坑の新旧関係は不明である。SK-017aはSX-002ピット群を伴う窪地整形の埋土に覆われており、そのほかの土坑とともにSX-002の窪地整形時かそれ以前に掘られたと推測される。SK-017aは平面形が方形で、長軸方向はN- 6°-Eである。規模は長軸長1.16m・短軸長0.96mで、確認面からの深さは0.37mである。SK-017bは平面形が不整形で、長軸方向はN-45°-Eである。規模は長軸長1.28m・短軸長0.82mで、確認面からの深さは0.17mである。SK-017cは平面形が方形で、長軸方向はN-35°-Eである。規模は長軸長1.10m・短軸長0.80mで、確認面からの深さは0.59mである。SK-017dは平面形が方形で、長軸方向はN-12°-Wである。規模は長軸長1.14m・短軸長1.0mで、確認面からの深さは0.30mである。

遺物は出土していない。

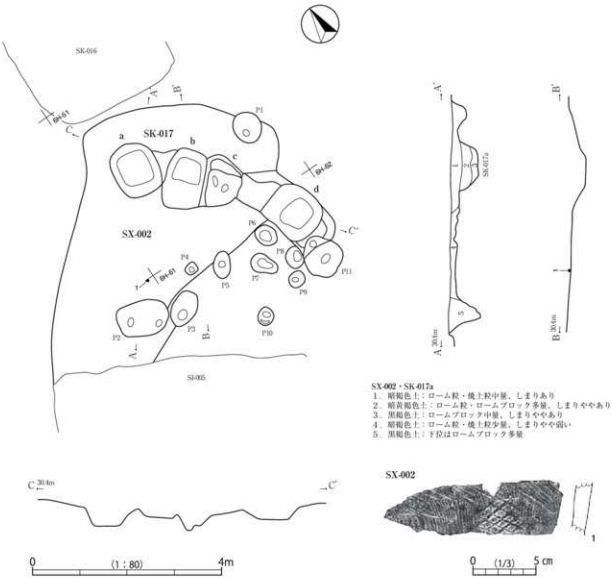
SK-051（第62図、第３表、図版９）

7G-09グリッドに所在する。北側は溝状の撹乱を受ける。平面形は隅丸台形で、長軸方向はN-58°-Eである。規模は長軸長1.39m・短軸長0.74mで、確認面からの深さは0.86mである。埋土の状況から中・近世の土坑と判断した。

本遺構に伴う遺物は出土していない。

SK-053～056（第62図、第３表、図版23）

6H-97グリッドに所在する。４基の土坑が重複しているが、SK-053・055・056は上端のみ図示した。北側でSI-014、南側でSI-012と重複する。それぞれの新旧関係は、土層断面図からSK-053はSK-055･056より新しく、SK-054はSK-055より新しい。SK-053は平面形が長方形で、長軸方向はN-84°-Eである。規模は長



第61図　SK-017a～d・SX-002

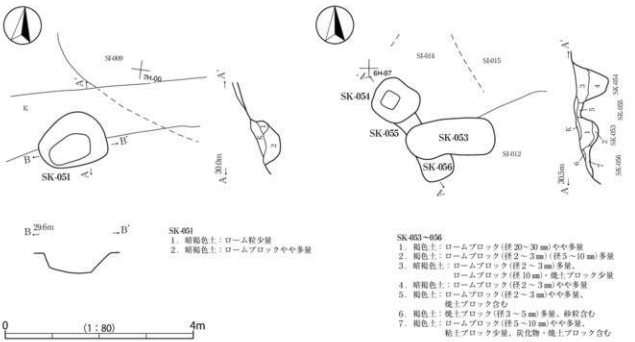
軸長1.9m・短軸長0.79mで、確認面からの深さは0.86mである。SK-054は平面形が方形である。規模は一辺1.0mで、確認面からの深さは0.45mである。埋土の状況から中・近世の土坑と判断した。

遺物は土器小破片が出土しているが、図示できるものはない。

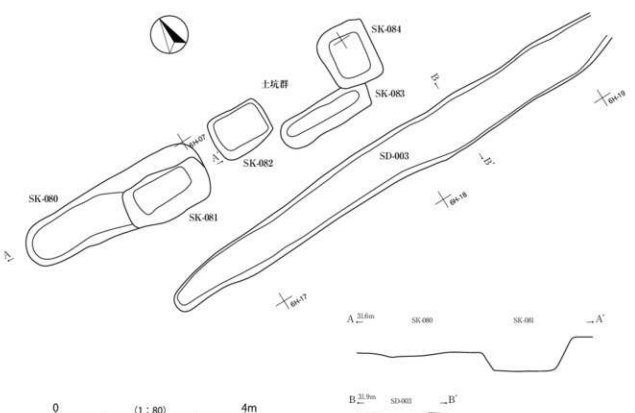
SK-080～084（第63図、第３表）

6H-06～08グリッドに所在する。北側台地整形区画東端に隣接する一段高い場所にあり、南側のSD-003に沿って東西に並んでいる。SK-080とSK-081、SK-083とSK-084はそれぞれ重複しているが、新旧関係は不明である。いずれも平面形は長方形である。SK-080は現存長軸長2.26m・短軸長1.04m・深さ0.25m、SK-081は長軸長1.92m・短軸長1.41m・深さ0.71m、SK-083は長軸長2.10m・短軸長0.63m・深さ0.45mである。SK-082・084は長軸長約1.4m・短軸長約1.0m・深さ0.32mで、ほぼ同規模である。長軸方向はSK-084がN-8°-Eで、そのほかがN-80°～90°-Wである。

いずれの遺構からも遺物は出土していない。



第62図　SK-051・053～056



第63図　SK-080～084・SD-003

5　土坑群（ピット群）

SX-002（第61図、第３・20表、図版23・39）

6H-50・51・60・61グリッドに所在する。ピットは17基で、実線で示した範囲は窪地整形の上端である。SK-017a～dと重複する。埋土の状況から、まずSK-017a～dの土坑及び浅い掘り込みによる窪地が整形され、１層・４層により窪地が埋め戻された後、最後に本遺構のピット群が掘られたと推測される。窪地整形は小規模かつ部分的で、掘り込みも不明瞭である。範囲は東西長6.8m・南北長5.9mである。ピットの平面形は円形ないし楕円形で、各ピットの規模等は第20表のとおりである。大きいものは長径112cm、小さいものは短径22cmである。確認面からの深さは深いもので73cm、浅いもので17cmである。

図示できた遺物は陶器１点で、そのほかに土師質・瓦質土器破片などが出土している。１は常滑窯製品の大甕の胴部破片である。外面は平行タタキ、内面はナデである。外面に斜格子刻印が見られる。

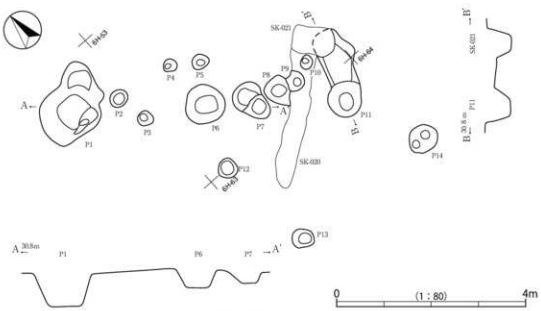
第20表　SX-002ピット計測表　　単位：m　（　）推定値　＜　＞現存値

番号	形状	長軸	短軸	深さ	番号	形状	長軸	短軸	深さ	番号	形状	長軸	短軸	深さ
P1	円形	0.68	0.59	0.46	P2	楕円形	1.12	0.73	0.73	P3	楕円形	0.78	0.53	0.30
P4	円形	0.37	0.22	0.24	P5	楕円形	0.56	0.36	0.24	P6	円形	0.50	0.40	0.19
P7	楕円形	0.62	0.38	0.34	P8	円形	0.45	0.36	0.17	P9	円形	0.36	0.32	0.48
P10	円形	0.42	0.35	0.41	P11	円形	0.92	0.82	0.72					

SX-006（第64図、第３・21表、図版23）

6H-52・53・63グリッドに所在する。南東側でSK-020・021と重複し、いずれも本遺構の方が新しい。ピットは14基で、東西4.5m・南北5.3mの範囲にある。ピットの規模等は第21表のとおりであるが、径30cm～50cmのものと60cm～80cmのものに大きく二分される。確認面からの深さは21cm～76cmで、径の大小に比例しない。P1は規模が最も大きく長軸長1.30m・短軸長1.12m・確認面からの深さ0.76mである。

遺物は出土していない。



第64図　SX-006

第21表　SX-006ピット計測表　　単位：m　（　）推定値　<　>現存値

番号	形状	長軸	短軸	深さ	番号	形状	長軸	短軸	深さ	番号	形状	長軸	短軸	深さ
P1	円形	1.30	1.12	0.76	P2	円形	0.41	0.36	0.41	P3	円形	0.32	0.28	0.26
P4	円形	0.30	0.25	0.47	P5	円形	0.36	0.30	0.51	P6	円形	0.84	0.83	0.42
P7	楕円形	0.90	0.50	0.31	P8	楕円形	(0.80)	0.56	0.21	P9	円形	<0.43>	<0.43>	0.62
P10	円形	0.30	0.25	0.63	P11	円形	0.74	0.70	0.56	P12	円形	0.46	0.40	0.26
P13	円形	0.45	0.41	0.51	P14	円形	0.64	0.58	0.66					

6　溝

SD-003（第63図、第４表）

6H-06～09グリッドに所在する。北側台地整形区画東端に隣接する一段高い場所にあり、北側には本遺構に沿った形でSK-080～084が並んでいる。走行方向はN-90°-Eで、調査範囲内では直線的に伸びている。西側は溝端部で、東側は調査範囲外に続いている。現状での総延長10.60m・幅0.86m～1.16m、確認面からの深さは0.05m～0.24mで、西側半分が深くなっている。

遺物は出土していない。

第22表　中・近世土器観察表　　（　）推定値　<　>現存値

遺構	掃図番号	種類	器種	法量(cm)	遺存度	胎土	色調・焼成	技法	備考
SK-014	第49図-1	陶器	三筋壺	口径　－ 底径　－ 器高　－	肩部	石英粒・砂粒	内面　鳶灰色(7.5YR4/1) 外面　鳶色(7.5YR4/3) 焼成　良好	内面　－ 外面　－ 底外面　－	自然釉 2条の沈線 13～14C常滑窯？
	第49図-2	瓦質土器	擂鉢	口径　(32.0) 底径　－ 器高　<9.0>	口縁部～体部上半	石英粒・白色砂粒	内面　橙色(7.5YR7/6) 外面　にぶい橙色(7.5YR7/4) 焼成　良好	内面　ナデ 櫛描き 外面　ナデ 底外面　－	地元産15～16C？
	第49図-3	カワラケ	小皿	口径　(8.0) 底径　(7.3) 器高　1.1	40%	石英粒・白色砂粒	内面　灰色(7.5YR6/1) 外面　灰色(5YR6/1) 焼成　良好	内面　ナデ 外面　ナデ 底外面　回転糸切り 手持ちヘラ	器面摩滅
	第49図-4	カワラケ	小皿	口径　(7.3) 底径　(6.8) 器高　1.2	55%	石英粒・白色砂粒	内面　橙色(7.5YR7/4) 外面　橙色(7.5YR7/6) 焼成　良好	内面　ナデ 外面　ナデ 底外面　回転糸切り 手持ちヘラ	器面摩滅
SK-018	第50図-1	瓦質土器	甕	口径　－ 底径　－ 器高　－	胴部	石英粒・白色砂粒 砂粒	内面　橙色(5YR6/6) 外面　橙色(2.5YR6/6) 焼成　良好	内面　ナデ 外面　ヘラナデ 底外面　－	常滑大甕模倣15～16C？
SX-001	第49図-1	土師質土器	杯	口径　－ 底径　(6.8) 器高　<1.9>	底部	石英・白色砂粒	内面　にぶい橙色(5YR7/4) 外面　にぶい橙色(7.5YR7/3) 焼成　良好	内面　ロクロナデ 外面　ロクロナデ 底外面　回転糸切り 無調整	
SX-002	第61図-1	陶器	甕	口径　－ 底径　－ 器高　－	胴部	白色砂粒	内面　黄褐色(10YR5/6) 外面　黄褐色(2.5YR5/3) 焼成　良好	内面　ヘラナデ ナデ 外面　平行タタキ 底外面　－	鉄釉之刻印 常滑窯
SX-004	第59図-1	土師質土器	杯	口径　－ 底径　5.6 器高　<1.3>	胴部下位～底部	白色砂粒・雲母	内面　橙色(7.5YR6/6) 外面　にぶい橙色(7.5YR6/4) 焼成　良好	内面　ロクロナデ 外面　ロクロナデ 手持ちヘラ削り 底外面　回転糸切り 無調整	
	第59図-2	土師質土器	杯	口径　－ 底径　7.4 器高　<1.7>	底部	白色砂粒・雲母	内面　明褐色(7.5YR5/6) 外面　橙色(7.5YR6/6) 焼成　良好	内面　ロクロナデ 外面　ロクロナデ 手持ちヘラ削り 底外面　回転糸切り 手持ちヘラ削り	
	第59図-3	土師質土器	杯	口径　－ 底径　(7.0) 器高　<2.0>	胴部下位～底部	白色砂粒・雲母	内面　黒色(5YR1.7/1) 外面　にぶい赤褐色(5YR4/4) 焼成　良好	内面　ロクロナデ 外面　ロクロナデ 手持ちヘラ削り 底外面　－	

第23表　中・近世土製品観察表　　<　>現存値

遺構番号	掃図番号	遺物番号	種類	法量：mm　g					色調	備考
				最大長	最大幅	最大厚	孔径	重量		
SK-078	第59図-1	2	管状土錘	44.0	20.5	－	4.5	19.28	灰黄褐色(10YR4/2)	
SX-004	第59図-4	SX-004-6	管状土錘	49.0	18.5	－	3.5	17.42	黒褐色(2.5Y3/2)	
	第59図-5	SX-004-8	管状土錘	44.0	21.0	－	4.5	17.57	黄灰色(2.5Y4/1)	
	第59図-6	SX-004-10	管状土錘	47.0	21.5	－	4.5	23.92	明灰黄色(2.5Y4/2)	

第３章　まとめ

旧石器時代

ローム層中から出土した石器は、総数10点である。そのうちⅥ層～Ⅶ層境界面から出土した石器７点について、点数僅少ではあるが、一括性が高いと判断し１か所のブロックを設定した。これを第１ブロックと呼称した。ここでは、この第１ブロックについて、石器群の様相をまとめ、編年的位置づけを行う。

第１ブロックは剥片６点・石核１点が出土し、接合資料が２例確認された。第２章第２節で述べたとおり、本ブロックは後世の削平の影響を受けており、石器群は本来の全容を保っていない可能性が高い。しかしながら、以下の①～③の特徴からⅥ層～Ⅶ層境界面に生活面を持つブロックであると判断した。①残存する全ての石器がⅥ層～Ⅶ層境界面から出土している。②石材は全て良質な硬質頁岩（いわゆる東北産頁岩）あるいは珪質頁岩である。③良質石材を徹底的に消費する石刃リダクションを技術基盤とする。

これらの特徴は、下総台地のAT降灰前後の時期に頻出する“大型石刃をブランクとし特徴的なリダクションを行う石器群”いわゆる「下総型石刃再生技法」[注1]ないし「千田台技法」[注2]を技術基盤とする石器群の特徴を網羅する。刃部再生と小剥片類生産のいずれが主体的であるかは、コンテクストが断片的であり判断できない。検出できた内容においては、小剥片類生産が主体的で、ブランクの技術形態や両極剥離の例からは、石材消費戦略における末端的様相が看取できよう。類似する石器群としては、成田市香山新田中横堀遺跡・同天神峰奥之台遺跡・多古町千田台遺跡・東金市滝東台遺跡などがあげられる[注3]。

縄文時代

縄文時代の遺構は陥穴が11基（SK-010・011・020・024・030・042・043・046・050・052・058）検出された。今回の調査で出土した縄文時代遺物は極めて少なく、本遺跡は居住の場としては利用されなかったものと推測される。取香川中流域の縄文時代集落跡は、中期の野毛平木戸下向山遺跡や長田雉子ヶ原遺跡を除いて現在まで確認されていない。本遺跡と同様に陥穴のみ検出された馬場扇ノ作遺跡が取香川対岸にあるが、縄文時代を通して遺跡や遺構が希薄な地域と言える。今回出土した土器は中期～後期であるが、これは本遺跡の北西に位置する関戸谷津之台遺跡[注4]や隣接する関戸砦跡[注5]の調査成果と同様である。

弥生時代

弥生時代の遺構は、竪穴住居跡が３軒（SI-002・007・009）検出された。これらは6G-66を北西端、7G-06を南西端、6H-64を北東端、7H-04を南東端としておよそ20m×36mの範囲に収まる。一方で遺構外出土遺物が多く、分布としては竪穴住居跡に近接する範囲に集中するものの、調査範囲に広く分布していることが確認された。遺構の内外を問わず、遺物のほとんどは破片資料であり、接合できた個体も極めて少ない。おそらくは、本遺跡には検出された数以上の竪穴住居跡が存在していたものの、後世の攪乱等により、遺構が消失したものと推測される。

遺構の時期は第２章第４節で触れたように、出土土器の様相からSI-002が後期中葉、SI-007が後期初頭、SI-009が後期と判断した。中期後葉に帰属すると判断できる遺構は検出されていないものの、宮ノ台式や足洗式など中期後葉の土器が遺構外で出土しており、本遺跡における集落の形成は少なくとも中期後葉には始まり、後期中葉頃まで継続するものと推測される。土器の様相としては、中期後葉～後期中葉まで北関東系土器を主体としつつ南関東系土器が共伴するが、中期末～後期初頭に属する南関東系土器は確認で

きず、従来指摘されてきた印旛沼周辺地域の様相[註6・7]と親和的である。このような集落の存続期間・土器の様相は、本遺跡の北西に位置する関戸谷津之台遺跡[註4]や関戸遺跡[註8]の調査結果と同様であり、この台地上における弥生時代集落の傾向として捉えることができる。なお、SI-007から中期前葉から中葉の可能性のある北関東系土器（第15図-12）が出土した点は注目される。

古墳時代

古墳時代の遺構は、中期～後期の竪穴住居跡が一部重複しながら14軒（SI-001・003a・b・004～006・012～015・017～020）検出された。そのほかに土坑３基（SI-021、SK-021・044）・溝１条（SD-006）が検出された。遺跡からは古墳時代初頭～後期にかけての遺物が確認されたが、集落は古墳時代中期～後期を中心に営まれたと推測され、いくつかの竪穴住居跡から土器類がまとまって出土した。

古墳時代中期～後期初頭の遺構はSI-003a・b・004・005・015・019・021・SK-044が該当する。この時期の遺構は調査区西部と東部に所在する。遺物の遺存状態は良好ではないが、杯・高杯・甕・甑などが出土し、赤彩された杯・高杯も含まれる。そのほかにもハケ調整が施されるものや底径の小さな甕などが特徴的である。また、財団法人印旛郡市文化財センターによって調査された関戸砦跡[註5]の「調査区南東側斜面地」では、５世紀後半～末の須恵器や古墳時代中期の土師器・有孔円板などの石製品及び未成品が集中して出土している。古墳時代後期中葉以降の遺構はSI-001・006・012 ～ 014・017・018・020・SK-021が該当する。この時期の遺構は調査区中央部を中心に分布する。遺物の出土量は豊富で、杯・甕・甑などが出土し、黒色処理が施された杯が含まれる。また、土製品・石製品の種類も豊富で、祭祀に関連したと考えられる遺物が多く出土している。

本遺跡における集落の展開は、古墳時代中期に始まり、関戸砦跡などでも見られたように台地縁辺部に居住していたと考えられる。その後、古墳時代後期中葉以降には台地奥を中心に集落を形成するが、小規模な集落として存続していたものと思われる。

本遺跡の古墳時代の出土遺物として特筆すべきものとして、SI-020から完形で出土した２点の土鈴があげられる。完形で出土する土鈴は珍しく、貴重な資料である。そこで今回、その内部構造を非破壊により明らかにするべく、千葉県産業支援科学技術研究所において、X線CT試験を行なった。その結果、同一の竪穴住居跡より出土した２点の土鈴に、内部空間の広さ、内容物の材質、製作方法やなどに違いがあることが確認できた。

16は内部の空洞が狭小な点が特徴である。狭小な空間には、最大長約９㎜の石が１点と、土鈴自体の胎土と似た、直径５㎜前後の土製の丸が３点の合計４点が確認できた。製作方法については、粘土の接合痕及びX線CT画像の観察から、上部は複数の細かな粘土を組み合わせて作成されており、下部は碗型に成形して作られていると考えられる。上下をそれぞれ作成した後、上部に下部を張り付けている。さらに、全体の形状を指ナデで整えた後、最後に下部の切込み及び上部の吊手部分に穿孔を施していると思われる（図版40・１～７）。

17は縦長で内部の空洞が広い。内部には土鈴自体の胎土と似た最大長７㎜前後の土製の丸が２点確認できた。製作方法は、接合痕及びX線CT画像の観察から、碗型に整えた底部に裏面と表面から側面のパーツをそれぞれ接合し、上部をかぶせた後、全体を指ナデやヘラナデにより成形したと考えられる。上部の吊手の部分は、粘土の接合痕は確認できず、上部の粘土をつまみ上げて成形したと推定される。また上部の穿孔は、両側から下部に向かって斜めに穿孔し、更に両側から水平に穿孔していると推定される（図版40・

8～14)。

土鈴の製作方法については国生尚の「土鈴集成」の中で言及され、上下を別々に作り下部に上部をかぶせるように接続する二分割成形と、底部の方から作り紐の方に絞りながら成形する一体成形の２つがあるとされている[註9]。16は二分割成形によって製作され、17は論文では指摘されなかった製作方法で作られていることが明らかになった。

県内の類例では、佐倉市間野台・古屋敷遺跡Ｃ地区（１点）[註10]、成田市大竹林畑遺跡（１点）[註11]・同中畠第１遺跡Ｆ地点（６点）[註12]、流山市三輪野山第Ⅱ遺跡（１点）[註13]、栄町大畑Ⅰ遺跡（１点）[註14]・同埴生郡衙跡（１点）[註15]、香取市大倉桜馬場遺跡（１点）[註16]の７遺跡があり、県内北部を中心として出土例が確認できる。

複数の土鈴が出土した中畠第１遺跡F地点での分類によると、形態からＡ：金属製の鈴の形態を模したもの、Ｂ：球形に近く、貼り付け把手がつき、鈴口のないもの、Ｃ：円筒型のもので、鈴口のないもの、の３種がみられる。県内で出土した事例を分類すると、Ｂは中畠第１遺跡出土の１点、Ｃは中畠第１遺跡出土の４点、Ａは本遺跡を含めた９点があてはまる。中畠第１遺跡では様々な形態の土鈴が出土しているが、多くの土鈴は金属製の土鈴を再現したものであると考えられる。また、土鈴の出土した遺構も竪穴住居跡で共通しており、本遺跡の土鈴も住居内での祭祀行為に伴い、製作・使用されたものと推測される。

奈良・平安時代

奈良・平安時代の遺構は、竪穴住居跡２軒（SB-001・002）・土坑11基（SK-004・005・007a・b・008・009・012・026・057・070・085）が検出された。竪穴住居跡は柱穴だけで、掘り込みは確認できなかったが、土坑からは遺物が比較的まとまって出土している。出土遺物から時期が明らかな土坑のうち、SK-085は９世紀中葉、SK-005・009・012・070は９世紀後葉、SK-004・008・026は10世紀前葉である。隣接する関戸砦跡では９世紀第２四半世紀と考えられる土坑が南西側台地縁辺部で検出されているだけで、竪穴住居跡は検出されていない。このことから、本遺跡は９世紀中葉～10世紀前葉の間に竪穴住居や土坑が作られたが、遺構数はわずかであり、この時代には本台地が居住の場としてはあまり利用されなかったと思われる。

中・近世

中・近世の遺構は、北側と南側の２か所の台地整形区画があり、この区画内を中心に土地整形遺構３基（SX-001・004・005）・掘立柱建物跡１棟（SB-003）・竪穴状遺構11基（SK-015・016・019・022・023・025a・028・029・032～034）・地下式坑２基（SK-014・018）・土坑墓１基（SK-027）・土坑31基（SK-001～003・017a～d・025b・c・031・035a・b・051・053～056・071～084）・土坑群（ピット群）７か所（SX-002・003・006～010）・溝１条（SD-003）が検出された。

北側台地整形区画は、北向きの斜面部の傾斜を変換するように掘り下げ、区画内に土坑群や地下式坑が存在する。各遺構とも遺存状態が悪いため、細かい時期や性格、前後関係は判然としない。その中で唯一、地下式坑SK-014の天井崩落土が小規模な台地整形区画SX-001に切られており、前後関係が判断できる。このことから、台地整形区画の中で地下式坑が機能していた第１段階と、その廃絶後にSX-001がなんらかの土地利用を行っている第２段階が想定できる。年代が分かる遺物は、SX-001から13世紀初頭の嘉泰通宝（南宋銭）が、SK-023から11世紀後半の熙寧元宝（北宋銭）が出土している。また、SK-014からは比較的遺存状態の良い瓦質の片口鉢が出土している。在地産の土器と思われるが、口唇部の拡張がみられ、常滑10型式（15世紀後半）に類似する。ただし、遺物の年代が上述の遺構の前後関係と整合しないため、伝来品である銭貨については正確な遺構の時期を反映していない可能性が高い。出土遺物全体の傾向をみると、粗悪な在地

系瓦質土器が目立つ。

南側台地整形区画は、南向き斜面に平場状遺構SX-004を形成し、更に階段状遺構SX-005を整形するものであり、平場状遺構内に土坑群が存在する。ここでは、平場状遺構とそれを切る階段状遺構の２段階の土地利用が想定できる。各遺構とも遺存状態が悪いため、細かい時期は判然としない。平場状遺構からは、漁労具として使用されたと推測される土錘がまとまって出土しており、この時代の漁労に関連する遺構であった可能性がある。

本遺跡の北西には関戸砦跡があり、中世後期の金山郷に関係する戦国城郭とされている[注17]。本遺跡北西の関戸砦跡まで延びる痩せ尾根上には点々と城郭状の構造物が確認されており[注5]、本遺跡の北側台地整形区画もこれらに関係する遺構である可能性もある。北側と南側の台地整形区画については、いずれも細かい時期や性格に関する情報が不足しているため、両区画が同時に存在したかどうかは明らかにすることはできない。

注１　1984『新東京国際空港埋蔵文化財調査報告書Ⅳ-No.7遺跡-』財団法人千葉県文化財センター
　　1995　新田浩三「下総型石刃再生技法の提唱」『研究紀要16』財団法人千葉県文化財センター
注２　1996『多古町千田台遺跡』千葉県文化財センター調査報告第283集
注３　1995『油井古塚原遺跡群』財団法人山武郡市文化財センター発掘調査報告書第25集
　　1997『新東京国際空港埋蔵文化財調査報告書Ⅹ-天神奥之台遺跡（No.65遺跡）-』千葉県文化財センター調査報告第304集
注４　2019『成田市関戸谷津之台遺跡』千葉県教育委員会埋蔵文化財調査報告第31集
注５　2001『千葉県成田市大生城跡・関戸砦跡』財団法人印旛郡市文化財センター発掘調査報告書第182集
注６　2007　高花宏行「『白井南式』と周辺土器の様相の検討」『研究紀要５』　財団法人印旛郡市文化財センター
注７　2013　小林嵩「下総における弥生時代後期の南関東系土器群について」『駿台史学』第149号　駿台史学会
注８　1983『成田新線建設事業地内埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅱ（関戸遺跡）』　財団法人千葉県文化財センター
注９　1992　国生尚「土鈴集成」『岩手考古学』第４号　岩手考古学会
注10　2013「佐倉市間野台･古屋敷Ｃ地区（第９次）」「第17回遺跡発表会　発表要旨」　公益財団法人印旛郡市文化財センター
注11　2008『大竹林畑遺跡Ⅵ・Ⅶ』財団法人印旛郡市文化財センター発掘調査報告書第261集
注12　1998『南羽鳥遺跡群Ⅲ』財団法人印旛郡市文化財センター発掘調査報告書第145集
注13　1996『主要地方道松戸野田線埋蔵文化財調査報告書』千葉県文化財センター調査報告第276集
注14　2006『栄町埋蔵文化財調査報告書４　大畑Ⅰ-４遺跡』　財団法人印旛郡市文化財センター
注15　1987『栄町埴生郡衙跡確認調査報告書Ⅱ』　千葉県文化財保護協会
注16　2014『千葉県香取市　大倉桜馬場遺跡　発掘調査報告書』　有限会社原史文化研究所
注17　1986　須田茂「城の用途と軍事構成」『成田市史　中世・近世編』　成田市

第65図　関戸関ノ台遺跡・関戸砦跡遺構配置

写　真　図　版

航空写真（S＝約1/10,000）

図版2

調査前①（西から）

調査前②（南西から）

調査前③（西から）

調査前④（北西から）

調査前⑤（南東から）

調査前⑥（南東から）

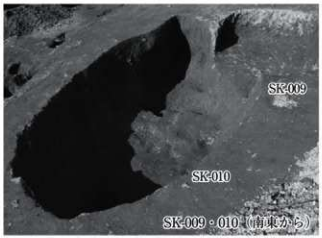
T6道構検出（北西から）

T7道構検出（南東から）

T12道構検出（東から）

第1ブロック東壁セクション（西から）

第1ブロック（東から）



SK-009・010（南東から）

SK-011（北西から）

SK-020（南西から）

SK-024（北から）

SK-030 セクション
（南から）

SK-030（南から）

SK-042・043（南東から）

SK-058（東から）

SK-046 セクション（北西から）

SK-046（南東から）

SK-050 セクション
（南から）

SK-050（南から）

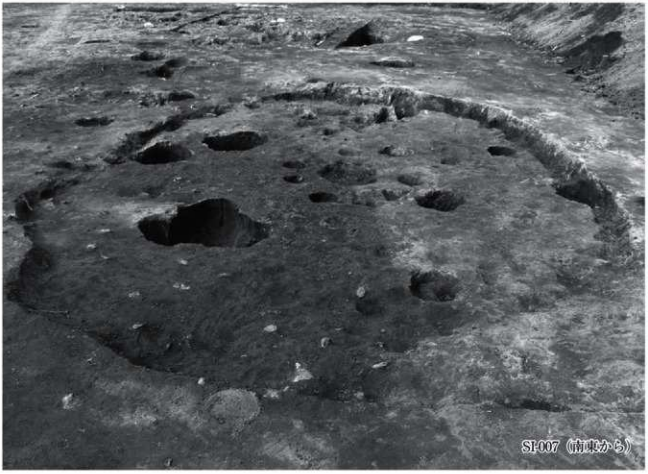
SK-052 セクション
（南から）

SK-052（南から）

SI-002 遺物（北東から）

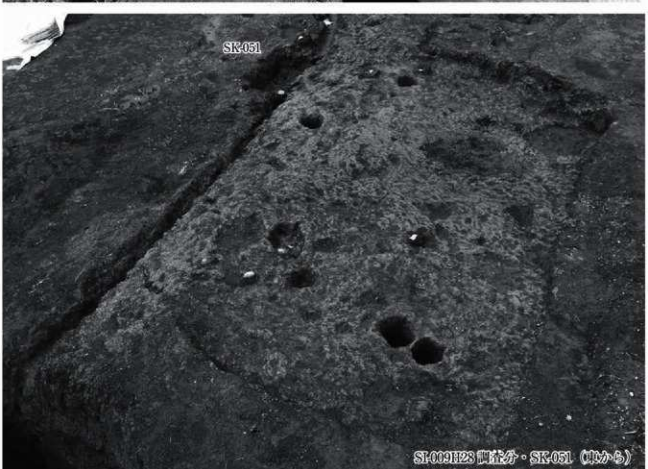
SI-002 遺物（北東から）

SI-002（南東から）



SI-007（南東から）

SI-009H27 調査分（東から）



SI-009H28 調査分・SK-051（東から）

SI-009 炉（南西から）

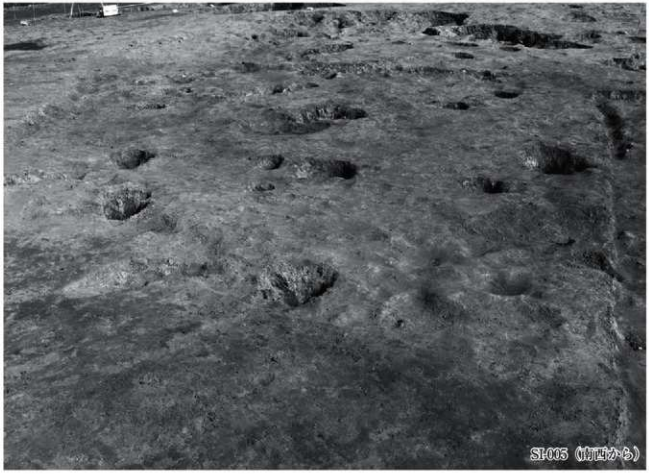
SI-001 カマド（南東から）

SI-001 カマド遺物（南東から）

SI-001 貯蔵穴遺物（北から）

SI-001（東から）

SF-003a・b（北西から）


SF-005（南西から）

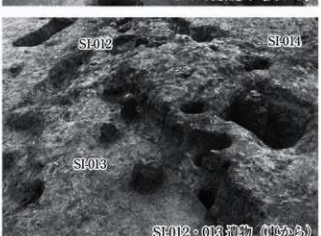
図版12

SI-006（西から）

SI-006 カマド（南西から）

SI-006 貯蔵穴（西から）

SI-013 カマド掘方（南から）

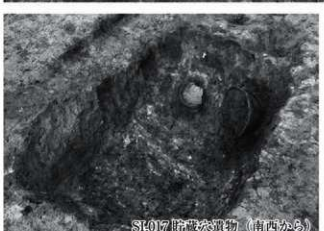


SI-012・013 遺物（東から）

SI-012～015（北西から）

SI-012～015（南西から）

SI-017・SK-070（南東から）


SI-017 貯蔵穴遺物（南西から）

SI-018・019 セクション（南東から）

SI-018・019 遺物（南西から）

SI-018 貯蔵穴遺物（南東から）

SK-018・019・SK-085（南東から）

SD-006・SK-057（北から）

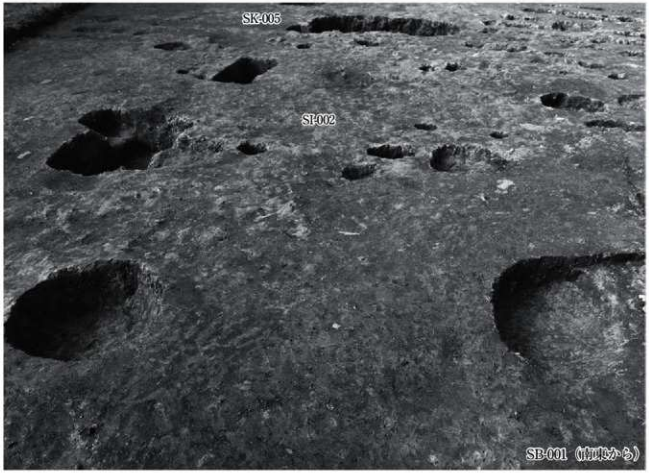
図版16

SF-020 貯蔵穴遺物（南西から）

SF-020 貯蔵穴セクション（西から）

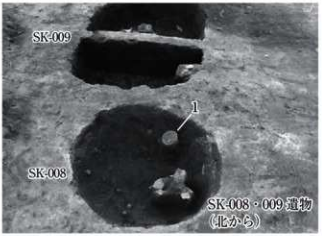
SK-021（南西から）

SK-004（西から）



SB-001（南東から）

SK-005（東から）

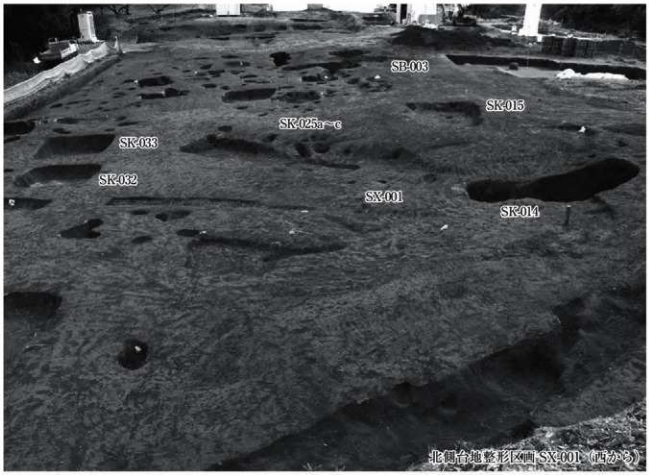


SK-008・009 遺物（北から）

SK-012（西から）

SK-026（南西から）

北側台地整形区画（東から）

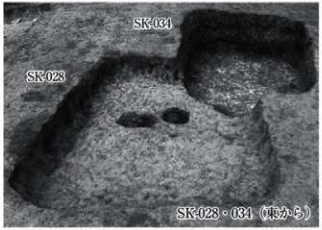


北調台地整形区画 SX-001（西から）

北調台地整形区画第Ⅰ地区北側（南西から）

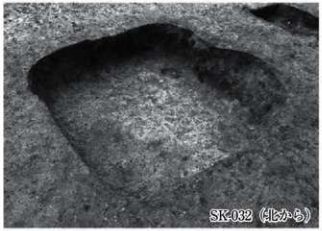
SK-014（北から）

SK-025a～c・SX-008（北東から）

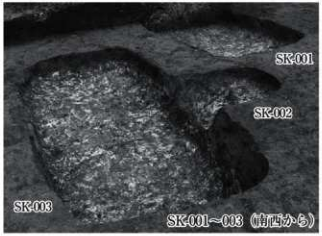


SK-028・034（東から）

SK-029（東から）

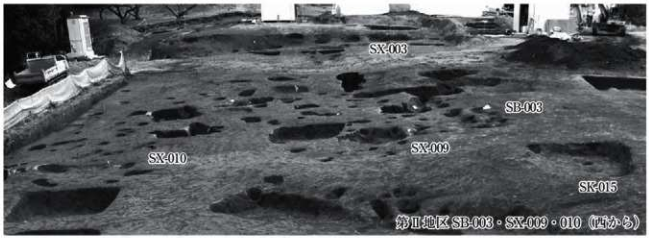

SK-032（北から）

SK-033（東から）



SK-001～003（南西から）

SK-031（西から）



第II地区 SB-003・SX-003・010（西から）

SK-018（東から）

SK-015（北から）

SK-016（西から）

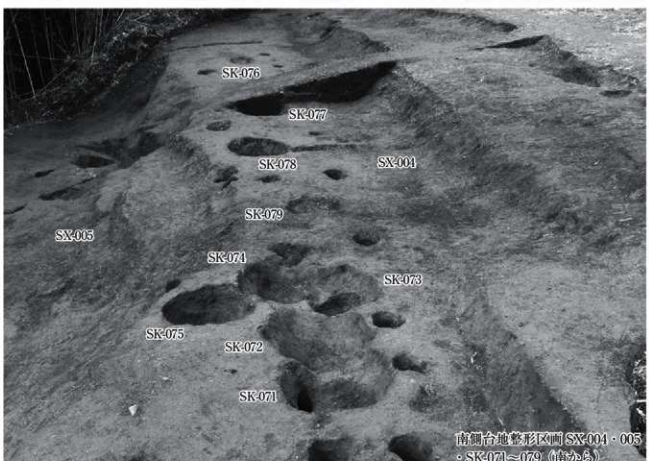
SK-019（西から）

SK-022（北から）

SK-023（北から）

SK-035a・b（北西から）

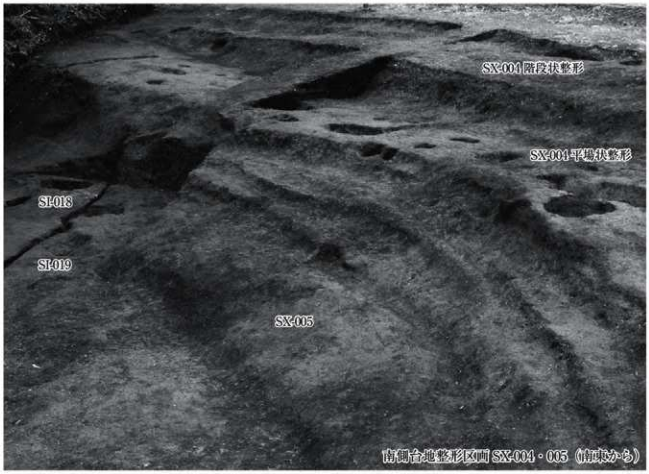
第Ⅲ地区 SX-003（南西から）



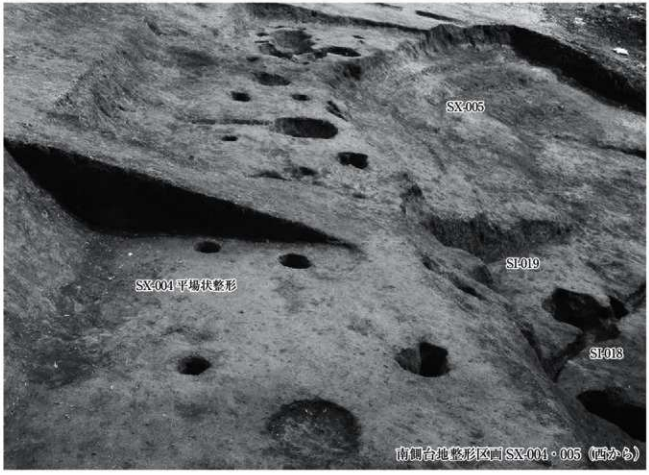
南斜面地整形区画 SX-004・005・SK-071～079（南から）

SX-005 セクション（南東から）

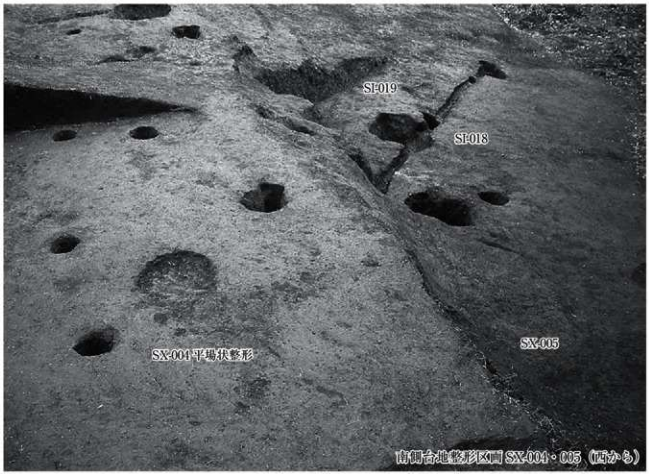
SX-004 セクション（東から）



南鍋台地整形区画 SX-004・005（南東から）

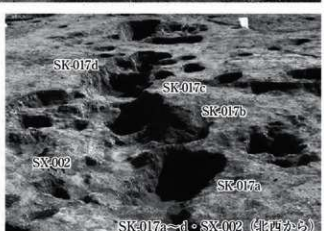


南鍋台地整形区画 SX-004・005（西から）

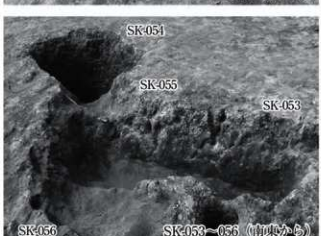


南鍛冶地整形区画 SX-004・005（西から）

SK-027（東から）



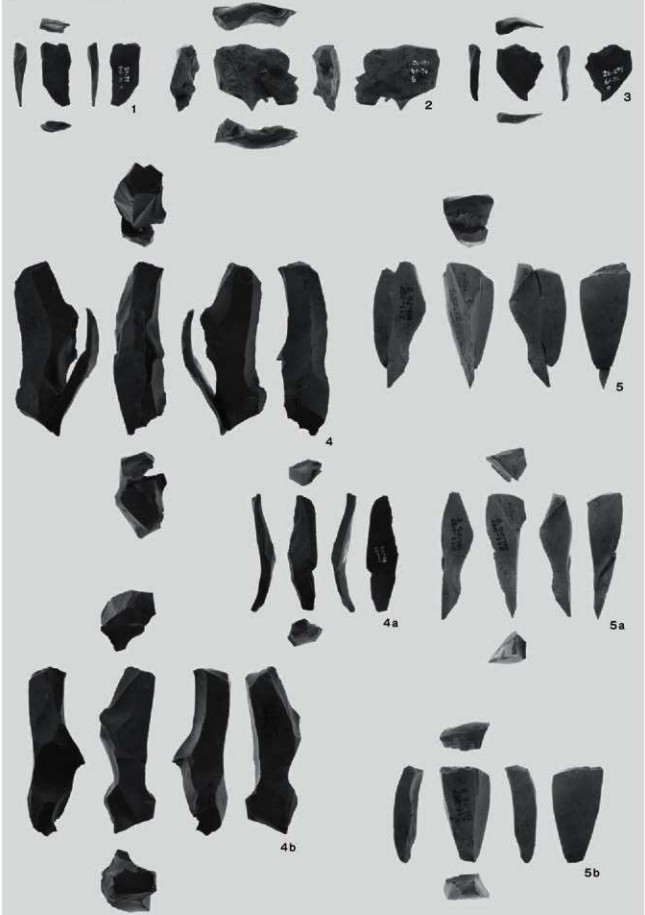
SK-017a～d・SX-002（北西から）



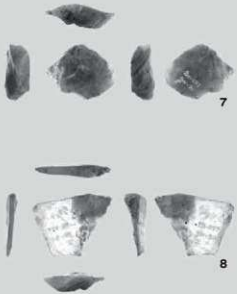
SK-053～056（南東から）

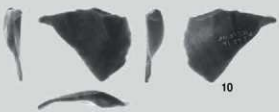
SX-006（北西から）

第1ブロック出土石器



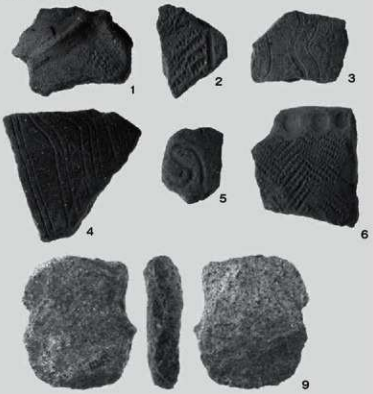
単独出土石器



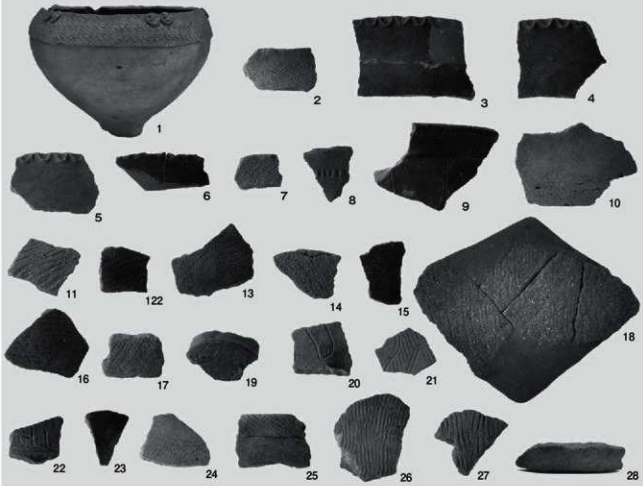


SK-050

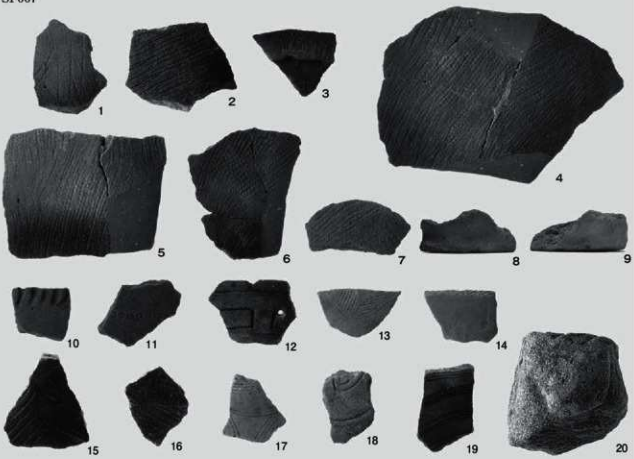
遺構外出土の遺物



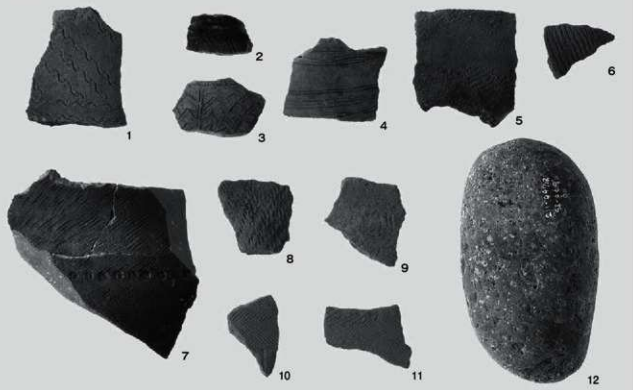
SI-002



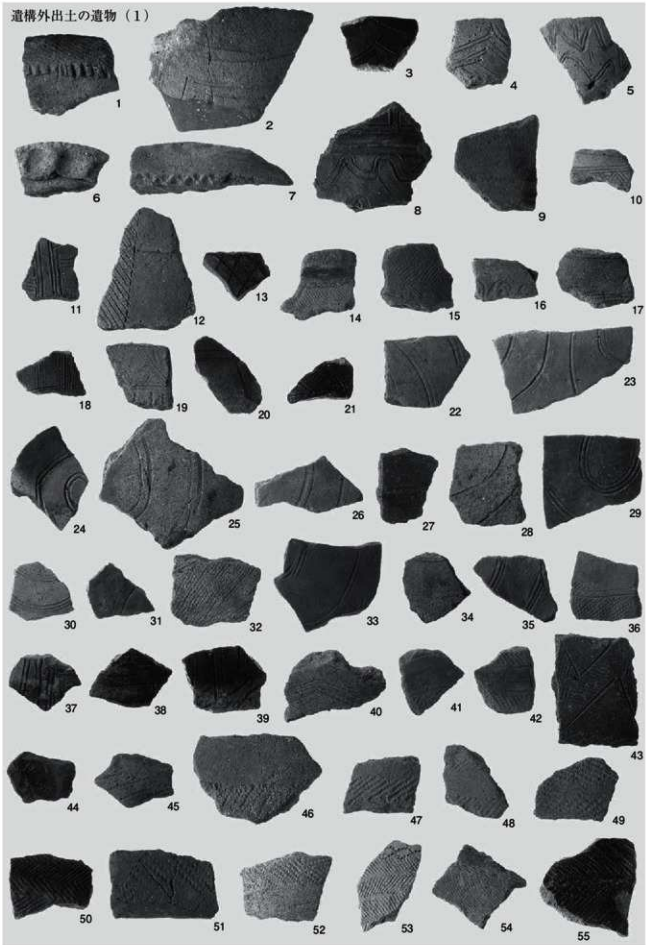
SI-007



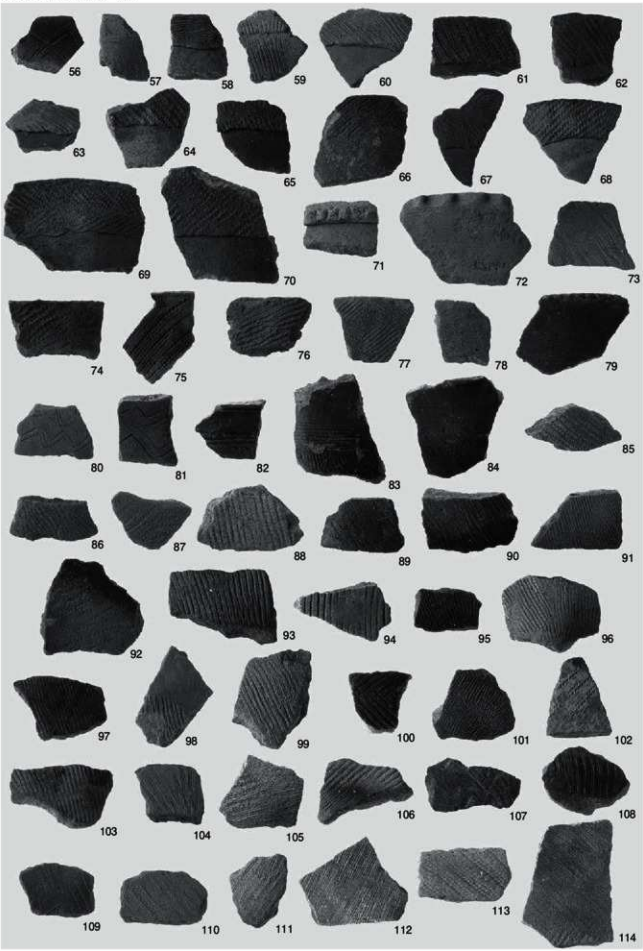
SI-009



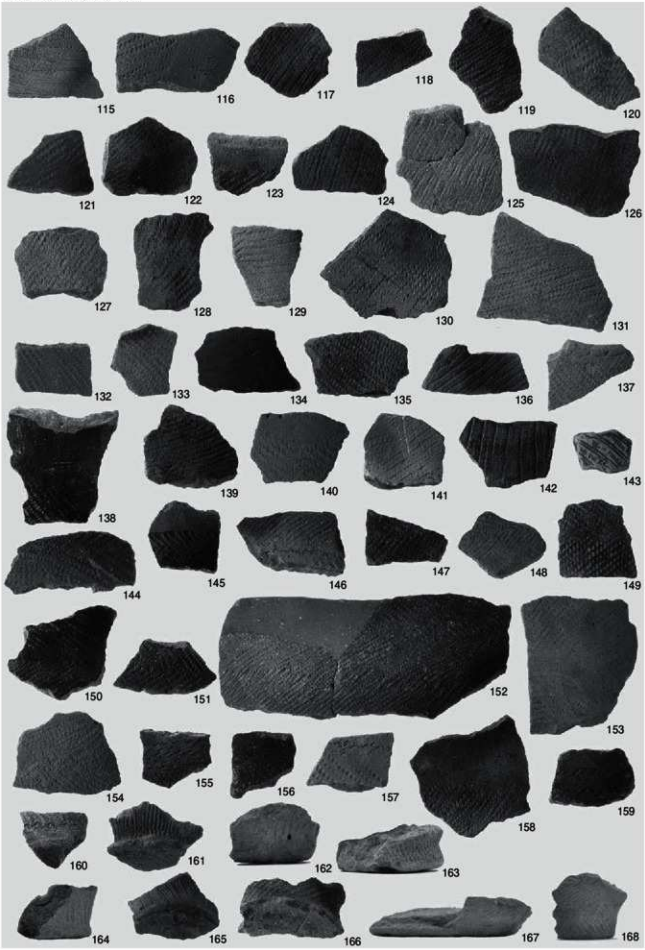
遺構外出土の遺物（1）


1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
32
33
34
35
36
37
38
39
40
41
42
43
44
45
46
47
48
49
50
51
52
53
54
55

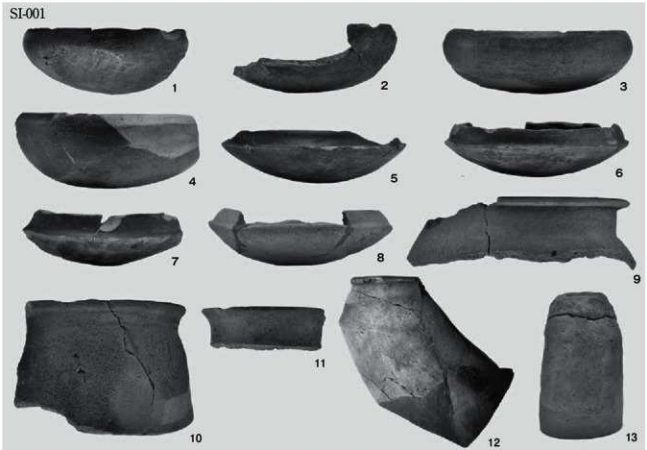
遺構外出土の遺物（2）


56
57
58
59
60
61
62
63
64
65
66
67
68
69
70
71
72
73
74
75
76
77
78
79
80
81
82
83
84
85
86
87
88
89
90
91
92
93
94
95
96
97
98
99
100
101
102
103
104
105
106
107
108
109
110
111
112
113
114

遺構外の出土遺物（3）


115
116
117
118
119
120
121
122
123
124
125
126
127
128
129
130
131
132
133
134
135
136
137
138
139
140
141
142
143
144
145
146
147
148
149
150
151
152
153
154
155
156
157
158
159
160
161
162
163
164
165
166
167
168

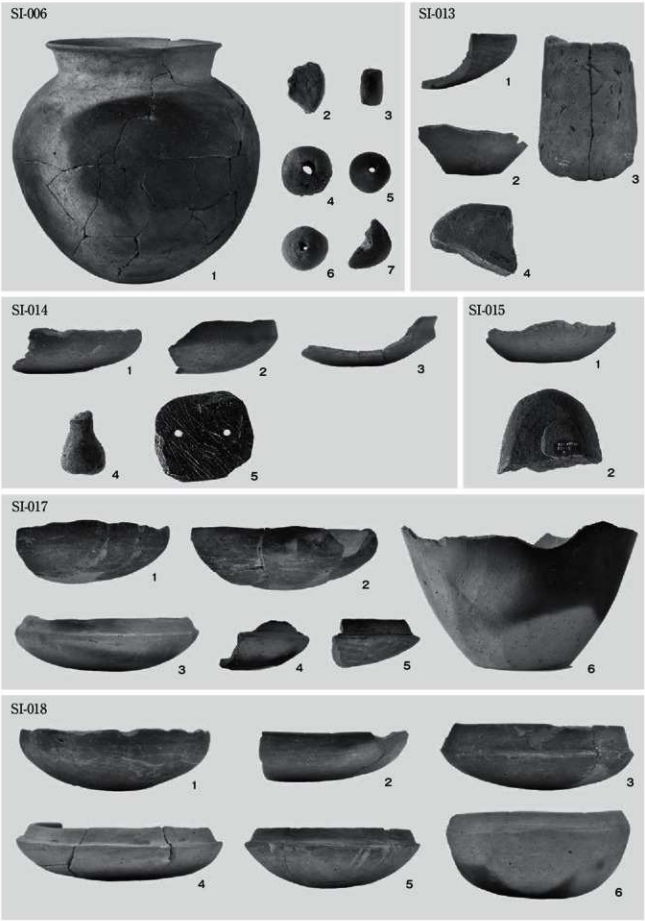
SI-001

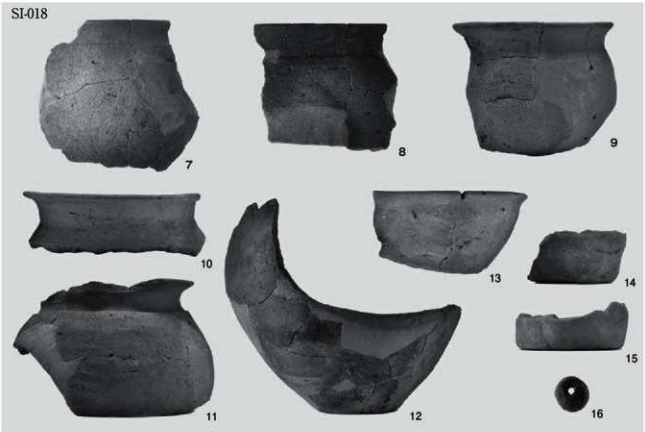


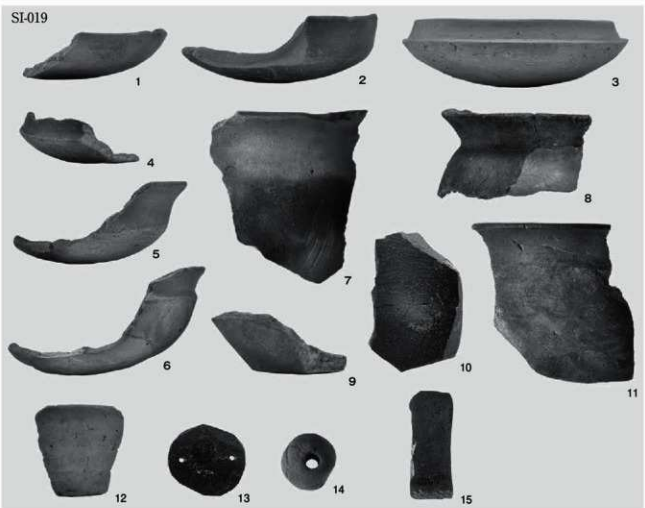
SI-003a・b

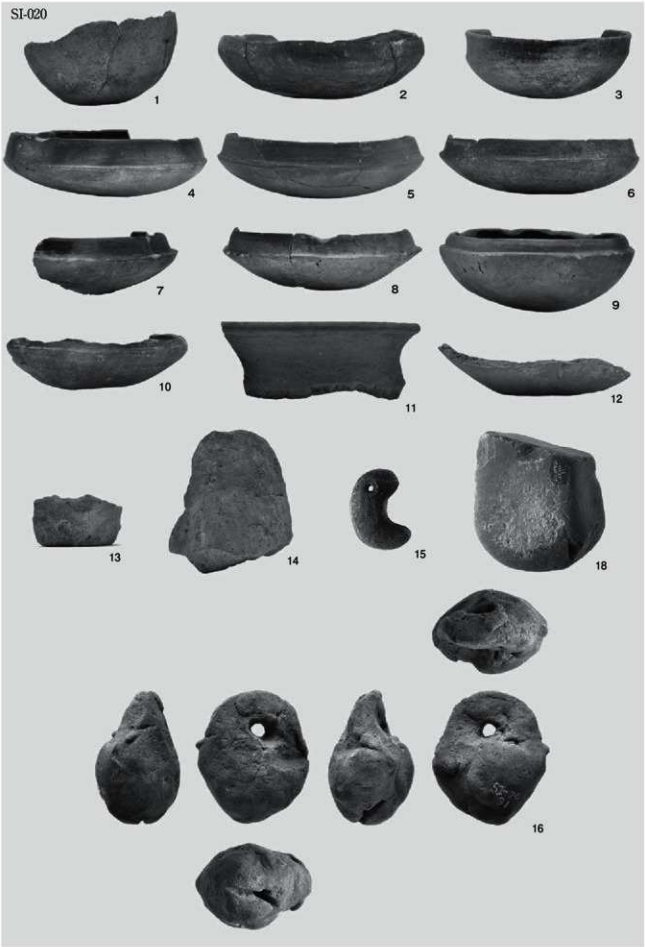
SI-004

SI-005


SI-006
1
2
3
4
5
6
7
SI-013
1
2
3
4
SI-014
1
2
3
4
5
SI-015
1
2
SI-017
1
2
3
4
5
6
SI-018
1
2
3
4
5
6


SI-018
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16


SI-019
1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15


SI-020
1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
18
16

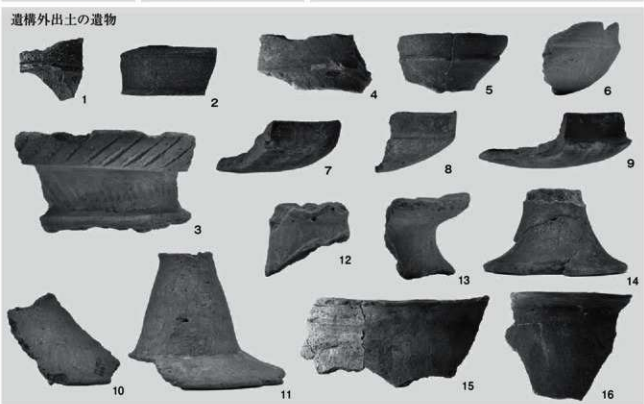
SI-020

SI-021

SK-021

SD-006

遺構外出土の遺物



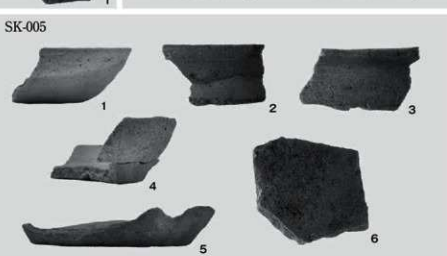
遺構外出土の遺物

SB-001

SK-007a

SK-004

SK-005

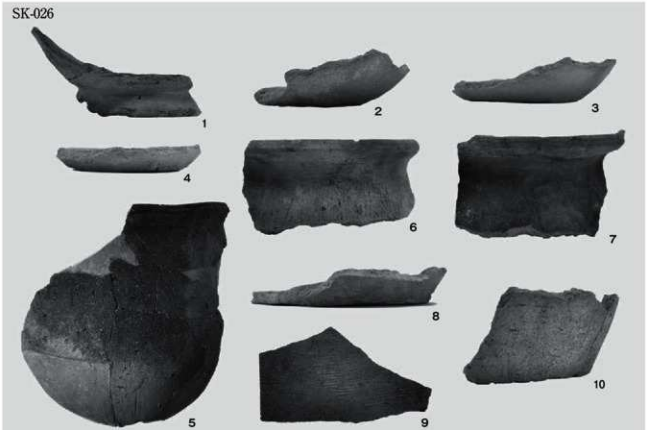


SK-012

SK-008

SK-009

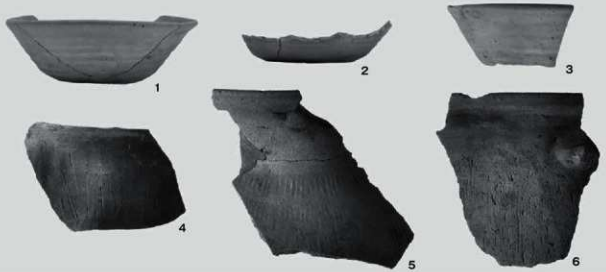
SK-026



SK-057

SK-070

SK-085



遺構外出土の遺物

SX-001

SK-014

SK-018

SK-015

SK-023

SX-004

1

2

3

SK-078

4

5

6

1

SK-074

1

SK-027

1

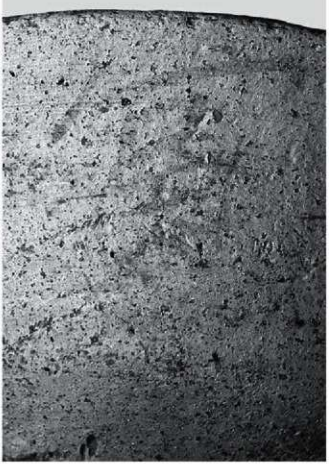
2

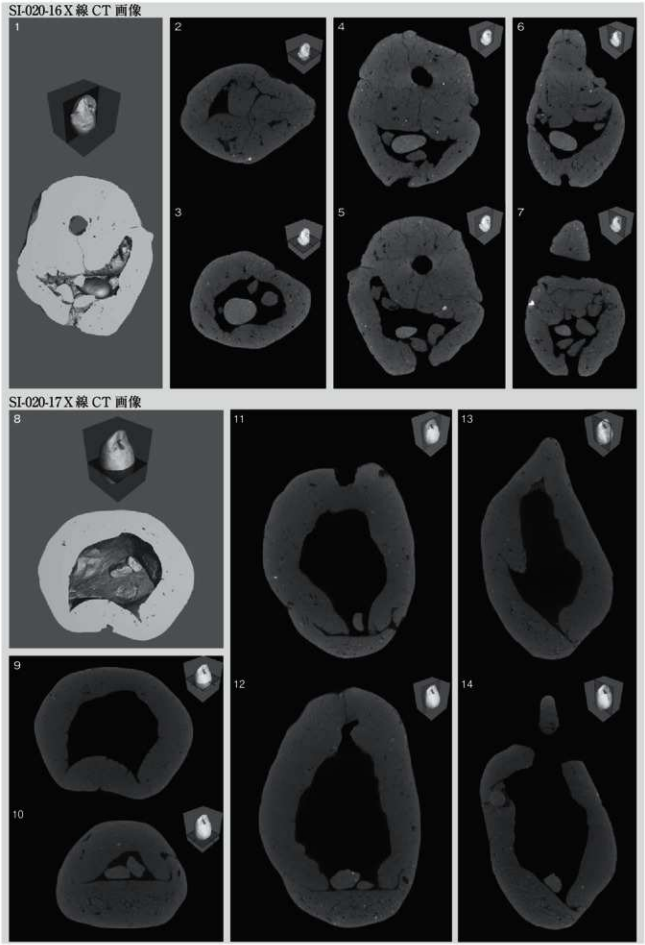
SX-002

1

SK-008-1 墨書土器（赤外線）

SK-070-1 墨書土器（赤外線）





1・8 断面見透し図、2・3・9・10横断面図、4・5・11・12正面方向からの断面図、6・7・13・14側面方向からの断面図

報告書抄録

ふりがな	なりたしせきどせきのだいいせき
書名	成田市関戸関ノ台遺跡
巻次	
副書名	一般国道464号北千葉道路事業埋蔵文化財発掘調査報告書３
シリーズ名	千葉県教育委員会埋蔵文化財調査報告
シリーズ番号	第35集
編著者名	金丸　誠　渡邊　玲　横田　真名望　鈴木　彩奈
編集機関	千葉県教育委員会
所在地	〒260－8662　千葉県千葉市中央区市場町１－１　TEL043－223－4129
発行年月日	西暦2021年１月29日

所収遺跡名（ふりがな）	所在地（ふりがな）	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
関戸関ノ台遺跡（せきどせきのだい／いせき）	成田市関戸字関ノ臺425ほか（なりたし／せきどあざ／せきのだい）	12211	097	35度47分37秒（世界測地系WGS84）	140度19分54秒	20150810～20160128 20160701～20161007	7,628㎡	道路建設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
関戸関ノ台遺跡	包蔵地 集落跡	旧石器時代	石器集中地点	石器	今回の調査成果は、取香川流域における旧石器時代～中・近世の各時代の様相や変遷を知る上での貴重な資料である。
		縄文時代	陥穴	縄文土器・石器	
		弥生時代	竪穴住居跡	弥生土器・石器	
		古墳時代	竪穴住居跡・土坑・溝	土師器・須恵器・石製品・土製品	
		奈良・平安時代	竪穴住居跡・土坑	土師器・須恵器・灰釉陶器・鉄製品	
		中・近世	台地整形区画・土地整形遺構・掘立柱建物跡・竪穴状遺構・地下式坑・土坑墓・土坑・土坑群（ピット群）・溝	陶器・瓦質土器・カワラケ・鉄製品・銭貨・土製品	

要約

本遺跡は根本名川とその支流である取香川の合流地点の北側で、樹枝状に延びる痩せ尾根付け根部分の標高28m～30mの台地上にある。旧石器時代は本台地ではじめてⅥ層～Ⅶ層からブロック１か所が検出された。縄文時代は陥穴11基が検出された。弥生時代は後期の竪穴住居跡３軒が検出され、北関東系の土器が主体となっている。古墳時代は中期～後期にかけての竪穴住居跡14軒、土坑３基・溝１条が検出され、後期の竪穴住居跡から県内でも珍しい土鈴が２点出土した。奈良・平安時代は竪穴住居跡２軒・土坑11基が検出され、出土遺物から９世紀中葉～10世紀前葉が中心となる。中・近世は北側と南側の２か所の台地整形区画と土地整形遺構３基・掘立柱建物跡１棟・竪穴状遺構11基・地下式坑２基・土坑墓１基・土坑31基・土坑群（ピット群）７か所・溝１条を検出した。

千葉県教育委員会埋蔵文化財調査報告第35集

成田市関戸関ノ台遺跡

―一般国道464号北千葉道路事業埋蔵文化財発掘調査報告書３―

令和３年１月29日発行

編集・発行　千葉県教育委員会
千葉市中央区市場町１－１
印　　刷　株式会社白樺写真工芸
千葉市稲毛区山王町102-5